ＤＥＡＤ　ｏｆ　ＰＡＲＡＤＩＳＥ

シュヴァルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＡＤ　ｏｆ　ＰＡＲＡＤＩＳＥ

【Ｎコード】
Ｎ３８３８Ｕ

【作者名】
シュヴァルツ

【あらすじ】
病気は常に形を変えていく、突然変異し、人間に牙を向くしかし、それらは人間の手によって駆逐されていくのもまた、事実である。ここに新たな病気が蔓延する人災か天災かそれは分からない。人が人を喰らうそんな非常識な事が現実に起こってしまう。しかし、人々は常に戦っていかなければならない。それは運命とも言えるであろう。日本で、世界でそれが蔓延する時、人々はどのような行動をするのであろう。近い将来、こういう事があってもおかしくはない。そんな非常識の中でどのような物語があるのかこれから話していこ

う。さぁ、ゲームの始まりだ

そう命を掛けたゲームがな

主人公と作者の声

主人公：名前　古知屋　修

年齢：２０

趣味　特技：武器改造、修理　鍛錬

体格的には筋肉質ではあるがそこまでムッキムキではない。しかし、親父からよくけいこの相手をされるので近接での体術はお手の物である。

主人公について

修は日本科学技術大学と呼ばれる大学に通っており、親は代々受け継がれてきた貿易商人である。しかし、本人はバイトなどをして社会勉強に励む立派な大学生である。

家は日本にあるのだが、親は海外に仕事に言ってるため、現在はメイドと一緒に暮らしている

作者の声

はいどうもシュヴァルツです！今回もゾンビ物をやってみる事にしました。名前的にオリジナルに見えますが場所は学園黙示録の床主市を設定しています。もちろん、本来の主人公達も出す予定です

ぜひ、楽しみに見て言って下さい！尚、今回は主人公のチート能力は使わない設定でやって行きたいと思います。

では、楽しみに見て言ってね！

平和とも言える日常（前書き）

始まるよーー！！

平和とも言える日常

ここは、床主市のとある邸宅、そこでは一人の人物が寝ていた

「修様、もう朝ですよ。今日は一限からって言ってたじゃないですか」

メイドが起こす

「う、う～ん、後、三時間半」

一人の青年が布団をかぶる

「はぁ、なんでそんな中途半端な時間帯なんですか。せめてきっちりにして下さいよ。というかさっさと起きて下さい。」

メイドは冷静に突っ込みを入れるが再度、起こしにかかる。だが、青年は起きようとしなかった

「仕方ないですね。奥の手と行きますか」

そう言ってメイドは一旦、部屋を出るとすぐさま戻って来た。手元にフライパンとお玉をもって・・・・

「行きます！地獄のラジオ！」

そう言いながらお玉とフライパンを思いっきりぶつけさせる。その音量は計り知れない。しかもこのメイド準備が良いのかちゃっかり耳栓までしている。部屋にいるのは二人だけという事は・・・・・・

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！！み、耳がーーー！！！！」

寝ていた青年だけとなる

「やっと起きましたね。おはようございます。修様」

そう言ってメイドは何事もなかったように挨拶をする

「おい～琥珀～頼むから、ラジオだけは勘弁してくれよ～耳、痛て～」

そう言いながら起き上がる青年

彼の名は古知屋（こちや）　修（おさむ）

代々受け継がれてきた貿易商人の一人息子である。

しかし、親は海外で仕事中なので現在はメイドの琥珀と二人で生活している。ついでにメイドの事も紹介しておこう

彼女は矢代（やしろ）　琥珀（こはく）

代々古知屋家の専属メイドとして勤めてきたメイドである。プロポーションは抜群で街を歩けば振り向く人が多いと言われる。修の専属メイドとして働いている

「さっ早く起きて下さい。朝食が出来ていますから」

琥珀が言う

「わーったよ。着替えるから外で待っていてくれ」

「むしろ、見してくれて「あっ？」何でもないです。」

琥珀は修ＬＯＶＥ属性が付いているため、最近は変態じみた行動が多いという（修談）

琥珀が出るのを確認すると着替え始める

「全く、最近は危なっかしいな。琥珀は・・・今度、親父に相談してみようかね」

そう言いつつクローゼットから迷彩のズボンと普通のシャツを取り出す、春が過ぎて夏に近い気候なので軽い軽装となっている。

～廊下～

「お待たせ」

「お待ちしておりました。どうぞ」

そう言って食堂に案内する琥珀

そして、食堂に着くと朝食の出来立ての匂いが鼻に来る。するとおなかの虫が鳴る

「さっさと食べて、行くとしますかね」

そう言って席に着く、反対側に琥珀が付く

「「頂きます」」

そう言って朝食を取る。

「琥珀、今日は誰か来る予定はあるのか？」

俺が聞いた

「そうですね・・・いえ、今日は誰も来ない予定ですね。それがどうかしましたか？」

琥珀が聞く

「いや、友達をさ今日家に招こうかと思ってな。」

「そうですか。御友人を・・・大学では友達は多い方ですか？」

「ん～割と気の合う奴らが多いからな。結構いると思うぞ」

そんな話をしながら朝食を取って行く

そして、食べ終わると一旦部屋に戻って授業の準備を始める。そして、地下にある車庫からハンヴィーを取り出す

ハンヴィーは二十歳の誕生日に親父の貿易仲間（軍関係）から頂いた本場のハンヴィーで現アメリカ軍が使用しているのと同じタイプである。

しかし、修はそれを改造してハンヴィーのデメリットを失くさせた。そのため本来のハンヴィーより燃料の貯蔵が大幅に上がっている

ハンヴィーは問題を起こすことなく動き出す、ガレージのシャッターを開けて外に出す、玄関では琥珀が待っていた

「行ってらっしゃいませ。修様」

「おう、家のお守り、頼んだぜ」

琥珀はメイドとしての役割もあるのだが他にも家の警備も受けている。そのため、武術、銃の扱いは軍人並みに優れている

琥珀はお辞儀をしながら俺を見送ってくれる。俺はハンヴィーで大学を目指す。大学は日本科学技術大学という大学で俺は親の跡を継ぐつもりでいたため貿易専門コースを受講している

「さーて、好きな音楽でも聞きながら行くとしますかね」

そう言って音楽を流す

数分後大学に到着した。車は大学の外にある学生専用の駐車場だ。金は払っていない。

何故かというと入学当初、親が大学に多額の寄付をしたと噂されている。そのため大学から無料で車を置けるらしい。

俺自身はそういう事はあまり好きではない。だが、使える物はすべて使う、それが信条にしている

車を降りると話しかけられた

「よう。修、おはよう」

「おう、秀治、おはよう」

こいつは上佐和（かみさわ）　秀治（しゅうじ）　大学に入って初めてできた友人である。出身は九州地方らしい彼は軍事オタクで結構な知識量を持っている

「今日もこれか。やっぱいいねハンヴィーは」

「そうか？まぁ、否定はしない」

「分かる人でじゃあ、教室に行くか」

「ああ、そうだな」

そう言いつつ教室に向かう俺達

今日も平和な一日となるはず・・・・・・だった

平和とも言える日常（後書き）

「はいどうも、シュヴァルツです」

「修だ」

「始まりました！新小説が！」

「そうだな・・・しかも、チートなし」

「そうだね。今回はチートなしという条件でサバイバルに臨んでもらうよ」

「おいおい、どんな無理ゲーだよ」

「大丈夫大丈夫、主人公は必ず死なないで生還するっていう法則があるんだから」

「でも、作者、ここ最近じゃあ主人公が死んじまうアニメやゲームが出て来ているんだが？」

「あるにはあるけど、あれは認めないね。」

「ほう？なぜだ？」

「だって輝いてこその主人公だよ？ヒロインとかも大事だけどね。モブキャラは知らん」

「まぁ、こんな偏見な作者ではあるがこれからも読んでいただきた

い。よろしくお願いします」

パンデミック

俺は普段通り、朝から授業を受けて普通に昼食を友達と食って学校生活を満喫していた。しかし、今日に限って感覚が違うように思えたのだった。

昔から勘だけは冴えていた。そのおかげで事故になりそうな所で巻き込まれずに済んだという経験がある

～大学内　喫煙所～

「いや～疲れたな～修」

秀治が言う

「ああ、しかも小田切の奴珍しく怒ってたな。何かあったのか？」

俺はタバコを吸いながら言った

「ああ、情報によると前の授業で注意したらしいだが、中々言う事を聞かなかったらしくてな。それでキレたらしいぜ」

秀治が言う。秀治には情報を集められるコネが大学内にいるらしい。その人のおかげで今までやってこれたんだと秀治は言っている

「まぁ、何にせよ。俺達には関係ない事だがな。フワ～」

俺はそう言って欠伸を出す

「なんだ、寝てないのか?修」

「ああ、昨日と一昨日バイト続けだったからよ～眠くてしょうがないんだ」

「へ～ボンボンの坊ちゃんがバイト何かしてるんだ!?」

「ボンボンだろうと関係ない。社会勉強はどんな人間でも必要な事だ。この先、何があるか分からないんだしな。秀治はバイトやってないのか?」

「うんと言うより、うちは造船業だからね偶に親父の仕事を手伝ったりしてるんだ。だから、バイトをする必要がないってわけさ」

「ほ～初耳だな。造船業なんかやってるんだ」

「そう。ついでに言うと修の親父さんが経営してる会社の船だってうちで整備する事が多いんだぜ?まぁ、お得意さんって奴だな」

「へぇ～」

そうこうしてる内に四限のチャイムが鳴った。俺らは三限で終わりなので後は帰路に着くだけだ

「あっ秀治、今日は家に来ないか?いい銃が手に入ったんだ」

「マジ!?行く行く!!」

「決まりだな。じゃあとっとと行くとするか」

そう言って俺達は大学の外にある駐車場に向かう事にした。

～道中～

「おい！早く運んでくれ！」

大学内でどうやら誰かが倒れたようだ。他の生徒が手伝ってくれるように頼んでるみたいだ

「あちゃ～誰か倒れたみたいだな」

秀治が言った

「仕方ないさ。人間、いつでも健康って訳にはいかないだろうしな。そんな事よりさっさと行こうぜ」

「ああ、そうだな」

そう言って俺達はその場を離れる。しかし、ここで気づいていればもっと早くに行動に移すことができたであろうに・・・・・

～正門～

正門に着くとなぜか、人だかりができていた

「なんだ?」

「さぁ、とにかく行って見るか」

そう言って俺達は人だかりの近くまで行って見たが人が多くて中心

が見えなかった。そこで秀治が近くの生徒に話しかけた

「なぁ、何があったんだ?」

秀治が言う

「ああ、不審者みたいですよ。多いですねやっぱり」

どうやら原因は不審者らしい俺は人だかりの隙間からその様子を覗く事が出来た

〜人だかりの中心〜

「なぁ、あんた、いい加減に帰ってくれないか?いつまでもいられちゃあ迷惑なんだよ」

警備のおっさんが言う

「あ〜・・・う〜・・・・・・」

不審者はふらふらとしながらうめき声を上げていた。酔っ払いにしては行動がおかしい

「はぁ、帰らないつもりならこっちだって手段を選ばないよ?警察に連絡するけどいいね?」

「・・・・・・」

「おい!聞いてるのか!?」

他の警備員が不審者の肩に手を置いた。次の瞬間・・・・

「アアアアア！！！！！！！！」

「グァ！？離せ！」

不審者がなんと警備員の腕に噛みついたのだ！

「おいおい・・・・」

他の奴らが声を上げた

「おい！何やってるんだ！離せ！」

おっさんが不審者を剥がそうと力を入れるがびくともしなかった

「くそ！なんて力だ・・・全く効かない」

「力なら任せな！」

そう言って出てきたのはアメフト部員の奴だった。見た目的にも不審者よりがっちりしているためすぐにはがす事が出来るだろう

「すまない、助かるよ」

おっさんはそう言ってアメフト部の奴に任せた

「任せな！おら！！」

アメフト部員が渾身の力を出して不審者を警備員から引き剥がす、

うまくできるかと思われたが・・・・

「ぎゃあああ！！！！！う、腕が・・・・」

不審者が離れた際、警備員の腕の肉が一緒に持って行かれたようだ。
その証拠に骨が視認できるほどはっきりしている

「きゃあああああ！！！！！！！！」

女子大生が叫ぶと他にも動揺が走ったみたいだ

中には吐く奴までいた

「しっかりして下さい！今、応急手当をしますから！」

そう言って一人の学生が警備員の腕にタオルを巻き止血に入ったが・・・・

「ぐあ！？があ・・・・・ぐあああああ！！！！！！！！」

警備員は転びながら断末魔を上げ・・・・死んだ

「そ、そんな！？こんな早くに死ぬはずがない！なんでだ！？」

手当を行っていた学生が驚いていう

「きゃあああああ！！！！！殺しよーーー！！！！！」

そう叫ぶと周りは電話をしたりカメラ撮影を行っていた

が、しかし、本当の地獄はここからだった。

死んだはずの警備員が突然、目を開いたのだ

「あっ！無事だったのですか!?よかった・・・今、救急車を呼びますね」

そう言って学生が携帯を取り出した瞬間

「アアアアア！！！！！！！！！」

警備員は学生の首元に噛みついた。そして・・・引き千切った。

学生の首から鮮血の赤が噴水のように飛び出ていた。

そして、その場は大混乱に陥った

「うわあああああ！！！！！！」「逃げろおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」「きゃあああああああああ！！！！！！！！！」

集まっていた学生たちはいろんな方向に逃げだす

「おいおい！！！何だっていうだ!?」

秀治が言う

「事情は後で話す！とにかく逃げるぞ！」

俺は秀治を連れて学生たちが逃げた方向とは違う方向に逃げた

～食堂近くの広場～

「はぁ、はぁ、修、ちょっと休憩」

秀治が言う

「ああ、そうだな。ここまでくれば大丈夫だろう」

そう言って俺達は近くにベンチに座った

「なぁ、修、何が起きたんだ？」

「ああ、実はな・・・・」

そう言って俺は見てきた事を秀治に話す

「そんなのありかよ！？」

「ああ、俺も信じがたいとこだがさっき起きた事実だ。信じるしかあるまい」

「だけど、なんで死んだはずの人間が？」

「分からん。とにかくここら辺も騒がしくなるな。どうするべきか・・・・」

そう考えていると校内放送が入る

「生徒の諸君に連絡します！たった今、正門で殺人事件が起こりました！生徒は直ちに出る準備を始めて下さい！繰り返します・・・・」

どうやら、先生方も気づいたようだ。しかし、あれは殺人事件と言ってよいのか?分からん所だ。

この時、他の生徒は早く帰られると思い喜んでいたが次の瞬間、全員の顔が凍りついた

「なんだ!?早く出て行きなさい!グワ!?何する離せ!いだ!?痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!!!!!ぎゃあああああああああああああ!!!!!!!

そう言って警察に電話を入れた。しかし・・・・

［現在、回線が込み合っているためつなぐ事ができません。しばらく・・・・・・・］

電話は無機質な機械音だけが流れた

「くそ！」

「ど、どうした?修」

「電話が繋がらない・・・・まさか、他の区域でも同じ事が起きてんのか?」

「ま、まさか、だとしたら日本は終わりだぜ?」

「しかし、いつまでもここにいられん。行動あるのみだ」

そう言って動こうとした瞬間

『ウウウ・・・・』

一人の学生がふらつきながらこっちに来ていた。服は血まみれ、どう見ても瀕死の状態だった

「お、おい、あいつ怪我してんぞ。助けようぜ」

秀治が助けようとするが俺が抑えた

「な、なにするんだ!?修」

「秀治、あいつのわき腹を見てみろ」

「何があるんだ？・・・・・・ッ！！」

秀治は驚いた。それもそのはず、その学生のわき腹からは腸らしき管がだらしなく垂れ下がっていた。しかし、学生は気にすることなく歩き続けていた

「何なんだ！？」

「分からん、今は逃げに徹するぞ。来い！秀治！」

そう言って走り出す俺

「ま、待てよ！修！」

秀治も俺の後に続いた

パンデミック（後書き）

は～い、第二話はここで終了です～

いや～チートじゃない物って難しいですね。だけど、頑張って行くんでこれからもお願いします！

感想などお待ちしてます～

終わりの始まり

俺らは目の前で人が死ぬとこを見た。正直言って二度も見るとは思わなかった。なぜそんな事が言えるかって？

まぁ、本編を見れば分かる事さ

～大学内～

「はぁ、はぁ、」

俺と秀治はあの後、走りっぱなしであった。後ろには生きた屍共が大行進しながら獲物である俺達に向かって来ていた

「くそ！生存者はいないのか！？」

秀治が言う

「とにかく、今は走れ！生き残りたきゃあ走るんだ！」

俺が言った。しかし、いつまでも体力が続く訳でもない。どこかであいつらをやり過ごす事が出来ればな

そう思って俺は走りながら周りを見た。

近くには教室棟があり、その隣には食堂が建っていた・・・・・ん？食堂・・・・・

「秀治！俺について来い！」

そう言って食堂の裏の道を行く

「おい！修！そっちは行き止まりじゃないのか！？」

秀治が言う

「大丈夫だ。この先に食堂の屋上に繋がる梯子がある。そこを昇れば勝ちだ」

「分かった。」

そう言って梯子めがけて走って行く

数分後、屋上に繋がる梯子に到着した

「よし、秀治先に行け」

「ＯＫ」

そう言って梯子を昇る秀治

だが、奴らもすぐそこまで来ていた。ろくな武器も持ち合わせていないので俺もすぐさま梯子を昇る奴らの手が伸びたが拳一個分の間が出来ておりギリギリ掴めずにいた

「よし、これで、なんとかなるだろ」

そう言って下をのぞく

「うはっテラキモスWWWW」

「修、そんな事言ってる場合じゃないっしょ」

秀治が呆れながら言う

「いいじゃん、人間追い詰められた時こそ心に余裕を持たなきゃあいけない。じゃないと生き残れる戦争も生き残れないぞ」

「確かにそりゃあそうだが・・・・っとその前に一つ質問」

「なんだ?」

「修、妙に落ち着いてるよね。なんか死体を見た事があるって感じだったけど・・・・」

「ああ、その事か・・・・理由は簡単、一度死体を見てるからな」

そう言ってタバコに火を付ける

「ええ!?いつ!?」

秀治が驚いた

「こいつは話してなかったな。高校の時親父と一緒にアフリカに行ったんだよ」

そう言ってタバコを吸う

「アフリカ?」

「ああ、あそこは紛争が多くてな。銃撃戦なんざ日常茶飯事だった。荒野の西部でも顔負けのな。死体なんざそこらへんの石ころと同じように普通に転がってたさ。まさか、日本で見る羽目になるとは思わなかったが・・・・・」

「そうか。道理で」

「ああ、だけど、歩く死体なんざあっちでも見られなかったよ。やれやれだぜ」

「で、これからどうする？」

「そうだな・・・・いつまでもここにいるわけにもいかない。とりあえず、食堂に降りて何か食おう。腹が減っては戦は出来ぬって言うしな」

「ははっ確かに」

そう言って俺らは下に降りた

～食堂～

「おっし、クリアだ」

そう言って俺が下に降りる。その後、秀治も降りた

「で、何食う？」

秀治が言う

「そうだな。軽い物にしておこう」

「じゃあ、パン？」

「そうだな。」

そう言って食堂の中にある購買に向かいパンをいくつか。もらっておく

「にしても、この状況は何だ？なんで、死体が歩いてんだ？」

秀治が言う

「恐らくは”ゾンビ”とでも言うべきかね。大学内でこうなってるんだ。他の地域でも同じ事が起きてるって考えた方がいいかもしれないな」

俺が言った

「でも、それだったら自衛隊が動いてるんじゃないか？」

「じゃあ、なんで、自衛達はともかく警察まで動かないんだ？答えは簡単、この県だけじゃない日本中であの死体共が蘇ってるのかもしれないな」

「おいおい、どこぞのスプラッター映画じゃあるまいしさすがにそれはないんじゃないか？」

「だったら、この状況をどういう風に説明する？」

そう言って外の状況を指さす

外は地獄絵図のまんまな状況だった。死体が歩き、生者を襲い、また別の生者を襲う。この負の連鎖を地獄絵図ではなくなんと説明すればよいのか。秀治は答えられなかった

「修の仮説が本当なら、原因はなんだ?テロか?」

「それは分からんな。もしかしたら新型のウィルスかもしれんし、テロなら政府機関でも察知してるはずだ。なのに突然、前触れもなく起きたからな」

そう言って椅子に座る

「まっ今はここを出ることに専念しよう。作戦も立てずに突っ込むのは愚の骨頂だろ?」

「そうだな。どうする?」

「そうだなまず（ガタン!!）・・・お客さんのようだ」

俺が作戦を言おうとした時厨房の方から物音が聞こえた

「どうする?」

「俺が行ってこよう」

「大丈夫か?」

「ああ、殺人ならあの地でやって来た。今さら後悔する物もない」

そう言って俺が厨房に向かう

～厨房～

「さて、どうするかね～」

そう言って近くにあったフライパンを手にする。言っておくがギャグじゃないぞ。本当は包丁の方が良かったんだがどこを探しても見当たらなかった。それだけだ

俺は物音がした方へ静かに歩いた・・・・・そして、角まで来た時相手の方が動いた

「おろ！？」

「いやあああ！！！！来ないでえええええ！！」

そう言って俺を思いっきり突き飛ばした。俺はそのまま後ろの棚にぶつかった。その衝撃で棚に置いてあった調理器具が俺の頭を直撃する

「みゃお！？」

つい、変な声が出てしまった。誰も聞いてないよな？

「え？人・・・間？」

女性は俺を見て茫然としていた

「あいたたた・・・・酷いないきなり突き飛ばすとは・・・・・」

そう言って立ち上がった

「す・・・すみません！てっきり、あの化け物が入って来たのかと・・・・・」

そう言って頭を下げる

「いいって気にするな。俺は古知屋　修、あんたは？」

「は、はい、私は古城（こじょう）　美麻（みま）といいます」

美麻はそう言って頭を上げる。髪はロングヘヤーで腰辺りまで伸びている。プロポーションは抜群琥珀と同じくらいであった。胸は・・・・でかめだ

「ん～性欲を持て余す」

「はい？」

美麻は俺の発言にキョトンとした

「気にするな。それより、良く無事だったな。これから、脱出しようと思ってた所だ。美麻さんも一緒に来るか？」

「は、はい！」

こうして、新たに仲間が出来た

その後、食堂に戻り俺は秀治に美麻さんの事を説明した

「へ～よく無事だったね。俺は上佐和　秀治、よろしく、美麻さん」

「こちらこそ」

そう言って互いに握手をする

「そうだ。美麻さん」

「はい？」

キョトンとした顔が可愛く思えたのは俺だけか？

「美麻さんはどうして、厨房にいたのかな？」

「あ、はい、私もあの化け物が出て来て友達と一緒に逃げていたんですが、途中で逸れてしまってそしたら、あの化け物が多くなってきたんで近くにあったこの食堂に逃げ込んだんです。修さん達はどうしてここに？」

「俺達もあの化け物共から逃げていたんだ。途中で食堂の屋上に昇ってな。腹が減ったんで中に入ったらさっきの状況になった訳さ」

「そうでしたか。で、これからどうするんですか？」

美麻が聞く

「そうだな。とりあえず、武器になりそうな物を集めよう。それに

情報も必要だ。何も分からない状況じゃあ動きづらい」

「あっでしたら私、あそこに置いてあるパソコンで調べますよ？」

そう言って隅っこにあるパソコンを指さす

「でも、アレってネットは繋いであるけど、校内専用じゃあなかったけ？」

秀治が言う

「大丈夫です。わたし、こう見えてもパソコンは得意なんです。」

そう言って胸を張る。それに伴って双子山が揺れる

「おおう・・・・じゃあ、美麻さんは情報を秀治と俺は武器になりそうな物を探すぞ」

「分かった（りました）」

「よし、行動開始！」

そう言って俺達は行動を開始するのであった

終わりの始まり（後書き）

人物紹介

～古知屋　修～

本編の主人公である。親は代々受け継いできた貿易商人で現在、両親は海外で仕事中である。そのため今はメイドである琥珀と一緒に床主市に家で住んでいる。趣味は武器改造で車にも興味があるが、軍事的な物の方が一番興味がある。

しかも高校の時にアフリカへ行き、銃撃戦を経験しているため、大抵の事に対しては動じなくなった。このゾンビ騒ぎの中でも冷静沈着に行動できた

最近の悩みはメイドである琥珀が変態属性になりつつある事を悩んでいる

～上佐和　秀治～

修と同期の大学生で九州地方出身、かなりの軍事オタクで修にも負けないほど知識を持ってはいるが実銃を持った事はない。

しかし、体力的には修よりちょっと下のためあまり疲れる事はない

～古城　美麻～

ゾンビ騒ぎの中食堂で出会った生存者、プロポーションは抜群で琥珀と同等である。胸もでかめ

趣味はパソコンをいじる事でそのおかげでハッカー顔負けの技術を習得している。パソコン一台あればあらゆる情報を手に入れる事が出来る
しかも、親が医療関係の仕事だったため大抵の怪我などは手当てできるらしい

性格的にはちょい天然属性が入ってたりする。いわゆるドジっ子と言う奴だ。

～矢代　琥珀～

修と一緒に住んでいるメイドでプロポーションは抜群、道を歩けば振り返る人多数と言うほどだ。胸は・・・・・ん？インターホンだ誰だろう？

家の警備も任されているため銃の扱いや体術などもプロ級である、一応、免許は持っているが滅多に運転する事が無いらしい

まぁ、こんな感じにやって行きたいと思っています。これからも応援の方よろしくお願いします

下準備

前回のあらすじ：新たな生存者　発見以上！

～食堂～

俺らは美麻さんと出会った後、この大学から脱出するため情報と武器の捜索を開始した

「秀治、そっちは何かあったか？」

俺が言った

「まぁ、武器になりそうな物って言ったら、包丁とかフライパンしかないぞ。そっちは？」

「こっちは防犯用のさすまたがあったぞ。正直、必要なのか？食堂で」

「さぁ？まぁ、武器になる物があるだけでもマシじゃないか？」

「それもそうだな。」

しっかし、これじゃあ心もとないな・・・・・いっそ改造でもするかそう思ってさすまたを手にする

「修、どうしたんだ？」

秀治が言う

「何、ちょっとした改造を施すのさ。秀治、ドライバーはあるか？」

「ああ、あるけど・・・・・ほい」

そう言ってバックの中からドライバーを取り出す

なぜ、用意がいいのかと言うと秀治自身が実家で働いてるため常に持ち歩くようになったそうだ。

「サンキュー　よし、またの部分を取って・・・・」

そう言ってまたの部分を取り外す、こうなるとただの棒になるので包丁をガムテープで固定する

「おし、簡易槍ができたぞ」

そう言って掲げる

「ほ～そんな簡単に作れる物なんだな」

秀治が感心したように言う

「まぁ、あっちでサバイバル経験もあるからな。偶々遭遇した民族に教えて貰ったんだ。他にも結構できるぜ。定番的な武器からちょっとした本格派までＯＫだ」

「へ～俺じゃあ思いつかないな」

「さっ他のも作っちまおう」

そう言ってできるだけ武器を造り出す、と言っても銃より攻撃力は劣るのであまり頼りたくはないが無い物を嘆いてもしょうがない。ないなら作るまでだ

～数分後～

「はぁ～いろんなのできたな」

秀治が言う

「そうだろそうだろ。まっ銃よりかは攻撃力は劣るけどな」

そう言って厨房の机を見る。そこには簡易槍から火炎瓶といろんな武器が出来ていた

「一番、頼れるとしたらこの火炎瓶かね」

そう言って持つ

「でも、数が少ないから多用はできないね」

秀治が言う

秀治の言う通り、多く作るべきだったのだが材料がないため多くはできない。火炎瓶は合計で十本しかない。つまり、使いどころを誤ればこっちが全滅してしまうかもしれない

「武器はこんなものかな?情報はどうだろうね」

秀治が言う

「様子を見に行って見るか」

そう言って美麻さんがいる食堂に向かった

～食堂～

「美麻さん～」

「あっ修さん」

パソコンから目を離した美麻さんを見るとがっかりした様子だった。
何かあったのだろうか？

「どうだい？情報は」

秀治が言う

「ええ、それの事なんですけど、これを見て下さい」

そう言ってパソコンの方を見せた

「ん？・・・・・・・おい、これってマジか？」

俺が言う

「ええ、政府機関の所に侵入して得た情報です。間違いはないかと」

美麻さんはため息をつく

パソコンには自衛隊の情報部の画面が開かれていた。（ハッカーも驚きだ！ｂｙ作者）

そこには航空自衛隊の映像で生中継で日本の至る所を撮影しているのだろう。日本の首都　東京　大阪　京都と映されていたのだが、どれもこれもが崩壊した街の映像だった。こっちと同じくゾンビが生者を襲っては仲間を作って行く

時折、一人に対して複数のゾンビ共が貪っていた映像もあった。俺は何とか耐えたが美麻さんと秀治は耐えられなくなり戻してしまった

「こいつは・・・・修の言う通りかもしれないな・・・・・・・」

秀治が言う

「ああ、正直当たって欲しくはないと思っていたが、厳しいもんだな・・・・・」

「それと、こっちは一般のニュース映像なんですが・・・・・どうやら日本だけじゃないみたいです」

そう言ってＹＡ〇〇のニュースサイト映像で緊急ニュースが流されていた。

その内容は・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・日本だけでなく世界中でこのゾンビ騒ぎが起きていたと言う事だった・・・・・・・・・・・・・・・

ニュースによるとアメリカではホワイトハウスを破棄して、洋上の空母に移転したようだ。中国は通信途絶　イギリスでは鎖国体制に入っているようだ。ロシア・メキシコ・オーストラリアでは暴動が発生現在、軍隊が鎮圧に当たっているようだ

「どこに逃げりゃあいいんだ?」

秀治が言う

「分からんね。自衛隊はまだしも警察はもう駄目だろうな。壊滅されているかもしれない」

「じゃあ、私達はどうすればいいんですか!?」

美麻さんが言う

「確かに、これは孤立無援と言ってもいい。だとしたら、生き残るために自分たちの力で生き残るしかないな・・・・・・とりあえずはここからの脱出だ。」

俺が言う

「でも、どうやって出るんですか?」

美麻さんが言う

「プランは二つ考えている。一つ目は今持ってる武器で強行突破だ。だとしてもこれは賭けに近い方法だ。二つ目はまず、俺が車を取りに行って、食堂まで移動させる。二人は食堂で待機と言う方法だ」

二人は驚いた

「一つ目は断然却下だな。今の武装じゃあ脱出できるかどうかも分からない。もしかしたら、そのままあいつらの仲間入りをするだろうな」

秀治が言う

「二つ目も駄目だと思います。修さん一人が危険な目にあうなんて」

美麻さんが言う

「じゃあ、二人に聞くがこれより最良なプランがあるか？あるならぜひ、聞きたいもんだ。因みに二つ目ならリスクの危険性は少ない。やられるにしても一人だからな」

俺が言った

「でも、それじゃあ・・・・・」

美麻さんが言った所で秀治が遮るように言う

「修、覚悟はできてるのか？」

「ああ、正直、これ以上の最良のプランはないと、俺は思ってる」

「・・・そうか。分かった。行ってくれるか?」

「秀治さん!」

「大丈夫だよ。美麻さん、これでも修は実戦経験をしてる。少なくともこの三人の中じゃあね・・・・」

秀治が言う

「・・・分かりました。ですが、修さん、これだけは約束して下さい」

「なんだ?」

「決して、自決するような真似はしないでください。これ以上、人が死ぬのを見たくはありません」

彼女は真剣な顔で俺に言った

「ああ、俺は自決して英雄になるとか。そんな詰らん物にはこだわらないからな。どんなに汚い手を使っても生き残れば大勝利だ」

そう言って笑った

「そうですか。それを聞いて安心しました」

美麻さんも笑顔になる

「じゃっ行って来るとしますかね」

そう言って簡易槍と防犯用のスタンガン（食堂にあった物）を持つ

「気お付けて下さい」

美麻さんが言う

「ああ」

「修、ｇｏｏｄｒｕｃｋ」

秀治は親指を立てて言う

「おうよ。」

そう言って行動を開始する俺だった

下準備（後書き）

「どうもー作者でーす！」

「秀治だよーよろしくねー」

「あれ？修君は？」

「ああ、修なら美麻さんと一緒にどっかに行ったぜ」

「マジか・・・もう手を付けていやがんな。それはともかく四話が終了しましたー」

「今回は武器が手に入ったね」

「そうそう。と言っても武装集団が使うような物程度だけどね」

「でも、火炎瓶とか陰険じゃね？」

「関係ない！汚物は消毒じゃい！」

「作者、それはいかんよ」

「それはともかくとして、次回は別の視点を描こうと思っています。」

「ほ～また、違う人物が出てくるんだな」

「そうそう。あっそれと学黙の原作キャラも出そうかなーって予定

しています。まだ、どこで合流するか分かりませんが」

「そうか・・・・まぁ、頑張ってくれよ。そしたら奢るからさ」

「マジで!?頑張ります！」

「じゃあ、次回も楽しみに待っていてくれ」

汚物は消毒じゃあああ！！！（前書き）

すみませんすみません、ただの出来心なんです

今回は別視点から始めますよー

汚物は消毒じゃあああ！！！

～床主市上空～

修達が大学から脱出を試みている頃、床主市上空で数機のブラックホークが飛んでいた。機体の横には陸上自衛隊という文字を掲げて

「いいか？今回の任務は発電所をあの化け物から守る事だ。」

隊長らしき人物が隊員達に向かって話している。本来なら基地でこう言う事を行うのだが、緊急だったためか機内でブリフィーングを行っているようだ

「隊長、日本中いや、世界中に現れたあの化け物共は何なのですか？それに北海道支部などは連絡が入らないと言う事も耳にしましたが・・・・・・」

一人の隊員が質問と噂を言った。全体に知られていないのか周りの隊員はざわめく

「化け物の事はまだ、良く分かっていない。しかし、北海道支部と連絡が取れなくなったぐらいで動揺するな。今は、任務に集中してくれ」

そう言って隊長はパイロットに指示を出しているようだ

「なぁ、篠田（しのだ）」

一人の隊員が女性隊員に話しかける

「何？」

「この騒ぎは一体なんだろうな。」

「分からないわ。けど、私達がすべきことは任務を全うする。それだけよ」

「そ、そうか。」

話しかけた隊員はそう言うと窓の外眺める。しかし、そこには平和な街ではなく黒煙が立ち上り、人々があの化け物どもから逃げ惑う姿だった

「いくら、軍人をやってるとはいえ、これはさすがに堪えるわね～」

篠田とは反対側の席に座っていたもう一人の女性隊員が言った

「綾瀬（あやせ）、少し黙ってて」

篠田が言う

「は～い」

そう言って彼女もまた外の景色を眺める

「目標！見えてきました！」

パイロットが全員に聞こえるように言った。

「いいか？もう一回確認するぞ。今回は発電所の確保だ。民間人の救出はその後、行う」

隊長が言った

ヘリはホバリングに入る。そして、両扉を開け、ファストロープの状態に入る

「綾瀬、先に行ってるわね」

「は～い、気お付けてね」

そう言って篠田はヘリから降りるのであった

ｓｉｄｅｏｕｔ

～大学　食堂～

「さ～て、どうするべきかね～」

俺は食堂から屋上に戻ってどうやって車を取りに行くか決めかねていた。下はあのゾンビ軍団　上は屋上しかない

「仕方ない。下から行くとしますか」

そう言って最初に昇った梯子の方に向かった。下を覗いてみると今まで集まっていた奴らはどこかへと行ったみたいだ

しかし、数体が梯子付近とその路地に屯っていた

「ん～このぐらいなら槍で倒せるか・・・・・よっしゃ、そうと決まりゃあ行動あるのみだ」

そう言って梯子に手を掛ける。そして、ゆっくりと降りて、途中でジャンプし着地した

『アアアアア』

着地した音に気付いたのかゾンビ共がこちらに向かってきた

「気色悪い声をあげてんじゃないよ！そら！」

そう言って槍を突き出し、一体のゾンビの頭に刺さった。すると糸が切れた人形のようにその場で崩れた

「はっ他愛も無い。そら！」

今度は後ろから掴もうとしていたゾンビを回し蹴りで吹っ飛ばした。ゾンビはそのままゴミ場に突っ込んだ

「ゴミはゴミらしく、そこに居やがれ」

そう言って俺はそのまま路地を出た

～大学内で一番大きい通り～

「うわ～こいつは・・・・臭いな」

修が見たのは数百体という数のゾンビ共だった。恐らく、大学内で？まれた学生だろう

「こいつはちと厳しいな。他の道から行くとしますか」

そう言って表とは反対側の道を進み、隣の建物の敷地に侵入した

「よっと」

俺は塀を越えて着地した

『アアアアア』

ゾンビが来た

「ちっ、ここにも居やがんのか。それ！」

そう言って槍を投げた。

槍は吸い込まれるようにゾンビの額に命中し深々と刺さった

「よし、次行くぞ次」

そう言って槍を取り戻し、その場を去って行く

～学生駐車場～

俺は無事、駐車場に辿りついた。

「俺の愛車は・・・・あった。無事だな」

そう言って自分の愛車ハンヴィーを見つけ出す。しかし、みょんな

事に周りの車はほとんどが火災を起こしていたり事故を起こしていたりしていた。
中には車内が真っ赤に染まっている車まであった
「酷いな・・・・さて、行くとしますか」
そう言ってハンヴィーに乗り込む、エンジンは問題なく始動した
「よっしゃ、二人とも待ってなよ！」
そう言ってアクセルを踏んだ
～正門～
俺は正門に辿りついた。だが、正門にはたくさんとしか言いようが無いほどゾンビの集団で埋まっていた
「おいおい、どっかの進行パレードじゃあないんだからよ。ちったぁ散っててくれよ」
俺が愚痴るように言う。しかし、車が通れるのはこの正門しかないのでどっちにしろここを突き抜けなければならなかった
「う～ん、このまま行くとなんかフラグが立ちそうだからな・・・・そうだ、こんな時こそ・・・・」
そう言って持ってきたバックの中を漁る
「あったあった」

そう言って出したのは火炎瓶であった。俺はジッポで火炎瓶の紐に火を付けた

「よし、汚物は消毒じゃあああああ！！！！！！！」

そう言ってアクセルを思いっきり踏んだ。

急加速で発進するハンヴィーその先には・・・・あのゾンビ集団だった

そして、ぶつかった。ぶつかるごとにゾンビ共は跳ね飛ばされたり轢き殺されていた

「ふはははは！！！！見ろ！人がゴミのようだ！」

某ジブリ作品の大佐が言っていた台詞を言いながらゾンビ共を殺したり燃やしたりしていた。そんなこんなで食堂の前まで辿りついた

しかし、修が通ったあの通りはゾンビ共の死体によって埋め尽くされていた

～食堂～

「うぃーす　ＷＡＷＡＷＡ忘れ物～」

今度は某アニメの脇役が言っていた台詞を言いながら食堂に入った

「何やってるんですか？修さん」

美麻さんが頭に疑問マークを付けて言った

「ぬおっ!?すまん、ごゆっくり!!」

「待って下さい!何がしたいんですか!?」

「修、はしゃぎ過ぎだ」

秀治が俺の頭を叩いて言った

「いたた・・・だって、しょうがないじゃないか。電波を受信したんだから」

俺がそう言うと秀治は呆れたように首を振り、美麻さんは若干引きそうな顔で俺を見ていた。やめて!そんな目で俺を見ないで!

数分後、ようやく落ち着きを取り戻した俺は脱出の準備を始める

「秀治、飲み水とかはこのバックに入れてけ」

そう言って空のバックを渡す

「OK、行って来るよ」

そう言って冷蔵庫に保存してある飲み物を取って行った

「美麻さんはこっちのバックに食糧を積んで来てくれないか?」

そう言ってもう一方のバックを渡す

「わかりました～」

そう言ってお菓子屋やらパンやらを積んでいく

「さて、俺は・・・・」

そう言って武器の確認をする。現在使われたのは槍と火炎瓶である。

槍は耐久が少し減っただけだが、それでもまだ、使える状態であった。火炎瓶は１０本から5本にまで減っていた

「う～む、いささか、使いすぎたかな・・・・仕方ない、新しい武器を作るか」

そう言って周りを見渡すと、防犯用のためか棍棒が隅っこに置かれていた

「おっこいつは使えるな。槍がダメになった時、代わりに使おうっと」

そう言って棍棒を机の上に置いた

数分後、秀治と美麻さんが戻って来た

「修、こっちは完了したぜ」

「私もできました」

バックはパンパンになるほど詰め込まれたようだ

「こっちも準備ＯＫだ。さぁ、覚悟はできてるな？」

そう言ってニヤリと笑う俺

「俺はもちろんさ」

と秀治

「私も大丈夫です！」

と美麻さん

「よし、行くぞ！」

そう言って俺らはハンヴィーに乗り込んだ。そして、奴らの襲撃を受けることなく、無事、大学からの脱出に成功するのだった。

汚物は消毒じゃあああ！！！（後書き）

いかがだったでしょうか？

まだまだ、文才能力が甘いですね。慢心せずこれからも頑張って行きたいと思っています！ではでは～

街の状況とメイドと機関銃

俺達は無事、大学から脱出した。そして、一番近い俺の家から寄る事になった。尚、美麻さんの両親は俺と同様海外で仕事をしているらしくこの時期は一人暮らしの状態だそうだ

なので、俺の家と秀治の家を回ることになった

～国道～

「こいつは、酷いな・・・・・」

秀治が言う

大学からそのまま国道に出た俺達、しかし、街は悲惨な状態だった。車は事故や火災を起こしており、店のショーウィンドウには血がべっとりと付いていた。そして、生存者が見当たらない。

まるで、ゴーストタウンのようだ

「街の人達はどこに行ったんでしょうか？」

美麻さんが言う

「ほとんどの人間がゾンビ化して生存者を追って行ったんじゃないか？ちらほらとゾンビの姿は見えるけど、」

そのまま、町を通り抜けるようにして過ぎていく、途中、ゾンビが襲うと追いかけてきたがすぐに離されてしまい、うめき声を上げる

だけで立ち尽くしていた

「さて、まずは俺の家に向かうとするか」

俺が言う

「そういえば、修の家ってメイドがいるんじゃなかったっけ？」

秀治が言う

「ああ、そうだ。」

「もしかして、手遅れって可能性は・・・・」

美麻さんが最悪の状況を想像する

「いや、家のメイドは特殊な訓練を受けていてな。ゾンビ如きに後れをとるはずはない。なんたって古知屋家最高のメイドとまで言われたからな」

そう言って笑う。琥珀はあらゆる軍事訓練を受けている。そのため、ちっとやそっとじゃあやられないのは俺が一番よく知ってるからな

「ついでに言うと俺の家には銃があるからな。そこで装備を整えて、これからのサバイバルに挑もう」

「サバイバルって・・・・・」

秀治が苦笑いしながら言う

「というか。修さん、銃なんて持ってるんですか！？」

美麻さんが驚く

「ああ、家に飾ってある模造品もあるが、親父のコネでな。秘密裏に家に置いてってくれたんだよ。多分、一年位は戦争を続けられるかもな。はっはっは！！！」

俺はからからと笑いながら言った。

親父のお得意様の中には軍関係者もいるので、友好の印に銃をプレゼントする事があるそうだ。そのおかげで、家には様々な武器が所狭しと置いてあるそうだ

そんな中、一番広い大通りに出た。そこを抜ければ修の家は目と鼻の先だった・・・・が、世の中、ハプニングと言う物は付きものである。

「ん？何だあれ・・・・・」

秀治が後ろに何かがあるのを気が付いたようだ。俺は曲がった時に気づいていたが・・・・・・・・・・

修達の乗るハンヴィーの後ろをタンクローリーが走っていた。しかもトレーラー型の大型車が

「修、後ろのトラックって生存者かな？」

秀治が言う

「どうだろう?だとしたら、向こうから何かしらの反応は（ガシャァアアン！！）！！」

サイドミラーから後ろの状況を見ると、トラックは標識などをぶった押しながら進んでいた。運転席の方を見ようとしてもライトが付いていて中の状況が見えないでいた

「?なんか、様子が変ですよ?」

美麻さんも気が付いたようだ

「ああ、確かにおかしいが、運転席が見えないからな」

俺が言った

「!修!もっとスピード上げろ!」

秀治が突然、大声で言う

俺はそれに伴ってハンヴィーのスピードを上げた

「秀治、どうしたんだ!?」

「あのトラックは生存者なんかいない・・・・・死体だけだ」

青ざめた顔で言う

どういう事だ?と思い、窓から顔を突き出して後ろのトラックを目視する

「・・・・！こいつはヤバい！」

そう言って更にスピードを上げた

「ど、どうしたんですか！？」

美麻さんが言った

「秀治の言う通りだ。あのトラック、死体が動かしてるぞ」

俺が後ろを見た時、丁度、ヘッドライトが届かない所まで来ていたため、運転席を見る事が出来たが、そこにいたのは生存者ではなく、ゾンビがトラックを操作していたのだった。

恐らく、ゾンビに襲われた後、何とかその場を逃げる事が出来たが途中でゾンビ化してしまい、今に至るって所だろう。しかし、厄介だこの大通りは大通りのくせに交差点が全くないのだ。そのため、途中でやり過ごす事も出来ないでいた

「クソ！どうすればいい！」

俺はアクセルを踏みながら言った

「修、これ以上は出ないのかよ！？すぐそこまで来てんぞ！」

秀治が後ろを見ながら言う

「これが限界だよ！」

アクセルは全開に踏んではいるが、トレーラーに比べると馬力はちょっと少ない方だ。大してトレーラーはスピードこそ遅くは行くものの馬力は怪物並みに性能を持っている。そのため、直線的なこの大通りではトレーラーが有利となるわけだ

「くそ、もう駄目なのか！？」

秀治が言う

その時だった。どこからか銃声が聞こえた、しかも警察が使用する銃ではなく明らかに連射音が聞こえたしかも、めっちゃ速く

銃声が聞こえたかと思うと、トラックのタイヤがパンクし、その衝撃でよろめいた車体は大きくバランスを崩し、横倒しに倒れた。

「「！？」」

俺以外の二人が何が起きたか分からない状況のようだ

「真打ちの登場ってか？」

俺はニヤリと笑いながら言った

「修！まだ、追いかけてくんぞ！」

トレーラーは横倒しになってもそのスピードを落とす事はなかった。

「おし！家が見えてきた！あそこに入りゃあ俺達の勝ちだ！」

俺が言った。

数メートル先には俺の邸宅が見えていた。

「よし！曲がるぞ！掴まれ！どっせいいいいい！！！！！」

そう言ってハンドルを限界まで回した。ハンヴィーはドリフトするように家の門を潜りぬけた。その数秒後にトレーラーが通り過ぎていき・・・・・その先で大爆発を起こした

「ふぅ～間一髪ってのはこの事だろうな～」

秀治が言った

「ああ、今回は運が良かったよ。家のメイドに感謝しな」

そう言ってハンヴィーを降りる。そこには一人のメイドが主の帰りを待っていた

「お帰りなさいませ。修様」

琥珀がお辞儀をして言った

「ああ、琥珀、ただいま。無事だったようだな」

「当たり前です。これでも、古知屋家のメイドをしているのですから」

「そうだったな。よし、門を閉めよう。あの化け物共が入ってこれないようにな」

「承知しました」

そう言って俺と琥珀で門を閉め、破られないようにバリケードを作った

～数分後～

「では、改めまして、古知屋家のメイドをしています。矢代　琥珀と申します。」

琥珀が自己紹介をする

「あ、俺は、上佐和　秀治って言います」

「私は古城　美麻と言います」

そう言って二人も挨拶をする

「琥珀はさっきも言った通り、家に仕えるメイドだ。訓練も受けてるから、多少、無茶なこともできる。さっきの攻撃だって琥珀がやった物だ」

俺が言った

「ええ!?マジかよ!」

秀治が驚いた

「修様、私にも限度があります。そこを弁えて頂きたい。まぁ、あの距離など私の愛用する銃ではどうってことないですけど」

琥珀が反論した

「因みに、どんな銃を？」

美麻さんが言う

「これです」

そう言ってどこから出したのか分からないが、外見はバレットＭ８２Ａ１だったが、それを改造してフルオート射撃とボックスマガジンを付けたようだ。さらに、撃ちやすいように銃身も短く切り詰めてある

「これは？」

秀治が言う

「これは、ＸＭ－１０１というフルオート型の狙撃兼機関銃です」

琥珀が言う

「は～こんなの初めて見た～」

秀治が言う

「すごいですね。琥珀さん」

美麻さんが言う

「いいえ、それほどでも、これも修様のためですから」

「まっそんな事よりも家の中に入ろう。戦の準備をしなきゃあな」

「無視ですか・・・・せっかく、主の期待に応えようとしたのに・・・・分かりました。お二人ともこちらへどうぞ」

琥珀が若干拗ねたように言うが、口元は笑っていた。久々の射撃と主が無事に生還してきた喜びと一緒にこみ上げての笑いなのだろう。そして、俺達は家の中へと入って行った

こうして、危機を切り抜けた俺達であった

街の状況とメイドと機関銃（後書き）

銃紹介

ＸＭ－１０１

使用者　矢代　琥珀

概要

外見はバレットライフルに似ているが、中身はとんでもない化け物である。まず、フルオート射撃機能を取り付けて、狙撃銃だけでなく機関銃としての役割も果たせるようになっている

そのため、マガジンも機関銃用のボックスマガジンとなっている。

さらに、琥珀自身が扱いやすいように銃身を切り詰めている。これによる反動がすさまじいが琥珀は難なく扱えている

弾は、本来のバレットと同じ、１２．７ｍｍ弾を使用している

念願の銃　取ったどーー！！！

俺は、自分の家で琥珀と合流した後、秀治、美麻さん、琥珀と共に家に入った。そこで、装備を整えてこれからのサバイバルに挑もうとしていた

～エントランス～

「うわ～でかいな～」

秀治が言う

「本当ですね～」

美麻さんが言った

「家の方はお袋のデザインでな。なんか、イギリスの宮廷をイメージしたんだと、俺には分からんがね」

「修様、その発言はどうかと思いますよ?」

琥珀が言う

「いいんだよ。本人がいなけりゃあ」

「そうですか」

「二人とも、付いて来い。琥珀、お前は食糧の準備と自分の車を整備しとけ、ここは捨てると思うし」

俺が言った

「了解しました。では、二人とも、後ほど」

「「あ、ああ（え、ええ）」」

両者ともそれぞれの反応をした

「ほら、二人ともはぐれないようについて来い。武器庫はこっちだ」

そう言って二人を地下室に案内する

～地下室～

俺達は車庫より下の階の地下に来ていた。ここは、親父がよく俺を連れて来てはいろんな銃を見せたり、撃たせたりしていた。もちろん、射撃場だってある

「は～広いな～」

秀治が言う

「ここは、武器保管庫だからな。ありとあらゆる銃が置いてある。さぁ、お披露目と行こう」

そう言って近くのスイッチを押した。

すると、一部の壁が凹んでその周りの壁が裏返しになるように次々と動いて行く、例で言うなら映画のスパイアクションで秘密基地に

作られた武器庫のような物だ。そして、裏返った壁には、世界中の名銃が飾られていた。

もちろん、作り物ではない。れっきとした武器だ。持てば重量はあるし撃てば、反動だってある。全部が本物だ

「うっひょーー！！！これ全部本物！？」

秀治が興奮しながら言う

「ああ、友好の印に送られてきた物だ。間違いはないぜ？」

ニヤリと笑いながら言った

「どこぞのスパイ一家ですか？この家は」

美麻さんは呆れたように言った

「すごい！すごい！Ｍ８７０とかＭ９とか全部、本物だ！！修！お前と友達で良かったよ！！」

そう言って手を上下に思いっきり振りながら言った。って言うか痛い

「分かった分かった。手を離してくれ秀治」

「おっと、悪いね」

「さて、二人とも、本物で撃った事はあるか？」

俺が聞いた

「私は、銃に興味はそこそこありましたが実銃は撃った事がありません」

美麻さんが言う

「俺は、ハワイに行った時、射撃場で撃たせてもらった事があるくらいかな」

秀治が言う

「ふむ、ｒｏｏｋｉｅが一人、成り上がりが一人か。なら・・・・」

そう言って俺は銃が置いてある部屋に入って行く。そこで、二丁の銃を取り出す

「ほい、二人とも、まずはこの銃からだ」

そう言って二人に手渡した

美麻さんの方は９ｍｍ機関拳銃という国産のサブマシンガンだ。日本のミネベア社が作りだしたサブマシンガンで主に自衛隊指揮官や砲兵などが主に使っている銃である。開発当初、ＵＺＩに似ていた事もあり許可を取っていなかったため本家からクレームが来た事もある銃だ

秀治の方はＡＫ－４７という旧ソ連が作りだした傑作アサルトライフルである。現代の紛争においても反乱軍が使用する事から別名革命の銃とも言われる。安価で単純構造のためコピー品が流れている。現在でも約７０００万挺ほどが使われている。銃声がうるさく伏せ

撃ちが出来ないとの指摘もあるが信頼度が高い銃だ

「おっほー！ＡＫ－４７！革命の銃！」

秀治はそこで踊るかのように回っていた

「これは・・・・自衛隊の銃でしたっけ？」

美麻さんが言う

「その通り、そいつは９ｍｍ機関拳銃と言ってＵＺＩと似た構造だが、扱いやすくて女性でも安心できる銃だ。精密射撃はできないが、ばら撒きにおいてはサブマシンガンの中じゃあ一番かな」

俺が説明をする

「美麻さん、銃の扱いは分かる？」

俺が言った

「と言ってもネットで見たぐらいですから、そこまでは・・・・」

「そうか、じゃあ、弾薬の補給・・・つまり、それ自体が弾切れを起こした時、マガジンの入れ替えは分かるかい？」

「はい、そこまでなら」

「そうか。じゃあ、ちょっと先に言った所に射撃場があるから、そこで練習していくといい」

「修！おれもいいか？」

「ああ、お好きにどうぞ」

「ヤッホー！！」

秀治はウキウキしながら進んでいく

「あのー」

「ん？どうした、美麻さん」

「弾はどれを使えばいいんですか？」

「ああ、それなら、ハンドガンとかと同じ９ｍｍパラベラム弾を使えばいい、ほら、あそこの弾薬箱にそれぞれ、振り分けをしてあるから、見に行って見るといい」

そう言って指さす方向には弾薬箱が大量に置かれていた。そして、間違って使わないようにそれぞれの口径で色分けをされていた

「分かりました。それじゃあ、練習してきますね」

「ああ、好きなだけ、撃ってきたまえ」

そう言って一旦分かれる

「さてっと、今の内に銃を出しとくとしますかね」

そう言って隅っこに置いてあった大型のボストンバックを取り出す、

このバックは軍でも使用されていて壊れないとの評判らしいと親父が言ってたような気がする。

「とりあえず、いれるだけいれるか。途中で必要になっても帰られるかどうか分からんしな」

そう言って積み込む作業を続けて行った

～数分後～

「ふぃ～終わった終わった」

俺の目の前には大量のボストンバックと弾薬箱が置かれていた

「修様、こちらの作業が終わりました」

琥珀が来たようだ

「おう、自分の車は大丈夫だったか？」

「はい、ａｎｇｅｌ（エンジェル）にも問題はありません。と言うか全部積み込んだのですか？」

「ああ、俺とお前の車なら問題ないだろ？」

「まぁ、それはそうですけど、大雑把ですね」

「いうな。聞いてて悲しくなるから」

「分かりました。」

「そうだ。俺のハンヴィーも改造しとくか。琥珀、秀治と美麻さんは射撃場に居るから終わって出てきたら、積み込みの作業をやってくれ」

「了解です」

そう言って俺は車庫へと上がる

～車庫～

「さて、まずは・・・・」

そう言ってハンヴィーの上部にＭ１３４ミニガンを取り付ける。こいつは米軍で最も使用されている兵器の一つで破壊力は折り紙つきだ。こいつで撃たれればどんな奴も文字通り塵となる

そして、ドアは装甲板が付いているドアに変換し簡単には開かないようにしてある。窓も防弾ガラスに変え、タイヤは軍用タイヤに変換する

ん？なんで、そんな装備を持ってるかって？答えは簡単、前回も話したがこのハンヴィーは誕生日の日に軍関係者がくれたものだがオプションで米軍で使用されている物と同じ物を一緒にプレゼントされた。それだけの話だ

「よし、こんな物かね」

そう言いながらさらにハンヴィーの調整をしていく俺であった。

街は崩壊の一途を辿り、死者は生者を追いかけ食らう、外の世界はまさに地獄絵図と化していた。

街の状況とこれからの方針

前回、俺の家で武器を確保した後、俺達は出る準備を整えていた

～修邸　車庫～

「フンフンフンフ～ン」

俺は鼻歌を歌いながらハンヴィーの改造を行っていた。

「修様、秀治様と美麻様が準備ができたそうです。」

琥珀が来た

「ＯＫ，じゃあ、居間の方に案内してくれ。俺も行くから」

「分かりました」

そう言って車庫を出る琥珀

「よし、後は、この弾薬を入れればいいな」

そう言ってハンヴィーにミニガン用の弾薬を押しこんだ

「それじゃあ、行くとしますかね」

そう言って俺は車庫を後にした

～居間～

居間に着くと秀治と美麻さんと琥珀がお茶を楽しんでいた

「紅茶淹れるのうまいですね。琥珀さん」

美麻さんが言う

「これは、メイドとして当然のことです。美麻様も淹れてみてはどうですか？」

琥珀が言う

「ええ～？私なんて素人同然なんだよ？無理だよ～？」

と苦笑いしながら言った

「そうでもないですよ。紅茶を淹れるのはさほど、難しい事ではありません。練習すればきっとうまい紅茶が淹れられるようになりますよ」

そう言ってニコッと笑う琥珀

「分かった。挑戦してみる！」

そう言ってポッドを持つ

「じゃあ、俺が飲む役をやろうかね」

そう言って俺が出た

「修さん、お願いできますか？」

「応！任せろって！」

そう言って俺は秀治の隣に座る。秀治は紅茶ではなくお茶を飲んでいるようだ

美麻さんがカップに紅茶を注ぐ、コポコポと音を立てながらカップの中を満たしていく

「どうぞ」

そう言って俺に紅茶を渡す

「どれどれ・・・・・」

そう言って紅茶を口に含む

「・・・・どうですか？」

美麻さんが恐る恐る聞いて来た

「うん！うまい！さすがに琥珀には負けちゃうが、素人が淹れた紅茶とは思えないうまさだな。美麻さん、素質があるんじゃないか？」

俺は感想を言った

「本当ですか！？良かった～やりましたよ！琥珀さん！」

そう言って琥珀の手をブンブンと上下に振りながら言う

「良かったですね。美麻様」

琥珀も笑って言う

「さて、和んだ所で話し合いと行こう」

俺はさっき飲んだ紅茶を置いて皆に向かって言った

「話し合い？」

秀治が言った

「ああ、これから先、どんな事が起こるか分からない。ましてやこんな騒ぎだ。イカれた奴が出て来てもおかしくはないだろうよ。」

俺が言った

「確かに、修様の言う通り日本で、いや、世界中でこんな騒ぎになっているんですよね。だとしたら、正気を失っている輩が出て来てもおかしくはないはず・・・・」

琥珀が言った

「で、でも、助けを待ってる人だっているんじゃないですか？あんな化け物が出てきたら為す術が無いと思って立てこもる人だっているはずです」

美麻さんが言う

「でも、美麻さん、こんな状況だ。逆に助けたとしてもその内、裏切るって方向もあり得るよ。」

秀治が言う

「でも、目の前で助けを求めている人がいるならそれを助けるってのは道理じゃないですか?それこそ、人としておかしいと思います」

美麻さんが反論した

「まぁまぁ、二人とも熱い論争は置いといて、今は何をやるべきか、じゃないか?」

俺が言った

「た、確かに」

「そ、そうだな。すまなかった」

二人は俺に謝った

「いや、分かってくれれば結構さ。さて、最初は情報だ。琥珀」

「はい、修様」

琥珀はそう言ってどこから取り出したか分からないが一台のノートパソコンを取り出す

「修さん、これは?」

「これは、非常時用のパソコンだ。これなら、電波の届く限り情報を入手できるからな。それにこの騒ぎは一月や二月では収まらないと思うし、最悪テレビも使えない状態になるのではないかと俺は思うね」

「？どういう事だ？修」

秀治が言った

「このゾンビ騒ぎ、そう簡単に収集が付くと思っているのか？答えはＮＯだ。前例が無い上に歩く死体なんて科学的根拠が無いからな。仮に何かの病原菌だとしてもこの手はワクチンが無いってオチだからな」

そう。歩く死体なんてものは映画の世界でしかなかった事、科学的根拠が全く存在しないのだ。それに新型のウィルスだとしても、その元を断たねばならないが、今の俺達にそこまでの力はない。ならば、どうするべきか。答えは生き残る事だ。正確な情報を仕入れ、それを元に行動を開始していく。そして、いつになるかは分からないがきっとワクチンができるだろうその日まで生き残ればいい話だ。

「だったら、どうするんですか？どこかに閉じこもったとしてもやられるのがオチだと思います」

美麻さんが言う

「美麻さんの言う通りだ。仮にここに閉じこもったとしよう。食糧などの備蓄も入れたとして持つのはせいぜい、８ヶ月～１２か月って所だ。それに武器・弾薬も無限にあるわけじゃないしな。」

俺が言った

「確かに・・・・でも、どうするんだ?世界中でこんな風になってるなら、安全な場所はないって事か?」

秀治が言う

「いや、確かに世界中で起きたとは言っているが、やられているのは主に人口が多い場所の国だ。島国や無人島だって生き残る可能性は残っているぞ。」

「だとすると、日本を出るという事になるのか?」

「ああ、だが、それは最終手段だ。日本だって島国だ。沖縄とかはまだ、安全じゃないか?あそこにあるのは自衛隊じゃなくアメリカ軍なんだからよ。それこそ、軍人が統制を行ってるかもしれんな。」

俺が言った

「しかし、修様、そう言う所は速く収集を付けて外部からは入れないようになってるんじゃあないですか?」

琥珀が言った

「琥珀の言う通り、それも一理あるが可能性は捨てたもんじゃない。それはそうと情報を集めなきゃ始まんないな。琥珀、テレビを付けてくれ」

「分かりました」

そう言ってテレビを付ける琥珀

丁度、生中継なのかアナウンサーがテレビ中継車で移動しながら状況を説明していた

「こちらは、現在の街の状況です！至る所で黒煙が上がり、街は戦争でもしたかの様な状況です！現在の情報によりますと、全国で自衛隊が総動員で動いており、また、警察も総動員で動いてるとの情報が入っています！近隣の皆様は外に出ないで家の中に留まり、ドアや窓には板を打ち付けて救助が来るのを待っていて下さい！現在、知事による緊急宣言が発令されており、（パァ――ン！！）あら？あれは・・・・運転手さん！もっとスピードを上げて！後ろから！後ろから！トラックが（ガシャァアアン！）きゃあああああ！！！！！や、やめて！来ないで！あ、あああああああああああああああ！！！！！

（親父やお袋は・・・・まぁ、あの二人なら早々にやられる事はないだろう。なんたって武装夫婦なんてあだ名が付いてるんだからな）

俺も自分の両親の事を思っていたが、現実に戻り、話を進める

「これが、現在の状況だ。大学で言ったかもしれないが、警察は当てにならない。むしろ、自衛隊の方が生き残る確率は高い」

「だとしても、どこに向かえばいいんですか？この状況じゃあどこに避難しても同じですよね？」

美麻さんが言う

「確かにそうだが、閉じこもってるって訳にもいかん、だったら、秀治の家に行って、両親の安否を確認した後、船で脱出すればいい話さ」

「え？俺ん家？」

秀治が言った

「ああ、このメンバーで目的が残ってるのはお前だけだからな。お前の両親を確認した後、そこら辺に残ってる船で脱出した方が話が早い」

「そうだな・・・・・よし、修、次の目的地は俺の家だ！」

「了解・・・・美麻さんもそれでいいよな？」

「はい、私の両親も気になる所ですが、修さんと同じ海外に居るので連絡が取れません。ですから、これからも宜しくお願いします」

そう言って頭を下げる美麻さん

「こちらこそ、よろしくな。さて、話し合いが終わった所で二人は仮眠を取っていてくれ。この先、安心して寝る事なんて難しいだろうからな」

「修や琥珀さんはどうするんだい？」

秀治が言った

「何、俺達も仮眠は取るさ。その前に準備しなきゃあいけない事があるからな」

「そうか。無理はするなよ？俺や美麻さんはお前のおかげで生き残れてるような物だからな」

「分かってるって、それじゃあ琥珀、二人を寝室に案内してくれ」

「分かりました」

そう言って居間から三人が抜けていく。俺はソファーに座り、再びテレビを見る

「さて、この先、何が待ち受けているだろうね」

そう言ってテレビを見る俺だった

そうだ　街へ行こう

俺達は俺の家で仮眠をした。終わりの始まりの一日目が終わった。
そして、二日目の朝が迎えた

「ふわ～、」

俺は欠伸を欠きながら食堂についた
皆はすでに起きていたようだ

「修、おはよう」

「修さん、おはようございます」

二人が俺に気付いてあいさつした

「おはよう～二人ともよく寝られたか～？」

「ああ、ばっちりだぜ」

「私もよく寝られました」

「そうか。これで、支障をきたす事はないな」

俺が言った

「そうですね。」

琥珀が朝食を持って現れた

「おはよう。琥珀」

「おはようございます。修様」

そう言って机の上に朝食を置く

その量は半端ない。まぁ四人で食べるんだからな

「うわ～結構な量だな～」

秀治が言う

「何、腹が減っては戦はできぬってよく言うだろ？」

俺が言った

「確かにそうですね。」

美麻さんが賛同してくれた

「じゃあ・・・・」

「「「「いただきます」」」」

そう言って朝食を取る。

朝食の風景？何それ、おいしいの？

そして、皆で身支度を始めた。と言っても秀治と美麻さんはすでに終わらしていたらしく俺と琥珀だけ着替えることになった

「じゃあ、琥珀　戦闘服でいくぞ」

「分かりました」

そう言ってそれぞれの部屋に入る

～修の部屋～

「さてっと、やっぱあの服装が良いかね」

そう言ってクローゼットの奥からある一式を取り出す

上下の迷彩服　マガジンポーチ　最新型の防弾チョッキ

米国軍隊で使用されている一式と同じものである。なぜあるかって？それは（以下略

そして、数分して着替え終わる

「よし、こんな物かね。えっと俺専用の武器は・・・・・」

そう言って机の上に備え付けてあるスイッチを押す

すると、机の隣の隙間から階段状に隠し箪笥が現れる。言わずもがな修専用の武器が収まっている。中には二丁のソウドオフショットガンと銃剣付きのモシンナガンが収まっていた

そして、これをうまく使いこなせればそれだけで敵を圧倒する事が出来る上級者向きの銃でもある。

「さて、お前らの出番だ。しっかりと働いてくれよ？」

そう言ってモシンナガンとミシガン（命名　修）を取り出し、準備を整えた

部屋を出ると同時に琥珀の方も準備ができたらしく同時に出る形になった

「おう、琥珀、やっぱ凛々しいなその姿は」

琥珀の姿はメイド服からマフィア風のスーツに入れ替わった事だ。
ただ、銃はそのスーツに似つかわしくないあの対物ライフルを背負っていた

「久々に着ましたからしっくりときますね」

琥珀が言った

因みに琥珀が持っている対物ライフルの名前はジャッカルだそうだ。
何でも、有名な賞金首の名前なんだと

「んじゃあ二人の所へと向かいますか」

「そうですね」

そう言って二人が待つエントランスへと向かった

～エントランス～

「お前ら、どこぞの軍隊とマフィアだよ」

着いた早々この言葉が出た。まぁ、予想はしてたけどね

「何、ただの戯れだ。気にするな」

「気にするよ！美麻さんを見ろよ！茫然としちゃってるだろ！」

「（。ｏ。）ポカーン」↑美麻さん

「ＨＡＨＡＨＡ！！！気にしたら、そこで試合終了だよ」

俺が言った

「はぁ～まぁいいや」

秀治はため息をつきながら言った。どっか具合でも悪いのか？

「それより、もう出発するのか？」

「ああ、ここに長居は無用だ。さっさと出て他の生存者でも探しに行くとしますかね」

そう言って俺達は車庫に入って行く

～車庫～

「そういえば、ハンヴィーで移動すんのか？」

秀治が質問した

「いや、琥珀は自分の車で運転するって言ってたからな。それに生存者がいても全員が乗り切れる訳じゃないだろ？」

「う～ん、確かに・・・・」

「あっそうそう。美麻さん」

「なんですか？」

「昨日渡したパソコンあるよね？あれ、改造を施してもいいから美麻さんには情報を集めて貰いたい」

「はい、分かりました。と言ってもネットは繋げられるんですか？」

「ああ、パソコン自体にも改造はある程度してあるが、俺の改造なんてたかが知れてる。だったら、パソコンに強い美麻さんに任せようと思ってね」

俺が説明した

「分かりました。お役にたてるように頑張って行きます」

美麻さんが言った

その時、丁度、琥珀が乗るａｎｇｅｌがやって来たようだ

「・・・・こいつは・・・・・」

「すごい・・・・・」

秀治と美麻さんは唖然としていた。そりゃあそうだな。目の前に”軍用車両”がありゃあ

琥珀が乗りまわしているａｎｇｅｌとはＬＡＶ－２５の事であった。しかも、琥珀独自の改造が施されており本来の人員より、大幅に乗せることができるようになっている。武装は２５×１３７ｍｍ口径のＭ２４２　ブッシュマスター砲　を一門装備している

「なんで、こんな物が？」

「それは、私から説明します」

琥珀がａｎｇｅｌを降りて言う

「と言うと？」

「実は、ここのメイドをする前は武器商人として働いていました。その時に移動用として使っていた物をここに持ち込ませてもらっていました」

琥珀が説明する

「ああ～だから、そんな服装なんですね」

秀治が納得したように言う

「まぁ、そんな所です」

「さて、武器弾薬はそれぞれの車両に乗せてある。二人はどっちに乗りたい？」

俺が言った

「う～ん、オタクの俺としては迷う所だな」

秀治はニヤニヤとしながら言う

「私は、琥珀さんの方に乗ってみたいです。」

美麻さんが言う

「ここは、レディファーストだな。秀治」

「むぅ、仕方ない」

「決まりだ。行先はどうする？」

「とりあえず、警察署に向かわないか？」

秀治が言う

「どうしてだ？」

「いや、警察署ならある程度は把握してるかもしれないし、もしかしたら、生存者がいるかもしれないぞ？」

「ん～そうだな。展開的になんか面白くないが、行って見るとしますかね」

俺が言った

「修様、不謹慎ですよ」

琥珀が言う

「んだよ。そう言う琥珀はどうなんだ？」

「私は・・・・・・実に充実していますよ」

笑顔で言う

「琥珀さんの方が危ないですね」

美麻さんが言う

「まぁ、ともかく出発するとしよう」

そう言ってニ両の車に分かれて乗る

ハンヴィーもａｎｇｅｌも問題なくエンジンが始動した。そして、車庫のシャッターを開ける

「おし、行くぞ！」

そう言ってアクセルを踏む

～広場～

門の方にはバリケードがあるため、ゾンビ共は入ってこれないでいたが・・・・・・

「おいおい、どこぞの無理ゲーか？」

門の前にはいつの間にか４０～６０体のゾンビ共がいた。きっと、爆発音を聞きつけて来たのだろう。そして、こちらの存在に気付くと一斉に門に寄って来た

『アアアアア』

「ったく、容赦しないな。これじゃあｈａｒｄと言うよりＬｕｎａだな」

俺が言った

「修、それ東方だよ。」

秀治が突っ込む

「おっといけね。じゃあ、秀治、銃座の方についてくれるか？」

「ｏｋ、把握」

そう言って助手席から銃座に移る秀治

「撃ち方は分かるよな？」

「もち」

その時だった。門の方でけたたましい音が立った。ゾンビ共が門を破って中に侵入して来たのだ！

『アアアアアア』

「行け！秀治！」

「ＯＫ！」

そう言ってＭ１３４のトリガーを押す、砲身がゆっくりと回転し始めやがて、弾が吐き出される。毎分２０００～４０００発という鉄の雨がゾンビ共を襲う。抵抗もなく塵となって消えていくゾンビ共

「ははは！！！見ろ！ゾンビ共が塵のようだ！」

秀治は笑いながら言う

「おま、それ前に使ったネタ・・・・」

俺が言った

数分後、ゾンビ共の死体は文字通り塵となっていた

「ふぅ～すっきりした！！」

秀治は清々しい笑顔で言った。全く、狂ってるのは俺だけじゃあないって事か?まぁいい、それはそれで面白いじゃないか

「では、気を取り直して出発進行!」

そう言って俺達は家から出る。前回、タンクローリーが事故を起こしたため本来、警察署に繋がる道とは反対の道から出ることにした

こうして、無事、出発する事が出来た俺達であった

そうだ　街へ行こう（後書き）

銃紹介

ソウドオフショットガン

狩猟用の散弾銃をストックと銃身を切り詰めたものでサイズ的にハンドガンで収まるような感じである。しかし、弾はニ発しか入らないので撃つ度にリロードが必要になるショットガンなのだ。

モシンナガン

ロシア帝国陸軍大佐のセルゲイ・イヴァノヴィッチ・モシンとベルギーの銃器メーカーである（エミールとレオンの）ナガン兄弟社が設計したボルトアクション式小銃。

ロシア帝国の制式小銃として１８９１年に採用。日露戦争、第一次世界大戦、ロシア革命など、ロシア帝国からソビエトへと移り変わる時代と共にあり続けた。１９３０年には近代化を施したＭ１８９１／３０の生産が続けられ、第二次世界大戦でも主力小銃として大量に生産された。第二次大戦後は、ＡＫ－４７の採用で主力小銃の座を譲ったものの、高威力と命中精度を生かして狙撃銃として使われ、１９６０年代にドラグノフ狙撃銃が後継となるまで第一線で使用され続けた。

ゾンビ共の特性

前回のあらすじ：準備は整った。出撃だ

～修邸前～

「ウラウラウラ！！！！！この死体共が！！！」

どうも、現在ハンヴィーを運転している修です。じつは、悩み事が出来てしまいました。親友である秀治君がミニガンをぶっ放しながらゾンビ無双を展開中です。しかも、楽しそうにヤッテいます。どうしたらいいのでしょうか？

「秀治、そろそろ変われや、お前だけずるいぞ。」

俺が言った

「良いじゃんかよ。修だって轢き殺したりしてんじゃん。」

「そいつはそうだけどよ。やっぱ、銃を撃ってなんぼでしょ」

俺が言った。いや車で轢き殺すのもありかもしれないけど、ただ、轢くだけじゃあね・・・・分かるっしょ？え？分からない？

「はいはい、だったらどこかで休憩に入るか？」

「だな。え～とこの辺だと・・・・・」

そう言ってカーナビを点ける。今来ている道は本来の警察署に向か

う道路の反対側を進んでいる。理由は（以下略

「修様、休憩でしたらこの先にある。スーパーはいかがでしょう？」

無線で琥珀で提案して来た

「おっ場所は分かるか？」

「はい」

「じゃあ、先頭を走ってくれ。俺は着いて行くから」

「分かりました」

そう言うと琥珀の乗るａｎｇｅｌが俺らのハンヴィーを追い抜いた。

「よし、今度は俺がやるからな。秀治」

「チェッ、分かったよ」

秀治は助手席に座りながら言った

～数分後、床主スーパー～

この床主スーパーは床主市でそれほど大きくはないが昔からあるスーパーだ。そこまででかくはないが近所にあるため俺も、昔はお世話になった場所だ

そして、なぜかゾンビ共はいなかった。

「さて、少しきゅ（ドカーン！！）おいいいいい！！！！！何やっちゃってんの！？琥珀さーん！」

秀治に休憩時間を言おうとしたが、その前にａｎｇｅｌがスーパーに突っ込んでいた。俺はすぐさまハンヴィーを降りてａｎｇｅｌに向かった。

丁度、ａｎｇｅｌから琥珀が出て来た

「おい！琥珀！何やってるんだよ！」

俺が言った

「すみません、ブレーキとアクセルを踏み間違えました。テヘッ」

「なんだよ。それ！今どきおじいさんやおばあさんがやりそうな事をやっちゃってんの！？」

俺は突っ込んだ。っていうか。琥珀ってあんな顔もできるんだな。思わずグッときちゃったぜ。この野郎

「ふえ～ん、何が起きたんですか～？」

後部のハッチから美麻さんが出て来た。しかも泣きながら、あんな事故を起こしたってのに美麻さんは無事みたいだ。ついでにいうとパソコンも無事だ

「美麻さん、無事で良かったよ。家の馬鹿が迷惑かけて申し訳ない。」

俺は謝った

「え！？い、いいですよ。修さんが謝る事じゃあないですし、それに、私も怪我をしてませんから」

美麻さんは慌てて言う

「この通り、修様も謝っていますので、ここはお願いします」

琥珀が言う

「おい、事故を起こした当事者が言うんじゃあねぇよ。締め上げんぞ」

「あらあら、怖い怖い」

琥珀はどこ吹く風だ。むかつく

「ま、まぁ、無事だったんだし、良かったじゃないか。それより、休憩しようぜ」

秀治が言った

「確かにそうだな。よし、琥珀、お前は罰として皆に飲み物を取って（盗って）来い」

俺が言った

「分かりました。もとはと言えば私の責任ですからね。それとなんか文字が違うような」

「気にするな」

「そうですか。では、行ってきます」

そう言って琥珀は壊れた部分からスーパーの中へと入って行った

「よし、じゃあ美麻さん」

「はい？」

そう言って首を可愛らしく傾げる。ん～性欲を持て余す

「パソコンの方は改造できた？」

「あっはい、粗方できました。システム自体も軽い物だったんで、改造してスーパーコンピュータ並みに上げてみました。」

さらりとすごい事言ったな。スーパーコンピュータ並みだって？アメリカの心臓部とも言えるくらいのシステムに上げましたよ。この子

秀治は口を開けてポカーンとしている

「そ、そうか。じゃあ、この辺の地図とかは出せるか？」

「はい、ちょっと待って下さい」

そう言ってパソコンを開き、カタカタと打ち込んでいく

「これ・・・・ですね。どうぞ」

そう言ってパソコンを渡す美麻さん

「ありがとう。どれどれ・・・・・」

そう言って俺はパソコンを見る。丁度、現在位置を中心にして、半径1．5キロが出されていた。東には俺の家があり、更にその向こうには橋を挟んで床主警察署があった。北には藤美学園という高校がある。西には俺達が通っていた。日本技術大学がある。

「修、どういうルートで行くんだ?」

秀治が言った

「そうだな・・・・俺に家から東の途中はタンクローリが横転、炎上してるからな。だとしたら藤美学園の方に向かって回り込む形かな。そうすれば、床主大橋とは別に御別橋の方から抜けられるだろうな。」

「なるほど、それに伴って障害はあるか?」

「そうだな。これは憶測だが橋は警察が封鎖してると思う。それにイカレタ奴らだな。多分、街の中心は暴動やら何やら起きてるだろうしな。」

俺が言った

「でも、なんで、警察が橋を封鎖してるんですか?」

美麻さんが言った

「簡単だよ。橋を中心としたら警察署の方はまだ、ゾンビ共が現れていないんじゃあないか？それか、拡大を防ぐためか。だな」

秀治が言う

「それと、あのゾンビ共、目は見えていないぜ。多分」

俺が言った

「え？どういうことですか？」

「推測だが、あいつらは視力とかの感覚を失う代わりに聴力が以上に高いかもしれないな。現に目を合わせていないのに一人、こっちに向かって来てるぜ」

『アアアアアア』

そう言ってソウドオフショットガンことミシガンをゾンビに向け構える。ゾンビは一歩一歩ゆっくりと歩きながらこちらに向かって来ていた

「ヒッ！」

美麻さんは驚いた

「シッ静かに」

そう言って俺は美麻さんの口を塞いだ。秀治も合わせるように静かになった

俺はもしもの時のためにミシガンだけは構えていた・・・・が

「？」

美麻さんは訳が分からないといった顔していた

（やっぱりか・・・・思った通りだ）

俺は今の動きを見て確信した。どういう理屈か分からんが、こいつらは耳が良くなっている。その代わり視覚などの感覚が無いに等しく、現に俺の方を見てはいるが全く反応しないのである

「お疲れさん、実験は終了した」

そう言ってミシガンを撃つ、１２ゲージの弾がばら撒かれて行く、近距離だったため上半身が吹っ飛んだようだ

「これで、確信した。こいつらは音に反応するんだ」

「ああ、俺も見て分かったよ」

秀治が言った

「これからは、あまり音を出さないようにしよう。大きければ大きいほどこいつらは大群になってやってくる」

「そうですね。気お付けましょう」

「じゃあ、一旦休憩だな。」

そう言って休憩を取ることにした俺達であった

ゾンビ共の特性（後書き）

あらすじの方で書いていなかったのですが、一応原作キャラもだそうと思っています。そして、時間軸が若干違うため、矛盾している時もあるかもしれません。ご了承ください。

皆で行けば怖くないさ♪♪（前書き）

最初は別視点で行きます。

皆で行けば怖くないさ♪♪

～床主発電所　篠田視点～

「撃て！撃て！相手を人間と思うな！」

隊長が叫びながらアンデット共に銃弾を浴びせてく。他の隊員達も自分の持っている銃で奴らに発砲している

自衛隊員の標準装備は８９式小銃という国産物の銃である。しかし、重装備兵などはＭＩＮＩＭＩという分隊支援用火器を持っている。もちろん、私の隊にも支給されている。

「もう～どれだけいるのよ～」

綾瀬が言った

持っているのは親友である綾瀬（あやせ）　薫（かおる）だ。普通なら機関銃なんて代物は女性が使うべきではないのだが、なぜか彼女は見事に扱えているのだ。まぁ、そこは気にしないでおこう

私も自分の愛銃８９式でアンデット共を撃ってはいるが如何せん数が多すぎる。一体、どこから湧きでているのか気になってしょうがないのだ。しかも、弾が乏しくなってきている。中にはハンドガンで撃っている者までいた

「くそ！これじゃあ、ジリ貧だな。俺について来い！ここは持たん！」

隊長である小ノ牧三等陸佐が大声で言う。

「綾瀬！行くわよ！」

「あ～ん、待ってよ～篠田～」

綾瀬が走りながら言う

他の隊員達も走ってはいるようだがこちらも犠牲者がいるようだ。
その証拠に自衛隊員の格好をしたアンデットの姿がある

「隊長！どこに向かうんですか！？」

私が言った

「この発電所は捨てる！このままじゃあ我々があいつらの仲間入りになる！だったら、今は退くだけだ！」

隊長が言う

「しかし！本部の命令ですよ！」

「なぁに、人間、生きていれば何とでもなる。無理にやろうとしたってこちらがやられるだけだ。だったら、しっかりと準備を整えて今後に備えればいい。」

そう言って笑う

「分かりました。だったら、私もついて行きます。」

私が言った

「ふぇ～ん、隊長～私達だけになりましたよ～」

綾瀬が言った。って言うかよくもってるわね

「何！？」

隊長が言う

確かに周りには小ノ牧隊長、私、綾瀬の三人しかいなかった。他の隊員は無事だろうか？

「隊長、どうしますか？」

私が言った

「仕方あるまい、ここは我々だけで逃げよう。あそこにバンがある！それで脱出だ！」

隊長が指さす先には発電所の作業用のバンが止められていた。それほど、大きくはないが三人なら十分な大きさだ

「よし、私が動かしてくる！君達はここで防衛してくれ！」

「「了解（しました～）！！」」

そう言って私と綾瀬はその場に留まりアンデット共に向いた。奴らはそれほど多くはなかった

「綾瀬、行くわよ！」

「も～う、こうなったらヤケよ！」

そう言って銃弾を放つ、私は正確に綾瀬はばら撒くように撃っている

奴らは糸が切れた人形のように次々と倒れて行く

「ちっ、弾切れね。仕方ない」

そう言ってサブとして持っているコルトパイソンを出す

え？なんで持ってるのかって？簡単、知り合いに武器マニアがいたから譲ってもらったのよ。私のスタイルは二丁拳銃というスタイルだ。銃を二丁で扱う物で相当な訓練が必要なものである

「来なさい！死人はもう一回死んできなさい！」

そう言ってありったけの弾を撃ち出す、それと同時に後ろでエンジン音が聞こえた

「篠田！綾瀬！乗れ！」

大声で隊長が叫ぶ

「行くわよ！綾瀬！」

「うん！」

そう言ってバンに乗る

～篠田視点終了～

～床主スーパー～

俺達はスーパーで休憩していた。

「ふ～、さて行くとしますか」

俺が言った

「そうだな。ルートはさっきの通りで良いな」

秀治が言う

「ｏｋ、把握」

「じゃあ、出発だ」

そう言ってそれぞれの車に乗る

「秀治、お前が運転な」

「ほ～い」

そう言って運転席に乗る。俺は銃座に乗ってミニガンの弾を補充する

「よ～し、準備完了だ。行ってくれ」

そう言うとハンヴィーとａｎｇｅｌが動き出す

～大通り～

ここは俺の家とは別の大通りだ。周りには奴らの死体や廃車、事故車が転がっている

「こっちも酷いな～」

秀治が言う

「ああ、だが、見慣れただろう？これから先、どんなことが起きるか分からんがな」

俺が言った

「確かにそうだ」

そのまま、何事もなく進んでいく俺達

～街中～

俺達は中心にあるオフィス街に到着した。ここも他と同じように悲惨な状況になっていた。その時だった

「おろ？生存者か？」

俺達が進んでいる道の先でマイクロバスが遠くに見えたが、行ってしまった

「お～お～、事故を起こしてんな～」

街の中を走っている都バスであろう事故車が横転炎上しながら燃えている。周りにはゾンビ共が燃えながらうろついている。熱くないのかね？

「じゃあ、排除しておきますか」

そう言って車から降りる

手にはモシンナガンを持って、そして構える

「ｇｏｏｄｎｉｇｈｔ」

引き金を引く、パァーンという乾いた音が響き一体のゾンビの頭に吸い込まれてぶち当たる。他のゾンビが銃声に気付いたので余裕を持って排除しちゃったＺＥ！

「よし、排除完了♪♪」

傍から見たら気が狂ってるように見えるだろうな。だが、気にしない

「よし、移動しよう」

「ｏｋ、把握」

そう言って再び、俺らは移動する

さっきの生存者に会えれば良かったかもしれないが、先に行っちゃったしな。再び会える事を祈ろう。

「さてさて、どっから向かいましょうかね～」

俺が言った

「とりあえず、床主大橋に繋がる大通りに出ているけど、どうする？」

秀治が言った

「そうだな・・・・・とりあえず、向かおうか」

「そうだね。」

そう言って俺達は橋の方に向かった

皆で行けば怖くないさ♪♪（後書き）

なんか、最後の方が中途半端な気がするが・・・次回に繋げよう。
頑張れ、俺！

新たな生存者達（前書き）

やっと、合流できた

新たな生存者達

俺達は床主大橋に続く大通りを通っていた。周りは相変わらずの状態であり、俺はハンヴィーの屋根からモシンナガンで撃ち続けている

「はぁ～生存者はいないのかよ？」

俺が言った

「そうだな～一人ぐらい居ても良さそうな感じだけど、周りがね・・・・」

秀治が言う

秀治の言う通り周りはゾンビだらけで生存者の影すら見えない。マンションなどの高層住宅では上の階が明かりを付けているという事は生存者なのだろう。だとしたら怖くて出て来れないという所か。所詮は、無駄な事だ。ずっと居座れば様々な問題が発生する。まず第一に食糧・飲料水が無くなるだ。人間にとって食は重要なことであり生きるためには絶対に欠かすことのできない物である

逆にゾンビ共は食事を取らなくても数年、数十年は生きていられる。これが大きな差だろう

「マンションとかには生存者がいそうだが、出てこないだろうな」

俺が言った

「どうしてだい？」

「簡単さ我が身が大切って所だろう。自分さえ助かればいいと思ってる連中だ。どんな事をしても出てこないだろうよ」

「確かに・・・・おっ？」

秀治が何かを見つけた

「どうした？秀治」

「修、ここの道にやたらと空薬莢が落ちてるよ。見た感じ、それほど時間が立ってない」

そう言って自分達が走っている道路の上を指さす。確かにそこには薬莢が転がっていた。一発ではなく何百発と言う数の薬莢が落ちていた

「ふ～む、生存者か？」

「多分、自衛隊じゃない？薬莢の長さ的には８９式の銃だと思うよ」

秀治が言った

「おお、言われてみればそうだな。よし、秀治、一旦停止しろ」

「ｏｋ　把握」

そう言ってハンヴィーを止める。琥珀達が乗るａｎｇｅｌも止まった

幸い、周りにはゾンビ共がいなかったというよりも修がモシンナガ

ンを使ってある程度排除しておいたのだ

ａｎｇｅｌから琥珀と美麻さんが降りてくる

「修様、どうかされたのですか？」

琥珀が言う

「ああ、お前らも気づいてはいると思うがここの道路に入ってから急に薬莢が多くなってきた。」

俺が言った

「あっ、確かにそうですね。でも、それがどうかしたんですか？」

美麻さんが言う

「薬莢の数的にもそれほど多くはない。しかも、撃ってからまだ、数分が立ってない事が分かる」

そう言って足元にあった薬莢を拾う。

「どうして分かるんですか？」

美麻さんが言う

「簡単だ。この薬莢、裏に撃った後、空である事が分かるように印が付くんだ。しかも、時間が経つごとに薄れていく。ほら、まだ、赤いだろう？」

そう言って薬莢の裏を見せる

「ほんとだ。でも、撃った後ですからこんなの必要ないじゃないですか？」

「美麻さんが言うのは最もだ。これは昭和の頃に作られた制度でな。なぜか、日本だけが守ってるんだ。まぁ、そんな事はどうでもいいが、もしかしたらこの近くで自衛隊が戦っているのかもしれない。可能性は低いが行ってみる価値はあると思う。そこで、皆の意見を聞きたいんだ」

「そうですね・・・自衛隊が加われば、結構な戦力になると思います。私は行くの方に賛成ですね」

琥珀が言う

「俺も同じ意見だ。生存者がいれば格段に生き残れる確率は高くなるからな」

秀治が言う

「私も賛成ですね。この中じゃあ私は戦力にはならないですし」

美麻さんが言う

「決まりだな。出発するぞ」

そう言ってそれぞれの車両に乗り込み発進する。

薬莢は床主大橋の手前で曲がっており俺達もそれに続いて曲がって

行く

「ん?秀治、何か聞こえないか?」

俺が言った

「聞こえるね・・・・こいつは８９式か?」

秀治が発砲音を聞きながら言った

「俺も同じ意見だ。銃声はあの角を曲がった先だな」

そう言って一軒のラーメン店の角を指さす

「ｏｋ　把握」

秀治がそう言ってハンドルを握る

「琥珀、お前らも後に続いてくれ。５０m先にあるラーメン店を曲がった先に生存者がいると思うから」

そう言うと無線から「了解しました」と聞こえた

「さぁ、ｐａｒｔｙの始まりだ・・・・」

そう言ってミニガンに弾を装填する

～篠田ｓｉｄｅ～

私達はなんとか発電所を脱出する事が出来た。その後もひたすら車

で逃亡を図っていた。しかし、アンデット共は分かっているかのように私達を追いかけてくる

「くそ！篠田、後ろはどうなっている！？」

小ノ牧隊長が言う

「ダメです！減るどころか増える一方です！」

私が言った。隣では綾瀬がＭＩＮＩＭＩで撃ち続けている

「え～ん、なんで、減らないの～？」

泣きながら言った

「うっさい！泣く暇があったら撃ち続けな！」

そう言って私もパイソン×２で撃ち続けている

「くっそぅ、どうすればいいんだ！」

隊長が運転しながら言う

「た、隊長！前！前！」

「え？うお！？」

拍子でハンドルが大きく左に傾く、その瞬間世界が回った否、車自体が横転したのだ！

「いっつつつ・・・・・はっ!?綾瀬!?隊長!?」

私は二人を見た

「きゅう～」

綾瀬は目を回しながら

「お～いたた・・・・・」

隊長は頭を摩りながらベルトをはずしていた。二人とも無事だったみたいだ

「ほら、綾瀬、さっさと起きな!奴らの仲間入りになるよ」

そう言って頭を叩く

「ふぎゃ!?いたた・・・一体何が起きたの～?」

「車が横転したのよ。外の状況を確認しなきゃ」

そう言って私が出た

「あらあら・・・こりゃあ、ヤバいわね」

周りはアンデット共がひしめいていた。

「篠田、どうだ?」

隊長が言う

「二人とも早く、車の上に乗って！」

二人はすぐさま横転したバンの上に乗った私も後に続く

「う～む、どうするべきか」

「絶体絶命ね・・・・」

その時だった

「ヒィーハァー！！！！！！」

どこからか声が聞こえた

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

「よっしゃあああ！！！！！戦争をおっぱじめんぞ！！！！！突撃ぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！！」

ハンヴィーはスピードを上げていく、その間にミニガンの砲身を回転させる

毎分２０００発以上の弾が多くのゾンビ共に直撃していき細切れになって行く、おや？あのバンの上に乗っているのは生存者だな

「秀治！あのバンの後ろに停めろ！こいつを盾にするんだ！琥珀！ａｎｇｅｌのブッシュマスターを使え！」

そう言うとハンヴィーは横転したバンの後ろにａｎｇｅｌはドリフ

トしながらブッシュマスターを奴らに向けて発砲していく

ゾンビ共は吹っ飛んだり細切れになって行った

「逃げるゾンビはヘタレゾンビだ！逃げないゾンビはよく訓練されたゾンビだ！」

ベトナム方面の軍人さんが言ってた言葉を発しながら撃ち続けた

数分後、ゾンビ共は壊滅した。それと同時に生存者が声を掛けてきた

「すまない、助かったよ。我々は陸上自衛隊第５師団の者だ。私は小ノ牧三等陸佐だこの隊の隊長を務めさせてもらっている」

そう言って敬礼した

「運が良かったですね。俺達は日本技術大学の生徒です。俺は古知屋　修って言います。」

俺が言った

「古知屋ですって！？」

一人の女性隊員が言った

「知っているのか？篠田」

隊長が言う

「はい、古知屋家といえば日本が誇る貿易会社の一つです。実はそ

この者と友人関係にあります。」

篠田という女性隊員が言った

「と言う事は、お袋の知り合いですか？」

「ええ、私は篠田（しのだ）　訓子（のりこ）と言います。佳織さんは元気にしてる？」

「まぁ、元気にしてるっちゃあ元気にしてますけど、今、親父と一緒に仕事で海外にいましてね。連絡が取れないんですよ」

「そうか・・・無事だといいな」

「まったくです。まぁ、あの二人なら大丈夫だと思いますよ。なんせ、武装夫婦なんてあだ名がありますからね」

「ふふ、そうだな」

「お～い、修、置いてくなよ～」

秀治が言った

「おっと悪い悪い、こっちの二人は同じ大学の生徒で上佐和秀治と古城美麻と言います。もう一人は家のメイドで矢代琥珀と言います」

「「「よろしく（お願いします）」」」

「ご丁寧にどうもな。こちらの二人は篠田訓子と綾瀬（あやせ）　薫（かおる）だ。」

「よろしく」「よろしく～」

二人が挨拶する

「さて、小ノ牧さん」

「なんだね？」

「あなた達はどうしてこんな所に？」

俺が言った

「実は、発電所を守るように言われて来ていたんだがな予想以上にこのアンデット共が多くてな。仕方なく脱出してさっきに至るという事だ」

「そうですか。大変でしたね」

「ああ、君達も無事みたいだしな。それにしても、なんで、ハンヴィーとＬＡＶ－２５があるんだ？」

ニ車両を見ながら言った

「ああ、どちらとも家の所有物ですよ。」

「なるほど、君に言われると妙に納得してしまうな」

「そうでしょうか？まぁ、そんな事よりもこれからどうするつもりだったんです？俺達はこの街から出ようかと思っているんですが」

「そうだな・・・本部とも連絡が付かんし、しばらく君達と一緒

に行動がしたい。良いかね？」

「ええ、大歓迎ですよ」

こうして、新たな仲間が俺達のチームに加わった

新たな生存者達（後書き）

人物紹介

篠田（しのだ）　訓子（のりこ）

陸上自衛隊第５師団に所属する女性隊員である。身長は高めで訓練で鍛え上げられた体はモデル並みにすごい

バストは大きいほどではないし小さくもない本人曰くあんな物肩がこるだけ、だそうだ。銃は８９式とコルトパイソンを使う
尚、彼女は数少ないトゥーハンドの使いだそうだ

綾瀬（あやせ）　薫（かおる）

篠田と同じく第五師団に所属する女性隊員、篠田とは親友の中だという性格は天然系でよくドジってたりすることがあるが大事な場面では軽機関銃をぶっ放す
　女性では珍しく軽機関銃を扱っているため仲間内からは〇〇〇〇と機関銃の再臨だと言われたらしい
バストはでかめでメロンが二つ垂れ下がっていると思ってくれればいい、

小ノ牧（おのまき）隊長

第五師団の隊長を務める隊員で冷静かつ決断のできる隊員である。自衛隊の中では銃の神様と言われるほど扱いがうまいらしい、
最近では８９式ではなくアメリカ軍から支給されたＭ１４ライフルを使用している。しかも改造仕様らしい

本人曰く自分はそこまで扱いがうまい訳ではないただ、銃が好きなだけだとの事

床主大橋

俺達は生存者である自衛隊の小ノ牧隊長と共に床主大橋に来ていた。
その頃には夜になっており、おまけに道は避難民で溢れかえっていた

「おいおい、こいつは多すぎだろう」

俺が言った

「そうだな。無線では警察が橋を封鎖しているとは聞いていたがこの有り様はなんだ?」

小ノ牧隊長が言う

因みに今、ハンヴィーに乗っているのは俺、小ノ牧隊長、篠田軍曹の三人である。残りはａｎｇｅｌの方に乗っている

「でも、このままだと埒が明かないんじゃあないですか?他の道から行っても良さそうな気もしますが」

篠田軍曹が言う

「確かにそうだな。修君、この橋以外で通れそうな所はあるか?」

「そうですね・・・・少し、北に行った所に御別橋っていう橋がありますけど、多分、同じようになってるんじゃないですか?」

俺が言った

床主大橋でこの状態なんだ、他の橋なんか、もっと酷い事になってるかもな

「だが、君の仮説が正しいならアンデット共はすぐにでも集まってくるぞ。そうなった時には取り返しがつかない」

「そうですね・・・ちょっと橋の様子を見てから決めるとしますか。小ノ牧さん、ハンヴィーの方ちょっと預かっててくれますか？」

「分かった。だが、危険を感じたらすぐにでも戻ってきなさい」

「わっかりました！お～い、秀治、いるか～？」

無線で秀治を呼び出す

「なんだ～？我が同志よ～」

「なんだ？その声真似は」

「気にすんな。で、どうした？」

「ちょっと橋の様子を見てこようと思ってな。お前も一緒に来てくれるか？」

「いいともーー！！」

「おい、それもやめろいろんな人から怒られそうだから」

「ｏｋ、把握」

そう言って無線を切る

「じゃあ、行ってきます。何かあったら無線で連絡して下さい」

「分かった。」

そう言って俺はハンヴィーを降りる後ろのａｎｇｅｌから秀治が降りる

「よっ修」

「おう、じゃあ行くとするか。っとそうだ。秀治、ＡＫじゃあ目に付くからこいつを持ってけ」

そう言ってＭ９２Ｆを渡す

「おお！Ｍ９２Ｆじゃん、アメリカ軍どころか今じゃあ世界中で使われている世界標準の銃じゃん悪いな」

そう言って後ろポケットに銃を差し込む

「じゃあ行くか」

そう言って俺達は渋滞の列を抜けて行った

～床主大橋～

橋の前には人だかりができていた

「なんだぁ？」

「さぁ？回って行くか？」

「そうだな」

そう言って脇の道から橋の入口に近づく

「警察横暴、許すなーー！！！」

［許すな――！！！］

前に周ると原因が分かった。一人のメットを被ったおっさんが警察の封鎖に対して抗議を行っているようだ。後ろの団体はそれにつられてだろう

しかも内容をよく聞いてみるとこの流行病は日米共同で造られた生物兵器が漏れ、それが世界中の回ったと言っているのだ

「どこぞの団体だよ」

秀治が言った

「無駄さ。こいつらは現実を見ようとしていない。設定マニアだろうが無茶苦茶にもほどがあんぞ。日米で共同？あり得ないね。そもそも生物兵器なんざ。この国が作ってもなんのメリットもないしな」

俺は呆れながら言う

日米で共同でやる事といえば大規模な軍事演習や災害などで派遣してくれる程度だ。後は日米安保条約があるだろう。しかし、生物兵

器となると簡単には行かないどうせアメリカが独断で作って配備する程度だろう。日本が関わったとしても部品作りや簡単な作業をやらせてお終いだ。こいつらは軍隊のぐの字もわかっちゃいないな

その時、一人の警官が抗議団体の前に出た。かなり年が行ってるから巡査部長とかだろう

「すぐにここを立ち去りなさい。このままではあなた達が危険な目に遭いますよ」

警官が警告を発した

「我々は!そんなことでは立ち下がらないぞ!むしろ、警察がここを去れ!かえーれ!かえーれ!」

メットのおっさんが叫ぶと後ろの団体さんも帰れコールを叫ぶ

「我々は・・・手段・・・守らなければ・・・」

警官がブツブツと独り言を言っていた。帰れコールのせいでうまく聞き取れなかったが・・・後、団体さんうるさい、終いにはハチの巣にしてやんぞ

が、次の瞬間、一発の銃声が鳴り、団体さんは黙ってしまう。

そりゃあそうだろう。自分達を守ってくれるはずの警官が一般市民に対して銃を発砲したのだから・・・被害者はあのメットのおっさんだ

眉間にきれいに入ってしまい、即死だった

「きゃあああ！！！！！」

一人の女性が叫ぶ

その後も周りはザワザワと喋っていた

「行くぞ。秀治」

「お、おう」

そう言って橋の入り口から離れていく俺達

「警察はもう駄目だな。当てにならん」

俺が言った

「そうだね。警察があの状態ならもう壊滅したって言ってるようなもんだよね」

秀治が言う

「ああ、最悪の場合、俺達にその狂気が来るかもしれんな。とにかく、ここから逃げ出そう。いつ、あのゾンビ共が来るか分からんしな」

「そうだね」

そう言って自分達の車に戻って行く

～ハンヴィー車内～

「どうだった？修君」

小ノ牧さんが言う

「警察はもう駄目ですね。壊滅と言ってもいいでしょう」

「それって、どういう事？」

篠田さんが言う

俺は橋の前の出来事を説明する

え？説明が雑だって？今言った奴ら表へ出な。裁判にかけてやる

「まさか、そんなことが・・・・・・」

篠田さんは驚いたようだ

「ええ、でも現実に起こったことです。ここからさっさと出ましょう。いつ、奴らが来るか分かりませんし」

「そうだな。なら、ルートはどうする？」

「そうですね。もう夜ですし、無理に渡ろうってのはやめた方がいいですね。どこか、落ち着ける場所でも探して・・・・・・」

そう言った時、後ろから逃げ惑う人々がやってくる

「んあ？なんだ？」

俺はそう言って屋根の蓋を開けた

「マジですか・・・さっさと逃げた方がよさそうですね」

俺が言った。

俺達より後ろの区域に都バスが走って来ていた。しかし、一向に止まる気配が無い目を凝らして見てみると中は地獄と同じだった。運転手も襲われ操縦者のいなくなったバスは暴走バスと化して俺達に向かって来ている

さらにその後ろにはゾンビ共の大群であった。きっとこの音を聞きつけてやって来たのだろう。

「修君、どうした？」

「話すより先です！琥珀、聞こえるか！？」

無線で琥珀に連絡を取る

「琥珀です、どうかしましたか？」

「後ろから厄災が来るぞ。ここから脱出だ。俺の後を着いて来てくれ」

「了解です。こっちはいつでも行けます」

そう言って無線を切る

「よし・・・あそこだ！」

そう言ってハンヴィーを進める。他にも車はあったがそれを無理やりどかして、大通りとは別の脇道に入って行く、ハンヴィーも通れる大きさなのでａｎｇｅｌでも十分な幅だろう。俺達がその大通りを抜けた瞬間、後ろから爆発音や悲鳴が聞こえてくる。間一髪だな

「いや～、危なかったですね～」

俺が言った

「全くだ。あそこにいた民間人達には悪いが生き残るためだ。仕方あるまい」

と自衛隊らしからぬ発言をする小ノ牧隊長

「らしからぬ発言ですよね。今の」

「何、人類が滅びなきゃあ万々歳だ。あのアンデット共には借りを返さなければな」

そう言って笑う。こんな状況だと不謹慎に聞こえますよ小ノ牧さん

「とは言っても、今日はどうします？夜ですしさすがに危険だと思いますよ？」

「なら、修君、あそこのコンビニはどうかな？」

そう言って廃墟になっているコンビニを指さす、暴動にでもあった

のだろう至る所が壊れ、ガラスは割れ放題、まさに廃墟と言った感じだ

「いいですね。あそこにバリケードを作って籠るとしますか」

そう言って駐車場にハンヴィーを止める。その隣にａｎｇｅｌが停まった

「修、どうしたんだ？」

秀治が言う

「今日はここで一夜を明かそうと思ってな。今の事態なら十分に使えるねぐらだ。」

「でも、このままじゃあ使えないよな？」

「ああ、大丈夫だ。その辺の壊れてる物で補強はするし、屋根を開けてもしもの時ように避難経路は作るつもりだから」

「そうか。じゃあ、さっそく作っちゃうとしますかね」

そう言って腕をまくる

「そうだな。小ノ牧さん、ここら辺でブービートラップなんかはできますか？」

「ああ、十分にできるよ」

「じゃあ、トラップを作って下さい。俺達は補強の方をやるんで」

「分かった」

そう言ってそれぞれの役割を果たしていく俺達だった

コンビニでの一夜

俺らは床主大橋から離れて北にある御別橋の方に向かっていたが、夜になってしまったのでさすがに危険かと思い近くにあったコンビニで一夜を越そうかと思っていた

～コンビニ～

「おし、完成だ」

目の前のコンビニを見ながら言った

コンビニ自体は窓などが破損していたので近くの工場から鉄板を持ってきて溶接した。ハンヴィーやａｎｇｅｌはコンビニの脇に隙間があったのでそこに停めて屋根からも飛び降りられる形にした

しかも、コンビニでは珍しく入り口にはシャッターが設置されていたので、これで、ゾンビ共が侵入する事はまず無いだろう。

「修君、トラップの方も完成したぞ」

小ノ牧隊長が言った。

隊長によると手榴弾によるブービートラップだそうだ。と言っても入り口付近に置いてあるだけの安い物でしかない

「ありがとうございます。よくありましたね。手榴弾」

「なぁに、私は幾つ物戦場を見た事がある。それだけさ」

「なるほど、そうしておきましょうか」

俺が言った

「お～い、修、屋根にも通れるようになったぞ～」

「修さん、裏の食糧庫にまだ、カップめんとかありましたよ～」

秀治と美麻さんが言った

「ＯＫ！、小ノ牧さん、後の二人は？」

篠田さんと綾瀬さんの事を聞いた

「ああ、あの二人には近辺調査をしてもらっている。心配する事はない。彼女らは私が率いる隊員の中でも優秀の類だ。それにあの二人は個人的な付き合いもあるしな」

「信頼しているんですね」

「当たり前だ。部下を信用してやらんで上官が務まるか。おっ噂をすれば」

そう言うと正面の道から二人が来た

「隊長、近辺調査をしましたが、付近に住民の姿はありませんでした。」

篠田さんが言う

「そうか。ご苦労だったな。中に入って休憩したまえ、夕食の時間だからな」

「はっ分かりました」

そう言って敬礼する篠田さん

「ふぇ～おなかぺこぺこ～」

綾瀬さんが言う

「綾瀬、うるさい」

そう言いながら拳骨を喰らわす篠田さん

「ふぎゃ！？」

「ははは！相変わらず、仲がいいな二人とも」

小ノ牧さんが言う

「隊長、それは違います。ただの腐れ縁です」

「え～ん、酷いよ～訓子～」

泣きながら言う綾瀬さん

「うっさい、さっさと中に入るよ」

そう言って綾瀬さんを引き摺りながら入って行く。綾瀬さんが何か喚いているが、気にしないでおこう

「さて、修君、ここで一夜明かした後はどうするのかね？」

「まぁ、計画的には朝、ここを出て御別橋の方に向かいます。その後は状況に合わせて事を進めて行きましょう」

「そうだな。では、我々も入ろうか」

そう言って店内に入って行く

～コンビニ店内～

「よう、修、夕食が出来てるぞ」

秀治が言った

皆は輪になって座っていた。どうやら俺らを待っていたようだ

「悪いな。遅くなってそれじゃあ、手を合わせて・・・頂きます」

「「「「頂きます」」」」

そう言って皆でカップめんを食べる。日常じゃあ当たり前になっていた食品が災害では大きな活躍をもたらす、人が生きるためにも必要な事だ

・・・

夕食を食い終えた俺は屋上に行って見張りをしている

なんで、そんな事をしてるかって?ばっかやろう、世の中には”絶対”なんて物はないんだ。入口にあるシャッターが破られたっておかしくはない。そのために見張りをしているんだ

因みに屋上にいるのは俺と琥珀と美麻さんである

俺と琥珀が見張りをし、美麻さんはパソコンにて周辺を調べている。しかも、軍事衛星に侵入してそこからここの周辺を見張っているそうだ

マジですごいな

俺は周辺のゾンビどもにここが割れないように消音付きのナイツＳＲ－２５スナイパーライフルだ。Ｍ１６をカスタマイズしてスナイパーライフルに転換した銃である

琥珀には、Ｍ１６Ａ２にスコープを付けた簡易狙撃銃を渡してある。（まぁ、某アニメの極太眉毛のおっさんが使っている銃を想像してくれればいい。分かんない人はググって調べてくれ。）最初は愚図っていたが、俺がオハナシをしてやるとあっさりと縦に頷いてくれた。

「う～ん、ここら辺も来やがったな」

俺はスコープを覗きながら言った。コンビニの周りには床主大橋からやって来たであろうゾンビ共が歩いて来ている

「じゃあ、気晴らしにやりますか」

そう言って近くにいたコンビニ風のゾンビに照準を合わせる

「ｏｎｅｋｉｌｌ」

サイレンサー付きのため、本来の音は出ず、パシュという軽い音が出る。数秒後そのゾンビの頭は消えている

「ｎｉｃｅですよ。修様」

琥珀が言った

「サンキュー、琥珀、お前も気晴らしにどうだ？」

「ええ、もちろん”楽しませて”頂きますよ」

そう言って琥珀も狙撃を開始する。顔はまさに狩人の顔をしていた。

「ふっ、世の中の秩序が破壊されるか・・・・・・それもまた、一興だな」

俺は小言で言った後、再び、狙撃を開始する

～数分後～

コンビニ付近にいたゾンビ共は全滅してしまったので再び見張りを続行していた。

その時、銃声が聞こえた

「ん?こいつは・・・・・」

銃声で聞く限り俺が持っているＳＲ－２５に近い銃声だったな

「修様、今の銃声」

琥珀が言う

「ああ、どうやら、生存者がいたようだな。だが、場所が特定できん。美麻さん」

「はい?」

「今の銃声、聞こえた?」

「えっと、ずっとパソコンに集中していたので気づきませんでした。」

「そうか。まぁ、銃も持っているようだし大丈夫だろう。てか場所的にも遠かったしな」

そう言って再び見張りに戻ろうとした時

「!修さん!この近くに生存者がいますよ!」

美麻さんが言う

「どこですか?」

琥珀が言う

「えっと、ここから北、５０m先の民家の庭に立て篭もっています。武装は・・・・簡易的な槍みたいですね。でも、多勢に無勢と言った感じです。ゾンビ共が圧倒的に多いです」

「数は？」

「数は・・・・・うそ・・・・７０以上！？」

美麻さんが驚く、どうやらパソコンに数が表示されるように設定したようだ

「多いな・・・・無闇に出れば返り討ちだな。近くに道路以外で通れそうな所はあるか？」

俺が言った

「塀だけずっと続いていますね。それ以外は途切れ途切れになっています」

「そうか・・・・・なんとかできればな・・・・・・」

そう言って周りを見渡す・・・・近くには工事現場しかも大型の・・・・

「よし、あのクレーンを使おう。それに工事車両もあるからそれも使ってしまおう」

俺が言った

「そうときまれば行動あるのみですね」

琥珀が言う、さすがは俺専属のメイドだ。役に立ってくれるね～

「じゃあ、美麻さん、小ノ牧さん達に言い訳よろしく、行くぞ。琥珀」

そう言ってコンビニの屋上から降りる俺ら、後ろで美麻さんが叫んでいるがほっとこう。今は窮地に立っている民間人を助けるだけだな

～工事現場～

「さて、琥珀、クレーンを道端まで動かしてくれ。俺は車両をチョイスするから」

「分かりました。」

そう言ってクレーンの方に向かって行く

「さて、ドイツを・・・じゃなかった。どれを使おうかね」

目の前の車両を見ながら言った

数分後

「よっしゃあ、完成！」

そう言って魔改造した車両を見る。チョイスしたのはブルドーザーである。何年か前にアメリカでブルドーザーを改造して暴走する事

件があったのを思い出して、実際にやってみた。運転席には鉄板を張り付け、キャタピラにはスカートを付けた。これで、耐久力は若干ではあるが上がるだろう。それにトラックなどの車両では７０もの大群に向かって行っても横転してやられるのがオチだからな。だったら馬力が一番でかいブルドーザーを使うのが一番だ

「これはこれは、修様の趣味が出てますね」

クレーンを動かしてきた琥珀が言う

「まぁ、あの大群ならこれが妥当だろう。他に選んでも良かったが数を考えるとな」

「確かにそうですね」

「だろ？それじゃあ、いっちょやってくるから援護はよろしく、ジャッカルは使用許可するぞ」

「マジですか！？」

おおう、琥珀の目が輝いてるぞ。そんなにぶっ放したかったのかよ。

「ああ、派手にやってくれ。それと、俺が脱出してきたらクレーンの方を頼むぞ」

「分っかりました！」

元気よく返事をする琥珀

俺は魔改造ブルドーザーに乗ってエンジンを掛ける、ハンヴィーや

ａｎｇｅｌと違って普通のエンジンのため音はそんなに派手ではない

「よっしゃ、いっちょ花を咲かせますか！」

そう言って工事現場から出る俺だった

迷わず行けよ、行けば分かるさ

～？？？～

「もう！なんで、本署は何もしないの！？っていうか、本庁から援軍が来るんじゃなかったの！？」

婦警が言った

「そんな事言ったってしょうがないだろ？現に橋は奴らに襲われて民間人、警官多数の死傷者、これ以上、正直みたくはないがね」

警官が言う

制服ではないので刑事と言ったところだろう

「ほれ、二人ともこれ以上侵入したら儂とて無理があるぞい、こんな爺に苦労を押し付ける出ない」

日本刀を振りながら言う爺さん、歳は７０を過ぎたくらいか

「そ、そうですね。失礼しました！」

婦警が言う

「カッカッカ、そんなに畏まらなくてもよい、儂はもう警官ではない。ただ、剣が好きなだけの爺じゃよ」

そう言いながら侵入してきたゾンビの首を切り落とす

「すごいな、やっぱ」

刑事が言う

「そうね。さすがは・・・・っとこっちにも来たわね。セイ！」

そう言って婦警は侵入した奴らに向かって回し蹴りを喰らわす、吹っ飛んだゾンビは他の奴らも巻き込んで倒れる

「さすがにヤバいわね」

そう言いながらも必死にゾンビ共の襲撃に耐える生存者三名だった

～魔改造ブルドーザー～

「さ～て、琥珀、準備は良いか？」

俺は無線で言った

「ＯＫ，ですよ。こちらは射撃位置に着きました。いつでも行動して下さい。というか、早く行動して下さい。さっきからうずうずしてるんですから」

琥珀が言った

「あいよ。じゃあ、よろしく頼む」

そう言って無線を切る

「それじゃあ、でっかい花火咲かせましょうか」

そう言ってアクセルを思いっきり踏む、数秒その場でキャタピラが動いて地面を抉る、その後、勢いよく突き進んでいくその先には大群となっているゾンビ集団だ

音に気付いた奴らはこっちに向かって来ているが、踏みつぶされたり吹っ飛ばされた後潰されると言った感じにやられて行く、ブルが通った後は文字通り血の海と化していた

「はーっはっはっはっは！！！！！最高！！！！アフリカにいた頃を思い出すぜ――！！！！」

俺は笑いながら言っていた。もう、精神的にはサイコの域まで達しているだろうな

ゾンビの大群を通り過ぎた後、その場に停めた。同時にミシガンで溶接しておいた鉄板を打ち破る

「さ～て、生存者は無事かね？」

そう言ってブルから降りた瞬間、一体のゾンビが俺に噛みつこうとしたができなくなってしまう。琥珀の狙撃によって頭自体が無くなってしまったからだ

「さっすが、琥珀、いい仕事してんな」

俺が言った

丁度、工事現場の屋上に琥珀が伏せ撃ちの状態で狙撃をしている

「おっあそこか。」

そう言って庭付きの家の門を開ける

「お前さんは・・・・軍人ではないな」

刀を持った爺さんが言う。刀は血がべっとりと付いていた

「おう、日本技術大学三年　古知屋　修だ」

「ほっほっほ、年上に向かって溜め語とは大胆じゃのう～」

爺さんは笑いながら言う

「こんな事態だし、敬語は必要ないかなって思ってさ」

「そうかそうか。久々に活のある若者を見たのぅ」

「そういえばそちらさんは?どう見ても爺さん以外は警官に見えるけど」

「あ、ああ私は近江（おうみ）　勲（いさお）だ。床主警察署の刑事課に努めている」

刑事姿の兄ちゃんが言う

「同じく、床主警察署、機動課のアリシア・メアリーよ。よろしく」

婦警さんが言う

「メアリーさんはあれですか？在日外国人ですか？」

俺が言った

「ええ、元々はＮＹの警官だったんだけど、知り合いの誘いでこっちの警官になったの丁度、三か月前にね。」

メアリーが言う

「へぇ～そういえば、こちらの方は？」

そう言って爺さんを見る

「儂か？儂はこの近くで刀屋を開いている　亀（かめ）　幸之助（こうのすけ）じゃ」

そう言って日本刀を鞘に入れる

「ともかく、無事で良かった。向こうにあるコンビニで俺の仲間がいるんだけど、一緒に来るかい？」

「そうだな。どうしますか？亀さん」

勲が言った

「そうじゃな。ここに残る理由もない。だったら連れてってもらおう」

亀爺（命名　修）が言った

「決まりだな。じゃあ、付いて来てくれ」

そう言って庭から出る

「琥珀、生存者は無事だ。先にコンビニに行っててくれ」

無線で言った

「了解しました。何人いますか？」

「三人だ。二人は警官　もう一人は刀屋の爺さんだ」

「分かりました。小ノ牧さんらにも伝えておきますね」

「頼む」

そう言って無線を切る

「それは、軍用無線？」

メアリーが言う

「ええ、家はいろんな所にコネを持っていましてね。軍関係者ももちろんいますよ」

俺が言った

「と言う事は、あの古知屋家か」

勲さんが言う

「知っているのか？」

亀爺が言う

「ええ、古知屋総合貿易会社　日本じゃあ代表する有名貿易会社ですよ。食糧はもちろん車　飛行機　軍用車までなんでも運ぶ大企業です」

「ほぅ～すごいのぅ～」

亀爺が言う

「そうでもないですよ。実際、家の親父とお袋は普通の人ですし、家庭的には裕福かもしれませんけど、それでも優しい親父とお袋です」

そう言って星空を見上げる

「その様子だとまだ、会ってないのねこの騒動が始まってから」

メアリーが言う

「ええ、あの二人は今海外で仕事中でしてね。その時にこの騒動が起こった。と言う訳ですよ。連絡はして見たんですが、まだ、返事が返って来てません。まぁ、あの二人は武装夫婦なんてあだ名が通ってますからね、こんなノロマなゾンビ共に後れをとったりはしないですよ」

「ほぅ～ずいぶんと信頼してるのぅ、そういえば、口調が変わっとらんか？」

「あっなんて言うか、さっきみたいに戦闘に入ると口調が変わってしまうみたいで、普段ならこう言う敬語口調なんですけどね。もちろん、年上には気を使ってますよ」

「なるほどのぅ。おっそろそろ見えてきたのぅ」

そう言うと補強されたコンビニが現れた前には、全員集合して待っていてくれた

「いやはや、君には驚かされるな。修君」

小ノ牧さんが言った

「全く、生存者の救出は私達の仕事なのに」

篠田さんが言う

「修、親友に相談なしとは頂けないな」

秀治が言った

「修さん、信じてましたよ。絶対救出してくれるって」

美麻さんが言う

「修様、お帰りなさいませ」

琥珀が言う

「おう、ただいま、こちら三人が生存者だ。警官二人に刀屋の爺さん一人だ」

そう言った後、それぞれが自己紹介をして中に入って行く

こうして、新たな生存者達が仲間に加わった

迷わず行けよ、行けば分かるさ（後書き）

人物紹介

亀（かめ）　幸之助（こうのすけ）

床主市市内で刀屋を開いている老人　若い頃には［床主の剣士］と言われたほどの剣の使い手で伝説に残っているほど、元警官である。今は平和な隠居生活をしていたがこのゾンビ騒ぎのせいで生活ができなくなってしまった
しかし、腕は錆付いていない

武器は日本刀　淀と言われる剣

近江（おうみ）　勲（いさお）

床主警察署に努めている刑事　この騒動で床主大橋の方に周っていたが例のゾンビ集団が攻めてきた際、メアリーと共に逃げ伸びる事が出来た。
合気道の有段者でどんな攻撃に遭おうとも受け流す事が出来るほどである。銃はコルトＭ１９１１Ａ１を使用する。昔は宮本（みやもと）　正（ただし）という相棒がいた

アリシア・メアリー

元はＮＹの警官であったが、上からの誘いで床主に赴任してきた警官、アメリカでは相当腕の立つ警官だったそうだ。勲と同じく橋の方に周っていたがなんとか逃げ伸びる事が出来た
基本は体術を繰り出すが、それに合わせて銃撃もできる

銃はＭ９２Ｆの改造版を使用する。時々ナイフも使用する

髪は金髪のロング　目は深緑である

スタイル的には一番普通で・・・あれ?扉が破壊されている。どういう事だ?警察を呼ばなきゃ・・・・・

ん～なんか、どんどん生存者が増えて来ていますが、一応、これ以上増やさない方針ではいます。それと前回の修達が聞いた銃撃音は分かりますよね?原作を見ていれば

では、失礼します～

刀屋って響きが良くない？え？そうですか・・・・・・・

俺らは新たな生存者と共に一夜を過ごした。早朝、起きた俺達は朝食を取り、御別橋に向かおうとしていた

～コンビニ～

「さて、準備はいいですかい？」

俺が言った

「我々は大丈夫だぞ。修君」

小ノ牧さんが言う

「俺達も大丈夫だぜ。修」

秀治が言う

「儂らも大丈夫だぞい、修や」

亀爺が言う

「よっしゃ、出陣しますか」

そう言って出ようとした時

「待て、修や」

亀爺が言った

「なんですか？」

「御別橋に向かう前にちょっと寄りたいとこがあるんじゃ、いいかね？」

～ハンヴィー車内～

俺達は御別橋に向かう前にある所に向かっていた。今、ハンヴィーに乗っているのは俺、亀爺、琥珀、メアリー、勲さんの五人である。ａｎｇｅｌの方には小ノ牧さんらが乗っている

「亀さん、どこに向かおうって言うんです？」

勲さんが言った

「何、銃じゃあいずれ、弾切れを起こすじゃろう。なら、弾が切れない武器を持って行こうと思ってな」

亀爺が笑いながら言う

「弾が切れない武器・・・ですか？」

琥珀が言う

「そうじゃあ、日本では古くから使われとる武器じゃ、ここまで言えば分かるじゃろ？」

メアリー以外は気づいたように顔を上げる。メアリーはアメリカ人

だからその辺は分からないのだろう

「おっと、答えが出る前に到着したぞい。修やその店の前に停めてくれんか？」

「了解」

そう言って一軒の店の前で止まる。店の看板には［鶴亀刀剣屋］と書かれていた

「なんだ？このふざけた店名は」

俺が言った

「これこれ、店主の前で何を言うか。失礼にも程があるぞい」

亀爺が言う

「亀さん、この店は？」

メアリーが言う

「ここはわしの店じゃ、さっあの屍共が来る前に終わらせてしまうぞい」

そう言ってハンヴィーを降りる亀爺

俺達もその後に続く

～店内～

店内は以外にも広く所狭しに刀や槍、はたまた規格外の武器まで置いてあった

「すごい量だな・・・・」

秀治が言った

「ほっほっほ、儂が見定めて置いてある商品じゃ間違えはないぞ？」

亀爺はそう言って奥にある座敷に座り自分の刀　淀の手入れをする

「ほれ、今日時点で店じまいじゃから好きなのを持って行くといいぞい。代金は無用じゃ」

「なら、遠慮なく」

俺が言ったのを合図に皆がそれぞれの武器を探しに店内を歩き回る

「は～いろんなのがあるな～」

秀治が言った

「ああ、おまけに国宝に指定してあるような武器まで置いてあるぞ。例えばそこの刀」

そう言ってガラス張りの中に置いてある刀を指さす

「これは？」

「まぁ、簡単に言うとかの有名な妖刀「村正」だ」

「ええ!?これが!?」

秀治が驚く

「ほっほっほ、よく気が付いたのぅ。その若さで分かるとは」

亀爺が言う

「そりゃあね。貿易関係のだからね。時には表に出せないような”商品”だって運ぶこともある。それ故にさ」

「なるほどの～」

亀爺はそう言いながら手入れをしていく

「さてっと、何か良いのはないかな～っとこいつは・・・・・」

村正の隣に展示してあったのは備前長船長光だった。かの有名な佐々木小次郎が使っていた物だ。通称物干し竿とも呼ばれている

「ほっほ、備前が気になるかね?」

「ああ、こんなにも保存状態が良いのは初めて見たぜ。どこで手に入れたんだ?」

俺が言った

「昔、友人が儂に託してくれた物じゃよ。そうじゃ、せっかくだか

ら使って見るかね？」

そう言って亀爺がガラスケースの中から取り出す。そして、俺に渡る

「おお、やっぱ違いがあるな」

備前を持ちながら言う

「試しに抜いてみい、因みにそれを抜けたのは儂とさっき話した友人くらいじゃ、他の者ではビクともしなかったぞい」

亀爺が言う

「へぇ～そうなんだ～ってあら？」

俺は亀爺と話しながら備中を抜刀して見た。どうせ、抜けないだろうと思っていたが、案外、簡単に抜刀出来てしまった

「ほほ～備前に気にいられたようじゃな。」

亀爺は嬉しそうに言った

「で、これはどうすればいい？」

「それはお前さんの好きにすればいい、好きなように使ってやれ、うまく使ってやれば刀もきっと応えてくれるぞい」

「そうか・・・分かった。これは貰うよ。亀爺」

「ほっほっほ、さて、他の者は決まったかのぅ？ちょいと見てくる

かのぅ」

そう言ってその場を離れる

「これからよろしくな。備前いや、物干し竿」

そう言って納刀する。この刀は普通の刀と違い長刀であるため中々使いづらい所がある。物干し竿という名前もただ長過ぎて刀には向いていないという軽蔑的な意味合いも込められているため

「これで、よしっと」

そう言って刀を脇にさす、本当は背中にやるものだが、モシンナガンなどの長銃とかさばる為脇にさした。

「お～い、修」

秀治が来たようだ

「おう、秀治、お前も決まったのか？」

「ああ、見てくれよ。」

そう言って見せてきたのは九五式軍刀だった。この刀は日本軍が太平洋戦争後期に開発したもので鞘はサーベルに似たような形をしているが、それまで持っていた将校准士官刀などの軍刀よりも遥かに耐久力が優れていた

「お～お～、お前らしい選択だな」

「だろ？」

「ああ、良いんじゃないか？だからと言って腕はど素人当然なんだからな。気お付けろよ」

「ああ、俺はもっぱら後方援護に周らさせて貰うさ」

そう言った後、他の皆も決まったようだ。

単純に説明するとこんな感じである

小ノ牧さん　倭刀

篠田さん　大型サバイバルナイフ

綾瀬さん　日本刀×２

勲さん　十字槍

メアリー　鉈

秀治　九五式軍刀

俺　備前長船長光

美麻さん　薙刀

と言う感じだ。美麻さんは小さい頃、薙刀をやっていたらしい、勲さんは警察で槍術をやっている都の事だ。綾瀬さんはなぜか分からないが、一時期二刀流でやっていた事あったそうだ。そのせいで警

察沙汰になってしまいそうになったらしい

他にもなぜ?と思う所があるだろうがそこはなんとか主義と言う事で

「さて、試し切りでもしてみたいもんだね」

俺が言った

「それなら、ほら、あそこに丁度いい得物がおるぞ?」

亀爺が指さした方には丁度よく一体のゾンビがいた

「いいね・・・・やってみますか」

そう言って備前を抜刀する。え?長さに無理があるんじゃないかって?今言った奴表に出ろ、首を落としてやる

備前を片手で持ってそのままゾンビに近づく

「せいや!」

そう言って大きく振りかぶりまっすぐ切って行く所謂、兜割って奴だ。刀はきれいに真ん中を通過した。時間差でゾンビの体がゆっくりと二つに分かれて行った

「ん~切れ味も最高だな。文句なし」

そう言って納刀する

「ほっほっほ、気に入ってもらえて何よりじゃ」

亀爺は笑いながら言う

「さて、出発するとしますか」

そう言ってそれぞれの車両に乗り御別橋に向かって移動し始めた

御別橋

俺達は亀爺の所で刀を入手して、再び、御別橋に向かって進んでいた。進むにつれて街は酷くなっていく一方だ。いや、それどころかゾンビ共が異様に増えてきた事だ。確かに前の実験で音に敏感になったのは理解できたが、どう見てもおかしい

まるで、こっちの位置が分かっているような・・・・・・・いや、考えすぎだな

「それにしても、眠いな～フワ～」

俺は欠伸をした。だって、長時間の運転って睡魔が襲ってこない？あるよね～

「そんなに眠いなら変わろうか？」

メアリーが言った

「あっじゃあ、お願いしていいっすか？」

「ええ、任せなさい」

そう言って運転を俺からメアリーに変えた

俺は後ろの座席に座って背もたれを倒す

「じゃあ、お休みなさ～い」

そう言って俺は瞼を落とす

～ｓｉｄｅ秀治～

俺達は現在御別橋に向かって進んでいる。亀爺さんの所で刀を手に入れ、武器の消費も圧倒的に少なくなった（主に弾薬類）

俺は琥珀さんが所有するａｎｇｅｌ事ＬＡＶ－２５に乗っている。他には自衛隊の小ノ牧さん、篠田さん、綾瀬さんの三人だ

と言っても俺は後ろで寛いでいる。話し相手に綾瀬さんの相手をさせてもらっている

「あっそうそう、聞いて秀治君」

話してきたのは綾瀬さんだ

「なんすか？」

俺が言った

「前の事なんだけど、秀治君をサバゲーで見かけたのよね～」

「え？マジッすか？」

俺が言った

「うん、私もちょくちょく行ってるんだけど、あの時は・・・・・千葉のサバゲーフィールドだったわね。私も参加してたから」

「へぇ～そうなんすか。因みにどんなのを？」

「え？ああ、電動ガンの事？う～んとね～あっこれね」

そう言って指さした先にはＭ６０が置いてあった

「え？これっすか！？」

俺は驚いた。だって、Ｍ６０は大の大人でも運ぶのがやっとだと言うのに、女性で運べるのはすごい事だ。あっ因みにサバゲーって言うのはサバイバルゲームの略で電動ガンっていう銃の玩具で撃ちあう戦争ゲームの事だ

「うん、私って重装備兵だったし、持つ事には何の苦もなかったわよ。それに玩具ならなおさらだわ」

「へぇ～すごいっすね～」

「そ、そう？照れるわ～／／／」

そう言って顔を赤くする綾瀬さん　か、可愛い／／／

「そういえば、秀治君はどんなの持ってるの？」

綾瀬さんが言う

「俺はこれですかね。イサカＭ３７とＭ７００のガス銃ですね」

「へぇ～ガス銃の方か～威力が強いわね～」

「綾瀬さんはガス銃使わないんですか？」

「うん、と言うより電動の方がしっくりきてるわね。やりやすいから」

「そうなんすか。でも、ビックリだな。まさか、本職の人も参加してたなんて」

「そうでもないわよ？実際、関係者がサバゲーをやってるなんて珍しくもないし、それに隊長や訓子だってやってるんだから」

「ええ！！マジっすか！？」

二人は運転席の方に居るため聞こえていない

「うん、そうよ」

「へぇ～やっぱすごいな～」

そう言った瞬間、車が止まった

～ｓｉｄｅ秀治　終了～

「お・・・・・きて・・・・・・・」

「う、う～ん」

誰かが呼んでいる気がする

「き・・て・・・さい・・・・修・・・・・・ん」

「フワ～」

それでも起きなかった俺

「もう、しょうがないですね～でいや！」

「あいた！？」

俺は飛び起きた

「あっやっと起きました。おはようございます。修さん」

美麻さんが挨拶をした

「あ、ああおはよう。起こしたのって美麻さん？」

「はい、こうすれば修さんが起きるって琥珀さんから」

手元にはいつの間にかあったハリセンだった。っていうか、お・ま・え・か！！琥珀

「おい、琥珀ちょ～とお仕置きされようか？」

「ええ！？まじっすか！？どんなお仕置きをされるのでしょう～もしかして○○調教とか！？あ～楽しみですわ～」

琥珀の目が輝いているというか、何かを期待しているようだ、この変態メイドは

「え?なにそれ怖い。お前が俺の専属メイドとかないんですけど、マジで」

俺が言った

「もう~修様~そんなこと言って~本当は嬉しいくせに~」

「なるか!アホか!お前は!」

そう言って車を降りる御別橋に着いたようだ。亀爺や勲さん達は先に降りていたようだ

「おや、おはよう。修君」

勲さんが言う

「おはようございます。御別橋に着いたようですね」

俺が言った

「ええ、けど、あなたの言った通り、こっちも酷い状況ね。確か、こっちも封鎖をしてたはずなんだけど・・・・・」

そう言って周りを見渡すが、警察官の姿はなく、車の残骸とゾンビ共の死体が転がっており、床主大橋と同じ状況だった

「じゃあ、様子を見て来てから渡るとしますか、」

「そうだな。それが良いだろう。小ノ牧さんらにも相談してみてはどうだ?」

勲さんが言う

「そうですね。おい、変態メイド、小ノ牧さんらを呼んで来てくれ」

「なんですか、そのランクは」

琥珀が言う

「うっさい、俺の中のランクはそうなってるんだよ。早く呼んでこい。じゃないと、更に下げんぞ。」

「分かりました。少々お待ちになって下さい」

そう言って家の変態メイドこと琥珀が小ノ牧さんらを呼びに行った。

数十秒後、小ノ牧さんらが来る

「どうしたのかね?修君」

小ノ牧さんが言った

「ええ、この先が御別橋なんですが、状況が分からない感じなんで一度様子を見て安全を確認してから橋を渡ろうと思ってます」

俺が言った

「そうか・・・分かった。では、我々が行くとしよう。篠田、綾瀬、準備をしろ」

小ノ牧さんが命令を出す

「「了解（しました～）」」

そう言って二人は準備しに戻る

「じゃあ、何か変化があった場合、連絡して下さい。こちらでも援護できるようにしておきますから、はい、無線機」

そう言って小型無線機を渡す

「分かった。では、行くぞ」

そう言って三人は進んでいく

俺はもしもの状況に合わせて秀治と一緒にａｎｇｅｌの上に乗ってスナイパーライフルをいつでも撃てる体制にとった

俺はドラグノフＳＶＤ、秀治はＳＬ－９という某国の狙撃銃を使っていた。ＳＬ－９とはＨ＆ａｍｐ；Ｋの狙撃銃でＰＳＧ－１の発展版と思ってくれればいい、威力、距離共に格段に上がっており使いやすいとの評価も受けている銃だ

「さて・・・どんな事が待ち受けてますかね～」

秀治が言う

「秀治、縁起が悪いぞ」

俺が言った

「悪い悪い、つい、な？」

「全く、おろ？車の影から一匹、」

そう言ってドラグノフで射撃する。でかい音だが奴らに気付かれてしまうだろうか？まぁ、そこは状況を判断してやるべきだな。弾は見事ゾンビ共の頭に直撃し、綺麗な風穴を造った

「ｎｉｃｅｋｉｌｌ」

秀治が言った

「あんがとよ。ほれ、お前の方にも来たぞ」

「ＯＫ、任せろ」

そう言って秀治も撃つ。ＳＬ－９はドラグノフほど音は出ないが、弾は高性能な物を使っているので威力は抜群だ。その証拠に撃たれたゾンビが吹っ飛んで他の奴も巻き込んでいった

「いいセンスだ」

どこぞのヘビのオッサンが言うようなセリフを言った

「おっ戻って来たようだぜ。案外早いな」

秀治が言った。見ると、小ノ牧さんらは戻って来ていた

「お疲れ様です。どうでした？」

俺が言った

「ああ、その事なんだが、意外な掘り出し物が出てきたぞ。着いて来てくれ」

そう言って再び橋に戻る小ノ牧さん

「なんだろう?」

秀治が言った

「さぁ?とにかく行ってみるしかないね」

そう言って俺らは小ノ牧さんらについて行く

~橋の中腹~

俺達は橋の真ん中まで来ていた。そこにあったものは・・・・・・

「おいおい、なんで、73式のトラックが停まってるんだ?」

「それに、米軍までいるなんて・・・・」

橋の中腹には自衛隊が使用する73式トラックとハンヴィーとかが停まっていた。周りには兵士の死体だけで生き残りはいなかった

「私達にも分からんが、きっと床主市市内にも兵士たちを展開させて殲滅しようとしたのではないか?」

小ノ牧さんが手を合わせながら言った。俺達もその場で手を合わせる

「さて、この人達には悪いが武器・弾薬類はすべて貰ってしまおう」

俺が言った

「確かにそうですね。兵器があっても動かす物が無ければ無用ですね」

琥珀が言う

「よし、秀治、お前は73の方を調べてくれ。俺はハンヴィーを調べる」

「了解」

そう言うと秀治と綾瀬さんが73の方に向かった。ハンヴィーには俺と訓子さん小ノ牧さんで向かった。他の人達はその場で待機し、琥珀と勲さんが車を取りに行く

～ハンヴィー車内～

車内は意外ときれいであったが、薬莢が大量に散乱していた。おもに機関銃の薬莢だ。このハンヴィーに載っているのはM2キャリバー重機関銃だった。その弾薬が大量に置いてあった。

「お～、まだ使えそうだな。このハンヴィーは」

「そうだな。これ自体も、もらっておくか」

小ノ牧さんが言う

「だとしら、ハンヴィー二台のＬＡＶ－２５となる訳ですか」

篠田さんが言う

「そうですね。これで、人も物も効率よく運ぶ事が出来ますよ」

俺が言った

「お、おい！修！えれぇーもん見つけたぞ！」

秀治が言った

「慌てなさんな。何を見つけたって言うんだ？」

俺が言った

「と、とにかく来てくれ！」

そう言われたので俺達は７３の方に行った

～７３の荷台～

「ほら、こいつだ」

「おいおい、こいつは・・・・・」

そこに有ったのは大量の火薬及びロケット砲などの重兵器だった。

よく爆発しなかったな。中には対戦車ミサイルやＣ４爆弾といった。

火薬類がたくさん置いてあった

「何に使うつもりだったんだ？」

俺が言った

「意図は分からんが、ゾンビ対策に持って来たのだろう。しかし、これだけ大量となると高層ビルが一つ潰せるほどだぞ」

小ノ牧さんが言う

「ま、まぁ、ついでに貰っておこう。何かに使えるかもしれんしな。さすがに俺の所にもＲＰＧとかは置いてなかったしな」

「そ、そうか。じゃあ、もらってしまおう。綾瀬さん、このトラック動きます？」

秀治が綾瀬さんに聞いた。ていうかいつの間にか仲良くなってんな。秀治の奴

「はい、点検しましたがどこにも問題はありませんよ。動かせます」

「そうか。じゃあ、もらってしまおう」

そう言って俺達は新たな車両をもらう事にした。

そして、無事、橋を渡る事が出来、俺達は反対側に到着した

爆弾♪爆弾♪（前書き）

時間に余裕ができたので出したいと思います・・・・テスト中なのに何やってんだ俺！

爆弾♪爆弾♪

俺達は御別橋にて、新たな車両と武器を手に入れた。だが、疑問に思っているのは何故、米軍が床主市に来ているのか？自衛隊ならまだしも外国の軍隊が介入するほど余裕はないはずだ。なんせ、世界中でゾンビ騒ぎが起きてるんだからな

そんなこんなで俺らは米軍のハンヴィーと７３式トラックを一緒に動かして御別橋を乗り越えた。俺達は警察署に向かっていた

～国道～

「でりゃあ！！！死ね死ね死ね！！！！」

俺は自分のハンヴィーに付いているＭ１３４ミニガンでゾンビ共の群れに穴を開けながら進んでいる。弾の嵐を喰らったゾンビ共は文字通り、塵となっていく

「ヒャッフゥウウウ！！！！最高！！！おら！どんどんこいや！！」

そう言いながら俺はありったけの弾を使っていく

え？そんなに使って大丈夫なのかって？大丈夫大丈夫、俺には強いコネがあるんだからさ。あっ因みにそれぞれの車に乗っているのだが、誰がどこの車両に乗っているのか紹介しよう

ハンヴィー（修専用）

修

美麻さん

メアリー

ａｎｇｅｌ

琥珀

小ノ牧隊長

篠田さん

ハンヴィー（米軍仕様）

勲さん

亀爺

７３式トラック

綾瀬さん

秀治

と言う感じになっている。というか。本当に秀治の奴いつの間に綾瀬さんと仲良くなったんだ?妬ましい

今、俺はミニガンを操作しているので運転はメアリーに任せてある。美麻さんは衛星からここら辺の状況をモニタリングしてくれている。

非常に便利だ

「修さん、この先、２００m先で多重事故がなっています。どうしますか？」

美麻さんが言った

「他に道はない？」

俺が言った

「え～と、ダメですね。脇道とかありますけど、この車列じゃあ幅が広すぎて通れません。」

「そうか・・・・多重事故ってどんな感じになってる？燃えてる車とかある？」

「え・・・・っと、周りが燃えてますけど、大元であるバスやらトラックやらは燃えずに残ってますね。それがどうかしましたか？」

「閃いた。ちっと面白い事を思いついたぜ。メアリー、このまま多重事故の所まで行ってくれ」

「了解」

そう言って俺らは先へと進んで行った

～多重事故現場～

「うわ～こいつは酷いな～」

秀治が言った

あれから、現場まで辿りついたのだが、美麻さんの言ってた通り道を塞ぐ形でトラックやバスなどの大型車両が事故を起こしていた。その間には警察車両が挟まれるように潰れており、中では警官が苦しんだ表情をしながら死んでいた。もちろん、周りにはゾンビ共が徘徊していた

「さて、汚物処理と行きますか。」

そう言って俺は物干し竿を鞘から抜いた。ん?なんでそんな事をするのかって?まぁ、簡単に言うと弾薬節約ってのもあるんだが、もう一つ面白い事を行うための準備みたいなものだ

「じゃあ、さっき言った通りにしてくれますか?できるだけ、音を立てずにお願いします。銃を使う時もサプレッサー付きので」

「了解した」

そう言って倭刀を持つ小ノ牧さんが言う。

ゾンビ共はそこまで多くないので俺らの人数ですれば容易い事だ。問題はゾンビ共を人間と見てはいけない事だ。少しでも心に隙があってしまったらあっという間にゾンビ共の仲間入りになってしまう。今の所、危ないとすれば一体も殺した事のない美麻さんだろう。彼女はほとんど情報面で役に立ってもらってるだけだ

「美麻さん、大丈夫か?」

俺が言った

「はい、大丈夫です。やる時はきっちりとやります。」

そう言って薙刀を構える

「そうか。危なくなったら、いつでも言ってくれ。俺が援護する」

そう言って俺も物干し竿を構える

「はい、お願いします」

「それじゃあ、行くぞ！」

そう言ってゾンビ共に切りかかっていく

「せいや！」

俺は縦に振った。見事にゾンビは真っ二つに切れた。その後も横に振ったり袈裟切りをしたりといろんな切り方をやった。全部、親父とやっているときに修得した物だ。我流ではあるが・・・・順調に切っていく俺だが美麻さんの方が心配になったので見てみた・・・・が

「あっはははははは！！！！！！！！是非もなし！！！！」

笑いながらゾンビ共を切っていく美麻さんがいた

っていうか、是非もなしって・・・・信長じゃあ、あるまいし人って見かけによらないな～あんなにも変わるなんて、一番の驚きだな

「ワオ～美麻さんも変わる時は変わるんだな～これは負けらんないな」

そう言って切っていく俺らだった

数分後・・・・・

「これで、終わりっと！！」

そう言って最後の一体を切った

「よし」

俺は物干し竿についた血を一振りで落とし鞘に収めた。周りを見ると他の皆も終わっていたようだ。ほとんどが首が取れていたり割られていたりした

美麻さんの方も無事に終わったみたいだ

「お疲れさん、美麻さん」

「あっ修さん、」

「いや～すごかったね～あんなにも変わっちゃうなんて～」

「そ、そうでしょうか？でも、薙刀をやめたのってこういう癖が付いていたからなんですよね。」

そう言って少し暗くなる美麻さん

「そういうのもアリなんじゃないか？俺だってアフリカで人殺しなんかやって来たさ。用はその狂気に飲み込まれない事が大事なんだ。最初は誰だって気持ち悪がったりするもんさ。でも、人ってそう言うのに慣れちまうと簡単に受け止めるからな。」

俺が言った

「そう・・・ですか。私はもう少し時間がかかるかもしれないです」

「そうか。でも、一人で抱え込もうとするなよ？それが却って逆効果になるからな。話したいときは俺に言ってくれればいい。少しでも力にはなれるはずさ。こんな世界だからな。いや、こんな世界だからこそか」

「はい、その時はお願いします」

そう言って俺らは皆の元に戻った

「で？全部切ったのはいいが、どうするんだ？修」

秀治が言った

「ああ、せっかくだ。ここにある爆弾を使って花火でも撃とうかと思ってね。小ノ牧さん、手伝って頂けますか？」

「ああ、もちろんだとも、花火は大好きだぞ」

にっこりと笑う小ノ牧さん

皆、少しずつ狂い始めているのが見て分かった。正常な人から見たら俺達は異常集団にしか見えないだろうが、そんなのは関係ない。こんな壊れた世界なんだ。楽しまないと損だろ？

「じゃあ、秀治　７３からＣ４爆弾を持って来てくれ」

「ｏｋ、把握」

そう言って秀治は綾瀬さんと一緒に７３の方に向かった。暫くすると木箱に入ったＣ４を持ってきた。

「ふぃー重たい重たい」

秀治が言った

「秀治、爺臭いぞ。」

「ＯＨ！ｄｅａｄ！」

「まぁ、いいや。小ノ牧さん、周辺の車の方に取り付けお願いします。俺は道を塞いでいる大型車両の方に行ってきます」

「了解だ。綾瀬、篠田、お前らも手伝え」

「「了解」」

そう言って俺らは道にＣ４爆弾を取り付けていく

～数十分後～

「準備はいいか？」

俺が皆に無線で言う。

あれから、それぞれの車両に乗って待機状態にした。ただ単に吹っ飛ばすのでは勿体ないので塞いでいる車両に防犯用のブザー（小学校などで使ってる奴）を取り付けた。このブザーは美麻さんが持っていた物だが必要ないと言うので餌として置いてみた。あいつらは音に引かれるからな。あれだけの大音量ならどんぐらいのゾンビ共が来るか楽しみだ

「行くぜ」

そう言ってブザーの元栓を抜いた。案の定、ものすごい大音量だ。すぐさまブザーを廃車の方に投げた。

ブザーは依然として大音量を流し続けている。その時だった

『アアアアア～～～』

脇道や裏路地からゾンビ共が現れ始める。その数はどんどん肥大化していった

「おいおい、どんだけいるんだ？まぁいい、満ち潮か・・・・・皆、準備しろ！」

そう言って手元のスイッチを押す

すると、数秒後にゾンビ共が集まっている場所で巨大な爆発を起こした。爆発と同時にガソリンに引火したのであろう。ゾンビ共は言うまでもなく木端微塵になってしまった

「あ～あ、汚ねぇ花火だ」

俺が言った

「修様、そんな事を言ってる場合じゃないですよ。後ろから団体様がお見えになっています」

無線で琥珀が言う

ミラーを見るとさらにゾンビ共が音に引き寄せられたようだ

「よし、長居は無用だ！一気に行くぞ！」

そう言って俺のハンヴィーを先頭に次々と塞がれていた道を走破していく。後ろではゾンビ共が声を上げながらその辺をうろついていた

床主警察署とアメリカ軍

俺らは順調に床主警察署を目指していた。途中、ゾンビ共の襲撃もあったが、こっちの強力な重機関銃の前には歯が立たなかった

そして、床主警察署付近にまで到着する事が出来た

「あ～あ、やっぱ、弾の消費量が激しいな。ガトリングの弾が結構少なくなってるな」

俺が言った。

俺の車には主にガトリングの弾が保管されていたが、その弾薬箱も簡単に確認できるような数にまで減ってしまった

「そうね～ここら辺はやたらと多い気がするわね～おっと、危ない」

メアリーが運転しながら言った

「ですね。ａｎｇｅｌの方には有ったけな？無線で確認しておこう」

そう言って無線に手を掛けようとした瞬間

「こちら・・・・中隊・・・・・・現在・・・・・・警察署に・・・・・・待っている。生存者が・・・・・つけたら・・・・・至急・・・・・まで、来て下さい・・・・・繰り返します」

俺達の使っている周波数とは別の回線から連絡が入る。しかし、電波状況が悪いのか、途切れ途切れになってしまっている

「修さん、これって・・・・」

美麻さんが言った

「ああ、どっかの中隊だな。避難民を救出に来たって事か。とりあえずは行って見るか」

そう言って俺らの車列は警察署を目指す

～床主警察署付近～

無事に、警察署付近にまで辿りついた。すると驚くべき物が停まっていた

「おい、修、屋上に止まってるのってブラックホークだろう？」

俺らは一旦車から降りて警察署を見ていた。幸い周りにゾンビ共はいなかった

「ああ、しかも、自衛隊のじゃない。ありゃあ海兵隊の所有物だ。しかし、何でこんな所に？」

屋上にはＵＨ－６０ブラックホークが停まっていた。横文字には自衛隊ではなくＵＳＭＣと書かれている。ＵＳＭＣとは、アメリカ海兵隊の略称の事

「分からんね。自衛隊にもそういう情報は入って来ていない。だったら確かめるしかあるまい」

小ノ牧さんが言う

「ですね・・・・こちらから連絡を取ってみますか？」

「そうだな。私が説明しよう」

そう言って米軍仕様のハンヴィーに乗り込む小ノ牧さん、きっと無線連絡するのであろう

俺達はその場で待機となった

～数分後～

「修君、中から連絡があったぞ」

「どうでした？」

「ああ、確かに海兵隊だった。向こうは私同様少佐のようだ」

小ノ牧さんが言う

「そうですか。で、向こうはどうしろと？」

「そのまま、中に入って来て欲しいだそうだ。玄関で迎えると」

「そうですか。じゃあ、移動だ」

そう言ってそれぞれの車両に乗り込み、警察署内に入った

～床主警察署　駐車場～

駐車場に入ると中も酷かった。ほとんどの車は炎上、動けるとしてもバリケード代わりに使用されている物ばかりだ

俺らはそのまま止めて車を降りる。玄関には三人ほど兵士達が立っていた。恐らく真ん中に立っているのが小ノ牧さんの言っていた人だろう。

「ご苦労様でした。ここまで来れば安心ですよ。私はアメリカ第１０師団、海兵隊のアリス・マーガロン少佐です」

そう言って敬礼する

「私がさっき、無線連絡した者だ。陸上自衛隊第５師団の小ノ牧少佐である。」

「なるほど、先程のはあなたでしたか。よく無事でしたね、自衛隊はほとんど壊滅したって聞いてましたから、心配してたんですよ」

アリス少佐が言う

「本当ですか？その話」

俺が言った

「ええ、司令部の話じゃあ主な自衛隊の駐屯地は襲撃を受けて、全滅又は再集結して反撃に移ってるみたい。と言うよりあなたは？」

「あっと、すいません。俺は古知屋　修って言います。」

「古知屋？・・・・ああ！あの貿易会社の事ね。てことは、息子さん？」

「ええ、まぁ、そうなんですけどね。と言うより何で知ってんすか？」

「まぁ、殆どの軍があの貿易会社から頼んでるからね。有名なのは当然の事よ」

「まぁ、それはともかくとして、どうして海兵隊がこんな所に居るんです？アメリカも酷い事になっているのでは？」

小ノ牧さんが言う

「ええ、確かにそうなんだけどね。当初はアメリカに戻ろうとしてたんだけど、空母［ケストレル］が謎の襲撃を喰らってね。仕方なく、ヘリでこの付近まで移動したの、で、警察署で避難民の確保をしながら待ってたって訳、無線も故障気味だから司令部とも連絡が取れないでいるわ」

そう言ってため息を出すアリスさん

「そうなんですか。他の地域に居る隊員はどうしたんです？沖縄とか」

「ああ、沖縄とかは米軍の指揮下に入ったみたい。でも、外部とかの受け付けは行ってないわ。本国の方もｃｈｏｒｄｒｅｄに入っちゃったみたいで、大統領もホワイトハウスから退避したっていうし、どうなるのかしらね？」

「ｃｈｏｒｄｒｅｄか・・・・」

ｃｈｏｒｄｒｅｄとは、アメリカの危機レベルの度合いを示すもので、いろんな呼び方があるが、今回の場合、完全封鎖と言う意味に繋がる。国外はもちろん国内でもゾンビ共を出さないために鎖国状態にしてしまう事だ。この場合、船や飛行機で辿りついたとしても戦闘機や護衛艦、ＳＡＭなどで撃墜されてしまう

「まぁ、同じ人間なんだし、仲良くやるってのは大事なことよね。てことでこれからもよろしくね。」

そう言って握手を差し出すアリス

「ええ、こちらこそ」

そう言って握手をする俺

その後も皆の自己紹介をしていった

～警察署内～

「では、こちらで休んでいて下さい」

俺らはそのまま、他の避難民達がいる部屋に通された。小ノ牧さんや勲さんとは別行動となった。

「ふぃ～やっと休める～」

秀治が言った

「そうじゃな。儂も安心できるわい」

そう言って近くの椅子に腰かける亀爺

俺らの他にも自力で辿りついたであろう避難民がいた

「ブツブツ・・・・・・」

「全く、会社と連絡が取れん！どうなっているんだ！？」

「はぁ・・・・」

周りは情緒不安定ばかりになっていた。きっと精神的に来てるんだろう。自然災害とかならまだ、説明は着くがこんなゾンビ騒ぎでは心がおかしくなったってしょうがないといえばそれで終わる。まぁ、俺らに関係なければ、いい話だ

「さて、警察署に来たのは良いが、これからどうするべきかね。」

俺が言った

「でも、アメリカ軍もいるんだし、多少は大丈夫じゃないか？」

秀治が言った

「俺が言ってるのはそこじゃないんだよ。いくら、米軍がいるからって食糧や飲料水が手に入る訳じゃないだろ？」

「う～む、確かに・・・・・」

「でも、食糧は私達の分でもどうにかなりませんか？」

美麻さんが言った。きっと車に積んである食糧の事だろう

「美麻さん、俺の車に積んであるのは俺や琥珀、そして秀治や美麻さんの人数を入れて丁度、ニ、三カ月分になるんだ。この警察署にいる全員を合わせたら一週間持つかどうか分からん。それぐらいの量しかない」

「あっそうなんですか・・・・そういえば、ここら辺にアウトレットがあったはずですけど、そこはどうなんですか？」

「加工食品なら大丈夫かもしれないが、魚や肉と言った物はダメになってくるだろうな・・・・いくら冷凍が効いてるからって、それに、もしかしたら、すでに無くなってる可能性だって高いし、第一誰が取りに行くんだ？」

「えっと、それは皆で力を合わせれば・・・・・」

「答えはＮＯだ。ここにいる連中を見てみろ。アリス少佐とかなら協力すると思うが避難民は全くって言っていいほど無能集団に近い、こんな連中に着いて行ったらそれこそ明日の日は拝めないぜ」

そう言って周りを見渡す

一人は部屋の隅っこでブツブツと独り言を言いながら言う高校生らしき少年、もう一人はこの状況下だと言うのに仕事一筋的なサラリーマンがいたりと精神的に危ない連中ばかりだ。もしかしたら、途中でとんでもない足手まといになりかねない。この騒動を戦争と置き換えれば、避難民は銃も握った事が無い新兵（ルーキー）だ。そんな奴は戦場

ではいい的になるだけだ。

「確かに、修の言う通りかもしれないな。もしかしたら軍隊って言う権威に縋っているだけかもしれない。」

秀治が言った

「でも、こんな状況だからこそ、皆で力を合わせなきゃいけないんじゃないですか？」

美麻さんが言う

「美麻さんが言ってる事は最もな事だ。だがな、人間はそんなに甘くはできちゃいない。一人で生きようとする者、他の奴を落としいれてでも生きようとする者、仲間と一緒に生き抜く者、様々な奴らがいる。」

俺が言った

「昔の日本ならば、そう言う輩も多くはなかったがの～ここ最近の日本は弛み切っておるからの～」

亀爺が言った

「まぁ、つまりはここにいる避難民は当てにならないと言う事だ。さて、俺は一服でもして来ようかね」

そう言って部屋を出る。そのまま屋上へ向かった

～屋上～

屋上にはブラックホーク以外何もなかった。俺はフェンス越しに腰かけタバコに火を付けた

「ふぅ～落ち着くね～」

そう言いながら街の風景を見ていた。辺りは叫び声なども聞こえなくなっていた。代わりにゾンビ共が徘徊していた

「おや、修君も一服かね？」

屋上に来たのはアリス少佐だった

「ええ、こうしてるのが一番、落ち着くんで」

俺が言った

少佐はそのまま俺の隣に座り、胸ポケットから葉巻を取りだした

「どうぞ」

そう言ってジッポのライターを取り出し火を付けた。

「すまない」

そう言って葉巻に火を付ける少佐

「さて、これからどうしたものかね」

少佐は葉巻を吸いながら言った

「分かりませんね。全世界でこうなった以上、生き残るしか手はないと思いますよ?あんな奴らと一緒に街を徘徊って楽しくもないｊｏｋｅですから」

「ハハッ確かにな。帰るべき家を失った我々は某国の軍隊と言った所か。」

少佐が言う

「本国に帰れないってのは辛い事でしょうね。でも、希望を捨てたらそこで終わりだと思いますし、何より、仲間に失礼だと俺は思います」

「そうだな。ワザワザすまない。初日早々こんな話をしてしまって」

「良いんですよ。人間だれしも、一人でいるってのは寂しい事です。少佐みたいな美人な人が泣いたって嬉しい事なんか一つもないですしね」

俺が言った

「び、美人だと!?／／／」

少佐が驚いたように言った

「あっすいません。もし、気に障ったのでしたら謝ります」

「い、いや、いいんだ・・・／／／そ、それじゃあ、私はこれにて失礼する。」

そう言って屋上から去っていく少佐

「・・・・・・俺、やっちゃったかな？」

と一人言う俺だった

床主警察署とアメリカ軍（後書き）

人物紹介

アリス・マーガロン

軍人

階級　少佐

床主警察署にいた海兵隊の隊長、空母で謎の襲撃を受けてしまい本国に帰れなくなってしまっていた。そこで、避難民の救助に当たっていた所、警察署を拠点として置く事にしていた軍人

スタイルはアイドル並みのスタイルで胸はＤカップ髪は金髪で腰まで届くロングヘヤー

使用武器は現代では珍しいブローニングＢＡＲ軽機関銃を使う

爆発

俺達は警察署で海兵隊のアリス少佐とその分隊のチームと合流する形となった。ついでに避難民とかもいたがどれも戦力外的な奴らばかりだった

「う～ん、とニ階部分に確か、重機関銃を設置するんでしたよね？小ノ牧さん」

俺はａｎｇｅｌの後方ハッチからＭ２キャリバーを取り出しながら言う

「ああ、二丁出せれば丁度いいかと思うが、」

小ノ牧さんが言う

暫くの間、警察署に留まる事になった俺達は補強を行う事にした。そのため、重機関銃を取り出し、ニ階部分に装着する事になったのだ

他の皆も手伝ってくれている。美麻さんとかはパソコンがハッカー並みに侵入できる子だったので、アリス少佐がお願いして米国軍隊の司令部とテレビ電話できるようにしている。俺とか秀治、小ノ牧さん、勲さんとかで重機関銃を運び出している

他の避難民達は手伝おうともしない。全く嫌になるぜ

～ニ階窓際～

「よし、秀治、ここを溶接してくれ。くれぐれも回転部分まで溶接

するなよ？」

俺がキャリバーを置いていった

「んな、ヘマやる訳ないじゃん？まっかせろよ。」

そう言って溶接道具を持って機関銃に近づく

溶接道具などは警察署の押収品室に置いてあったので遠慮なく使う事にしたのだ。それに避難民が勝手に武器を使わないように、武器保管庫には常に米兵が監視している。俺とかは特別に許可してもらってるけどね

「小ノ牧さん、Ｍ２の弾をこっちに運んで来てくれますか？俺は反対側の部屋にキャリバーを持って行くんで」

「分かった。勲さん、あなたも付いて来てくれますか？」

「よし、分かった。」

そう言って小ノ牧さんと勲さんは武器保管庫に向かう。俺はａｎｇｅｌに戻り、もう一つのキャリバーを運ぶ作業をしている

～ａｎｇｅｌ～

『アアアア～』

バリケードで封鎖された門にゾンビ共が群がっていた

「へっ、この門がある限り大丈夫だろう。内側からやられなきゃな。

それにしても、なんか増えて来てるな。気のせいか？」

昨日まではそこまで多くなかったはずなのに、ゾンビ共の数が時間が経過する度に増えて来ているのだ。こいつらは音に反応するからな。でも、そんな大きな音は出していないはずなんだがな・・・・・

「考えてもしょうがないか。さて、さっさと運んじまおう。」

「修さん」

「ん？」

振り返ると美麻さんがいた

「どうしたの？美麻さん、確か、テレビ電話できるようにしてたんじゃないっけ？」

「ええ、それは終わったんで、手伝おうかと思いまして、今、アリス少佐が米軍本部とテレビ電話してます。」

「は～繋がったんだ。で、暇だから手伝いに来た、と」

「はい、そう言うことです」

そう言って笑顔になる。ヤベッいい笑顔

「そうか。じゃあ、一緒に機関銃を運ぶ手伝いをしてもらおうかな？重いと思うけど、大丈夫？」

「はい、やりましょう！」

そう言って駆けていく、が

「んぎゃ！？」

思いっきりこけました。乙です

「だ、大丈夫かい？美麻さん」

俺が声を掛ける

「あいたたた・・・・大丈夫です～」

鼻を押さえながら言う美麻さん

「ま、まぁ、さっさと運んじまおう。」

そう言って一緒に運ぶ俺達であった、が

運ぶ途中、二人で運んでいたんですが、如何せん力が抜けそうになりました。何故かって？

そりゃあ、目の前でででかい双子山が大きく揺れてたら釘付けになるっしょ？男なら誰もが見ちゃうような光景だ。

俺だって健全な二十歳の大学生なんだぞ？前かがみになっちゃいました

そんなこんなで無事にキャリバーを運び終わりました。本当にありがとうございました。御馳走様です

「ふぅ～なんとか、運べましたね～」

美麻さんが言う

「あ、ああ、そうだね・・・・・・」

俺は若干前かがみになりながら言った

「？どうかしたんですか？」

「い、いや、気にしないでくれ。」

「は、はぁ」

「お～い、修～こっちは終わったぞ～」

秀治が部屋に入ってきた

「あっ、秀治さん、お疲れ様です」

「おう、って美麻さん何故ここに？」

「はい、アリス少佐の仕事も終わったんで、修さんと一緒に機関銃を運んでいました」

「ほ～、そうかそうか。じゃあ、俺もチャッチャかと終わらすとしますかね～」

そう言って窓際に近づいた

「じゃあ、私は一旦、アリス少佐の所に戻りますね。」

そう言って美麻さんは部屋を出る

「修、どうしたんだ?股間なんか抑えちゃって」

「いや～、健全な男子なら分かるっしょ?」

「あ～そう言う事、修も男だな～、嬉しいね～」

「お前は俺の親父か・・・まぁいい、じゃあ、秀治、ここも任せたわ。俺は様子を見てくる」

そう言って部屋を出る。

俺はそのまま、屋上に繋がる階段に差し掛かった時、違う部屋からアリス少佐が出てきた

「あっ修君」

「どうしたんすか?少佐、そんな暗い顔をして」

妙に暗かった少佐に聞いた

「ああ、実はな、無事に本国と連絡が付いたんだ。で、至急、救援部隊を送って欲しいと要請したんだが、ダメだった。本国でもすでにアメリカ軍はほとんどが壊滅に追い込まれたらしい。西海岸は全滅だと言っていた」

「それは・・・・大変ですね。で、司令部はなんと？」

「生き残って欲しいだそうだ。現在、連絡が取れているのは沖縄、横須賀、米国大統領を乗せた空母艦隊、そして、我々だけだそうだ。その他とは連絡が取れていないらしい。これからどうしたものかね・・・・」

そう言って少佐は街の外を見る。外では未だにゾンビ共が徘徊している。まさに終末と言う奴だ。イカれた宗教者とかは天罰だとか言いそうだな

「なら、生き残るべきですよ。少なくとも俺はそう思いますね。」

「そうだな・・・・君の言う通りだな。ここで死んでしまっては何の意味もない。そしたら、部下に示しがつかないしな」

「その通りですよ。俺に出来る事があれば何でも言って下さい。力を貸しますよ」

「ありがとう。少し、気力がわいて来たよ。」

そう言った瞬間だった。

「隊長！」

一人の米兵が駈けてきた

「どうした、そんな慌てて？」

少佐が言った

「避難民の一人が急に暴れ出したんです！刃物を所持していて錯乱状態に陥っています！」

「何！？分かった。すぐ行こう！」

そう言って俺達はその部屋に急行した

～避難部屋～

「ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！！！！！！！！！どうせ、助けなんか来ないんだ！ここで、皆死ぬんだ！ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！！！！！！！」

俺達が部屋に入ると一人の青年が包丁を振り回しながら笑っていた。思考回路がイカレたんだろう。この騒ぎなら出て来てもおかしくはない

「逝かれたか」

俺が言った

「修、字が違う」

秀治が言った

「そうだな・・・・・でも、間違いではないだろ？」

「そうだね・・・・・」

そう言った瞬間

「今すぐ、刃物を手放しなさい。さもないと、それ相応の手段を持ちいらせてもらうわ」

アリス少佐は銃を構えながら言った

「なんだ?俺を銃で黙らせようって言うのか?どうせ、皆死ぬんだ!今さら、変わらねぇだろ!」

青年は言い放つ

「あいつは・・・ダメだな。この先、生きていけないな」

俺が言った

「確かにね・・・・でも・・・・・」

と言った瞬間だった

急に外が光り出した!

「な、なんだ!?」

秀治が言った。周りの皆も外の方を見ていた

「こいつは・・・・・まさか・・・・・」

アリス少佐が言った

果たして、外からの閃光は一体何なのか？

こりゃあ、ないぜ・・・・

俺達は錯乱した少年を止めようとしたのだが、その途中で急に外が光り出した。

～警察署の一室～

「な、なんだ!?ありゃあ!?」

秀治が言う

「これは・・・・・まさか・・・・・・」

アリス少佐が独り言を言う

他の皆も外の気が引いているようだ

（今だ！）

俺はそう思って一気に包丁を持っている少年に近づき、手刀で包丁を落とし、腕を後ろで拘束しそのまま押し倒した。

それと同時に光が収まった

「は、離せ！」

少年が叫んでいるが俺は無視してＭ９で頭を叩いた

「ウグ！？」

少年はそのまま気絶した

「うるさいんだよ。少し黙っとけ」

俺はそう言って立ち上がる

「少佐、こっちは抑えましたよ」

俺が言った

「あ、ああ、おい、あいつを拘束して他の部屋に入れとけ」

少佐が部下に指示を出す

「にしても、あの光は・・・・」

俺がそう言った瞬間、美麻さんが部屋に入ってきた

「修さん！あの光と同時にＰＣが死にました！あの光は何なんですか！？」

美麻さんが言う

他の避難民も動揺を隠せないでいた

「高高度核爆発・・・・・・・・通称ＥＭＰ攻撃だ」

少佐が言った

「やっぱりそうですか」

俺が言った

「お、修、何がどうなってんだよ！」

秀治が言う

「さっきの光は核爆発の光だ。ＥＭＰ攻撃と言って、大気圏外で核を爆発させ、その地域のＰＣ、自動車、携帯などの電子機器はその機能を失われてしまう。厄介な攻撃だ。どっかの国が混乱して打ち上げたんだろうよ。全く、いらねぇ世話をかかせやがる。」

今、核兵器を所有してる国なんて限られてはいるが、最近ではテロリストでも核を持てるようになってきている。

「今、修君の言った通りだ。この地域にある電子機器はすべて機能を失われたであろう。ブラックホークもダメだな」

少佐が言った

「おい！どうなってるんだ！さっきの光は何なんだ！？いきなり、私のＰＣがイカレたぞ！」

サラリーマンの男性が言った

「申し訳ありません。少し静かにしてもらえますか？私達も調べているので」

「ふざけるな！軍人は市民のために動いているのだろう！だったら、

その［ダンッ！］！！」

一発の銃声と共にサラリーマンは静かになる

発砲したのは少佐だった

「いい加減にしろよ?私達だってまだ、把握しきれていないんだ。そのうるさい口をしまっておかないと次は一生しゃべれなくするぞ?」

少佐は今までにない気迫でサラリーマンに言った。サラリーマンは黙って縦に頷いた

「では、市民の皆さんはそのまま待機していて下さい。結果が分かり次第、すぐに報告させて頂きますから」

そう言って部屋を出ていく少佐

「は～怖かった～」

秀治が言った

「ああ、目がマジだったからな。一瞬、ヒヤヒヤしたぜ」

俺が言った

「ですが、これからどうしましょう?ＥＭＰ攻撃なら、私達の車もダメになってるのでは?」

美麻さんが言う

「う～ん、一応調べておくか。秀治、琥珀、一緒に付いて来てくれ。美麻さんも一緒に」

そう言って俺達も部屋を出る

～駐車場～

「俺は自分のハンヴィーを琥珀はａｎｇｅｌ、秀治は米軍ハンヴィーを美麻さんは７３式の方を見て行ってくれ」

そう言ってそれぞれに分かれる

「う～んと確か、こいつは対ＥＭＰ対策してあったんだっけな～エンジン掛けてみようっと」

そう言って自分のハンヴィーのエンジンを掛けてみる。ハンヴィーは問題なく動いた

「おっ動くな～やっぱ対策しておいて正解だぜ。」

そう言ってエンジンを切る

「修様、ａｎｇｅｌの方も大丈夫でした。」

琥珀が報告しに来た

「そうか。二台は確保っと」

「修、米軍の方も大丈夫だったぞ。」

秀治が言った

「修さん、トラックの方も大丈夫でしたよ」

美麻さんが言った

「あれま、全部大丈夫だったんじゃん。にしても、米軍の方は分かるけど、なんで、７３の方にも対策が施されてんだ?」

秀治が言った

「まぁ、自衛隊の中にも対策を施されている車両はあるけどな。と言っても限定されるが、しかし、ＥＭＰとなると発電所もダメになるな～今後の電力は無いに等しいか・・・・」

「うぇ～ん、秀治君～」

俺が言った瞬間、綾瀬さんがやってきた

「ど、どうしたんすか?綾瀬さん」

秀治が言った

「さっきのＥＭＰ攻撃のせいで、タマ○っちが動かなくなっちゃった～！」

俺達はズコー！お笑い芸人の如くこけた。

「なんで、世界の終末の時にそんなもん育ててんすか!?しかも、

時代古いし！」

秀治が最もな事を言った

「だって～マイブームだったんだもん！せっかく大事に育ててきたのに～」

「・・・・なんだ？この茶番」

俺が言った。だって、さっきまで真面目シーンが出てきたのに一気に崩された感じだよ

「この先、どうなるのかね～」

そう言いつつ俺達は再び、警察署に戻って行く

～？？？～

警察署の中では別の動きがあった。

「クッフッフッフ、ゾンビがなんだ。僕だってやる時はやるんだ。」

そう言いつつ少年は裏の門のバリケードを壊していく、外にはもちろん、ゾンビ共が徘徊している

「僕は・・・・・世界の救世主になるんだ！」

少年は笑いながら裏門を開けて行くのだった

～警察署内部～

「ダメです！全ＰＣがやられました！監視カメラも作動しません！」

一人の兵士が言う

「くそ！どうすればいい！？」

アリス少佐が言う

「ヘリの方も確認しましたが、ダメでした。エンジンがイカレています。」

屋上から戻った兵士が言った

「まさに、終末と言う奴か」

そう言ってパイプ椅子に腰かける

「少佐・・・・」

「いや、まだ、手はあるはずだ。諦めてはいけない。」

「少佐～」

その時、修が部屋に入ってきた

「ああ、すまない、修君、しばらく、時間をくれないか？もう、手も足も出ない状態だ」

「その事なんすけど、こっから、移動とかします？」

「ああ、そのつもりだが・・・・」

「だったら、家のコンボイ部隊に乗って行きますか?全部、動きますよ?」

そう言って修は笑った

「ほ、本当か!?」

少佐は立ちあがった

「ええ、すでに調べましたから」

「そうか・・・・それなら」

と言おうとした時だった。一人の一般市民が慌てた状態で入ってきた

「おい!軍人さん!警察署にゾンビ共が入って来てるぜ!」

「何!?」

「それはどこだ!」

「裏の門からだ!バリケードが壊されていて、もう、すでに入って来ている!」

俺達はすぐさま、廊下の窓際に行った。

確かにそこには門が大きく開いていてゾンビ共がゆっくりと中に侵

入してきたのだった

「クソ！誰がやったんだ！？仕方ない、防衛態勢に入れ！」

そう言って部下の米軍兵士たちを指示していく、兵士達はＭ４やＭ８７０などをもちだして、それぞれ動いていく

「少佐、俺達も手伝いますよ」

俺が言った

「すまない、手を貸してくれるか？」

「ええ、もちろんですとも、秀治、行くぜ」

「おうよ」

そう言って俺達は自分たちの車の所に行った

～駐車場～

途中で騒動を聞きつけた勲さんとメアリーに合流した。小ノ牧さんらはアリス少佐と共に動いている

「さて、どれを所望する？」

俺が言った

「なんでも、いいぜ？とにかく、室内で大丈夫な物だ」

秀治が言った

「そうか。なら、好きなのを取って行ってくれ。時間が無いからな」

そう言って皆がそれぞれの武器を持って行く。

俺はＭ１４ライフルにサイレンサーを付けた物とベネリＭ４を持って行く事にした

「さぁ、戦争をおっぱじめようぜ？」

そう言って再び警察署に入って行く

史上最大の防衛線

俺達は警察署に留まっていたが、最悪の事態が起きた。どっかの馬鹿な国が核を打ち出しやがった。おかげで、核は日本上空で爆発しＥＭＰを拡散させた。

さらに、まずい事が起きた。警察署に留まっていた避難民の誰かが裏門を開けて出て行ったみたいだ。出て行くのは構わないが、お返しと言わんばかりにゾンビ共が集中してこの警察署に侵入してきた

俺達は防衛線を始める事となった

～廊下～

俺達はそれぞれのチームに分かれて二階、三階の重要な所に防衛線を構築し、ゾンビ共を待っていた。一階はすでに奴らに支配されてしまったため、諦めた。一階にも避難民は居たのだが、時すでに遅かった。

「さて、どうなることやら」

秀治が言った

「さぁな。最悪の場合、ここから出る羽目になるだろうな。表は無事なんだ。車で脱出するしか手はない」

俺が言った

「そうだな。あやや?来ちゃいましたか」

秀治がそう言ったので階段の方を見ると服がボロボロで肉が引きちぎれた人間だった物がゆっくりと歩いている。一体ではない、数十体の群れをなして

「近くで見ると気持ち悪い物だな」

アリス少佐が言った

「まぁ、慣れちまえばどうってことないっすよ。それじゃあ、諸君、私は戦争が大好きだ」

某吸血鬼アニメ少佐の台詞を言いながらＭ１４で撃つ、サイレンサー付きなのでゾンビ共が俺達の存在に気付く事は確率的に低い

弾は静かに一体のゾンビの眉間に命中し、ドサッという音を立てて崩れた。他のゾンビは一瞬、止めるがすぐにその辺をうろついている

「確かに修君の言う通りだったな。まさか、音に反応するなんて・・・」

少佐は驚いたように言った

「俺も気づいた時は驚きましたよ。でも、音を立てれば、一瞬にして囲まれてしまいますから気お付けて下さい」

「了解した」

そう言って少佐は部下にアイコンタクトで指示を出す

部下は静かに回って行き、背後を取るような形になっていた

さらなるアイコンタクトで攻撃命令を出す、それと同時に部下は軍用鉈でゾンビを掻っ捌いた。非常に気持ち悪い光景だ

「よし、こっからは俺がやる」

そう言って俺はＭ１４でゾンビ共を狙撃していく、弾の無駄遣いにならないようにｏｎｅｓｈｏｔｏｎｅｋｉｌｌで決めていく

数分後・・・・

「制圧完了」

そう言ってマガジンを交換する

「ヒュウ～さっすが～」

秀治が言った

「よせやい、褒めても何も出ないぞ」

「よし、移動する。おい、三階の部下に・・・・・・・（ガチャン！）」

少佐が指示を出そうとした瞬間、どっかの部屋からこれまた、大きな音でコップが割れるような音が響いてしまう。ＥＭＰ攻撃によって全電子機器が停止し、音が無くなった世界ではよく響く音だった

『アアアアア～～～』

外でうろついていた奴らも音に気付き、次々と中へ侵入していく

「ＯＨ、ｓｈｉｔ！こっからは派手に行くぞ！少佐！」

俺が呼んだ

「なんだ！」

「すぐ、三階の連中に二階の避難民の部屋に向かって下さいと伝えて来て下さい！俺は、ここで防衛します！」

「分かった！移動が完了次第、君達の所へ向かう！待っていてくれ！」

そう言って少佐は階段を掛けていく

「お前は行かなかったのか？秀治」

俺が言った

「ああ、この世に英雄なんかいない。いるのは仲間の存在だけだ。修一人だけにかっこいい所は持って行かせないぜ？」

秀治は笑いながらＭ４に弾を装填していく

『アアアアアア～～』

ゾンビ共が来たようだ

「おや、来たようだな。戦争と行こうか。」

そう言って俺は予備で持って来ていたバレットライフルを構える

「発射あああ！！！」

そう言って俺と秀治の銃から１２．７ｍｍ弾と５．５６ｍｍ弾がゾンビ共に向かって飛んで行く、５．５６ｍｍ弾では、そのまま倒れるだけだが、機関銃の弾である１２．７ｍｍ弾を食らっちまったら普通の人間と言えど上半身と下半身が一生お別れする羽目になる

「うらあああああ！！！！！！死ねやーーー！！！！！」

秀治が叫びながらＭ４をぶっ放す

「食らうならこれでも食らってな！！」

俺もバレットをぶっ放しながら言った

しかし、数は減るどころか増えていくばかりだった。次第にこっちの持って来ていた弾薬も減って来ている

「クソ！Ｍ４の弾薬が無くなっちまったぜ！」

そう言って秀治はサブであるウィンチェスターＭ１８８７を取り出す、こいつは年代物のショットガンではあるがレバーアクションのため、非常に使いやすい物がある。有名な物だと映画ターミネーター２でシュワちゃんが使っていたショットガンの長くしたのがＭ１８８７である

「また、年代の古い物を・・・・っとこっちも弾切れか・・・・しょがねぇ」

そう言って俺もベネリＭ４を取り出す

そして、二人でショットガンをぶっ放すが、如何せん、近距離武器なので飛距離は長くない

「まだ、援軍は来ないのか!?」

秀治が言う

「あきらめんな!どんどん撃ち続けろ!」

が、ゾンビ共はそれでも止めずに俺達に近づく、

「くそ!ここまで（ドドドド）援軍が来たようだ」

撃ちながら後ろを振り向くと、アリス少佐が立っていた。手元にはブローニングＢＡＲ機関銃を持って・・・・

「秀治さ～ん!手伝いに来ましたよ～!」

さらに後ろにはＭＩＮＩＭＩを持った綾瀬さんがやってきた

「綾瀬さん!援護をお願いします!」

秀治が言った

「まっかせて～!」

そう言って彼女は俺達の所に来てＭＩＮＩＭＩをゾンビ共に食らわして行く

「よくも、やってくれたわね～くらえ～！！」

ゾンビ共は軽機関銃の餌食となり次々と倒れていった。そして、ゾンビ共がいなくなると

「ふぅ、か・い・か・ん？」

この現場なのに、妙に合っていた。まるで〇〇〇〇と機関銃のようだ。それにしても彼女はいつもあの音程だからな～癒し要素でも入ってるのか？

「ムッフ～」

秀治が言いながら笑顔になる

「お前はどっかの親父か？」

俺が言った

「んな！？心外だぞ！修」

「はいはい、オワタオワタ」

「おい！」

「ふっ相変わらず元気だな。さぁ、次が来ないうちに移動してしま

おう」

そう言って俺達は避難民の部屋にまで移動する事になった

史上最大の防衛線？

俺達は防衛線にて多数のゾンビ共を殺してきたが、如何せん数の暴力という言葉があるように、全部を塞ぐ事は出来ていない。

そして、俺達は避難民達がいる部屋の直前にまで来ていた。部屋の手前には俺達が持ってきたＭ２キャリバーが設置されており、その周りを俺達が固める形になっている

「撃て！撃ちまくるんだ！敵は待っちゃくれないぞ！」

アリス少佐が大きな声で言う

ドドドドという重機関銃独自の音を出しながら弾を発射していく、弾はゾンビ共に当たり真っ二つに切れていた

「チッ　修、１２ゲージはもう無いか！？」

秀治が言う

「ねぇよ！とっくのとうに切れちまったよ！おら、ＭＰ５を使え！」

そう言って近くに置いてあったＭＰ５を投げ渡す

「サンキュー！マガジン装填！」

そう言って奴らに向けて連射していく、サブマシンガンは威力は弱い物の圧倒的な連射力にて補っている

「くそ！こっちも弾切れか！」

そう言ってＭ１６をしまい、シカゴタイプライターを取り出す、こいつはニューヨークのマフィアが良く使用している物だ。弾の少なさをドラムマガジンによって補っている

「おらおら！！消えちまいな！！」

そう言ってぶっ放す、こっちもサブマシンガンの類なので連射力は圧倒的だ

が、ゾンビ共は逆に増えて来ている

「隊長！このままではジリ貧です！」

篠田さんが言う

「分かってるよ！クソ、何か良い手はないか！？」

小ノ牧少佐が言う

確かに、このままではいずれ、餌食になってしまう。しかし、避難民共がいるので後ろに退く事が出来ない。どうするべきか

そう思って後ろに下がった時、足に何かが当たる

「ん？こいつは・・・・・」

そこにあったのは梱包爆薬だった。梱包爆薬は鉄橋などを崩すほどの威力を持った爆薬である。

「よし、行ける！アリス少佐！」

「なんだ！」

「自分の合図と同時に全員を部屋に押し込んで下さい！爆薬を投げます！」

意図を察したのか、アリス少佐は他の部下と一緒に下がっている。
小ノ牧さんや秀治も合わせたようだ

「まだだ・・・・・・・・今だ！行け！」

そう言うと全員が部屋の中に入る。俺はそれを横目で確認すると梱包爆薬に火をつけて近くにあった階段めがけて投げる

「おら！食いたいならこいつを食え！」

そう言って投げ飛ばす、梱包爆薬に防犯でお馴染みのアラームも一緒に取り付けてある。落ちた衝撃でピンが外れるように設計してある

そして、向こうに落ちた瞬間にアラームが勢いよく鳴っている。ゾンビ共はそれに釣られて階段の方に向かって前進していく

俺は即座に部屋に入った。それと同時に長机などで扉にバリケードを作る

「皆！念のため伏せろ！」

そう言った瞬間、全員が伏せた。次の瞬間・・・・・・

大きな揺れと共に崩れる音がした。きっと、階段が爆発の影響で崩れたのだろう

「く～さすがに効くな～」

俺は耳を押さえながら言った。まだ、耳鳴りがするからである

「全く、無茶をしてくれるな。修君」

小ノ牧さんが言う

「だが、ある程度片づいたのも事実だ。」

アリス少佐が言う

「さて、これからどうするかね～外はゾンビ共でいっぱい、おまけにそこからの脱出は不可能に近い。」

俺が言った

「まっ気楽に行こうぜ。焦ってもしょうがないし」

秀治が言う

「そうだな・・・・」

そう言って暫く休憩にした

皆、精神的に来ているようだ。特に避難民はほとんどがここに留まって救助を待った方が良いとかほざいてやがる。無理だよ、そんな楽観的な考えじゃあ

外はゾンビでいっぱい、おまけにＥＭＰ攻撃のせいで電子機器がやられちまっているんだ。当然ながら携帯やパソコン、無線での通信機能は奪われたに近い

今もアリス少佐や小ノ牧さんが説得しているが、一向に考えを傾けようとはしなかった

「だから、さっきから言ってるだろう！私達は動きたくないんだ！救助が来るまで絶対に行かんぞ！」

サラリーマンの男が言う

「そうよ！待っていれば、自衛隊か米軍が来てくれるはずよ！それまでは絶対に動かないわ！」

主婦が言う

（このままじゃあ、いずれ、こいつらと一緒の運命を辿っちまうな。しかし、窓から出ようにも何か、良い方法は無い物か・・・・・）

そう思って周りを見渡す、部屋の中はガラクタなどが置かれていたので倉庫として使っていた物だろう

「ん？こいつは・・・・・業務用のロープか・・・・・・・長さ的には３ｍ半ってとこだな・・・・・・」

俺は独り言のように言った

「修さん？何をしてるんですか？」

美麻さんが可愛らしく聞いてくる

「いや、早々にここを出ようと思ってな。表の門だっていつまで持つか分からんし、だったら、あの窓から出た方が良さそうな気がしてな」

そう言って窓を指さす、窓の外側には駐車場に面しているのでそこから降りられればすぐさま車を動かす事が出来る

避難民の方を見たが未だに動く気配はないようだ

俺は窓際に立ち窓を開けた

「修？」

秀治が答える

「よ～し、皆聞け、俺はこっから脱出しようと考えている。ここからロープを垂らして下に降り、車を使って警察署を出る。一緒に来るってやつは一緒に来い。残りたい奴はここに残ってろ。武器も一応渡しておくが、ここに残るのは賢明じゃない。少なくとも俺はそう思ってるぞ。」

皆は黙って俺の話を聞いている

「それじゃあ、決断した奴はロープを降りて来てくれ。それじゃあ

な。武器はそこの長机に置いてあるから好きなのを使ってくれ」

そう言って俺は誰の返事も聞かずにロープを降りて行く

～ｓｉｄｅ秀治～

「それじゃあな」

そう言って修はロープを降りて行く

避難民は全員、秀治の事を批判しているようだ

「秀治さん、どうするんですか～？」

綾瀬さんが言った

「もちろん、俺は修の方に行きますよ。状況から見てもここの方が絶望的ですし、助けに来るかどうか分からない物より修に付いて行った方が確率は高くなります。綾瀬さんや美麻さんはどうするの？」

「私も修さんの意見に賛成ですね。軍隊も動かないんじゃあ自分たちで生きていくしかない。そう教えてくれたのは修さんですし、何より・・・・その・・・／／／／」

そう言って赤くなる美麻さん

「あらあら、青春ね～因みに私も修君の考えに賛成かな？食料も少ないし、それだったら、近くにあるモールとかに避難すれば良いんじゃない？あそこなら確率は高くなると思うし」

綾瀬さんが言う

「小ノ牧さんらはどうなんです？」

「私も綾瀬と同じ意見だ。異論はない」

「同じく」

小ノ牧さんや篠田さんも賛成のようだ

「勲さんらは？」

「ここを去るのは名残惜しいが、脱出した方が賢明だな」

「そうね。生き残るためならそっちを選択するわ」

「儂も老後の隠居生活を楽しみたいしの～」

三人も賛成のようだ

「じゃあ、決まりだな」

そう言って俺達は行動する。避難民はそれに唖然としているようだ

～ｓｉｄｅ秀治ｏｕｔ～

「さて、どれぐらい来るのかね～」

俺はハンヴィーを整備しながら言う。実際、残るのも残らないのも自由だし、それを強制する義務は俺には無い。俺は生き延びようと

しているだけだしな。親父にもお袋にも無事なのを報告したいし

「修」

「おっ秀治か。やっぱり・・・・」

そこで止まった

秀治の他には美麻さん、小ノ牧さん勲さんが付いて来ており、何より、アリス少佐が付いて来ていたのだ

「アリス少佐も来てくれたんですね」

俺が言った

「ああ、すでに任務自体も変わってるしな。だったら、違反には無らんだろう?それに個人の自由を強制するほど、権限は持っていないしな」

そう言って笑う

避難民達は全員が警察署に残るようだ。武器も渡してあるから大丈夫だろう。多分

何故かって?簡単だ、集団を維持できない者から破滅するんだ。これはどんな事でも言えると思う。

「さぁ、もう一仕事行きますか!」

そう言って脱出の準備を進めるのであった

大脱走（前書き）

むかし、こんな映画あったよね？

大脱走

俺らは警察署から脱出するべく今まで使って来ていた。車両を点検、整備を即座に行った。表側の門には今だ、ゾンビ達が山のように動いていた

「修、こっちの整備は大体終わったぞ。いつでも出発できる」

秀治が言った

「OK、こっちももう、終わるから好きにしててていいぞ」

俺はハンヴィーを整備しながら言う

他の車両も各自、点検・整備は終了したようだ。

「よし、こっちも終わりっと」

そう言ってボンネットを閉じる

「さて、ここからが本題だ。まずはこれを見てくれ」

そう言ってアリス少佐が設計図みたいな紙をボンネットに広げる

「アリス少佐、これは？」

小ノ牧さんが言う

「これは、この警察署のみ取り図のようだ。脱出する途中で見つけ

た。現在、我々はここにいる。表にはゾンビ共がゴキブリのようにいる」

そう言って赤いペンで見取り図をなぞって行く

「出られるとしたら、裏門に限定されますね」

美麻さんが地図を見ながら言う

「その通りだ。これ以外はすべて塀で囲まれているため、出る事は不可能だ。」

「だとすると、裏門に限る訳だな。しかし、この警察署は少しばかり特殊でな。俺達の位置から直接裏門に行く事は出来ない」

勲さんが言う

「どういうことですか？」

俺が言った

「建物自体が塞ぐように建っているからだ。もちろん、通る事も可能だが、それは人が通る場合のみだ。ハンヴィーやトラックでは通る事は出来ん」

「じゃあ、どうすれば・・・・」

秀治が不安そうに言う

「大丈夫だ。裏門に行くには警察署の地下駐車場を使えば良い。そ

こからなら直接裏門に行ける」

勲さんが説明する

「よし、地下駐車場を通って脱出だ。他に意見はあるか？」

アリス少佐が言う

皆は黙って頷く

「よし、すぐに・・・・（ガシャ――ン！！）！！」

門の方を見るとバリケードが耐えきれなかったのか、崩されていた。
隙間からゾンビ共が堂々と入ってくる

「くそ！どれでもいい！すぐに乗車しろ！さっさと出るんだ！先頭は俺が行く、勲さんナビゲートお願いします！」

俺が言った

「分かった！」

皆は適当に乗り込んで行く、俺も自分のハンヴィーに乗り込んだ。
俺の他には勲さん、美麻さん、アリス少佐の四人だ

「もたもたしてる暇はない！行くぞ！」

そう言ってすぐに発進させる。後から他の車両も付いて行く

～地下駐車場～

俺らはゾンビ共の追跡を振り切って地下駐車場に来た。中は真っ暗だったのでライトと軍用のペン型ライトを使用して前進しているが暗さゆえにゆっくり進まなければならなかった

「くっそ～、こんなに暗いと前が見えなくて困るぜ～」

俺が言った

「すべてはＥＭＰ攻撃のせいだな。まさか、屋内の車両までやられているとは・・・・」

勲さんが言う

駐車場にはいくつかのパトカーが残っていたが、ＥＭＰ攻撃のせいで動かなくなってしまっている。ライトが壊れていたり、エンジンから煙を吹いたりしているからだ

「しかし、静かだな・・・・・不気味すぎる」

アリス少佐が言う

「や、やめて下さいよ～怖いじゃないですか～」

美麻さんが泣きそうな声で言う

その時だった

『アアアア～～～』

「・・・・おいおい、こんな所にまでいやがるのか・・・・・・
勘弁してくれよ。勲さん、少佐、戦闘準備をお願いします」

「「了解」」

そう言って二人は銃を取り出す、勲さんは問題ないが、少佐は軽機関銃なので、M3A1のグリースガンを渡してある

少佐は懐かしいと言っていた

「敵はどっから来るか分からん、注意しろ」

俺が言った

次の瞬間、

『アアアア～～～』

一匹のゾンビが俺らの車に張り付く、ビックリするな～

「ヒッ！？」

美麻さんが怯える

「大丈夫だ。砲撃でも食らわない限り、破られる事は無い。安心しろ」

俺が言った。

しかし、張り付いたゾンビ以外にものろのろと集まって来ている。

「くそ、強行突破しかないか？」

勲さんが言う

「ですね・・・・後ろも付いて来てくれるだろう。1、2、3！」

そう言ってアクセルを思いっきり踏む、それと同時に前にいたゾンビはボンネットに乗り上げた。目の前で気持ち悪い動きをしている

「うへっ気持ち悪」

俺が言う

「修君、そこを右だ」

勲さんがナビゲートする

「了解です」

そう言って右に曲がる

ギュギュギュというタイヤが擦れる音が鳴り響く、ボンネットに乗っていたゾンビは耐えきれなくなって落ちて行った。その後も勲さんのナビゲートのおかげで出口付近まで来ていた。

「あちゃ～、こんな事になってるとはな～」

俺が言った

目の前には裏門に続く出口があった。しかし、その手前には事故を起こしたであろう警察輸送車両が停まっていた

「どうする?前は事故車、後ろはゾンビ軍、絶体絶命だなぁ・・・・・」

アリス少佐が言う

「待って下さい・・・・・確か・・・・・・・あった」

俺は運転席から後ろの所、トランク付近に置いてあった武器をまさぐってニヤリと笑う。なんでかって?そりゃあ、”いいもん”が見つかったからな

「修さん?何してるんですか?」

美麻さんが言う

「もちろん、突破用の武器さ」

そう言って取り出したのはＲＰＧ－７、ソ連が作りだした対戦車ロケット砲だ。今では紛争でもよく見かけるお馴染みの武器だ

「修君、そんな物まで有ったのか・・・・」

少佐が言う

「ええ、格安の武器ですからね”裏”でならよく運んでいましたし」

そう言って上部のハッチを開ける

「少佐、運転お願いします」

「了解した」

「アッラーに栄光あれ！」

そう言って引き金を引く、勢いよく飛び出たロケット弾はまっすぐ飛んで行き、輸送車両にぶつかって爆発を起こす

「命中！ヒャッハー！」

俺はガッツポーズした。

「修！後ろから奴らが来てんぞ！」

ａｎｇｅｌに乗った秀治が言う

「ＯＫ！少佐！出して下さい！」

「了解！」

少佐はアクセルを踏んだ

「よし、これで、脱出するだけだな」

そう言って蓋を閉めようとしてぶっ飛ばした輸送車両が視界に入る

「！おいおい、マジかよ！？少佐！今すぐここを出ないとまずいです！！スピードを思いっきり出して下さい！」

「な、何!?わ、分かった!!」

そう言ってハンヴィーのスピードが上がる。後ろの車両もスピードを上げる

「修君、何があったのだ?」

勲さんが言う

「さっき、車両をぶっ飛ばしたでしょう。あれ、燃料が漏れてたみたいで、今にも爆発が起きそうなんです」

そう言った瞬間、俺達がいた場所から爆発が起きる。さっきの輸送車両が爆発したんだろう。そして、爆発の衝撃で他の停まっていた車両にも爆発が連鎖する

「ヤバい!少佐!もっとスピード上げて!」

「了解だ!!」

更にスピードが上がる

「もうすぐ出口だ!」

勲さんが言った

そして、すべての車両が地下駐車場から出た瞬間、火が噴き出した。

「ふぅ〜何とかなったな〜」

俺が言う

「そうは言ってられないかもな。ゾンビ共が集まって来ている。」

そう言って周りを見る

確かに今の爆発音でゾンビ達が集まって来ている

「そうですね。さっさと出ましょう。」

そう言って俺らは裏門から出て行く、こうして、無事に警察署から脱出できたのだった

「」

静かってたまには良いね。そして、新たな生存者（前書き）

久々に帰ってきました！

静かってたまには良いね。そして、新たな生存者

俺らは警察署を脱出した後、港に向け進路を取っていたが、途中、食糧が少ない事に気付いたため、美麻さんの情報で近くにあるショッピングモールを目指していた。

～大通り～

俺達を乗せた車両は現在、大通りを通っていた。ここにも廃車やら事故車がたくさんあったが、生存者は見つかっていない。

「いや～、やっぱり、渋滞が無いってのは良いね～」

俺はハンヴィーを操作しながら言った

「そうだな。順調に進むってのは同意だな」

少佐が言う

「二人とも、少しは他の人の事を心配してはどうですか？」

美麻さんが言う

「ごもっとも」

俺言う

「さて、これからどうするのだ？修君」

勲さんが言う

「そうですね～やっぱり、食糧が少なくなってきているので、美麻さんの情報を元に近くにあるショッピングモールに向かう事にします」

「向かうとして、食糧はあるのか？」

少佐が言う

「まぁ、あまり、期待はできないでしょうね。食糧は粗方、無くなっているでしょうし、それにＥＭＰ攻撃のせいで電子機器が停まっている今、店にある冷凍食品はダメになってる可能性が高いですし・・・」

「そうだな・・・まぁ、行ってみるだけ価値はあるか・・・・・」

少佐がため息を吐きながら言う

車両は順調に進んでおり、途中、ゾンビ共に遭遇したが、多くはなかったので避けて行った。ＥＭＰ攻撃のせいで無線もやられてしまったため、世界がどうなってるのか分からない状態だ。他の国がどうなっているのか、見当もつかない

「それにしても、静かな事は良い事だな～」

俺が言う

「修さん、どうしてなの？」

美麻さんが言う

「なんと言うか、今までの暮らしじゃあ騒音とかがいっぱいあったけど、ＥＭＰのおかげで本来の状態に戻ったと言うかそんな感じだな」

「ふーん、修さんってやっぱり、静かな所が好きなの？」

「そうだな。と言うか昔、ばあちゃんの家に行った事があるんだけどあそこは本当に田舎でね。自然な状態がそのまま続いてるような場所なんだ。それ以来、静かなとこが好きになっちゃってね」

「へ～行ってみたいな～」

「いつかは行けるさ・・・・・いつかはな・・・・」

そう言いつつ車を走らせていく

～？？？ｓｉｄｅ～

僕たちはショッピングモールから脱出しようとそれぞれの武器を持って試みていた。新たな仲間、警官のあさみさんと一般人の島田さんを連れて出たのだが、途中、奴らを入れた中学生らしき少年がワゴンの上で立ち往生していた。

それを見たあさみさんは助けに行こうとした。そして、島田さんも助けに行ったのだが、島田さんは奴らの餌食になってしまい、あさみさんも今まさに奴らの餌食となろうとしていた

「小室！早く助けないと！」

平野が言う

「無理だ・・・あの数じゃあ、こっちまでやられてしまう・・・・」

「・・・・そんな・・・・・・」

銃を握り締めて悔しそうに地面を叩く平野

「くそ・・・・・」

僕も助けてあげられない事に悔しがっていた

「コータさーん!!!」

奴らに囲まれているあさみさんが大声で叫ぶ

「私を・・・・・私を撃って下さい!!!お願いします!!!!」

あさみさんが言う

「そんな・・・・そんな事・・・できるわけ無いじゃないか・・・・・・」

平野が言う

「コータ、あの婦警の願いが聞けないの?彼女は信頼できるからこそ、あんたに言ったんじゃないの?」

沙耶が言う

「・・・・・・・分かりました・・・・・・」

そう言って平野は銃の三脚を立てて射撃体勢に入った

「さようなら・・・・・あさみさん・・・・・・」

平野はそう言って引き金に指を掛ける

その時だった

「ヒャッフゥウウウウ!!!!!狩りの時間だ!!!!!」

大声と共に複数の車両が駐車場に入ってきた

～小室ｓｉｄｅｏｕｔ～

「よ～し、後ちょいだな」

俺が言った

現在、俺達はショッピングモールが見える所までやって来ていた。
ここら辺もゾンビ共がウジャウジャといた

「やはり、生存者はいないのか？」

少佐が言う

「ですかね・・・・でも、モールなら少しは居るんじゃないですか？」

美麻さんが言う

「まぁ、行って見て確かめよう。」

勲さんが言う

「ですね・・・・・そうしましょう」

そう言ってモールの駐車場に入って行く

～駐車場内～

「やっぱり、生存者はいない・・・・か」

俺は周りを見渡しながら言う

近くにゾンビ共は居なかったので車両を止めて、ａｎｇｅｌの上から望遠鏡を使ってモール付近や駐車場を見ていく

「ん?修、ありゃあなんだ?」

一緒に監視をしていた秀治が言う

「どんなのだ?」

「なんか、一か所にゾンビ共が集まってるんだけど、ほら、あそこにあるワゴン車付近」

「ん～?本当だ。生存者かな?」

俺が言った

「多分ね、こっから出ようとして逆に嵌められた感じになってるのかな？」

秀治が言う

「だな・・・・よし、琥珀」

「何でしょう？修様」

外で待機していた琥珀が来る

「ａｎｇｅｌを動かしてくれ。そっちには秀治を乗らせる。少佐、運転願えますか？俺が銃座に付くんで」

「了解した」

「修さん、私達はどうすれば？」

「美麻さん達はここで待機していてくれ。完了したら信号弾を撃つから、小ノ牧さんらも付いて来てくれますか？周辺の掃討が必要なんで」

「了解した。行くぞ、篠田、綾瀬」

「「了解」」

そう言って三人はａｎｇｅｌに乗り込む、俺はハンヴィーの銃座に

乗り込み、ガトリングガンの弾を装填していく

「じゃあ、少佐、お願いします」

そう言ってハンヴィーとａｎｇｅｌが動き出す

「ヒャッフゥウウウ！！！！！狩りの時間だ！！！」

そう言って引き金を引く、ガトリングガンはゆっくりと回転し始めてやがて、無数の弾の嵐をゾンビ共に襲う

ワゴン車の前あたりに溜まっていたゾンビ共は木端微塵に散って行った。残りもいたのだが、それは轢いて行った

そして、ワゴン車付近に来た所で車を止めて、俺は真っ先に降りた。それと同時に物干し竿を抜いて近くにいたゾンビを真っ二つにした。

「そらそらそら！！！！！もっと食らいたいか！？掛かってこいや！！！」

そう言ってゾンビ共を切って行く

ａｎｇｅｌからも小ノ牧さんらが降りて援護射撃を行う。琥珀はそのままａｎｇｅｌを動かし、集まって来そうなゾンビ共に２５ｍｍ機関砲をぶっ放していた

数分後・・・・・

「はっはっはっは！！！私は帰ってきたーー！！！」

某メタルなゲームのボスの人が言っていた言葉を言いながら物干し竿を収める

「・・・・・」

ワゴン車付近にいたのは婦警さんだった。しかも茫然としていた

「あらら・・・大丈夫ですか?婦警さん」

秀治が言った

「ハッ!?あ、危ない所を助けて頂き、ありがとうございます!」

慌てて言う婦警さん

「おーい、あさみさーん!!」

遠くから声が聞こえた。そっちに振り向くと高校生らしき集団と少女と犬がいた

「あ、コータさん!」

婦警さんが駈けて行く

「良かった・・・本当に良かったよ」

ミリタリー的な服装をした少年が言った

「良かったな。青年」

俺が言った

「ありがとうございました。僕、小室孝って言います。藤美学園の生徒です」

リーダー的な少年が言った

「ああ、たすけられて良かったぜ。俺は古知屋修って言うんだ。日本技術大学の生徒だ」

俺が言った

「古知屋!?」

高校生側の少女が叫んだ

「知っているの?高城さん」

金髪の爆乳お姉さんが言った

「ええ、古知屋家と言えば、世界でも代表する貿易会社よ。パパもよく利用してた」

「と言う事は君は、右翼団体の高城荘一郎氏の御令嬢かな?」

俺が言った

「ええ、高城沙耶よ」

「ここで、会えたのも何かの縁だな。壮一郎氏はどうしたんだ?」

「パパは・・・・その・・・・」

何か言いづらそうに顔を伏せる

「沙耶の両親は家に残りました。俺達が先に出たので後の事は分かりません」

答えたのは小室だった

「なるほどな・・・・」

俺はそう言って空を見る

「そういえば、どうしてここに来たんですか？」

M1A1に銃剣を付けた少女が言った

「ああ、俺らは警察署を出た後、ここに「警察署ですって！？」おおう！？」

M1A1を持った少女が言った

「警察署から来たんですか！？」

「ああ、そうだが？」

「そこに、私のお父さんを見かけませんでしたか！？」

「ええっと、名前は？」

「あっすみません。私は宮本麗と言います。父の名前は宮本正と言います」

「う〜ん、そんな人いたかな?秀治、お前はみたか?」

俺が言った

「いんや、俺も見かけてないね。それだったら、勲さんとかに聞けば良いんじゃない?それの方が話が早いと思うよ?」

秀治が言った

「それもそうだな。よっと」

そう言って俺は上空に向かって信号弾を発射する

「これで、よしっと小室君、ちょっと待っててくれよ」

「分かりました」

そう言ってその場で待機する事になった

こうして、新たな生存者に遭遇する事が出来た俺達であった

床主アウトレット

俺らはアウトレットにて新たな生存者と遭遇する。それは藤美学園から逃げ出してきた高校生のグループだった。彼らはこのアウトレットから脱出して警察署に向かおうとしていた所、予想外の自体が起きてあそこにいたみたいだ

～駐車場～

まだ、勲さん達が来ていないので俺はリーダーである小室君に話を聞いてみる事にした

「小室君、ここを出てどこに向かうつもりだったんだい？」

俺が聞いた

「はい、警察署に向かおうかと思ってました。そこで、情報を集められたらいいかなって」

小室君が言った

「なるほどな。けど、もう無理だよ」

「え？」

「俺らはそこから出て来たんだ。警察署は化物でいっぱい、正直、生き残れる確率は０だ」

「そうですか・・・・けど、僕たちは自分の親の安否をどうしても

確認しておきたいんです。」

「生き残ってればいいが逆にダメだったら?」

俺が聞いた

「その時は・・・・・自分達の手で・・・・・」

小室君の目は決意を表していた

「そうか・・・・無事だと良いな」

「ええ」

そんな時、丁度勲さん達の車両が到着した

「修君、どうやら、成功したようだね」

勲さんが言った

「ええ、それと紹介しておきます。彼らは藤美学園の生徒たちです。勲さん、あなたに質問がある子がいますよ」

そう言って宮本さんを前に出す

「ほう?」

「は、初めまして、宮本麗と言います」

彼女が自己紹介する

「宮本？・・・・もしかして、正の娘さんかい？」

勲さんが言う

「知っているんですか！？」

「ああ、と言うよりも相棒だったからな。」

「それで、父は！？父はどこにいますか！？」

宮本が詰め寄る

「すまない、私はすでにあいつとは分かれたんだ。警察署を出た事は確かだ。私は床主大橋の方に正は小学校の方に向かった。だが、生きているかは私も分からない」

「そう・・・ですか・・・・」

宮本はそう言って表情を暗くする

「だが、あいつはそう簡単には死なんからな。まだ、しぶとく生きてるんじゃないか？娘なら信頼するのも役割だぞ？」

勲さんはそう言って笑う

「・・・・・はい！」

宮本はそう言って顔を上げる

「さて、君たちはこれからどうするんだい？」

俺が聞いた

「そうですね。もしよろしければ、途中まで良いですか？僕たちは小学校の方に行こうかと思ってます」

小室君が言った

「そうだな・・・・少しばかり付き合ってもらえるかい？俺達がここに来た理由は食糧の確保なんだ」

俺が言った

「でも、中にも奴らがいますよ？」

ミリオタな青年が言った

「そうなのか？」

秀治が言った

「はい、僕達がここを出る羽目になったのも奴らがアウトレットの中にまで侵入してきたからなんです」

「そうか・・・・・小ノ牧少佐、アリス少佐、何か良い手はありますか？」

そう言って少佐達の方を見る。小ノ牧さんは銃の整備をアリス少佐は葉巻を吸っていた

「そうだな・・・・これだけの大きな建物だ。この人数でやるとなると、一番はヘリボーンで屋上から侵入する事が良いのだが・・・・」

小ノ牧さんが言う

「しかし、Ｍｒ小ノ牧、非戦闘員にも戦わせるわけにはいかないでしょう?それに、この車両部隊の監視も必要よ」

アリス少佐が言った

「確かにな・・・だが、少人数でやるとしても早急なチームでは連携が難しいと思うが・・・・できるとしても特殊部隊位だ」

「だったら、一つ提案があります。もし、無理そうな場合は反対して下さい」

俺が言った。二人は黙って頷く

「あのゾンビ共は音に反応します。この無音の世界じゃあ俺達はあっという間に標的になってしまいます。だったら、こっちに引き寄せいて始末すれば良い」

「どういう事なのだ?」

黒髪の刀を持った美少女が言った

「君達もここまで生き残れたのなら分かるだろう?あのゾンビ共は音に敏感になっている逆にその他の機能は使用不可になっている。

そして、俺らが持っている武器は派手に音を出す物ばかりだ」

俺が説明する

「ハッ！もしかして、陽動？」

ミリタリー少年が言った

「察しが早いな。用はこちらに引き寄せれば良い。そこで、アリ地獄のようにゾンビ共を嵌めて行くんだ。もちろん、陽動にはこいつを使うがな」

そう言ってａｎｇｅｌを叩く

「小室君」

「は、はい」

「あそこのアウトレットは入り口がどういう風に繋がっている？」

「えっと、直線的な物だった感じがします。他の通路は全部シャッターが降りてましたし・・・・」

「なるほど、美麻さん、俺のハンヴィーにもう一台のノートパソコンが無かったかい？」

「ちょっと待って下さい。今、調べます」

そう言って美麻さんはハンヴィーに入り込む、そして、ノートパソコンを取り出す

「これですか？」

「ああ、それはＥＭＰ攻撃を喰らって無いはずだから、動くと思うよ？すぐさま、このアウトレットの地図を出してもらえるかい？それと可能なら中の様子が見たいがね」

「今、起動するんで待ってて下さい。後、できる限りはしますけど、中の方は難しいと思いますよ？」

そう言ってカタカタと打ち込んで行く

数分後・・・・

「・・・・よし！修さん、監視衛星からリアルタイムで映るようにはなりました。けど、中は見れませんでしたね。カメラの方がやられてます」

そう言って画面を見せる

「そうか・・・・仕方ないな・・・・琥珀、ａｎｇｅｌを使って偵察をしろ。必要であれば攻撃していい秀治、お前もａｎｇｅｌに入って中の様子をできる限り映して来てくれ、」

そう言ってカメラを渡す

「分かった（分かりました）」

そう言って二人はａｎｇｅｌに搭乗する。そして、そのまま、発進していく

「気を付けてね～」

綾瀬さんが手を振りながら見送る

「さて、今の内に銃を取り出しておくか。」

そう言ってハンヴィーからモシンナガンとミシガンを取り出す

「おっほー！！ソウドオフショットガンとモシンナガン！！」

ミリタリー青年こと平野君が目を輝かせながら言った

「ああ、俺の相棒だ」

そう言って弾を装填していく

それと同時にアウトレットの方からガラスが割れる音と機関砲の音が聞こえた。

「お～お～ぶっ放してるな～」

勲さんが言う

「そうね・・・」

メアリーが言う

「じゃあ、ここに残る班と突入班を決めるか。まずは・・・・・ここに残る班から美麻さん、亀爺、メアリー、後、そっちのグループ

から鞠川さん、ありすちゃん、わんこ、高城さん、あさみさんって所だな。残りは突入班って所かな?」

「そうですね。戦略的に考えてもそれが妥当でしょうね」

平野君が言った

「だとしても残りの方が心配じゃないか?銃を扱えそうなのはメアリー君とあさみ君位だし」

小ノ牧さんが言う

「う~ん、そうですね~じゃあ、補助として綾瀬さんと琥珀を残していきますか。これ以上減らしたら突入の方が難しくなると思いますよ?」

俺が言った

「そうだな。それで行こう」

そうこうしている内にａｎｇｅｌが戻ってきた

「ふぅ~ただいま、戻りました」

琥珀が上部のハッチを開けて言った

「ご苦労さん、中の様子はどうだった?」

俺が言った

「はい、情報の通りゾンビ共がウジャウジャと居ましたよ。撃てるところは撃ってきましたが、2階にも進行しているようで」

琥珀が説明する

「そうか。分かった。休んでていいぞ」

「分かりました」

そう言って琥珀はａｎｇｅｌの方に戻って行く、それと同時に秀治がやってくる

「修、ビデオだぞ」

そう言ってカメラを渡してくる

「サンキューどれどれ・・・・」

そう言って中身を見る

中の映像はゾンビ共が我が物顔で歩いていた。正直、イラッと来たのは俺だけだろうか？

「うへ～いっぱいいるな～正直、勝てる自信が無いな」

小ノ牧さんが言う

「これだけの量なら爆薬を使った方が早くないか？」

アリス少佐が言う

「確かに・・・よし、手榴弾とクレイモア、それに小型爆弾を持って行こう。準備だ」

そう言って俺達は準備にかかる

床主アウトレット～制圧編～

前回のあらすじ：他の生存者と合流そして、制圧へ・・・・

～駐車場～

「よし、まずは、二班の別れよう」

俺が言った

「というと？」

秀治が言う

「あんなでっかいアウトレットなんだ、一緒に行動してるより効率的に撃破していった方がいい、幸い、二階までしかないからな、その分時間は捗れると思うぜ？」

「なるほど、それぞれのエリアで制圧していくのだな？考えた物だ」

小ノ牧さんが言う

「じゃあ、俺と秀治とアリス少佐、勲さん、メアリーだな。二階は小室君、平野君、毒島さん、宮本さんに小ノ牧さんと篠田さんを加えよう」

「そうだな。それの方がいい」

アリス少佐が言う

「でも、そっちの方が人数が少なくないですか？」

宮本さんが言った

「大丈夫だ。少ない分、こいつを連れていくからな」

そう言ってａｎｇｅｌを叩く

「なるほど、それが補助代わりになるって事ですね」

平野君が言う

「そういうこと、それと見る限りそっちはＭ１Ａ１とイサカＭ３７とＡＲ－１０ぐらいしか銃は持っていないのか？」

俺が言った

「はい、毒島先輩は刀を使いますし、麗も銃より銃剣を使って攻撃してます」

「なるほど、なら、平野君」

「はい？」

「ちょっとこっちに来てもらえるかな？見せたい物があるんだ」

そう言ってａｎｇｅｌの近くに寄らす

「何があるんですか？」

平野君が言った

「なぁに、軍オタなら昇天しそうな光景さ」

そう言って後方ハッチを開ける

「うっひょーーー！！！！！」

予想通り平野君は舞い踊った

「これは、Ｍ８７０ショットガン！！こっちにあるのは、Ｍ４！！すごいすごい！！」

「気にいったかな？」

俺が言った

「はい！」

平野君は目を輝かせながら言う

「そこで、だ。小室君達が扱えそうな武器を持って行ってくれ」

「えっ、でも、それだと修さんが不利になるのでは？」

「大丈夫だ。それぞれの武器はあるし、それにずっと放置じゃあこいつらが浮かばれないからな。使ってくれた方が本望だ」

そう言って笑う

「分かりました。じゃあ、これとこれと・・・・・・」

そう言って平野君は小室君達が扱えそうな武器を選定していく

～平野君が持って行った武器～

Ｍ１６アサルトライフル

Ｍ９２Ｆ×４

Ｍ８７０ショットガン

Ｍ７００スナイパーライフル

ＭＩＮＩＭＩ軽機関銃

と持って行った。その他にもグレネードとクレイモアを持って行った

「そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題無い」

そう言って平野君は戻って行く

「さてと、近距離は変えておくか」

そう言って取り出したのはデザートイーグルだ。この銃はハンドガンの中では大型の部類に入る物で、正しく持たなければ手首がイカレてしまう代物である。尚、修にはそんな物は問題ではない。それ

を二丁装備する

また、銃自体も改造されているので総弾数は通常の１．５倍は収まる

「は～また、えらいモン出したな～」

秀治が言う

「そうか？こいつなら、二体か三体はぶち抜けるぜ？」

「まっ修なら問題ないと思うけどね」

「おいおい、人外呼ばわりしてくれるね～俺は人間をやめるつもりはないぜ」

「ははっそうか」

そう言って秀治は弾を装填して行く、俺は運転席に周って上部ハッチを開ける

「じゃあ、小室君、無事を祈ってるよ」

「ええ、そちらも気を付けて下さい」

「ああ、制圧が完了したら一旦、ここに戻ろう」

「分かりました。」

そう言って小室君のグループは二階へ続く外部階段に向かっていく

「さて、こちらも向かうとしようか？修君」

アリス少佐が言う

「ええ、それじゃあ、乗って下さい」

そう言うと俺らのグループが乗る

「行くぜ！狩りの時間だ！」

そう言ってアクセルを踏む　ａｎｇｅｌはエンジンを上げながら進んで行く、途中、ゾンビ共が音に気付いてこちらに向かってくるが、その度に撥ねられたり踏みつぶされたりしていった

「さぁ、突っ込むぞ！皆、捕まれ！」

それと同時に正面の入口を突き破るガラスが壊されて行き、その先にあったバリケードも一緒に破壊してしまう

～アウトレットロビー～

突き破った先にはロビーがあった。案の定ゾンビ共が徘徊している

「うへっ気持ち悪、さっそく掃除開始と行きますか」

そう言って２５ｍｍ機関砲をぶっ放す、ん？弾は大丈夫なのかって？大丈夫大丈夫、この前、アウトレットに行く途中で何故か落ちてたからな。世の中不思議な事もあるもんだ

だから、弾は補給で来てるからな。でも、正直言うとガトリングガ

ンの弾とかも欲しかったりするんだよね。少ないから

「よし、皆、出て応戦しろ！」

そう言って後方ハッチを開ける。それと同時に秀治達が降りて攻撃を開始する

「ヒャッフゥウウウ！！！ゲームの時間だ！！！」

秀治が言ってＭＡＣ１０をぶっ放す、それが二丁もある。本人に聞くと「なんかかっこよくない？」との事だそうだ

「海兵隊の力をなめるな！」

そう言ってＢＡＲ軽機関銃をぶっ放していく、この銃は本来、弾数が少ないのであらゆる機関で使われる事が無かった。が、少佐は改造してボックスマガジンに変換しており、これにより弾数は数倍にまで膨れ上がったのだとまた、銃自体も改造を施してあるので戦場では頼りになる”暴れ馬”とのことだそうだ

「刑事（デカ）の底時からを見せてくれる！」

そう言って勲さんはＧ３６アサルトライフルである。この銃はドイツのヘッケラー&コック社が作りだした銃で命中精度が高い、また、２．５倍の光学スコープとダットサイトが標準装備されている

「米国警官だって負けてないわよ！」

そういってメアリーはＦＮＰ９０を使っている。この銃はファブリックナショナル社が作った銃で左右対称に作られている。つまり、

左利きでも楽に使用する事が出来る

「さて、俺も負けては居られないね！」

そう言って上部ハッチを開けてそこから、モシンナガンを使って遠方にいるゾンビに照準を合わせる

「ｇｏｏｄｋｎｉｇｈｔ」

そう言って一発撃つ、弾は直線状に突き進んで行き、狙っていたゾンビの頭に直撃する。ゾンビはそのまま倒れて機能停止する

「よし、次は・・・・」

そう言って次のを狙う

～数分後～

「修君、周辺の確保が出来たぞ。」

少佐が言う

「分かりました。ちょっと待って下さい。後もう一体居るんで、少し休憩しててていいですよ。」

「了解した」

「修、あとどれぐらいいるんだ？」

秀治が言う

「う～ん、後、十体は居るな」

「よし、俺も手伝うぜ！」

「そうか、じゃあ、俺のモシンナガンを使ってくれ」

そう言って渡す

「修はどうするんだ？」

秀治が聞く

「俺は・・・・・・こいつだ」

そう言ってａｎｇｅｌの中から取り出したのはＳｔｅｙｒ　ＩＷＳ２０００というアンチマテリアルライフルだ。オーストリアのステアー社が作った対物ライフル。口径はあのバレットライフルよりでかい１５．２ｍｍという怒涛のでかさ、弾は１５．２ｍｍＡＰＦＳＤＳ弾（Ａｒｍｏｒ　Ｐｉｅｒｃｉｎｇ　Ｆｉｎ　Ｓｔａｂｉｌｉｚｅｄ　Ｄｉｓｃａｒｄｉｎｇ　Ｓａｂｏｔ；装弾筒付翼安定徹甲弾）と言う物を使っている。個人用の火器としては前代未聞ともされている

「うは～ステアーの対物ライフルじゃんキチガイだね～」

秀治が言う

「一度使って見たかったんだ」

そう言ってバイボットを立てて射撃体勢に入る

「おっ重なってるのがいるじゃん、もらいっと！」

そう言って撃った。反動はでかく、一瞬、体が後ろに下がったような気がする。弾は一直線に駈けて行き、一体目の頭が消えた。そして、二体目の胴体に当たった。二体目はそのまま吹っ飛んで後方にあった噴水に突っ込んだ

「うは、テラキモス」

秀治が言う

「ん～快感だね～」

そう言いつつどんどん撃ちこんで行った

床主アウトレット～制圧編2～

前回のあらすじ：アウトレット制圧開始

～ロビー～

現在、俺達はアウトレットに突撃し、ロビー周辺を確保した。だが、まだまだ、ゾンビ共は徘徊しており、早急に片づけなければならなかった

「おらおら！！！！死ねや！！」

そう言って俺は、ａｎｇｅｌに積んであったＭ６０Ｅ４をぶっ放していた。こいつは元祖のＭ６０より軽く設計されているため、陸軍以外にも海軍などでも使われている軽機関銃だ。

もっとも、精密射撃などできないからゾンビが大量に出てきたのみ使用している。ゾンビ共はまともに食らってしまってドミノ倒しのように倒れていく

「やるね～俺も負けてられないな！」

そう言って秀治もＳＩＧ５５０を使用する。こいつは国防大国スイスで使用されているアサルトライフル（アサルトライフル）だ。世界のＡＲの中でも最高の能力を持っている。弾薬は５．５６×４５を使用する。秀治が使っているのはスコープを取り付けたＶａｒである。

弾はそのほとんどが頭部に命中し、次々と倒れていく、本当に実戦経験は無かったのだろうか？と疑ってしまうほどだ

「ヒュウ～、やるね～秀治、本当に射撃体験しただけなのか？」

俺が言った

「もちろんさ」

そう言って撃ち続ける

あっ因みに今、ａｎｇｅｌを運転してるのはアリス少佐だ。

勲さんとメアリーはその横に付いて援護する形になっている。俺と秀治がポイントマン役になっている

「メアリー、１１時方向にターゲットがいるぞ。排除しろ」

勲さんが言う

「ＯＫ」

そう言ってメアリーはＭ１４で店内にいるゾンビ共を狙撃していく

「少佐、俺達のいる位置から１２時方向に対処しきれない目標がいるんで、排除してくれませんか？」

無線機で言う

無線機は行く途中で、近くの店を漁った時に金庫から出てきた物だ。

ＥＭＰの影響も受けていなかったみたいなので、使う事にした

「了解した。影に居てくれ、影響を受けるかもしれないからな」

そう言ってａｎｇｅｌの２５ｍｍ砲をゾンビ共に向けて撃った。機関砲の弾は着弾と同時に爆発するシステムなので一体だけでなくその周りにいるゾンビ共も吹っ飛んだりしていた

「おおー、いい眺めだ」

俺が言った

「ああ、まさに戦争って言った所かね」

秀治が言う

「まぁ、その戦争にも負けたら死が待ってるだけだろうからな」

「確かに」

そう言って俺らは先行していった

～食料品店～

「修、ここ、スーパーじゃね？」

秀治が言った

「おお、でかそうだな。これなら多少は期待できるか」

そう言ってドアに貼りつく、ノコノコ入って奴らの餌食なんて笑えない冗談だからな

「3カウントで行くぞ。3・・2・・1・・GO!!」

そう言って俺らは中に入って行く

「ふぅ～いきなりの御対面は無いな」

俺が言った

「そうだな。とりあえず、探索するか?」

「ああ」

そう言って奥に入って行く、スーパーは予想通りでかく、思ったよりも食糧が棚に有った

「意外とあるな～これなら持つんじゃね?」

秀治が言う

「ああ、そう・・・」

俺が最後まで言おうとしたが、途中でやめた。なぜなら、俺たち以外にも誰か、このスーパーに入っているってことだ。現にショッピング用のカートの音が聞こえている

「修・・・この音って・・・・・」

「ああ、他にも生存者がいるみたいだな。」

その間にもカートの音が大きくなってくる。こっちに近づいている証拠だ。俺達は銃を構えて警戒を取っておく

「・・・・・ふぅ、生存者か」

秀治が言った

俺達の前に現れたのはこのスーパーの店員だろう人物、その証拠に前掛けのエプロンを付けていた。カートも身を守るためか、包丁や電ノコなどが取り付けられていた

「お前たちは・・・・・何をしに来た・・・・・」

店員が言う

「あーこの街から脱出する為に来たんだ。だけど、食糧が尽きて来てな。ここで、補給しようと思っていたんだ。」

俺が説明した

「そうかそうか　貴様らも他の奴らと一緒にこの店の商品をかっぱらおうって言うんだな。困るんだよね。そう言うのは」

「は?何言ってるんだよ。おっさん、こんな世の中だ。生き残るに必要だって言ってるんだよ。」

秀治が言う

「いいか。よく聞け餓鬼共、この店はな、私の物なんだよ。つまり、私の許可なしに持ち去る事は許されんのだよ!」

声を荒げて言うおっさん

「おいおい、勘弁してくれよ・・・・どうしてもダメなのか?」

俺が言った

「もう一度言うぞ!この店はな・・・私の店なのだあああああああ!!!

「俺の方もキツイ、正直、白兵戦にはなりたくないと思ってるけどね・・・・」

そう言ってため息をつく

「まぁ、どっちにしろ、あのおっさんを止めない限り、ここから持ち出せそうにないしな。」

そう言って立ち上がる

「どうするんだ?」

「俺が囮になる。秀治、俺のモシンはあるだろ?それで、狙撃してくれ。撃つとしたらあそこの棚だな。あそこから正面に出るから」

そう言って指さす、その一角は広くなっており、狙撃には最適のポイントだ

「とは言っても人殺しなんてやった事無いよ。」

「現にやってるじゃないか。ゾンビと言う人間達に向かって・・・・・じゃあ、頑張ってくれよ。じゃないと俺がこの世からいなくなる事になるからな」

そう言って棚を降りる。万が一のために物干し竿を抜いておく、え?そんなに持てるのかって?気にしない気にしない

「さ~て、どっからやってくるのかね~」

なるべく音を出さないように慎重に歩く・・・が

「見つけたぞ！！！！！！この店はやらないぞ！！！！！！」

そう言って猛スピードでこっちに向かってきた

「見つかるの速すぎるだろ！！！！この野郎！！！！」

そう言って走る。あのカートに追いつかれたら最後、上半身と下半身が一生、お別れする羽目になる。そんなのはごめんだね

俺が抜けた後、おっさんがものすごい勢いで追いかけてくる。おっさんが通った後は商品の一部が真っ二つに切れていった

「自分で店破壊してるじゃねぇか！」

そう言って秀治がいる所とは反対側の通路を走って行く多少なりとも時間を稼ぐためだ

「この野郎！！！」

そう言ってサブに持って来ていたＭ９２Ｆを乱射する。確実に当たりはしないが、牽制になるだろう。

「グォ！このクソ餓鬼が！！！」

腹に一発銃弾を喰らったがオッサンは勢いを弱めるどころかさらに増してきた

「そろそろかな？秀治、頼むぜ」

そう言って秀治が待機している棚の方に向かった。予想通り、真正面から秀治と対峙する形になった。

「まだだ・・・・・・・・まだだぞ・・・・・・・・・・今だ!!!」

そう言って俺は横にジャンプする。おっさんは勢いを止められるず、走っている。それと同時に一発の銃声が店内に響く

「グゥゥゥ!!!!!??」

おっさんはその場で転げていた。秀治が撃った弾はおっさんの心臓付近に命中していた。カートは棚に突っ込んで停止した

「おわり・・・・だな」

そう言って俺はおっさんに近づく

「この店は・・・・私の・・・・だ・・・・・他に・・・・誰が・・・・・管理・・・・・できる・・・・・・・・・・・・・いらっしゃいませ・・・・・・レジへ・・・・どうぞ・・・・・・・・・・・・・・・・・・六番レジ!!!!!!掃除しろ!!!!!!!!!!!!!!!」

そう言っておっさんは息絶える

同時に秀治がやってきた

「終わったな」

「ああ、お前のおかげで助かった・・・・ありがとうな秀治」

「ああ・・・・・・」

「なんか、悩みが出来たら相談しろ・・・・できる限り、協力はする」

「ありがとう・・・・修」

そう言っておっさんに対して黙祷した

こうして、スーパーを奪取する事に成功した修達だった

床主アウトレット～制圧編3～

～小室視点～

僕たちは修さんの協力の元、奴らに奪われたアウトレットを取り返すため、脱出経路として使っていた外部階段から中に侵入しようとしていた

「では、準備はいいかね？ポイントマンは我々で行う、君たちは後方の援護を頼む」

自衛隊の小ノ牧さんが言った

「了解です。」

平野が答える

「よし・・・・・フラグ・クリア」

そう言って篠田さんがドアを開けて綾瀬さんが手榴弾を中に放り込む、数秒後、中で爆発があった。小ノ牧さんらが最初に入って中の確認をする

「クリア！いいぞ」

「行こうか？小室」

平野が言う

「ああ」

そう言って僕達も中に入る

～二階非常階段前～

中に入ると奴らの死体があった。手榴弾は奴らの真ん中に落ちたようだ

「うへ～本場は違うな～」

僕が言った

「だが、今の音で奴らに嗅ぎつけられたな」

冴子さんが言う

冴子さんの言う通り、僕達のいる所とは反対側の廊下から奴らが歩いて来ていた

「むぅ、少しばかり派手に行きすぎたか？」

小ノ牧さんが言う

「いいえ、これくらいならどうにかなると思いますよ？」

平野が言う

「では、ここから近い方には私と毒島さんと宮本さんで頼むよ。遠くにいるのは狙撃してくれて構わない」

「分かりました。皆もそれで良いな?」

僕が言うと皆は黙って頷いた

「よし、行くぞ!」

そう言って分かれる

「小室、こいつを使いなよ」

そう言って渡してきたのは静香先生の友達の家に置いてあった。銃だった

「でも、これって狙撃銃だろ?難しくないか?」

僕が言う

「大丈夫大丈夫、そこの木箱の上に銃を置いて狙撃すればいいさ。使い方は簡単に言うとね。マガジンをここにさして、後は上のレバーを引けばいいさ。ショットガンと違って引き金を引く度に次の弾が装てんされるようになってるから」

と平野が実演しながら説明する

「なんとなく分かったよ。やってみる」

そう言って平野からスナイパーライフルを受け取る。ショットガンとはまた違った重みを感じた

そして、木箱の上に三脚を立ててスコープを覗く、すると遠くにいた奴らの姿が目の前で見てる様なほど近くに写った

「ほへ～すごいな～」

「じゃあ、試しに一体撃ってみなよ。狙うのは頭だよ」

そう言って平野は修さんから借りた狙撃銃で撃ち始める。僕も真似して奴らの頭に照準を合わせる

「それ！」

そう言って引き金を引いた。弾が一発出て、真正面にいた奴らの頭に吸い込まれるように直進して行った。そして、奴らの頭、眉間の真ん中に命中し、奴らはその場で倒れた

「すごいな～、狙撃銃って」

そう言いつつ僕は狙撃していくのだった

～小室視点ｏｕｔ～

「さ～て、少佐らを呼んでしまうか」

スーパーで狂った奴に遭遇した。やっぱり、こんな人間も出てくるんだな～俺はそんな事を思いつつも無線で少佐に連絡を取った

「少佐、食糧を見つけましたよ。すぐ近くにあるスーパーに来て下さい」

俺が言った。無線の向こうから「了解」という言葉が来た

「さて、秀治、スーパーの前で待ってるか」

「そうだな」

そう言って一旦、スーパーを出る

人間を一人殺してしまった事に対して、秀治は引き摺るかと思いきや、すぐさま、いつも通りの元気を俺に見せてくれた。正直、ホッとしてる

「ふぅ～」

俺らはスーパーの前でタバコを吸いながら待っていた

「で？この後はどうするんだ？」

秀治が言った

「う～ん、まずは、小室君達を小学校の方に向かわせなきゃな。それから、秀治の親御さんの所に向かっていく、だが、その後が問題だな」

「なんでだ？」

「だって、ＥＭＰのおかげですべての電子機器はダメになったんだ。当然、船にも影響を与えてるはずだぜ？脱出経路を見なおさなくっちゃあいけないな」

「海がダメならこのまま車で脱出ってのは？高速なら半分の時間で出られるし家の近くに高速の入口はあるぜ？」

「そうだな・・・それが一番いいかな～」

と話しているとどっからやってきたのかゾンビ共がやってきた

「おいおい、弾が無い状態でこいつはきついな・・・秀治、どのくらい弾薬はある？」

俺が聞いた

「え～と、ハンドガンの弾が４０、ライフル弾が２００ってとこだね」

「多くは期待できないか・・・なんかあったけな～」

そう言ってバックの中身を漁る

「ん？こいつは・・・・・」

そう言って出したのはスタングレネードだった。グレネードと言ってもこいつは強力な光と音を出して相手の視覚と聴覚を奪う非殺傷兵器だ。人質なんかがいる状況では効果が高い

「スタンじゃん、そんなのいつ入れてたんだ？」

秀治が言う

「分からんね・・・・・でも、こいつは使えるかもな。秀治、合図

と共に物陰に隠れろ。奴らが耳の発達が著しい、それを利用しよう」

「なるほど、どうなるか楽しみだな」

「3カウントで行くぞ。3・・2・・・1・・・・GO！」

そう言ってピンを抜き、ゾンビ共に向かってスタンを投げる。その間に物陰へと隠れる俺達、スタンはそのまま奴らの上空で一気に光り出し、強烈な音を響かせる

「ひゅい～耳塞いでも、きついな～」

俺が言った

「でも、あいつらの方が効果抜群みたいだね」

そう言ってゾンビ共を見る。ゾンビ共はその場でのたうち回りながら床に伏せていた。中には頭が破裂している物までいた

「あれま～結構なお手前で・・・・これで、しばらくは動けないだろうな～今の内に処理しておくか」

俺が言った

「そうだね。」

そう言って俺達は刀を持って彼らに対して敬意を払いつつ、処理活動を行った

うっほ！いい食材！

俺らはアウトレット内でスーパーを発見し制圧した。少佐らを待ってる途中、ゾンビ共が嗅ぎつけてきたが、撃退した

～スーパー前～

「ここか」

少佐が言う

「ええ、結構な数ですよ。生ものはダメになってましてけど、インスタント食品はまだ、あったので大丈夫だと思いますよ」

俺が言った

「よし、後は二階のチームか。大丈夫かね？」

勲さんが言う

「大丈夫でしょう。小ノ牧さんら自衛隊もいますし」

秀治が言う

「でしょうね。で、どうする？先に集めちゃう？」

メアリーが言う

「それが先決だな。いつまでもここにいるわけにはいかん。さっさ

と集めてしまおう」

少佐が言った

「よし、少佐とメアリーは食糧を集めてきちゃって下さい。ここは俺と勲さんと秀治で守ってますので」

俺が言った

「了解した。量はどうする？」

「集められるだけ集めちゃって下さい。」

「分かった。では行くか。メアリー」

「ええ、行きましょう」

そう言って少佐とメアリーは中に入って行く

「よし、防衛線を張っておこう。秀治と勲さんはここら辺に重機関銃を設置して下さい。俺はトラップを仕掛けて置くんで」

「了解した。秀治君、準備してしまおう」

「分かりました。修も気お付けてな」

「応、それじゃあ」

そう言って俺も二人と分かれる

「さ～て、どこに仕掛けようかね～」

俺はスーパーの近くから離れてゾンビ共がやって来そうな場所にクレイモアを仕掛けて行っている。クレイモアは対人用の地雷で爆発すれば、人間はミンチになってしまう恐ろしい物だ

「おっここの通路にも仕掛けて置くかな・・・・」

そう言って業務用の通路にクレイモアを仕掛けて行く

『アアアア～』

「おっと、さっそくお出ましだな。それじゃあ、実験台になってもらおうか」

クレイモアを仕掛けた直後にゾンビ共が業務用通路から出てきた。一目で3～4って所だ。

「ほ～ら、こっちだぞ～ここまでおいで～」

手を鳴らしながらこちらに誘導する。奴らは音に敏感なんだ、これで十分だろう

「よし、逃げるか」

そう言って通路とは反対側に走って行く、通路側からはゾンビ共がやってきた

「よし、ここじゃな！」

そう言って手元のリモコンを押す、クレイモアはワイヤートラップの他にリモコンを操作して爆発させる事が出来る。

スイッチを押した瞬間、クレイモアは爆発した。クレイモアは爆発すると扇状に７００個もの鉄球をばら撒く、１６mは立ち入り禁止エリア、１００mでは危険エリアとなっている。上記の説明通り、一番近くにいたゾンビは爆風と鉄球の餌食となり、外見は判断不能までになっている。逆に遠くにいた奴でも鉄球を喰らっていた。足が?げていたり、手が吹き飛んでいたりと凄惨な光景である。

常人が見たら真っ先に吐く事間違いない光景である

「うへっテラキモス、だけど、成功だな。もう一個仕掛けておこう」

そう言って再び仕掛けて置く

「ただいま～」

俺はスーパーの前に帰ってきた

「お帰り、どうだ?」

秀治が言った

「出てきそうな所に仕掛けたさ。それに、実験もしてきたから大丈夫だ」

「実験?」

「ああ、ゾンビ君相手にクレイモアを仕掛けた」

「うはっ鬼畜だな～」

「あいつらは人間じゃないんだ。願っても無いのに死体にされ、そのまま当ても無く動き回るんだからな。いっそ倒した方が倒された方も成仏してくれると思うぜ？」

「確かにな～」

「おや、修君、帰って来てたのか」

ａｎｇｅｌから出てきた勲さんが言った

「ええ、こっちのトラップも仕掛けましたから、とりあえずは大丈夫ですよ。少佐達は？」

「今さっき、出てきた所なんだが、まだ、積み込めそうなので、再び入って行ったよ。時間的にもう少し掛かりそうだ」

勲さんが説明する

「そうですか。じゃあ、もうちょい待ちましょうかね」

そう言って俺はａｎｇｅｌの上に昇り、タバコに火を付けた。いや～タバコも切れそうになってたからな～スーパーの中にあってほんと、良かったよ

「修、俺にもくれ！」

秀治が言った

「あいよ。よりどりみどりだ」

そう言ってタバコが入ったバックを投げる

「サンキュー」

そう言ってバックをまさぐる

「あれ?勲さんは吸わないんですか?」

俺が言った

「ああ、私は昔、吸っていたが、今はやめたよ。ドクターストップを掛けられたからな。今では健康体そのものさ」

そう言って笑う勲さん

「へ~意外ですね~吸ってそうなイメージがありましたけど」

そう言ってふぅーと息を吐く、同時に白い煙が上空に立ち昇ってやがて消えて行く

そうしている内に・・・・・・

『アアアアア』

どこからともなくゾンビ共がやってきた

「お出ましたな。サクサクと片づけて・・・・・・」

そこで言葉を止めてしまった俺

「修？どうしたんだ？」

秀治が言った

「いや、見間違いなら良かったんだが・・・・・なんか、でかいのがゾンビ共の中に紛れ込んでるぞ」

「何？どんなのだ？」

勲さんが言う

「なんて言うか・・・・・ゴリマッチョ的な？そんな感じです」

「ゴリマッチョ？て言うと筋肉ムチムチなあれの事？」

「そんな感じ」

数メートル先にゾンビ共が徘徊しているのだが、その中に数倍の体格を持ったゾンビが徘徊していた。スピードは遅そうに見えるのだが、パワーが極限までアップされた感じのタイプだ

「・・・おいおい、あれ、銃弾・・・・・効くのか？」

それを見た秀治が言った

「分からんね・・・・・・」

俺が言った

「試しに撃ってみてはどうだ?それで、分かるかもしれないぞ」

勲さんが言った

「ですね・・・・秀治、俺のモシンを返してくれ」

「OK」

そう言ってモシンを渡す秀治

「サンキュー」

そう言って射撃体勢に入る俺

「心臓付近を狙って見るか?」

そう言ってトリガーを引いた。弾は勢いよく出て、ゴリマッチョゾンビに当たるが・・・・・・

「なん・・・・だと?弾かれた?」

確かに弾は心臓付近に当たったのだが、まるで、装甲板に当たったかのような金属音がした

「マジかよ・・・・」

秀治が言った

音に気付いたゾンビ共は一斉にこちらに進行してきた

「ヤバい！勲さん！重機関銃を使って下さい！秀治！お前は援護射撃を頼む！」

「分かった！」

「把握！」

そう言って二人が動く、勲さんは設置したＭ１３４をぶっ放す、秀治はＭＩＮＩＭＩでゾンビ共を刈っていく、俺はａｎｇｅｌの中にもぐりこみ、対物ライフルを漁る

「クッソ、とりあえず、バレットでやってみるか？」

そう言ってバレットを取り出して、ゴリマッチョに照準を合わせる

「死ねや！！」

そう言ってトリガーを引いた。１２．７ｍｍ弾が勢いよく飛び出た。そして、ゴリマッチョゾンビに命中するが・・・・・

「効かない！？」

ゴリマッチョゾンビは悠々とこちらに向かって来ていた

「修！どうすんだよ！？」

秀治が言う

「クッソ・・・・どうすりゃあいい?考えろ修・・・・・」

そう言って自問自答した

「こうなったら、あいつを出すか・・・・・二人とも少し時間をくれ!」

「「分かった!」」

そう言って俺は再びａｎｇｅｌに潜り込むのだった

デカブツの倒し方

俺はモール内で新たな敵に遭遇した。しかも、並みの攻撃では効かないような頑丈な体格になっていた。俺はａｎｇｅｌ内で新しい武器を持ち出そうとしていた

～スーパー前～

スーパー前では銃声が轟き、また、止む事が無かった

「修！ゾンビ共は粗方、片づけたぞ！後はあのデカブツだけだ！」

秀治が言った

「オーケー」

俺はａｎｇｅｌ内から返事をした

「秀治君、我々であいつを引き付けよう。多少なりとも時間を稼ぐんだ」

勲さんが言う

「了解っす！」

そう言って二人はデカブツの方に向かった

～ａｎｇｅｌ内～

「クッソーバレットでも効かないんじゃあな～なんか、規格外の武器って有ったけな・・・・」

そう言って俺は辺りを漁る

出てくるのはハンドガンだったり、ショットガンだったり、いかにも効かないような武器ばかりだった

「あれは、マジでＬｕｎａだな・・・・・これ以上に難しい事なんざ、他にないぞ」

そう言った時、奥の方の荷物が拍子に崩れる

「ん？なんだこれ・・・」

荷物の間から？マークが出てきたのだ

「ａｎｇｅｌに元々積んである物か？だとしたら、琥珀だが・・・・」

そう言いながらも荷物を掻き分け、全体を取り出す

「おいおい、無反動砲じゃないか。琥珀の奴、何に使うつもりだったんだ？怖いわ～でも、こいつは使えるかもな・・・・・」

そう言って近くに張り付けてある説明書を取る

～説明書～

アメリカ陸軍からＭｓ．琥珀へ

注文されていた装甲車用の無反動砲が完成したので送ります。これは、Ｍ２０・７５ｍｍ無反動砲を元に造りました。名前はＭ３０・８５？砲です。使い方は従来の無反動砲と一緒なので難なく扱えるかと思います。
威力は戦車砲とまではいきませんが、少なくとも同じ装甲車両なら一発で片が付きますよ。これは保証します。
弾は、通常弾と特別な手甲爆裂弾を用意しました。爆裂弾の方は注意して扱って下さい。間違って手元に落とすような物なら自分の体が無くなると思って下さい。まぁ、あなたの場合、そう言うのは慣れてるかもしれませんが・・・・・・とにかく、慎重に扱って下さいね。

「琥珀って・・・・アメリカ陸軍とお友達なの？そりゃあ、武器商人とはいえ裏の顔は広いかもしれないが・・・・・うん、気にしたら負けだ。えーと、使い方は、まず砲身を外に出す」

そう言って砲身を押した。すると、簡単に砲身が外に飛び出た。

「ほうほう・・・・で、肝心の弾は・・・・あれかな？」

そう言って固定座席の下に木箱が置いてあったのでそれを開けた。
中身は無反動砲の弾だった

「おおう、こいつか・・・・・装填方法は、横から入れるのか」

説明書通りに弾を装填した

「えーと、撃ち方は・・・・・運転席でやるんだな。」

そう言って運転席に移動する。席に付いてまだ、触って無いボタンが有ったのでそれを押した。すると、目の前に画面が表示され、あのデカブツが映った

「よーし、うまく、誘導してくれてるようだな。一気に決着を付けるか」

そう言って運転席の蓋を開けた

「秀治！勲さん！準備ができました！離れて下さい！」

そう言うと、二人は一気に離れ、姿が見えなくなった。俺はバレットでこっちに引かせるように撃った。予想通り、デカブツはゆっくりとこっちに歩いて来た

「スタンバーイ・・・・・・スタンバーイ・・・・・・・・・・・・・・・ｆｉｒｅ！！」

そう言って発射ボタンを押す、車体に大きな揺れが走り、弾は勢いよく射出された。そして・・・・・デカブツと衝突し、爆発した

「さすがに効くだろう・・・・これで、効かなかったら撤退有るのみだな」

爆発のせいで周りに置いてあったベンチなどが近くの店に突っ込んでいた。それが爆発の威力を物語る。ゆっくりと煙が晴れてきた。

「よっしゃ！！こいつは効いたも同然だな」

デカブツは爆発の衝撃で後ろの方に吹っ飛んで大きな遊具を背もた

れにするかのように座っていた。それから、観察していたが奴はピクリともしなかった

「うへ～、何使ったんだ？修」

秀治が言った

「無反動砲さ」

「無反動砲？つまり、対戦車ランチャーとか？」

「いやいや、それより威力がある奴さ」

そう言って笑った

「しかし、あいつはどこから出て来たんだ？今まで見たことも無いぞ」

勲さんが言う

「さぁ、分かりませんね。これは仮説ですけど、あのゾンビも元々は普通だった。しかし、何かの拍子に細胞が急激に変化して、あんな姿になったんでしょうかね」

俺が仮説を言う

「なるほど～それが一番しっくり来るけどな～これから先、あんな奴までいるかと思うと寒気がするな」

秀治が言った

秀治の言う通りだった。今までのゾンビならハンドガン一丁でも倒せるが、あんなデカブツが出てくるとなると対戦車ランチャーなどの重火器が必要になってくるのかもしれない。現にバレットライフルがダメだったんだ。

「秀治の言う通りかもな・・・・まぁ、今回は倒せたから良いとして、次から気を付けないといけないな・・・・・」

俺が言った

同時に少佐達がスーパーから出てきた

「皆！これで、全部だぞ・・・・って何があったんだ？」

少佐が言う

「実は・・・・・」

そう言って俺がこれまでの経緯を話す、説明が適当だとか言うなよ。めんどくさいとかそう言うのじゃないんだからな

「なるほど、それじゃあ、ここを出るとするか？」

少佐が言った

「そうですね。帰りは俺が運転していきますよ。後の皆は周りを警戒しておいて下さい」

そう言ってａｎｇｅｌに乗り込む

「了解した。勲さん、一緒にポイントマンをしてくれませんか？」

「分かりました。」

そう言って少佐と勲さんが先導する

俺もａｎｇｅｌのエンジンを動かして、反転した

「修、この砲はどうするんだ？」

そう言って無反動砲を指さす

「うーん、片づけるのも面倒だしな、いいや、そのままで」

「ＯＫ、じゃあ、行こう」

そう言って俺達も動いた

途中、小ノ牧さんらのチームすれ違った。小ノ牧さんらはもう少し、調べたら出てくるそうだ。

俺達はそのまま、外に出て待機班と合流した

～駐車場～

「お帰りなさい。修さん」

美麻さんが迎えてくれた

「ただいま、美麻さん、食糧も手に入ったぜ。これなら、当分は持つな」

「そりゃあ、すごいですね！後、こっちで調べたんですが、どうやら、ＥＭＰ攻撃を受けたのは日本だけみたいです。軍事情報だと、最初は六発も上がってたらしいですけど、米海軍と海上自衛隊が防衛したらしく、５発までは落とせたみたいです。ですけど、最後の一発だけ漏らしたみたいで、後は日本上空で爆発したらしいです」

美麻さんが情報提供をしてくれた

「なるほど～そう言う事だったのか・・・・・」

「そう言えば、小室達は？」

高城が言った

「ああ、小室君たちならもう少し、調べるそうだ。後、数分で来るらしい」

「そう。まぁ、自衛隊もいる事だし、大丈夫ね」

そう言って戻った

「さて、彼らが戻ってきたらどうする？」

少佐が言う

「戻ってきたら、ここを出発、小学校の方に彼らを乗せて行って、それで、秀治の家に行って船を頂戴しようかと思ってます」

「なるほど、では、今は待機だな」

そう言って葉巻を取り出す少佐

「さて、今の内に銃の点検でもしますかね」

そう言って俺は銃を取り出して点検を始めるのであった

こうして、無事に食糧を手に入れる事が出来た俺達だった

やっぱし、改造は楽しいよね？

俺らはアウトレットで食糧を調達し、駐車場で小室君達のチームを待っている所だった。

～駐車場～

「ふわ～、遅いな～」

俺は欠伸をしながら言った

「しょうがないんじゃない？アウトレットは広いんだし、何よりゾンビ共がウジャウジャ居るからね～」

秀治が言った

「分かってるんだけどな～でも、暇なのは確かな事じゃないか？」

「それはな・・・・・」

そう言って秀治はタバコを咥える

「暇だし、車両をちょっと改造しようか。秀治、工具一式」

「ほいよ。大事に扱ってくれよ」

「わーってるよ。さてと、手ごろな車から材料を拝借するとしますか」

そう言って俺は近くの廃車から材料を集める事にした

「この際、防御を高めるとしますかね。だとしたら、あのトラックからか」

そう言って７３式の方を見る

「う～ん、やるとしたら同系のトラックが良いんだけど・・・・・・・あった。」

そう言って近くに放置されていた大型トラックが目に入った。さっそく、分解を行い、使えそうな部品を集めて行く

「何をしてるんだね？修君」

勲さんが言った

「ああ、待ってるのも暇なんで車両をちょこっと改造しようかと思いましてね。今、手ごろな部品を集めてる所です」

「なるほど・・・・面白そうだな。私も手伝おう」

そう言って笑う勲さん

その後は二人で手ごろな材料を集めて、７３の方に持って行った。さらに運の良い事に分解したトラックは工事用の道具を運搬する会社だったらしく荷台にはたくさんの工具が揃っていた。

「いや～、これでいい作品ができそうですね。勲さん」

「ああ、実に楽しみだ。で、今回のジャンルはなんだ？」

「一応、防御型と言う事でお願いします。この車両の中じゃあこのトラックが貧弱なんで」

「了解した」

そう言って俺らは作業を開始する。

まずは、荷台の帆を取り外して、さっき外したトラックの荷台の鉄を囲むように取り付けた。さらに、タイヤにはスカートを取り付けてタイヤへの被害を少なくする作業を施した。これにより、パンクする確率が低くなるのだ。

運転席にはさらに鉄板を取り付けて中の運転手及び同乗者に被害が行かないようにした。バンパーも通常の物から雪かきなどで使われるバンパーを取り付けた。助手席の屋根を切り取って、代わりにM2キャリバーを乗っけた。さらに荷台の屋根部分にも機関銃を取り付けられるように造った。これで、外見はガントラックのように見える

さらに、このトラックにはロケランと言った爆発の可能性がある物ばかり積んであるので、荷台の下の部分の鉄を厚くして火による誘爆と言った事態を避けられるようにしてある

「う～ん、いい出来だな」

勲さんが言った

「そうですね。これなら、そこらのトラックより強いはずですね。

まぁ、元が軍用車両ですし、大丈夫でしょう」

俺が言った

「おーい、修～終わったか～？ってガントラックじゃん、良くできたな」

秀治が言った

「ああ、実にいい出来だ。俺も満足してるよ」

笑顔で言った

「そうか。そりゃあ、良かったな」

「所で、秀治君は何か用があったのではないか？」

勲さんが言った

「おおっとそうだった。小室君達が戻ってきたようだよ。今さっき、ニ階の非常階段の所にいた。だけどな・・・・・・」

「？なんか、有ったのか？」

「ああ、階段の下にゾンビ共がいつの間にか集まっていてな。降りられないみたいだ。」

「そんなに多いのか？」

「いいや、多いとは言っても１５～２０って所だな。でも、まだそ

の近くの入り口から出て来やがる。増える方に継続中だ」

秀治が言う

「他の道は？」

「アウトレットの中って事か？エスカレーターは何があったか知らないけど、爆破されて落ちてるよ。それに階段もシャッターが降りてて通れない。さっき、中にいた時に確認した」

秀治が言った

「そうか・・・だとすると、こっちからの支援が無いとダメって事か。ａｎｇｅｌは琥珀が点検中だから使えないしな・・・・・」

俺が言った

「なら、修君」

「はい？」

「こいつを使って見てはどうだ？」

そう言って７３式改を指さす

「なるほど、実地試験も兼ねてって事ですね。」

「ああ、こいつがどこまで役立てるのか試してみようじゃないか。」

そう言って荷台の屋根に昇る

「おもしれぇ、どこまでやれるか楽しみだな。」

そう言って俺は運転席に入る

「修、面白い事は俺も混ぜろよ。」

そう言って秀治も荷台の屋根に昇った

「よーし、出発するぞ！」

そう言ってアクセルを踏んだ。因みに、防御力を高めたわけだが、肝心のエンジンは修の独自改造によって出力が上がっており、本来の７３より上に仕上がっている

「よっしゃあ！！！！悪魔が通るぜ！！！」

そう言いながら駐車場に停まってある車をどかしながら突き進んでいく

そして、小室君達がいる非常階段付近にまでやってきた。秀治の情報通り、関係者用通路からゾンビ共が歩いて来ていた

「行くぜ！大型トラックのドリフトじゃあ！！！！」

そう言ってハンドブレーキを思いっきり引いた。後方タイヤにロックがかかりアスファルトとタイヤの擦れる音が響く、もちろん音の無い世界になっているのでゾンビ共はこちらに向いた。それと同時に巨大な車体がゾンビ共の目の前に現れ、無残にも轢かれていった

「よし！勲さん！秀治！派手にやっちゃってくれ！」

俺がそう言った瞬間、荷台取り付けてあったＭ２キャリバーやＭ６０軽機関銃が火を吹く、それを喰らったゾンビは風穴が開いていった

俺も頃合いで運転席から飛び出て右手に物干し竿、左手にはミシガンを持った状態で奴らを切ったり撃ったりした

「ヒャッフウウ！！！！最高！！！！」

「修さん！」

上から小室君の声が聞こえた

「小室君！さっさと降りてこい！防衛はこっちで持つ！」

「わ、分かりました！」

そう言って小室君達は階段を降りて行く

「さぁ、俺を楽しませてくれよ！」

そう言って近くにいた奴を切った。後ろから一体、俺に噛みつこうとしていたが、できなくなる

「修、あまりはしゃぎ過ぎるなよ。背中がガラ空きだぞ」

秀治がＭ４で撃ちながら言った

「はは！！無理だね！！お前を信頼してるからこそ、こうやって暴

れられるんだ！背中は任せたぜ！相棒！！」

「嬉しいね！だったら、期待に応えないと！！」

そう言って固定機関銃であるＭ６０に再び持ち替えて連射しまくる

「そら！どんどん掛かってこいや！」

そう言いながら俺は撃ちまくっていた。

え？ニ発しか撃てないのになんで撃ちまくれるかって？簡単さ。俺のリロードはレヴォリューションだからさ！

「修さん！」

小室君達が着いたようだ

「さぁ！早く乗りたまえ！最終便は待たないぞ！」

「はい！」

そう言って小室君達は乗り込む

「修君！早く来い！」

運転席から小ノ牧隊長が声を掛ける

「ええ、今行きますよ！」

そう言って俺は梯子部分に手を掛けた。もちろん、撃てるように片

方にはミシガンを持っている

「よし、出発する！」

そう言って小ノ牧さんはアクセルを踏んだ。トラックはゆっくりとスピードを上げて行く

「修、こいつであの入り口吹っ飛ばしていいか？」

そう言って秀治が見せてきたのはカールグスタフだった。

グスタフは自衛隊でも使われている対戦車ロケットランチャーだ。ジャンル的には無反動砲に入る代物だ

「ああ、いいぜ。思いっきり吹っ飛ばしてやりな」

「ｏｋ、把握！」

そう言って秀治は射撃体勢に入る。数秒後、一発のロケット弾が入り口に向かって飛んで行き、入口の上の部分に当たって爆発を起こした。

爆発の衝撃で入口は崩れ落ち、近くにいたゾンビはその下敷きになった

「琥珀、聞こえるか？」

俺は無線機で呼びかけた

「はい、なんでしょうか？修様」

「すぐに出発準備をしろ。ここはもう捨てる」

「了解です。こっちにいる皆さまに伝えます。では」

そう言って無線を切る琥珀

「さてさて、食糧も手に入った事だし、後は小学校に向かうとしますか」

そう言って俺は梯子を昇った

墜落機と商品（前書き）

商品が気になりますね～ｂｙ修

墜落機と商品

俺達は床主アウトレットから脱出して、小室君達が目指している床主小学校に向かっていた。因みに俺は７３式改を運転している。俺専用のハンヴィーはメアリーが操作している。

ガントラックの方に乗っているのは俺、秀治、勲さん、小室君、毒島さん、宮本さん、コータ君、小ノ牧さんらである。少々、定員オーバーギリギリだが、まぁ何とかなるだろう

～大通り～

「さて、どう行こうかね～小室君、こっから小学校までの道のりは分かるかい？」

俺が聞いた

「あっはい、この辺りは僕が暮らしていた地域なので大体、分かります」

「そうか。じゃあ、ナビゲートよろしく」

「分かりました」

そう言って道案内してくれる小室君

「メアリー、先頭は俺が立つ、ａｎｇｅｌは最後尾にいてくれ」

無線機で伝えると両方が「了解」と言った

その時だった

「ん？なんだ？この音」

俺が言った

上空を切り裂くように重低音が響く

「修！上だ！」

荷台にいた秀治が言った

「上？」

そう言って窓から顔を出した。そこには・・・・・

「ありゃ、Ｃ－１３０じゃん。しかも自衛隊のじゃないな・・・・・アメリカ空軍の輸送機か？」

上空にはｃ－１３０と呼ばれるプロペラ式の輸送機があった。アメリカの航空会社ロッキード社が作った輸送機で、最新版のはハーキュリーズ？と表記されているアメリカは元より世界の６９カ国で使用されているベストセラーの輸送機だ

「てことは、アメリカ軍が助けに来たのか？」

勲さんが言った

「いんや、こんな早く事態が解決するとは思えませんね。」

俺が言った

そこで、輸送機がどの方向に向かうのか調べるため、一旦、車列を止めた。幸い、ゾンビ共は周りにいなかったので見張りを立てて俺は双眼鏡で輸送機を見ていた

「う～ん、どう見ても米空軍だな～でも、こんな所で何をやってるんだ？」

俺が言った

～ｃ－１３０機内～

「機長！アンデット共がそこまで来てます！」

一人の兵士が言った

「奴らはもう仲間ではない！撃て！とにかく撃ちまくるんだ！」

操縦桿を握る機長が言った

操縦室には機長と副長、それに数名の兵士達がいた。しかし、扉の向こうではドンドンと扉を叩く者がいた。人間ではない者達が・・・・・

「くそ、まさか、兵士の中に紛れ込んでいたとはな・・・・・このままでは、母国に帰る事も許されなくなったか」

機長が言った

「しかし、機長、燃料も予備と合わせて少ないです。落ちるのも時間の問題かと・・・・」

副長が言った

「生存者はこの室内にいる者だけか・・・・・後は全員・・・・・」

「ええ、奴らの餌食になりました。このままでは沖縄に届けるはずの救援物資も無理そうですね。」

「確かにな・・・・このまま降りれば、沖縄にいる仲間達に危害を与えてしまう事になる。これ以上人が死ぬのはごめんだ・・・・・」

「機長!もう、扉が持ちそうにないです!」

兵士が言った

「ああ、神よ・・・・・慈悲があれば・・・・・どうか我々を天に召したまえ・・・・・」

機長がそう言った瞬間、扉が破壊され、アンデット共がなだれ込んできた

「う、うわあああああ!!!!!!!!!」

近くにいた兵士はすぐに餌食となった。そして、ゾンビ共は機長や副長にも手を伸ばした

副長は多少の抵抗はしたものの、喉を食いちぎられ死亡した。機長

は何も抵抗しないまま、餌食となった
操縦者のいないＣ－１３０はバランスを崩しながら落ちて行く
～ガントラック～
「おいおいおい・・・・・・墜落すんぞ」
俺が言った
「何かあったのかな？」
秀治が言った
「分からんね。もしかしたら兵士の誰かがゾンビにでもなったんじゃないか？」
そう言った瞬間、オフィス街の向こうから爆発音が聞こえた。墜落したのだろう
「行ってみるか？もしかしたら生存者がいるかもしれない」
勲さんが言った
「どうしましょうかね～ここは多数決で決めるとしますか？」
「それが良いと思うな」
秀治が賛成した

俺は皆に墜落現場に行ってみる事を聞いてみた。もしかしたら、生存者がいるかもしれないと言って・・・

小室君達は先を急いでいたが、生存者がいるならと言って賛成してくれた。琥珀や少佐はすぐに賛成してくれた。なので、墜落現場に向かう事にした

～オフィス街～

俺らはオフィス街を通っていた。ここも今までと同じく人の姿は無く、あちこちで火事の跡が見えた。道路では車が横転していたり電柱に突っ込んでいたりと無残な物だった

「ここも酷いな・・・・」

小室君が言った

「皆、同じだよ・・・・少なくとも今、俺達は生きてるんだ。大切な人を失くしたって生きる義務が俺達にはあるんだ。どんな汚い事をやってもな・・・・・」

そう言いながら俺らはオフィス街を抜けて行く

～墜落現場～

「・・・・・ここか」

そう言って車両を止める俺

ｃ－１３０は見るも無残な形になっていた。機体は半分に折れ、プ

ロペラエンジンは近くのビルに突っ込んでいた。さらに物資らしきものが散乱していた

「こいつは・・・・・絶望的だな」

少佐が言う。

俺は黙祷した。皆も合わせるように黙祷などをした

「・・・・・・使える物が無いか探そう。今後のためにもな・・・・・」

俺が言った

「そうだね。物資があっても運べないんじゃな。使わないよりマシだろ」

秀治が言った

その後、皆で手分けして使える物が無いか探した。ほとんど落ちた衝撃でか中身が散乱していた。ほとんどは食糧などであったが、火が燃え移って焼けてしまっていた。見つけられたのはａｎｇｅｌ用のブッシュマスターの弾薬、それにそれぞれの銃の弾薬などが多く拾えた。これなら、大量のゾンビ共が現れない限り、消費する事は無い

「ん？なんだ、ありゃあ」

俺が言った

機体の後方部分（ハッチがある所）であろう所に何かが収まっていた。俺は瓦礫を崩しながらそれに辿りついた

「おいおい、こんな物まで運ぼうとしてたのか?あきらか、重量オーバーじゃないか?」

俺が言った

そこに有ったのはＭ１Ａ２エイプラムズ戦車であった。これはアメリカ軍が使用する第三世代のＭＢＴ（主力戦車）で世界の国々で使用されている戦車である。砲台の１２０ｍｍ滑腔砲が特徴的であらゆる障害を破壊する為に作られた兵器である。

「どうした?修」

秀治がやってきた

「こいつを見てみろよ」

「なんで、エイプラムズがあるんだ?しかも、開発中のタイプじゃないか?」

「なんで、分かる」

秀治・・・・恐ろしい子!!

「だって、今までのタイプと違うからほら、エンジン部分なんて燃費考慮なためか新しい奴だぜ。これそれに一回りちっちゃくなってるし、後は・・・・・」

そう言っていろんな所の違いを言う。俺より詳しいじゃないか。ちくせう

「そんなことまで、分かるのか」

「まぁ、伊達に軍オタはやってないからね。これでもいろんなとこにコネがあったのさ」

「そのコネとやらが気になるが・・・・・まぁいい、こいつ・・・・・動くのか?」

「どうだろう・・・・落ちた衝撃で動かなくなってるかもな。よいしょっと」

秀治はそう言ってエイプラムズに乗る

「どうだ?」

「ちょっち待ってて」

そう言って中に入る秀治

数分後・・・・・

鋼鉄の騎馬がうねりを上げた。

「おー動くじゃんか」

俺が言った

その後、少佐に伝えると「動かせるなら持って行こう」と言った。

そんなわけで、新たな主戦力が俺達のチームに加わった

やっぱり戦車は良いよね！え？良くない・・・・・そうですか・・・・・

俺らは墜落現場からアメリカ軍の試作機エイプラムズＸＭ１０２を手に入れた。もちろん、戦車砲の弾薬も墜落現場から発見した。これで、大抵のゾンビ共は吹き飛ばせるし、アウトレットに出てきたあのデカブツも仕留める事が出来るだろう。

そして、本来の目的地である床主第３小学校に向かっている。ここには小室君の母親や宮本さんの父親がいるのではないかとの未確認情報もあるので、向かっているのだ

試作戦車にはもちろん、俺が乗っている。

「うわ～、戦車ってこんなに揺れるんですねー！」

同乗している美麻さんが言った。

「この戦車で約８０ｋは出るように設計されてるんだ。スピードもここ最近になって重視されてきたからな。後、赤外線モニターも付いてるしクーラーだって付いてるんだ」

俺が説明する

「へ～すごいですね。でも、修さん」

「なんだ？」

「なんで、戦車の動かし方とか知ってるんですか？どう見ても一度、動かした事があるみたいな感じですけど」

「ああ、俺の海外の友人に同じ軍オタの奴がいてな。そいつは戦車とか所有してたから長期休みの時に遊びに行って動かしたりしてるんだよ。もちろん、免許は無いけどね」

「さらっと怖い事言いますね」

「そうか？これ以上に怖い経験なんてしてきたろ？今まで」

「・・・・・確かに」

美麻さんは納得したように言った

「おっと、噂をすれば・・・・」

そう言って目の前に現れたゾンビどもに照準を合わせる。と言ってもそこまで多くないので同軸機銃で十分なほどだ

「ほいっと」

手元のスイッチを押す、すると７．６２ｍｍ弾が勢いよく発射されゾンビ共の体を穴だらけにする。

「これだと、もうチートですよね。」

「そうだな・・・まぁ、やられるよりはマシだろ？」

「そうですね」

「おっと、今度は大量発生したな・・・あの車を狙うか」

そう言って今度は主砲に切り替え、照準を乗り捨ててあった車に合わせた

「そこだ！」

そう言ってスイッチを押す、１２０ｍｍから砲弾が発射される。弾は従来の砲弾も使用する事が出来る成形炸裂弾や多目的対戦車榴弾などが使用できるが、この戦車は１２０ｍｍ　ＫＥ　ＤＭ５３というラインメタル社が開発した新型弾薬も使用する事が可能なのだ

砲弾はまっすぐ進み、車にぶつかって爆発を起こした。その爆風でゾンビ共は吹っ飛ばされて行った

「ふぅ～気持ちいい！」

俺が言った。その時だった

「ガッ　修さん、聞こえますか？」

無線機から小室君の声が聞こえた

「こちら、修だ。どうした？小室君」

俺が答えた

「もうすぐ、小学校が見えてくるはずなんですが・・・・・」

「そうか。美麻さん、小学校は見えるかい？」

「ちょっと待って下さい」

そう言って上部ハッチを開ける美麻さん

「えーと・・・・・あっ有りました。約、二キロ半って所ですかね。小学校が見えます」

「だそうだ。聞こえたかい？」

「はい、」

そう言って無線を切る小室君

「ちょっと待って下さい。修さん、前方が妙な事になってますよ？」

美麻さんが言った

「妙な事ってなんだい？」

「ＥＭＰ攻撃のせいか分かりませんけど、道を分断するようにジャンボジェット機が横たわってます。」

「マジでか・・・ちょっと止めるよ」

そう言って戦車を止めた。後ろも同じように停まった

そして、俺もハッチを開けて前方を見た

「おうおう、こんな綺麗に横たわってるなんてな・・・・・」

美麻さんの言った通り前方にはＥＭＰ攻撃のせいか。旅客機が道を塞ぐように横たわっていた。翼は近くの民家に突き刺さっていた

「うへ～こいつは酷いな～」

ハンヴィーに乗った秀治が言った

「どうする?他の道から回ってみるか?」

少佐が言った

「う～ん、どうするべきか・・・・・・小室君、他に道はあるかい?」

俺が聞いた

「いいえ、他の道は前に大規模な工事があって塞がれてます。今はこの道ぐらいしか通る道がありません」

小室君が言った

「う～ん、戦車砲で撃ってもいいが、それだと時間がかかりそうな気がするな・・・・・かと言って戻ったとしてもゾンビ共がいるからな・・・・」

「いっそのこと民家を突き進んで行くってのはどうでしょう?」

平野君が言った

「あんた、バカァ?そんな事しても大きな音を立てるだけだし、奴

らが来た時、瓦礫に挟まって動けませんでしたってオチになるって分かるでしょ？このデブちん」

高城嬢が言った

「それも一つの手だがな・・・・・美麻さん、ここら辺の情報はどんな感じ？」

「そうですね・・・小室さんの言った通りこの道以外には通る事はできなさそうです。例え、民家を突き進んだとしても、戦車ぐらいしか通れなさそうですね。他は瓦礫が邪魔して最悪の場合、横転しかねません」

美麻さんが言った

「だよな・・・だとしたらあの旅客機をどうするかだな・・・・・内側から爆破するか？」

「それが一番の得策なのではないか？幸い、爆薬は有るのだから」

小ノ牧隊長が言った

「ですね・・・また、二手に分かれますか？」

「そうだな。」

「それじゃあ、分かれるとしますか。今回は爆弾設置班と援護班に分かれよう。それに待機班もな」

俺がそう言うと皆が頷く

「じゃあ、爆破班から・・・俺、秀治、アリス少佐、小ノ牧隊長ですね。援護班は琥珀、篠田さん、綾瀬さん、メアリーですね。待機班は小室君のチームと勲さん、美麻さん、亀爺だな」

そう言うと皆が動く、爆破班はガントラックからC4などの爆薬を取り出し、援護班はそれぞれの武器を取り出していく

俺も自分の武器を取り出す、今回は室内なのでベネリM3とサブとしてMP5（サイレンサー付き）を取り出す、さらにサブとしてM92Fを取りだす

「おっ修、今回はベネリとMP5か」

秀治が言った

「ああ、室内戦ならこれで良いだろう。即座に反応が出来るからな」

「そうか。じゃあ、行くか？」

「ああ」

そう言って俺らは旅客機へと向かった

～旅客機ドア～

「う～ん、ここは歪んでて開きそうにないな・・・セムテックスは有るか？」

「ああ、持って来てるぞ」

そう言って秀治が渡す

「よいしょっと、これで良いだろう。爆破するぞ」

そう言って少し離れた所に有ったワゴン車の後ろに隠れた。そして、スイッチを押した。量は少ないため大きな音は出ないでボン！と言った一瞬の音で収まった。そして、ドアの方を見るとドアは木端微塵になっていた

「さっすが、セムテックスだな。よし、安全を確認した後、設置するぞ」

そう言って中に入って行く俺達だった

旅客機　爆破

俺らは床主第三小学校を目指していた。だが、その行く道でジャンボジェット機が行く手を阻むように横たわっていた。他の道を探したが無かったので仕方なく、爆破をして通れるようにして置く事にした

～ジャンボ搭乗口～

俺と秀治は壁に張り付いて皆の準備を待った

「いつでもいいぞ」

少佐が言った

「よし、フラッシュ・クリア」

そう言って持っていたスタングレネードを投げ入れる。こいつは非殺傷兵器だが、音がハンパない物なので聴覚が敏感になってるゾンビ共には有効な武器と言える

数秒後、中で一瞬光った。光が収まった後、俺と秀治は突入して中の安全を確認する。

「クリア」

俺が言った

「こっちもクリア」

秀治が言った。幸い、入口付近にはゾンビはいなかったようだ

その後、全員が中に入る

「よし、さっき言った通りに動くぞ。作戦開始」

少佐が言った

少佐らは二階の部分に設置に向かった

俺と秀治はまず、二手に分かれ入り口側と反対側にセムテックスやＣ４と言った爆薬を設置していく

「秀治、そっちは大丈夫か？」

「ああ、幅は戦車が通れるぐらいで良いよな？」

「ああ、そうだ。一気に爆発を起こしゃあ、壁ぐらいはいけんだろ。」

俺が言った。

ついでに爆発が大きくなるようロケット弾も束ねて真ん中に置いてある。もちろん、Ｃ４を設置済みだ。

「よし、こっちはＯＫだな。少佐らの所に向かうか」

「ｏｋ、把握」

そう言って銃を構えながら進んで行く、乗客が座るシートには客であろう死体が座っている。落ちた衝撃で死んでいるのだろう。

「まだ、この死に方の方が良かったかもしれないな・・・・・・・」

秀治が言う

「確かにな・・・得体の知れない化物に食われるよりはな・・・・・だが、死ぬのはごめんだね」

俺が言った。その時

『ガタッ！』

奥から物音がした

「お客さんか・・・・・・」

俺が言った

物音がした先はカーテンが閉まっており中の様子を窺える事が出来ない。だが、確実に何かがこっちに近づいている。現に音が大きくなってるからだ

「秀治、背後は任せたぞ」

「当たり前だよ。ここで、友達を失う訳にはいかないからね」

そう言って俺の背後に立つ秀治

「嬉しいね。俺も同じ事を思ってた所だ」

そう言ってベネリの薬室にショットシェルを入れる

その瞬間、カーテンの向こうからゾンビ化したＣＡの姿が出てきた

「あれま、生前はきっと美人だったんだろうな・・・・・・おやすみ」

そう言ってショットガンをぶっ放す、それを喰らったゾンビは後ろに吹っ飛び動かなくなった。

「ウヘッえげつないね～」

「しょうがないだろ？やらなきゃあやられるんだ。」

「ご尤も」

そう言った瞬間、さっきまで死体だったはずの客が突然、動き出した

「やっべ、秀治、後ろに下がんぞ。少佐達が昇った階段付近までな」

「把握」

そう言って銃口をゾンビ共に向けながら後退していく。一応、物音は立てないようにしたのだが・・・・

「（よ～し、このまま下がって）『カラン・・・・』しまった・・・・」

落ちていた空き缶にぶつかったのだろう。近くでカランカランと音を出しながら回る空き缶が目に入る

その瞬間、ゾンビ共はこっちに視線を向けた

「秀治！撃て！」

そう言ってありったけの弾薬を奴らにお見舞いしていく。ショットガンは射程距離は短いが近くにいる奴なら最悪、腕とか吹っ飛んだりするほどの威力がある。現に一番近くにいた奴の頭が木端微塵になった

秀治の方にもゾンビ共は向かっているが、それに負けじと持っているレミントンＭ１１００をぶっ放している。それから後方に下がりながらショットガンを撃っているが、数は奴らの方が上だ。

「くそ！」

そう言って俺はＭＰ５に持ち替える。こっちはショットガンほど威力は高くないので正確に奴らの頭に銃弾を叩きこんで行く。秀治もＭＰ４０に持ち替えている

しばらく、奴らと交戦していると

「修君！」

上の階に行っていた少佐達が戻ってきた

「少佐、設置は完了しましたか！？」

俺が言った

「ああ！上の方は設置が完了してるし奴らの掃討も完了している！さっさとここを出るぞ！」

「了解です！秀治、お前から先に行け！」

「把握！」

そう言って秀治が離脱する。

「少佐、先に行って下さい！すぐに追いつきますから！」

「分かった！」

そう言って出口の方に向かう少佐達

「よし、俺も行くか！」

そう言ってダッシュで出口に向かう。後ろではゾンビ共が呻きながらこっちに向かって来ていた

～搭乗口～

「よし、出たぞ！皆、走れ！」

俺が言った瞬間、皆はダッシュで飛行機を離れて行く。それを見張らかって、ポケットから起爆装置を取り出す

「よし、システム良好、ここで切れるなよ・・・そんなオチは見

たくないが・・・・・・」

そう言って俺も走りだす、その後ろではゾンビ共が外に出ようと揉みくちゃになりながらも手を伸ばしていた

「あばよ。さまよえる子羊達」

そう言ってスイッチを押す

その瞬間、巨大な爆発が機内で起こり、その場にいたゾンビ共は跡かたも無く吹き飛んで行く、同時に旅客機の壁が崩れ、それと同時に火災が発生する。爆発を逃れたゾンビがいるが火だるまになってその辺をうろついていた。てか、熱くないのかね？

「ふぃ～まいったまいった。」

俺は歩きながらタバコに火を付ける。その先では皆が待っていた

「お帰りなさいませ、修様」

琥珀がお辞儀をする

「おう、ただいま」

「お帰りなさい。修さん」

今度は美麻さんだ

「ああ」

「作戦成功だな。修」

秀治が飛行機を見ながら言う

「そうだな。これで、小学校に行ける」

タバコを吸いながら言った

「よし！全員乗車だ！修君、エイプラムズを頼む」

少佐が言った

「了解っす」

そう言ってエイプラムズに乗り込む

「エンジン始動」

そう言ってエンジンを掛ける。鋼鉄の馬車がうねりを上げる

「じゃあ、まずは自分が行くんで少々、お待ちを、通過できたら連絡を入れますんで」

そう言って無線を切る。同時にエイプラムズを動かす

「修さん、火の中に突っ込んでも大丈夫なんですか？」

同乗者の美麻さんが言った

「ああ、元々火の中でも大丈夫なように設計されてるんだ。中に入

る事はまず無いよ。それにクーラーのおかげで熱さも免れるように設計されてる」

俺が説明した。それと同時に飛行機の中に突っ込む、壁は完全に破壊で来たが、骨組みがまだ残っていた。しかし、熱によって歪んでいるようだ

「こいつは一回ばらした方がいいな・・・・」

俺は運転中に言った。そして、無事に向こう側に着く事が出来た

「よし、美麻さん、砲撃を行うから弾を装填してくれるかい？」

「はい、分かりました」

そう言って砲弾を重たそうに持ちながら装填してくれた。元々、女子が扱うような代物ではないと言うに

「そ、装填できましたよ」

疲れたように言う美麻さん

「サンキュー」

そう言って砲台を操作する。目標は飛行機の骨組みだ

「ほらよっと！」

そう言ってスイッチを押す、車体が大きく揺れた。数秒後、飛行機から爆発が起き、音を立てながら崩れて行った。

「よし、これで、安全に行けるだろう。少佐、もう大丈夫ですよ。」

無線で連絡を入れる

向こうから了解と言う声が聞こえた

こうして、無事に学校に向かう事が出来た俺達であった

床主第三小学校

俺達は旅客機を爆破し、そのまま小学校の方に向かった。先頭はＸＭ１０２を順に走っている。もちろん、途中、ゾンビ共がいたが、踏みつぶしたりして行った。

「いや～戦車が手に入って本当に良かったぜ。」

俺が言った

「そうですね。無駄に弾を使わなくて済みますしね。」

同乗者の美麻さんが言った

「ああ、それにしても小学校の方は大丈夫かね?着いた時全員がゾンビでした。ってオチは見たくないが・・・・」

「そうですね。子供もいますしやっぱり、難しいですよね。」

美麻さんの言う通りだ。奴らの特性は音に反応するそれを分かってない限り、全滅は必至だ。特に感情に任せて行動してしまう小学生ならなおさらだ・・・・・

「とにかく、行ってみるしかないな・・・・」

そう言ってどんどん進んで行く俺達だった

～小学校付近～

俺達はついに小学校付近にまでやってきた。ここも他と同じく事故車が電柱にぶつかったり、大型車両が家に突っ込んでいたりと悲惨だった

「やっぱり、ひでぇな・・・・・・」

秀治が言う

「今の所、どこも安全って訳じゃあ無いしな。ここら辺も相当な状況だったんだろうよ」

俺が言う

「さて、小室君、小学校はあれかな?」

そう言って指さす、先には小学校らしき大型建造物が建っており、大きな時計が今も時を刻んでいる。

「はい、あれが床主第三小学校です。僕と麗と沙耶が通っていた母校です。」

小室君が答える

「ほう、三人もこの学校の出なのか」

「ええ、と言う事は・・・・」

「ああ、俺もこの学校の出身だ。いや~こんな形で後輩と会えるとはな。偶然も不思議なもんだ」

俺が言った

「さて、思い出話も良いが・・・・・そろそろ中に入るとするか？」

小ノ牧隊長が言った

「そうですね。皆、覚悟は良いな？」

「元より承知だぜ！」

秀治が言う

「私もです！」

美麻さんが言う

「僕はどんな形でもお袋に会う」

小室君が言う

「お父さん、待っててね」

宮本さんが言う

「正、無事でな」

勲さんが言う

「さぁ、行くとしますか！！」

そう言って全員、車両に乗り込む、同時に動かしてしまう

「む、門が開いてるな・・・・まぁいい、奴らが攻めた時用の防壁として役立ってもらおう」

そう言って小学校内に入って行く、校庭にはいくつかの死体があったが、どれも頭部が無くなっていた。

「修君、こいつはスナイパーライフルでやられてるな・・・・・・・・口径は５０口径だ。」

少佐が調べながら言う

「て言う事はバレットとかの対物ライフルですかね？となると軍関係者か・・・・・」

平野君が顎に手を乗せながら言う

「そうとも限らないぞ」

小ノ牧隊長が言う

「どういうことですか？」

宮本さんが言った

「いや、これは私の憶測だが、もしかしたら正気を失った者がバレットを手に入れてぶっ放しているかもしれんしな。実際、我々自衛隊に出された任務は主要施設の確保だったからな。銃を手に入れることなど容易い事だ。」

隊長が説明する

「しかし、隊長、ここら辺に重要な施設なんて有りましたっけ？」

篠田さんが言う

「有るじゃないか。政府専用の秘密倉庫が・・・・・港に」

「でも、倉庫だけなら別に襲われても制圧できるんじゃないですか？なんで、わざわざ・・・・」

秀治が言う

「秀治君の言う事は最もだ。だがな、この床主市に有る政府専用の秘密倉庫は我々、自衛隊にとっても非常に重要な物なんだ。それこそ、最高機密で守られてる奴がな。これは、一部の上級士官、防衛大臣しか知らない事だ。」

「なんですか？その最高機密って・・・・・・」

高城さんが言う

「まぁ、話した所で問題はあるまい。その倉庫には戦争で役に立つ兵器が満載してある。当然、倉庫付近には兵士が巡回しており、中に入ったとしても一見では分からん。だが、地下に続くエレベーターを降りると、そこにはこれでもかって位の銃器や兵器が置かれている。戦争でもしたら5年はできるほどだ。」

「でも・・・・そんなに置いておいて気づかれないんですか？他の

国とか・・・・・」

平野君が言う

「もちろん、それに備えてコンクリートに特殊な鉄板を仕掛けてある。衛星から赤外線で探索されたとしてもその下は映らないようになっている。因みにこの秘密倉庫は全国の主要な港に存在している。」

「でも、そんなに揃えてどうするんですか？日本は戦争放棄しているのに・・・・・」

美麻さんが言う

「まぁ、仮説的な状況だがもし、日本が占領された際、その秘密倉庫から通じて敵軍を包囲できるって寸法だ。また、いくつかは地下通路が通っていて奇襲戦法も用いているそうだ」

隊長が説明する

「まぁ、倉庫自体のある場所が自衛隊の管轄だからな。早々に入る事は出来んだろうよ。」

「まぁ、それはさておき、小室君、このまま中に入るか？」

「はい、一刻も早くお袋の安否を確認したいです」

「分かった。それじゃあ、中に入ろう」

そう言って俺達は中に入って行く

～小学校の中～

学校の中も悲惨だった。教室は血の海とかし、壁には血の飛沫が飛んでその時の現状を表している。

「ウヘッ・・・・中も最悪だな・・・・・」

秀治が言う

「確かにな。ここも避難場所として使われていたようだが・・・・・・時すでに遅しのようだな・・・・・」

俺が言った

壁にはいろんな写真と共に手紙が備えられていた。

「でも、他の市民はどこに行ったんでしょうね?」

綾瀬さんが言う

「大方、ゾンビにでもなったんでしょう?表の奴らがそうだったんじゃない?」

篠田さんが言う

「まぁ、捜索して見る事には変わりないけど・・・・・よし、ここからは分かれて動こう。」

俺が言うと皆が黙って頷く

その後、どこを捜索するか決めて分かれた。集合場所は校庭に止めてある車両だ。俺はアリス少佐、美麻さん、琥珀と共に体育館に向かっていた

「しかし、妙ですね・・・・・・」

美麻さんが言う

「何がだい？」

アリス少佐が言う

「いえ、ここが襲われたとしても、全滅は無いんじゃないですか？少なくとも少数の人間は生きてるはずだと思うんですけど・・・・・」

「美麻さんの言う通りだ。もし、奴らにここを襲われたとしても冷静な状況判断ができる奴はいたはずだ。だからこそ、探してみないと分からんしな。まぁ、俺としては小室君の母親と宮本さんの両親が見つけられればいいが・・・・・」

「その他は気にしないんですね。修様は」

琥珀が言う

「当たり前だろ？知っている奴の関係者なら助けるが、赤の他人にまで助けるような肝は持っちゃいない。助けを求められれば手を差し伸べるが、その後の事まで面倒は見切れん。」

「案外、えげつないですね。修さんは」

美麻さんが言う

「そうじゃないと自分が生き残れないしな。中には騙す奴もいるからな・・・・・早々に人を信じる事なぞ出来ん。ましてやこんな世の中なんだ、人間の本性が現れる。俺はゾンビ共より人間の方が怖いと思ってるしな」

「修君の言う通りだな。ゾンビなら理性などない。逆に人間だと信用していた人間が突然裏切ると言った行動に走らない事は絶対にない」

アリス少佐が言う

「・・・・お客様の様ですよ。修様」

そう言って琥珀はジャッカルを出す、いつも思うけど、どこに隠し持ってるんだ？

「おやおや、ずいぶん年配のゾンビだな・・・・・この学校の教頭か？」

そこには一体のゾンビがいた。服装からこの学校の職員なのだろう

『アアアアア・・・・・』

ゾンビは俺達には気づいていないみたいだ。その辺をうろついている

「俺がやる・・・・・安らかに成仏してくれ」

そう言ってモシンナガンで頭部を狙撃する。教頭ゾンビはそのまま頭部を貫かれその場に倒れた

「相変わらず、いい腕だな」

少佐が言う

「ありがとうございます。さて、先に進むとしますか・・・・・」

そう言って俺達は体育館に向かった

人がいないと学校って静かになるよね

俺らは無事に小学校に辿り着いた。しかし、中に生存者の気配はなくいるのは数体のゾンビだけだった。そんなこんなで手分けして学校を捜索することになった

～廊下～

「さてさて、生存者はどこにいるのかね～」

俺が言った

「一か所に集まってるのではないでしょうか。例の攻撃でゾンビ共に気づかれやすい環境になってしまいましたし、」

琥珀が言う

「だが、一般人などすぐに業を煮やして動いてしまう。特に自分勝手な人間ほどな・・・・」

少佐が言った

「でも、やっぱり気配が全くないってのはおかしくないですか?見つけるのは時間の問題としても・・・・」

美麻さんが言う

「そうなんだよな～問題はそこだ。生存者は外から来たやつように知らせるもんだ。自分たちがここにいるっていう証拠をな。だが、

探してもそれらしき物が全くない」

そう言ってあたりの壁を見まわす、壁には血飛沫の跡があり、ここで起きたことが鮮明に映っている。もちろん、ゾンビ共の死体もあった

「それの暇がなかったのではないか？あの光が何なのかも分からず、音を出してしまった。そして、その周辺からゾンビ共が集まってきて大惨事に発展した」

「それが妥当かもしれませんね・・・・・生きてりゃあいいけどな・・・・・」

そう言いつつ俺らは先へと進んで行った

～体育館前～

俺らは校舎を抜けてそのまま渡り廊下を進んで体育館前にやってきた。体育館も扉が閉まっており中の様子は分らなかった

「これでは、中の様子が分りませんね・・・・・・」

琥珀が言う

「確かにな・・・・窓が無いってのも不思議だけどな」

そう、体育館の壁には窓が一切無いのだ。普通なら換気などのために付いているはずなのに・・・・・・

「不思議だな・・・・これは完璧な避難所・・・というよりは、

牢獄に近いな・・・・・逃げ出さないように設計してあるみたいだ」

少佐が言う

「ですね・・・・・こりゃあ、何か裏があるかもな」

そう言って扉を見る

「しかし、開かないとなるとここは、後回しにするか?」

少佐が言う

「そうですね・・・・・いや、琥珀、爆薬あるか?」

「はい、どうぞ」

そう言って琥珀はどこから出したのか分からないが、C4爆弾を出してきた

「琥珀さん、どこにしまってたんですか・・・・・それと、修さん、何を?」

美麻さんが言う

「簡単な事・・・爆破してしまえばいいのさ」

そう言って爆弾を扉の間に押し込むように設置した

「じゃあ、爆破しますよーー3,2,1」

そう言って手元のリモコンを操作する。数秒後爆発が起きた

「よーし、どうなった？」

そう言って扉の方を見る。扉は形が変形して使い物にならなくなってしまった

「よし、これで・・・・・ウッ！？」

少佐が鼻を押さえる

「どうしました？アリスさん」

美麻さんが言う

「これは・・・・酷い悪臭だ。」

そう言って俺は中の方を覗いてみる

「こいつは・・・・・・ひでぇな・・・・・・」

「ええ、ここにも修様が言ってた精神異常者がいるかもしれませんね」

琥珀が反対側から言う

体育館に有ったのはたくさんのゾンビが逆さまに吊るされていた。まるで、処刑後の見世物のような・・・・・

「ウッウエッ！！・・・・・」

美麻さんは吐いてしまった

「大丈夫かい?美麻さん」

俺が言った

「はい・・・大丈夫です・・・・でも、これは何なんですか?」

「分からんよ。もしかしたら、ヤバい事が起きたのかもしれんな・・・・」

俺は中の様子を探りながら言う

中にいるゾンビ達は死んだ後、吊るされたようだ。しかも、生存者がいる気配がない

「どうする?調べるか?」

少佐が言う

「ええ、俺と琥珀で調べるんで二人は待っていてもらえませんか?」

「分かった・・・・何かあればすぐに逃げて来い。出口は確保しておく」

「了解です。琥珀、行くぞ」

「はい」

そう言って俺と琥珀は中に入って行く

～体育館内～

「中はもっとひでぇな・・・・・」

俺はＭ４を構えながら進んで行く、琥珀はジャッカルを構えながら進む

「このやり方は・・・・・・ベトナム戦争で用いられた処刑方ですね・・・・」

「分かるのか？」

「はい、本を読んだだけですけど、アメリカ軍の図書館にそういう本があったんです」

「キチガイな本もあるんだな・・・・・」

「まぁ、そこまで読んだ訳じゃないんですけどね。しかし、この方法を知っているとなると相当なＳですかね？」

「どうだろう・・・・・分からんな」

半分は居住スペースになっていたのだろう避難用のテントや大きな家具が置かれていた。もう半分にはさっきの死体が吊るされている

「ここの避難民はどこに行ったんだ？そう簡単に逃げられそうにないと思うが・・・・・・」

「分かりません。もしかしたら別の場所で隠れているのかもしれませんよ？」

「だといいが・・・・・・・・・ん？」

「どうしました？」

「いや・・・・あそこに人が立ってるからさ・・・・・・」

そう言って指さす

その先には一人の軍服姿の人間が立っていた

「おや？・・・一般市民の方ですか？」

軍服姿の男性が言った

「ええ、ここに避難している人はどこにいったのかなー？って、後、自衛隊の方・・・・ですよね」

「ええ・・・・第五連隊所属の者です・・・・・」

男はそう言って振り返る

「「！！！」」

俺らは驚いた。

男の迷彩服は血で染められ、手には８９式の銃剣付きが握りしめられている。反対の手には先程殺したであろうゾンビが捕まっていた

「見て下さいよ・・・・・この異常者がここに入って来て、食い散らかしたんですよ・・・・・全く、社会性が全くなっていない・・・・・・」

「と言う事は・・・・これ全部・・・・・・」

「ええ・・・・私がやったんです・・・・・私は必死にここを守ろうとした・・・・・だが。こいつらは・・・・・罪も無い人を襲い・・・・新たに仲間を作る・・・・私は・・・・それが嫌になった・・・・・・・・ククックククハーッハッハッハ！！！！！！」

男は急に笑い出した

「なんだ？」

「修様、気を付けて下さい」

そう言って琥珀はジャッカルを持ち直す

「だったら、奴らに与える餌を無くせばいい！！！」

「・・・・・そんなことで、お前は生きた人間を殺めたのか？」

「ええ、と言ってもほとんどが逃げて行きましたからね・・・・今頃、校舎の方で震えながら隠れてるんじゃないでしょうか？・・・・・それにしても・・・・・新たな餌が舞い込んでくるとは・・・・・フフフ、ハッハハッハッハ！！！！！！」

「琥珀・・・・臨戦態勢だ・・・・・・あの人間崩れを排除するぞ・・・・」

そう言ってＭ４を構える

「元より承知です」

そう言った瞬間、奴の８９が火を吹く、もちろん、俺と琥珀は二手に分かれた

「おら！！こっちだ！」

そう言って俺が撃った・・・・・・が

「何！？」

男は弾丸を喰らわずに避けたのだ

「ククク・・・・軍人である私にそんな弾が当たると思いですか？」

男はニヤリと笑う

「琥珀！！」

「はい！！てりゃあああああ！！！！！！」

そう言ってジャッカルをぶっ放す、対物ライフルであるが機関銃としての役割もある為、連射がが可能なのだ

「甘い！！！」

そう言って背中に背負っていた大刀で銃弾を弾く

「おいおい、防御も強いって訳か・・・・・・・なら・・・・・」

そう言って上に向けて発砲する。すると、吊るしていたゾンビの紐に当たり、切れて落下していく、男は大刀で切って行く

「クソ！小賢しい！！」

「そらよ！！」

そう言って今度は奴の方に向けて撃った。だが、移動しながらなので当たったのは足だった

「グッ・・・何のこれしき・・・・・日本男児の底力を見せてやる！！」

そう言って今度は後ろの方に置いてあったミニガンを取り出す

「おいおい・・・・危険極まりないな・・・・・」

「オラアア！！！！！」

そう言ってミニガンをぶっ放す、毎分二千発以上もの弾が俺達に襲う

「あぶね！！」

「ハハハハ！！！！！どうだ！！！大人しくミンチにされろ！！！」

「やなこった！！」

そう言いつつ避けて行く

数分、避けていたがついに奴の弾が無くなった

「今だ！！！」

そう言って俺と琥珀が同時に突っ込む

「うおおお！！！！！！！」

「てりゃあああ！！！！！！！」

二人の銃弾が一気に男の体に刻まれていく

「ぐあ！っぐっぎゃ！！！」

男はしばらくの間、立っていたがついに倒れる

「ハァハァ・・・・今度ばかりはヤバかったぜ・・・・・・・」

「はい・・・・私でもこんなの相手をした事がありません」

琥珀も肩で息をしながら言った

「うっく・・・・・・私は・・・・・・負けたのか？」

男が言った

「ああ、あんたの負けだぜ」

「そうか・・・・・これで、家族の元に行けるな・・・・・すまない・・・・・胸ポケットに・・・・写真がある・・・・・取ってくれないか?」

俺は少し考えたが、無言で男の胸ポケットから写真を取り出す、写真は血でべっとりと付いていた

「・・・・家族のか?」

「ああ・・・・・死ぬ間際に電話をしたんだ・・・・・・向こうからは・・・・・断末魔・・・・正直、切りたかった・・・・・・だが、切れなかった・・・・・・・」

男は苦しそうに言う

「こんな俺でも・・・・・・家族に会えるかな?」

「会えるさ・・・・・・きっとな」

「そう・・・・・か・・・・・ありがとう」

そう言って男は息を引き取った

「琥珀・・・・・こいつは、埋葬するぞ」

「・・・・・はい」

そう言って俺らは手ごろなシートで男を包み、一緒に外に運び出す、

美麻さんと少佐は驚いたようだが、事情を話すと納得したようだ

その後、近くの広場に男を埋葬し黙祷した

探索（前書き）

更新が遅れて申し訳ない！！

探索

俺らは体育館で異常者だった自衛官を近くの大きな木の下に埋葬した。その後は再び、校舎に入り生存者を捜す事にしたのだ

～校舎内～

「あーあーこちらは修、小ノ牧隊長聞こえますか？」

俺は無線機で声を掛けた

「ああ、感度良好だ。どうした？」

小ノ牧隊長が答える

「実は、体育館に行ったんですが、避難民はいなかったです。一応痕跡らしきものは有りましたけど・・・・」

「なるほど、と言う事は校舎の方に逃げて行ったという事かね？」

「ええ、可能性としては・・・・俺らは下の階を捜索します」

「分かった。では、私らは上を捜索する。合流はどうする？」

「玄関前でお願いします」

「了解した」

そう言って俺は無線を切る

「さて、俺らも行動するとしますか」

「じゃあ、修君私と琥珀さんとで、二階を捜索しよう。」

少佐が言った

「分かりました。集合場所は玄関前で」

「了解」

そう言って二人は二階へと昇って行く

「じゃあ、俺らもいくとしますか。美麻さん」

「はい」

そう言って俺達は先へと進んで行った

～一階　廊下～

「それにしても、どこにいるんだろうな～」

俺が言った

「そうですね・・・・・私の推測ですけど、保健室とか理科室の可能性は?」

美麻さんが言った

「保健室は分かるけど、なんで理科室？」

「理科室なら薬品がありますし、薬品に詳しい人がいれば武器なんかは作れると思うんですけど・・・」

「なるほどな・・・・・」

そう言いつつ手短な教室を一つ一つ探索していく、空になった教室もあれば血まみれの酷い惨状となった教室もあった

「おっここは保健室か・・・・・」

そう言ってドアに手を掛ける

［ガチャガチャ］

「あら？開かないな・・・・・」

「と言う事は・・・・・」

「中に誰かいるって事か・・・・・」

俺はドアに耳を当てて中の様子を探る事にした

「・・・・・・・・・・」

「どうですか？」

「いんや、なんも聞こえない。しゃあない、強制的に開けるとしますか」

そう言ってショットガンを取り出しドアの金具部分を銃撃する

「せいや！」

前蹴りでドアを蹴った。ドアはそのまま重力に任せ倒れる

『アアアアア・・・・』

中にいたのはゾンビだった

「ワオ・・・・これでも食らいな」

そう言って頭に向かってショットガンを撃つ

ショットガンは近距離武器なので近くで食らったら悲惨な事になる。

現にゾンビの脳みそが保健室にぶちまけられた

「あ～あ、汚ねぇ花火だぜ・・・・・」

俺が言った

「他にいませんよね？」

美麻さんが言う

「ああ、死体が二個転がってるだけだな」

一つはゾンビの物、もう一つは犠牲になった避難民であろう死体だった。喉を食い千切られていたのですでに事切れていた

「遅かったてことですね・・・・・・」

「ああ・・・・・次に行こう・・・・・・・」

そう言って保健室を後にする

「さてさて・・・・・ん？」

「どうしました？修さん」

「いや、あそこの階段、地下に続いてないか？」

そう言って指さす、さした先には階段と踊り場があったが、地下へと続く階段があったのだ

「あっ本当ですね。行ってみますか？」

「ああ、何も無かったら上がればいい」

そう言って俺らは地下に入った

～地下～

「思ったよりもきれいですね・・・・」

美麻さんが言う

「ああ、最近まで使われていたって感じだな・・・・・」

電気は一応、点いていたのだが薄暗い感じだったのでフラッシュライトを点けて慎重に進んで行った。

「おおう、こんなに部屋があるとはな」

曲がり角を曲がるとまっすぐな廊下が続いていた。そして、両方に扉が配置されていた

「こりゃあ、骨が折れますね・・・・・」

「ああ、美麻さんは左側を頼む、俺は右側に行く」

「分かりました。気をつけて下さいね」

「ああ、そっちもな」

そう言って美麻さんは部屋に入って行く、それを見届けて俺も最初の部屋に入った

「おおう、展覧会かなんかですか？ここは・・・」

最初に入った部屋は所狭しに武器が置かれていた

「おお・・・・・アメリカに有った武器博物館とはまた違った感じだな・・・・・・」

そう言いつつ奥へと歩いていく

「ん？こいつは・・・・・」

俺は一つの作品に目が止まった。そこには豪華な額縁に二丁のルガーＰ－０８が展示されていた。色は黄金色だ

ルガーＰ－０８は主に旧ドイツ軍の将校や砲兵などが携帯していた。構造が複雑で高価だったが、第一次世界大戦、第二次世界大戦に旧ドイツ軍によって使用され、戦後も７０年代まではワルサーＰ３８やコルトガバメントと並んで多く使用された事から、古い映画などでは良く見つけることが出来る。

俺は試しに手に取ってみる

「おお、こいつはしっくりくるな・・・・・・」

そう言っていろんな形に構える

「撃てんのかな？」

そう言って試しにマガジンを突っ込む、そして引き金を引く・・・・・が

「やっぱ駄目だな」

銃自体はロックが掛かっており銃弾は発射できないのだった

「ロックを外すしかないか・・・・・ん？あそこに有るのは・・・・・作業台か・・・・・」

奥の方に作業台がぽつんと置かれていた。その周りには廃棄された部品が山ほど置かれていた

「・・・・良い事思いついた」

そう言って作業台の方に歩いていく

～数分後～

「よし！完成！」

そう言ってルガーを掲げる

構造自体が複雑であったがなんとか、撃てる状態にした。これも修のスキルの一つである。

『アアアアア』

その時、一体のゾンビがどこからともなく現れる

「丁度いい、実験体になってもらおう」

そう言ってルガーを構える。そして、二丁のルガーから弾が発射される。弾はまっすぐ進み一発は心臓にもう一発は額に命中した

ゾンビはそのまま事切れる

「うっし、完璧だな。」

そう言ってクルクルと回しながらホルスターに仕舞う

因みに修独自の改造で強化弾も撃てるようにしてある為、耐久度はハンパなく強くなっている

「さて、他にも何かあるかね・・・・」

そう言って部屋の中を物色していく俺だった

生存者　発見

俺らは小学校で生存者の捜索をしていた。そんな中、俺と美麻さんは地下室を発見し中を探索している途中だった

～地下～

「それにしても、いないな～」

「そうですね～」

俺と美麻さんが言う

あれから各部屋を捜索したのだが、どこにも生存者はいなかった。途中で美麻さんと合流し廊下を進んで行く

「残るはあの部屋だけか・・・・・」

そう言って見た先には頑丈そうな核シェルターがあった

「これって核シェルターですよね？」

美麻さんが言う

「ああ、しっかしなんでこんなのがあるんだ？作るにしても相当な額が掛かると思うが・・・・・」

「とりあえず、開けてみますか？」

「ああ、と言いたい所だが、こいつはコンピュータ制御されてるな。パソコン自体も対ＥＭＰ仕様だ」

シェルターの横に壁かけのパソコンが付いていた。しかもしっかりと動作している。

「美麻さん、開けられそう？」

「分からないですね。とにかくやってみます。」

そう言ってキーボードを出したかと思うと目にも止まらぬ速さで打ち込んで行く

「速ぇ～家の専門スタッフより速いぜ」

俺はしばらく見ていた

～数分後～

［ピピッ］

「ふぅ、修さん開きましたよ」

笑顔で言う美麻さん

「さっすが、さっそく開けてくれ」

「分かりました。」

そう言ってさらにキーボードに打ち込んで行く

すると、シェルターの扉が大きな音を立てて開いていく

「よし、先行するから後から来てくれ」

そう言って前回入手したゴールドルガーを取り出し、胸ポケットに小型のＬＥＤライトを付けた

「分かりました。気を付けて下さい」

そう言って美麻さんも護身用ではあるが機関拳銃を持つ

～シェルター内～

シェルターの中も電気が生きていた。

俺は慎重に中へと進んで行く

「よし、クリア「手を上げろ」・・・・ワオ」

俺が言いきる前に後ろを取られたようだ

「修さん！」

美麻さんが叫ぶ

「大丈夫だよ。で？あんたは何者だい？」

「それはこっちの台詞だ。私は警察官だ。」

「と言うと小学校に来ていた警察官かい？娘さんが来てるのは知ってるのかい？」

「何！？それは本当か！？」

警察官と名乗る男が言った

「ええ、その反応から察するに宮本正さんですか？」

「ああ、そうだ」

「小室君のチームが現在、小学校内であなた達を探していますよ。会いに行ってあげてはどうですか？」

「うむ・・・しかし・・・」

「ああ、体育館にいた自衛隊なら排除しましたよ。それに学校内はゾンビ共はいません」

「すべて君達がやったのか？」

「ええ、ですから会いに行ってあげてはどうかと申し出たのですよ」

「すまない・・・・・」

「いいって事ですよ。それより連絡を入れたいんで無線機を出してもいいですか？」

「あ・・・・・ああ」

了承を得たのでバックから無線機を取りだす

「そういえば、他の生存者は？」

俺が言った

「ああ、奥の部屋に隠してあるよ。入口付近じゃあ不安だったからな」

「なるほど・・・・あーあーこちら修、小ノ牧さん聞こえますかー？」

「ああ、感度良好だ。どうした？」

無線機から小ノ牧さんの声が聞こえる。他にも銃声が聞こえた

「あら？お取り込み中でした？」

「いいや、今、終わった所さ。それで？」

「ああ、生存者を発見しましたよ。地下の部屋で集まっていました」

「ほう。それは朗報だな。さっそく向かうとするよ」

「ああ、それと、アリス少佐らも一緒に連れて来てくれませんか？途中で別行動したので」

「了解、では、後でな」

そう言って無線を切る

「どうだ?」

正さんが言う

「大丈夫ですよ。すぐにこちらに来ますから」

「そうか・・・・安心した」

そう言って近くの椅子に座りこむ正さん

数分後、小ノ牧さんらのチームと小室君のチームがやってきたようだ

「お父さん!お母さん!」

宮本が入って来る

「麗!!」「麗ちゃん!!」

正さんと香苗さんが迎える

香苗さんは正さんの妻だ

「良かった・・・・生きてて良かった・・・・・」

宮本は涙を流しながら言う

「お袋!」

小室君も無事、母親に会えたようだ

「さて、目的は達したな・・・・」

俺は部屋の隅でタバコをふかす

「ああ、こっからは俺達の番だな」

「ああ、遠回りしちまったが、大丈夫かね？秀治の親」

「まぁ、あの二人はしつこく生きるタイプだからな。大丈夫だと思うぜ。それに危険だって分かったら船で逃げて沖合で停泊してるかもな」

「そうか・・・・・」

「修さん、本当にありがとうございます！」

小室君が言った

「よせやい。俺はただ単に手伝っただけだ。自分の力で会えたもんなんだから素直に喜びな」

「でも、修さんがいなかったら僕たちはさらに時間を掛けていたかもしれません。それでも、僕たちは修さんのおかげだと思ってます」

小室君が言う

「嬉しい事を言ってくれるね～で？これからどうするんだい？」

「小ノ牧さんが言うには自衛隊が助けに来るって言ってるんです。」

「おろ？そうなんですか？小ノ牧さん」

俺が聞いた

「ああ、無線で適当に周波数を合わせていたら偶々繋がってな。輸送艦のおおすみが沖合に停泊しているそうだ。ヘリが迎えに来る」

「そうですか・・・・」

「因みに私らも本隊に戻されることになった。・・・・本当は戻りたくないがね」

愚痴を言う小ノ牧さん

「それは何でですか？」

秀治が言った

「簡単だよ。君たちと居た方が楽しく過ごせる。それだけだ」

「だったら隊長～私達だけでも逃げませんか～？」

綾瀬さんたら大胆な事を言う

「こら、綾瀬、何言ってるのよ」

そう言って拳骨を喰らわす訓子さん

「いった～い！」

「理由を教えて貰えないか?綾瀬」

小ノ牧さんが言う

「簡単ですよ~戻りたくないなら自由に行けばいい。それだけのことですよ~何より、私が秀治君と離れたくないんですけど~」

そう言って秀治の腕に絡む綾瀬さん

マジで羨ましいな・・・・・もう、恋人宣言してるし・・・・・

「あんたね・・・・・」

訓子さんは呆れながら言う

「はっはっはっはっは!!!確かに言う通りだな!!いやはや、一本取られたな」

笑いながら言う小ノ牧さん

「よし、私も自衛隊から抜け出すとするか!」

「隊長!?」

訓子さんが驚く

「綾瀬の言う通りだ。自分の意思で決めなければこの先、やっていけまい。師匠の言葉を思い出したよ。」

「で?訓子はどうするの~?」

綾瀬さんが言う

「どうって・・・・・はぁ~分かりましたよ。付いていきますよ。」

「と言う訳だ。修君、これからもよろしく頼むよ」

「ええ、こちらこそ」

そう言って互いに握手をする

「さて、決まった所で外に出るとしますか。」

そう言って俺らは外に向かう

~外~

「それで、自衛隊は何時頃来る予定ですか?」

「速くても明朝と言われたな」

「なら、奴らがここに来ないように見張りでもしますか?」

「そうだな。それが、我々にできる仕事だな」

そう言って俺らは動き出す、俺と秀治と小ノ牧さんは正門に向かい門を閉じた、門の前にはハンヴィーを置き機銃陣地を作った。その後ろにはａｎｇｅｌとＸＭ－１０２を停車させ、最終防衛線として

置いた。その前には机などを置き機銃が置けるようにしてある。もちろん、小学校の前に有る道路にはブービートラップが仕掛けてあり、奴らが来た時には数十体を巻き込めるようにしてある

「さて、こんぐらいかな。秀治、そっちは良いか？」

俺が言った

「ああ、大丈夫だ。このまま見張っちまおうぜ」

「了解」

そう言って俺らは見張りをすることになった

深夜の防衛

俺らは自衛隊の救助が来るまで、正さん達の護衛を行う事になった。
しかし、自衛隊の救助は明朝・・・つまり、次の朝日までである。
それまで、俺達は周りを警戒する事にした

～小学校正門前～

「修」

秀治がやってきた

「おう、裏はどうだった？」

俺が言った

「大丈夫だ。ゾンビ共はいなかったが、一応、封鎖はしておいた。
簡単に破れないようにしてある。」

そう言って親指を立てる

「そうか。じゃあ、こっちだけ気にしていればいいな」

「ああ、俺は東側の壁を見張っておくよ。体育倉庫が良い見張り台
になる」

「そうか。どうせ、綾瀬さんとだろ？」

俺はニヤニヤしながら言った

「か、薫さんは素敵な人だ／／／命を掛けても良い」

秀治は赤くしながら言った

「お～お～熱い熱い」

「そう言う修だって美麻さんと一緒だろ？」

「ああ、そうさ」

俺はしれっと答える

「なんか悔しいな・・・・・・・まぁいいや、じゃあな」

「ああ」

そう言って秀治は倉庫の方へと向かった

「修さん」

同時に美麻さんがやってきた

「応、こっちだぜ～」

そう言ってハンヴィーの上から手を振る。美麻さんは屋根に昇った

「よいしょっと・・・・・修さん、夜食を持ってきましたよ」

そう言ってバスケットの中からサンドイッチを出す

「お～サンドイッチか～懐かしいな～もしかして、美麻さんの手作り？」

「はい、きっと喜んでもらえるだろうって琥珀さんが」

そう言って渡してくる。

全く、あのおせっかい野郎が・・・・・・まぁ、今回は甘えるとしますかね

「頂きま～す」

そう言ってサンドイッチを頬張る

「ど・・・どうですか？」

不安そうに言う美麻さん

「うん、おいしいよ。やっぱ手作りはいいね！」

そう言って親指を立てる俺

「そ・・そうですか／／／良かった・・・・」

美麻さんもそう言ってサンドイッチを頬張る

静かな時間が二人を支配していく

「ごちそうさま。うまかったよ」

「はい、ありがとうございます・・・・・・・修さん」

「ん？どうした？」

「私達、これからどうなるんですかね・・・・・・・秀治さんの両親を探した後って・・・・・・・私、不安なんです。これから先、世界がどんな風に変わって行っちゃうのか・・・・もし、ずっとこのままだったら・・・・・・」

不安そうな顔で言う美麻さん

「さぁな・・・・・・正直な所、この騒動は終わりが見えないのが現状だしな。だけど、人間は失敗を繰り返して成長するんだ。今までの歴史がそれを示している。だからこそ、俺達は生きなきゃあいけない。どんな未来が待っていようとな。例え、地獄の先でも・・・・な」

「修さん・・・・・・」

「大丈夫だ。美麻さんは俺が守る。絶対に」

そう言って顔を近づける

「んっ」

「んっ」

二人の唇が交わる。甘く、静かな時間が過ぎて行く

「修さん／／／私、どこまでも付いていきます」

「ああ、任せてくれ」

そう言った瞬間だった。

［ピピピピピ！！！！！！］

「「！？」」

警戒用に張っていたトラップが作動したようだ

「修！！」

無線から秀治の声がする

「どうした！？」

「こっちにゾンビ共がやってくるぜ！数は五十！！」

「分かった！そっちはそっちで対処しろ！こっちのも奴らが現れた！」

「了解！！」

そう言って無線を切る

「修さん・・・・」

美麻さんが不安そうな顔で言う

「大丈夫だ。さっきも言ったろ?何があっても守るって、美麻さんはパソコンで周囲の状況を調べてくれ。何か分かり次第、報告を」

そう言って俺はハンヴィーの中からバレットＸＭ１１０を取り出す

このバレットは最新型で今までのバレットよりも高い威力を持っている。一部の噂では、戦車をも破壊するほどの能力を秘めていると言われている。弾は１８．５ｍｍ×９９弾である。これは新開発の専用の弾薬である

全長も今までのより長くなっており、どでかさが一目で分かる。俺は屋根の上で伏せ撃ちの状態に入った。因みに美麻さんは車両の中に入っている

「こちら、修、少佐、聞こえますか?」

俺は無線で言った

「こちら、アリスだ。奴らが来たのか?」

「ええ、東と南にそれぞれ、戦える人を向かわせてくれませんか?」

「了解だ。西の方は来てないようだな」

「はい、琥珀から何の連絡も来ないんで大丈夫かと」

「よし、今から向かわせる。数分待っていてくれ」

そう言って無線を切る

～数分後～

「修君！」

やって来たのは小ノ牧さんだった。他にも数名やって来ている

「小ノ牧さん、こっちです」

「どうだ？状況は」

隊長が言う

「まだ、姿を確認できていません。暗視装置で探してはいますが・・・・」

「そうか。今の内に配備しておこう」

「ええ、お願いします」

そう言って隊長はそれぞれに指示を出す

「修さん」

「ん？おお、平野君か」

話しかけてきたのは平野君だった

「俺も手伝いますよ」

そう言って自分の銃であるＳＲ－２５風のＡＲ－１０を掲げる

「ありがたい。少しでも戦力は必要だからな。平野君はそっちの詰所の屋根に昇って狙撃してくれるかい？」

「ヤー！」

そう言って平野君は指示通りに動く

「修さん、地域の分析ができました。南に集団がやって来ています。東はすでに交戦状態のようですね」

美麻さんが言った瞬間、秀治のいる東側から銃声が聞こえ始めた

「おっぱじめたか。っとこっちにもお客さんか」

暗視装置でゾンビ共を視認する事ができた。少なくとも５０以上はいるか

「団体様、ご案内しま～す」

そう言って引き金を引いた。ドン！という鈍い音と共に衝撃が体にかかる。弾は勢いよく出て、一番前にいたサラリーマン風のゾンビの頭に命中、しかし、弾は止まることなく後ろにいたゾンビの頭を貫いていく

「さすがは究極系だな。本当に戦車をぶっ壊せるかもな」

そう言いつつ、射撃を繰り返していく

最初は少なかったゾンビ共だが、やがて１０～２０と増えて行く。
まさに数による暴力だ

「機関銃！撃て！撃ちまくるんだ！」

小ノ牧さんが指示を出していく

俺も攻撃の手を休めることなく攻撃を行う

「美麻さん、弾を」

「はい、どうぞ」

そう言って箱型マガジンを受け取る

「ありがとう。」

「いいえ、それよりも数が増えてきましたね。」

「ああ、トラップを発動しますか」

そう言ってポケットからＣ４用のリモコンを出す

「小ノ牧さん！全員、伏せるように行って下さい！」

「了解だ！全員伏せろ！！どでかい花火が来るぞ！！」

小ノ牧さんが言うと全員伏せた。俺は伏せた事を確認すると

「あばよ。彷徨える子羊達」

そう言ってリモコンを押す、次の瞬間、廃車に仕掛けてあったC４が次々と爆発していく、同時にガソリンに引火し爆発の威力を高めて行く

一通りの爆破を行った後、俺は顔を上げる。そこには無残に燃える廃車とゾンビ共の散らばった肉片だった。

「汚ねぇ花火だ。」

しかし、それでもなお、ゾンビ共は人肉を求めてやってきた

「おいおい、終わりにさせてくれよ。全く、キリがないな・・・・・美麻さん、どれぐらい来てる？」

「えーと、まだまだ、増えてますね。もしかしたら予想以上に音で引き付けてしまったんでしょうか？」

「だろうな。今夜は眠れなさそうだ」

そう言って再び、バレットをぶっ放すのであった

深夜の防衛２（前書き）

今回は琥珀視点からどうぞ！

深夜の防衛2

～ｓｉｄｅ琥珀～

私達は小室様の親御様を救出するべく床主第三小学校へ来ていた。
やっと親御さんを見つけられたものの自衛隊は明朝に迎えに来るそうだ。だから、今は校庭にて見張りをしている

私が担当するのは西地区だ。ここは正門や東側に比べたら道幅が広く、何か動きがあればすぐに分かる状態である

余談ではあるが修様にも春が訪れたみたいですね。美麻様とずいぶん仲良くなっているご様子で何よりです。私としては複雑な気持ちは最初、ありましたが、今では妄想で３Ｐもいいかなって思っているこの頃です。

私は愛車のａｎｇｅｌに乗りながら暗視装置で周囲を見張っている。
その時だった。ａｎｇｅｌの車体を叩く音が聞こえた

「はい、どちらさまでしょう？」

私が言った

「ああ、勲だ。開けて貰えるかな？」

外で勲さんが言った

「あ、はい、少々お待ち下さい」

そう言って私は後部ハッチを開けた

「いや～すまないね～」

勲様が言う

「いえ、それで、どのようなご用件で？」

私が言った

「いやなに、琥珀さんも夜食はまだだったろう？カップ麺ですまないが持ってきたよ」

そう言ってすでに湯が注がれたカップ麺を渡す

「ありがとうございます。私に気遣ってくれて」

そう言って笑顔で言う。勲様は顔を赤くしているようです

「そ、それより、こっちはどんな感じかな？」

話を逸らそうと勲様が言う

「はい、こちらは至って平穏です。この子も早く暴れたいってうねっていますよ」

そう言ってａｎｇｅｌを叩く

「はは、ずいぶんと好戦的だな。それなら、安心できるよ」

そう言って笑う勲様

「ふふ、そういう勲様も本当は暴れたいのでは？」

「あれ、ばれてたか」

「ふふ、顔に書いてありますよ？」

「そうか。私も世界が変わってから自分も変わったと言う事だろうな。琥珀君は修君に仕える前は何をしていたのかね？」

勲様が質問をする

「あまり、表向きには言えないような仕事です。勲様が光なら私は影っと言ったところでしょうか。」

「なるほど・・・・・裏の仕事をしていた訳か」

「軽蔑しますか？」

「いや、そんな事で私は好き嫌いにはなったりしないよ。人にはそれぞれの人生ってものがあるんだ。他人が無闇に言う資格は無い。少なくとも私はそう思っているがね」

「そうですか・・・・こんなことを言われたのは三人目ですね」

私が言った

「一人は修君としてもう一人は誰なんだい？」

「もう一人は・・・・・修様のお父様です。あの方は・・・・・心

が乱れ切った私に光をくれました。希望と言う名の光を・・・・・・」

「そうか・・・・・それは良かったな」

「ええ、今、ここにいるのもあの方と修様のおかげです。私は心に決めていたんです。絶対、何があろうともあの方と修様だけは守って見せるって、だから、私は武器商人をやめ、ここに仕える事にしました。今では、本当に幸せだと思ってます」

顔もきっと緩み切っているだろうな・・・私

「そうか。君を見ていると娘を思い出すよ」

「娘さんですか？」

「ああ、あの子は私立の学校にいた。丁度電話をしていて、この騒動が起こってな。電話口からあの子が必死に助けを求めているのが分かったよ。だが、最後に聞こえたのは・・・・・・・・あの子の断末魔だった・・・・・・切ろうとしたが・・・・・・・切れなかった・・・私はついに一人になってしまった。妻は先立たれ、男手一つで育ててきた宝物が・・・・・一瞬のうちに崩れ去ったよ・・・・だから、決めたんだ。もう、こんな事は起きて欲しくないってね・・・・・・・・・・あっとすまないな。男の愚痴を聞いてもらって」

「いえ、大変だったんですね・・・・・・・勲様も」

そう言って私は運転席から離れ、勲様の元に行った。そして、抱きしめた

「安心して下さい。私はあなたの娘さんにはなれませんが、一人の女性としてあなたを支えたいです」

自然と口が走っていた

「そうか・・・・ありがとう」

勲様が言った瞬間

「琥珀君！聞こえるか！！」

無線機から少佐の声が聞こえた

「アリス少佐、どうかしましたか？」

私は無線で答えた

「奴らが現れた！正門と東側に！そちらは異常は無いかね！？」

「ええ、こちらは・・・・・」

そう言って暗視装置を付けた。

「！！いえ、前言撤回です。奴らが現れました！数は一目で１００！」

「くそ！音で引き付けられたか！構わん！全力で排除しろ！」

「分かりました！」

そう言って無線を切る

「どうしたんだね？」

「奴ら現れました。正門と東にも」

「そうか。私も手伝わせてもらうとするかね」

そう言って上部ハッチを開け、付属で付いているＭ２キャリバーに弾を装填する

「攻撃開始！」

そう言ってブッシュマスターを奴らに向かって放って行くのだった

～ｓｉｄｅ琥珀ｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ秀治～

俺達は東側で防衛していたが、如何せん数が多すぎる。今は綾瀬さんのＭ７０と俺のＭＩＮＩＭＩで弾幕を張っている。少佐の所からハンヴィー（米軍仕様）を持ってきてもらい訓子さんがＭ２キャリバーで撃っている。他にも戦えそうな人達を応援に来てもらっている（主に小室君のチーム、他の市民は全部俺達に押し付けている）。

あっ因みに薫さんのＭ７０は米軍で持たれているＭ６０の後継機版で弾数がなんと２００発、総弾数は１０００発以上と驚異の力を持っている。さらにＭ６０として問題にされていた機関などをすべてとっかえてすぐに壊れないように耐久性を上げてある代物だ。それゆえに持てる人が限定されている。薫さんはそれを何なく使ってい

るから本当にすごい

俺は修から借りたゾロターン　Ｓ－１８／１１００という対戦車ライフルを使用している。こいつはスイスのゾロターン社が開発したＳ１８／１０００をオートマチック化した口径２０　ｍｍの大型対戦車ライフル。１９３６年に輸出されたが、移動用の二輪付き台車が用意されているほど長大で、また精密工作がなされ高価であるため、あまり商業的には成功しなかった。だが、修の親父さんはそれに改良を加え弾数を増やし、弾自体も自分の会社で作っていたため、弾切れの心配は無いとの事だ（修談）。

俺は遠慮なしにぶっ放している。対戦車ライフルと言う事もありゾンビは容易く五体以上の体を貫いている

「秀治君！弾はある！？」

薫さんが言う

俺はバックで持って来ていた補給用の弾薬を手渡す

「どうぞ！」

「ありがとう！」

そう言ってボックスマガジンを装填し、すぐに弾幕を張った。が、奴らの勢いも止まる気配がない。

「くっそ、これじゃあアラモだな！」

俺が言った

「それは皮肉？」

薫さんが言う

「いや、冗談ですよ。簡単に諦めたりしません！」

「ふふっそれでこそ秀治君」

薫さんが笑う、それにつられて俺も笑う

「二人とも！攻撃の手を緩めない！ほら！撃った撃った！！」

そう言ってＭ２の弾を入れ替える篠田さん

「ｓｉｒ　ｙｅｓｓｉｒ！」

「あ～ん、訓子、ぶたないでね！」

そう言って俺らは再び銃撃戦を繰り返していく

～正門～

「おらおらおら！！！！しねやー！！」

小ノ牧さんがＭ１３４を回転させながら言った

（てか、小ノ牧さんってあんな性格だっけ？）

俺はバレットを撃ちながら思った。俺は車両から平野君のいる詰所

とは反対側の壁に昇って狙撃をしている

「修さん！奴らがすぐそこまで来てます！」

平野君に言われて目を下ろすとそこには手を伸ばしたゾンビ共がたむろっていた

「Ｗｏｗ、気持ち悪いね！」

そう言ってＭ８７０を取り出し近くにいたゾンビを粉々にする

「う～ん、気持ちいいね！！てか、バレットじゃあ、意味がないかな・・・・・そうだ！」

そう言って一旦、壁を降りハンヴィーの後ろに周りトランクを開ける

「あったあった。」

俺はニヤケながら言った

ある装備を一式抱えて、再び戻った

「修さん！どこに・・・・・」

平野君が言うのをやめた。そりゃあそうだろう俺の持っている”武器”を見ればな

「悪いね。平野君、こいつを取りだすのに苦労したよ」

俺が持っているのはＧＡＵ－８の個人用武器として改良されたガト

リング砲だった。本来はＡ－１０に積まれているガトリング砲でガトリング砲の中で最大・最重・最強の三拍子がそろった砲である。こいつを喰らえば、人間なんてあっという間にミンチにされちまう。個人用として成功したのは世界を探しても修の所しかないだろう。それを可能にするのが彼の父親の会社だ。弾はそのままの口径にして小型化を実現してしまったのだ。本体だけ修が持ち、弾は下に置いてある

「行くぜ！！実験体共！！」

そう言ってトリガーを引いた。ゆっくりと回転していきやがて高速回転して弾が放たれる。毎分３９００発という弾の嵐を食らってしまえば、人間であることすら忘れてしまう。まさに無痛風と言われるだけある。ゾンビ共はあっという間にミンチになって行く

「す・・・すごい・・・・」

一緒に戦っていた民間人が言った。平野君は目を輝かせながらガトリング砲を見ている。小ノ牧さんは・・・・暴走中だ

「よし」

そう言って俺は一旦、止めるのをやめた

俺が撃った方はすべて穴だらけになりゾンビ共はただの肉片に変わっていた

「美麻さん、こっちの状況は？」

俺が言った

「はい、普通のゾンビ共は消えましたが・・・・かわりにお客さんが来たようですよ。」

「ＯＫ　もう一勝負と行きますか」

そう言って向き直る。その先にいたのは

「なんだ・・・あれ・・・・・」

平野君が言う。そういえば、初めて見るんだったな

「平野君、重火器は使えるかね？」

俺が言った

「え・・ええ、一応は」

「よし、美麻さん、彼にグスタフを」

「分かりました」

そう言って駈けて行く

「修君、どういう作戦かね？」

隊長が言う

「まぁ、最初は弾幕を張りましょう。平野君」

「は、はい！」

「俺が合図をしたらどでかいのを一発かましてくれや。」

「りょ、了解です！！」

そう言って一旦、詰所から降りる

「さぁ、地獄の幕開けだ」

俺は笑いながら言った

アドレナリンＭａｘだ！！

俺らは学校でヘリが来るのをひたすら待っている。その中、音を聞きつけたのかゾンビ共が大量にやって来ていた。俺が守る正門は一波が過ぎたが第二波がやって来ていた

～正門～

「お客さんだな。しかも、団体様と来た。今日は宴会かね？」

俺は皮肉交じりに言った

「修さん！何なんですか！？あれ！」

平野君が言う

「ああ、あいつは変異体だろうな。偶然、普通のゾンビだった奴が変化してあんなムキムキになったんだろうよ。どう思う？」

俺が言った

「すごく・・・・・大きいです・・・・・・」

「貴重なギャグ、ありがとう。久々に聞いたよ。そのネタ」

「えへへ・・・ありがとうございます。それより・・・・・あれ、どうするんですか？普通の銃弾じゃあ効かなそうな気がしますけど・・・・・・・」

「ああ、ついでに言うとバレットでも効かなかった」

「ええ!?あのアンチマテリアルライフルでも!?」

平野君が驚いた。そりゃあそうだろう。遮蔽物ごと相手を射抜くほどの威力を持っている対物ライフルでさえ効かないとなれば驚きもある

「大丈夫だ。方法はある」

「本当ですか?」

「ああ、あいつには重兵器が一番効く。どんな化け物でもやはり、勝てなかったからな」

「でも・・・・・対物ライフルも十分、重兵器のような気がしますけど・・・・・」

「気にしない気にしない。さて、このガトリングは置きますか」

そう言って小型のＧＡＵ－８を地上に下ろす、と言ってもやはり重い、いくら人間用に小型で来ても重量はギリギリまでしか下げられていないのだ

「今度は何を使うんですか?」

質問をする平野君

「そうだな・・・・・・」

そう言って俺は顎に手を乗せた

（奴は普通の銃弾では効かない。さっきのガトリングのせいで結構、肩に負担が掛かってるからな・・・対戦車ライフルなんかあったけ？）

そう思って再びハンヴィーの後ろに回り込んで探った

「う～ん、無いな～ａｎｇｅｌに積みっぱなしだっけ？しょうがない、他ので代用するか・・・・」

そう言ってさらに探す

「おっこいつは・・・・・新しい対物ライフルだっけ？」

そこに出てきたのはＸＭ１１２アンチマテリアルライフルだった。名前はヘラクレス。ギリシャ神話に出てくる狂戦士の名前である。これは、アメリカで作られた試作品の対物ライフルである。弾の口径は１８．９ｍｍ弾薬は３０８型と呼ばれる新型の弾薬だ。こいつは他の弾薬より二回りでかい物で外見だけで見てしまうとライフルと言うよりは砲に近い物である。が、カテゴリーではライフルに分断されるらしい（米軍中将殿が言ってた）

「お、修さん、それって・・・・・」

「ああ、新型の対物ライフルさ。」

「もしかして・・・・・ＸＭ１１２ですか？」

「おっ良く知ってるね～正解だよ。名前はヘラクレス。しかし・・・

・まだ、どこにも出されていない物なんだけど？」

「ああ、ネットじゃあ良くありますよ。外人の武器マニアがあちこちの基地を見学してる時、偶々見つけたらしいんです」

「へ～情報が早いな～」

「修さん、そんなこと言ってる場合じゃないですよ。団体様、こちらに進軍中です」

美麻さんがパソコン片手に言った

「ＯＫ・・・実地試験と行こうじゃないか」

そう言ってハンヴィーの前に伏せ撃ち状態になってバイボットを出した

「効いてくれるかな？・・・・・そら！！」

一瞬の衝撃が体に走るが、そこまででかいものでもないんで安定して撃てる。また、肩の部分には衝撃吸収パッドもあるので使用者にそこまで酷いダメージを与えないようだ

因みに今使ってるのは新型の手甲弾である。これはヘラクレス専用に作られた物で先がドリルのように鋭利になっている

弾はまっすぐ進み、一体のデカマッチョの足に直撃する。普通なら弾き返されてお終いなのだが、そんな事にならず貫いた。さすがに聞いたようでデカマッチョもその場で膝をついた

「よっしゃ！！今回は行けるぞ！皆、撃っちまえ！！」

そう言うとその場にいた全員がありったけの弾丸をデカマッチョ共に食らわしていく

「平野君！」

「はい！」

平野君はそう言ってグスタフを構え、膝をついたデカマッチョに照準を合わせる

「これで・・・・・終わりだ！！！」

ロケット発射音と同時にミサイルが直進して行ってデカマッチョの顔に直撃した。その瞬間、爆発が起き、デカマッチョのいる所は煙でよく分からなかった

「やった・・・・か？」

小ノ牧さんが言う

段々と煙が晴れ、ミサイルを喰らったデカマッチョは民家に突っ込んでいた

「いっちょ上がり！よーし、このまま続けるぞ！」

俺がそう言って残りのデカマッチョの掃除に掛かる

～ｓｉｄｅ琥珀～

私と勲様はａｎｇｅｌを使って防衛を行っていた。私はブッシュマスターを勲様はＭ２キャリバーで応戦している。他にもアリスさんが援軍として使える男性をこっちに送って頂いたので戦闘はだいぶ楽です。

「弾、交換！！」

そう言って勲様はＭ２のマガジンを交換する

「ブッシュマスター発射！！」

ドン、ドン、ドンとタイミング良く弾が発射されていき、ゾンビ共を襲っていく

「くそ！どんだけいるんだ！？」

援軍として来ていた若い兄ちゃんが言う

「諦めないでください！正確に弾薬を無駄遣いしないでください！」

私はスピーカーを通して皆に伝える

「しかし、琥珀君、これでは埒が明かないのでは？」

勲様が言う

「確かにそうですね・・・・・よし」

そう言って私はａｎｇｅｌに付いているパソコンを出し、キーボー

ドに打ち込んで行く、すると、砲塔の横に付いていた四角いボックスが起動する

「勲様、一旦、中に入って下さい」

「分かった」

そう言って中に入ったのを確認すると同時に発射ボタンが点滅する

「ミサイル、発射!!」

そう言うとボックスからミサイルが発射される。これはＴＯＷミサイルと言って本来なら対戦車用兵器として使われる物だ。これは使用者が被っているヘルメットと同期されており、首を動かすとミサイルも方向転換するようにできている。半自動指令照準線一致誘導方式（ＳＡＣＬＯＳ）と呼ばれる装置で使用者が目標を捉え続けなければならない

このミサイルを使っている兵器と言えばアメリカ軍のＭ２ブラットレー歩兵戦闘車である

ミサイルは順調に進んで行きやがて、ゾンビ共の中心に着弾し爆発を起こした。近くにいたゾンビはそのまま砕け散るか吹っ飛んで行くかのどちらかだった

「着弾!」

私が言った

「うまいもんだ。そろそろ夜明けだな・・・・もう少しか」

勲様が言う

確かに西の空は段々と明るくなってきているのが分かる。太陽が昇り始めたのだろう

「皆さん！あと、もう少しです！それまで、防衛し続けましょう！」

私が言うと皆、「応！！」と答えてくれた

「よし、私達もやるか琥珀君」

「はい！勲様！」

そう言って銃撃を続ける私達だった

作戦完了！

～正門前～

俺らは正門であのデカブツくんと対峙している。一体、倒したので残りは後、二体である

「おら！弾幕を張り続けろ！！」

俺が言うと皆はありったけの弾薬をデカブツ共にぶつけて行く

俺はＸＭ１１２をぶっ放して奴らの足に直撃させ速度を落としている

「修君！グスタフは！？」

小ノ牧さんが言う

「弾薬が底をついちまいましたよ！こんな時に限って！」

俺が言った。そう、肝心のグスタフの弾薬が底をついてしまったため、こうして弾幕を張って時間を稼いでいるのだ

「修さん！新手です！」

美麻さんが言う

「どこだ！？」

「さらに普通のゾンビが追加です！」

「マジかよ！？」

「くそ！ミニガンの弾薬も切れてしまった！」

そう言って小ノ牧さんはハンヴィーから出てＭ４のカスタム版を持ち出す

「修君！戦車はどうなっているんだ！？」

「あれは、今、整備中です！動かせません！」

「くそ！状況が厳しいな！」

その時だった。無線が入る

「修！聞こえるか！？こっちに例のデカブツが出た！」

秀治から無線で言った

「修様！こちらにも同じく！」

琥珀から連絡が入る

「くそ！何とか足止めしろ！時間を稼ぐんだ！」

そう言って無線を切る

「自衛隊はまだか！？早く来て欲しいもんだ！！」

空は段々と明るくなっており、すでに太陽が顔を出していた

「本当にな！全く、仲間とはいえ遅すぎる！」

小ノ牧さんが言う

その間にもありったけの弾薬を奴らに注ぐ

その時

「・・・修さん！東の空に航空機が出ました！」

美麻さんが言う

俺は東の方を見る

「やっと来たか・・・・」

東の空にはＣＨ－４７とその護衛にアパッチロングボウが姿を現していた。銃の音だけでなくエンジン音が割り込んできている

「修君！救援が来たぞ！」

無線でアリス少佐が言う

「ええ、見えてますよ！アパッチにこの化け物を始末するようお願いします！」

「了解した！」

そう言って無線を切る

数秒後、二機のアパッチがＣＨ－４７から離れ一機はその場に留まって東側を殲滅し始める。もう一機は西側に行きそのままロケット弾を発射していく

「ふぅ、後はここだけだな」

小ノ牧さんが言う

「ええ、そのためにも弾幕を張り続けましょう」

「ああ！！」

そう言って銃撃していく、すると、東側にいたアパッチがこっちにやって来てチューインガンとロケットを同時に発射していく

弾は俺達に当たることなくデカブツや他のゾンビを巻き込みながら爆発していく

「■■■■■■――――――！！！！」

デカブツは断末魔を上げながら倒れて行った

「銃撃やめ！！」

俺が言うと皆は銃撃をやめた。それと同時にエンジン音が辺りを支配していく

ＣＨ－４７は校庭に着陸し、アパッチは警戒のためか上空で待機し

ているようだ

「よし、戻るとするか」

俺が言うと皆は安どの表情を浮かべた。俺はそのままハンヴィーで移動しアリス少佐がいるテントまで行った

～テント内～

「今回はありがとうございました！」

テントに戻ると少佐が救助に来た自衛隊に敬礼をしていた

「いえ、これが我々の仕事です。まさか、アメリカ軍の少佐殿にお見えになるとは光栄でしたよ。よく、無事でしたね」

救助に来た自衛隊が言った

「ええ、これもすべて彼らのおかげです。」

少佐が言う

「さぁ、もう安全ですよ。すぐに搭乗準備をして下さい。沖合でおおすみが待機していますから、それと、アメリカ軍からあなたに伝言がありましてね。できれば、我々の仕事を手伝って欲しいのですが・・・・・」

「本当ですか！？」

少佐が驚く

「ええ、アメリカ軍は首都を放棄して南部に防衛線を作ったそうです。指揮は大統領ではなくハーマン大将が行っているとの事です」

「大統領は・・・・・」

「ええ、エアーフォースワンが行方不明だとの事です。全力で捜索はしているらしいですがね」

「そうですか・・・・・」

「少佐、ちょっとよろしいですか?」

俺が言った

「ああ、すまない。少し、時間をくれないか?」

「ええ、待っていますから」

そう言って俺らはテントを後にする

「少佐、戻るんですか?」

俺が言った

「ああ、本国からの命令でな。自衛隊の手伝いをすることになったらしい。幸い、アメリカ軍は生きているとの事だ」

「それは良かったですね。で、どうするんですか?」

「ああ、君達と別れるのは寂しいが、軍の命令には逆らえない。もし、間接的にでも手伝う事ができれば、ここに連絡して欲しい。それと、個人用の無線周波数だ」

そう言って紙に書いたメモを出す。どうやら、俺達が乗らない事は先方に話したようだ

「分かりました。ここで、お別れですね。でも、今生の別れにならないようにしますね」

俺は笑いながら言った

「君達なら大丈夫だと思うが、祈っているよ」

少佐も笑いながら言った

「そうですね。また、会えたら奢ってもらいますよ?」

「ははは！いいよ。その時はパーっとやろう」

そう言って互いに握手をした

「じゃあ、私はしなければならない事があるんでな。これで失礼する」

そう言って再び、テントの中に入って行った

「修さん！」

「ん?おっ小室君じゃないか」

やって来たのは小室君だった

「乗らないって本当ですか！？」

「ああ、俺達には俺達の目的がある。それはまだ、達成できていない。君達はもう達成できたんだ。後は身の安全に気を配ればいい」

「で、でも」

「小室君、君は強い子だ。この先、何があっても頑張って行けるさ。せいぜい達者でな」

俺が言った

「はい！修さんも道中お気をつけて下さい！」

小室君が涙を流しながら言った

「男が簡単に泣くもんじゃないぞ。男が涙を見せるのは大切な人を失くした時だけだ。いいな？」

「・・・はい！」

そう言って小室君を別れる

数分後、避難民と小室君のチーム、アリス少佐、亀爺は乗り込んだようだ

「では、お気をつけて下さい」

自衛隊員が言った

「ええ、そちらも無事に届けてやって下さい」

俺が言った

自衛隊員はそのまま頷いてヘリに乗り込んだ

ヘリはそのまま離陸し、おおすみのいる沖合に向けて飛んで行った

「行っちまったな・・・・・」

秀治が言う

「ああ、本当にこれで良かったのですか？小ノ牧さん」

俺が言った

「ああ、これは私達が決めた事だ。修君や秀治君、美麻さんの親捜しに手伝わせてもらう。これに拒否権はないからな」

小ノ牧さんが言う

「そうですか。なら、付き合ってもらうとしますかね。琥珀、弾薬はどんな感じだ？」

「はい、今回は結構消費してしまったようでミニガンの弾は０になってしまいました。それに重兵器・・・特にミサイルが底をついてしまっています。ハンドガンやショットガン、アサルトライフルは

まだ、ありますね」

「なるほどな・・・・・どっかで弾薬を補給したいが・・・・・・・・・ここら辺に駐屯地は無いしな・・・・・」

「確かにな・・・・それに親も気になる」

秀治が言う

「戦車の方は？」

「幸い、アリス少佐が直してくれたようでいつでも動かせます。でも、人数が割に合わないんですよね」

「車両の方が多いって事か・・・・・一台、置いていくか」

「だとしたらどうする？」

小ノ牧さんが言う

「ハンヴィーは置いていきましょう。米軍の方を」

「そうだな。それと弾薬の方を心配無いぞ」

「え？どういうことですか？」

美麻さんが言う

「小学校に入る前に言っただろう？政府専用の秘密倉庫が・・・・・」

小ノ牧さんがニヤリと笑う

「・・・・なるほど、もらっていけばいいって事か」

秀治が笑う

「しかし、隊長、それは自衛隊が守っているのでは?」

訓子さんが言う

「大丈夫だ。この騒動のおかげで倉庫の方は誰もいない状態らしい。それにあそこを守るために派遣された自衛隊員は連絡が途絶しているそうだ。これはチャンスだぞ」

「なら、まずは補給と行きますか。秀治、それでもいいか?」

俺が言った

「ああ、準備不足のまま敵に突っ込むのは愚の骨頂だろう?それに家の親は長生きするタイプだしな」

そう言って笑う

「(本当は無理しているくせに・・・・・)分かった。なら、進むとしますか!全員乗車!」

『応!』

そう言って俺らはそれぞれの車両に乗り込む、そのまま小学校を後

にした。

作戦完了！（後書き）

少佐と別れる羽目になりました・・・・グスン、結構いい人なんだけどな・・・・次回は弾薬を補給に向かいます！楽しみにしてて下さい！

謎の外人部隊（前書き）

遅れて申し訳ない！！後、少し短いかも・・・・

謎の外人部隊

俺らは小学校の生存者を見送った後、本来の目的である秀治の両親を探す事に専念する事にした。しかし、その前に先の戦いで弾薬類を大量に消費してしまったため小ノ牧さんの案内で港付近にある政府専用の秘密倉庫に向かう事になった

～国道～

俺らは港に向けて走っていた。先頭は俺が乗る戦車だ。そうそう、この戦車に名前を思いついたんだ。名前はリンカーンアルファだ。リンカーンはもちろんアメリカ大統領であるアブラハム・リンカーンだ歴史があって良いと思わないか？

「修さん、もうすぐ港に続く道に出ますよ」

砲台付近で座る美麻さんが言う

「了解、この先はどんな感じになってる？」

俺が言った

「他と同じですね。事故車があってゾンビ共がいて、どんな風に広がったのか。逆に不思議ですね。発生源が分からない」

そう言いながらパソコンを弄る

「そうだな。俺は最初街の中心から一気に広がったのかと思ってたけど、これじゃあ、各地で一気に広がった感じだしな」

俺が言う

「でしょうかね・・・・・・それはともかく、秀治さんの御両親が心配ですね。まだ、無事だといいんですけど」

「そうだな・・・・秀治の奴一番気にしてると思うぜ。あいつは親に孝行してやるんだっていつも言ってたしな」

「秀治さんのためにも早く、弾薬を見つけて親を探しましょう」

「ああ、そうだな」

そう言って俺らは先へと向かうのだった

～ｓｉｄｅ秀治～

俺は自分の両親の安否確認のため港に向かっていた。家は港のすぐ近くにあるため先に寄る弾薬庫に近い感じである

「秀治君、親が心配？」

薫さんが言う

「まぁ、心配って言っちゃあ心配ですけどね。そんな事を言ったって安全って訳じゃないですけどね」

俺は苦笑いしながら言った

「そう・・・私、何かしてあげられることってないかな？」

「そうですね・・・・・・自分の傍にいて貰えますか?落ち着くんで」

「秀治君／／／分かったわ!いつまでも傍にいる!」

そう言って薫さんは手を握った

(親父、お袋、待っててくれよな。もう少しの辛抱だ)

俺は心の中で親の安否を心配しながら銃の整備を行っていった

~秀治ｓｉｄｅｏｕｔ~

~国道~

俺らは港に続く道へと入って行く、ここら辺も予想通り酷い事になっていた(と言うよりも美麻さんが衛星を使って事前情報を仕入れたからである)

「そろそろかな~?」

俺はリンカーンを操作しながら言った

「そうですね。風に乗って潮の匂いもしてきましたし」

ハッチを開けて外の様子を探りながら言う美麻さん

「あっ修さん!見えてきましたよ!でっかい倉庫が見えてきました!」

「おっ本当か！よし、小ノ牧さん、聞こえますか？」

俺は無線機で小ノ牧さんを呼び出す

「ああ、どうした？」

「例の倉庫が見えて来たんですけど、どれだか分からないんで小ノ牧さんなら分かるかなって思って」

「ああ、こちらからも見えてきたよ。一番手前にある大きな倉庫だ」

「あの、赤く塗られてる奴ですか？」

「ああそうだ。」

「よし、一気に進むぜ！アクセル全開！」

そう言ってペダルを思いっきり踏む、キャタピラが大きな音を立てながら事故車やゾンビ共踏みつぶしていく

「ヒーハー！！最高！！」

俺は大きな声で言った

数分後例の倉庫前までやってきた

「・・・・・どうなってんだ？こりゃあ」

俺は目の前の惨状を見て言った。

「さすがに私でも分からないな。何があったんだ?この場所で」

小ノ牧さんが言う

俺らの目の前には政府専用の秘密倉庫があるのだが、その手前、きっとここを監視していた自衛隊であろう死体が無残にも転がっていた。ここら辺までならゾンビの襲撃を受けて全滅したのが妥当と考えていいだろう

しかし、その近くには所属不明の外人部隊が死体となって転がっていた

「自衛隊の方もゾンビのせいで死んだんじゃないな。銃撃戦で死んだのか・・・・」

俺は近くの自衛隊員を調べて言った

「でも、修、こっちの外人部隊はどうなんだ?」

秀治が言った

「そうだな・・・・・どう見ても装備は反政府の使われるような物じゃない。すべて一級品の物ばかりだ。それこそ特殊部隊が使っていそうな装備ばかりだな」

外人部隊の装備はコンバットアーマーなど軍で支給される物ばかりが装着されていた

「だったら、こいつらは何者なんだ?」

小ノ牧さんが言う

「まぁ、とりあえず中に入って弾薬があるかどうか確認しよう。もしかしたらこいつらだけじゃないかもしれない」

俺はそう言ってＳＩＧ５５０を抱えた

「だな。弾薬が盗まれてるかもしれない。早いとこ確認しよう」

秀治もそう言ってＭ８７０を取り出す

「修君、我々はもう少し、こいつらを調べてみるよ。何か分かったら連絡しよう」

「小ノ牧さん、私も手伝いします。良いですよね？修さん」

美麻さんが言う

「ああ、頼む、何か分かったら連絡してくれ。秀治、琥珀、行くぞ」

そう言って俺らは中に入って行く

調査結果

俺らは政府の倉庫に辿りついた。しかし、そこを守ってるはずの自衛隊は全滅、その傍らには謎の外人部隊が横たわっていた。俺と秀治と琥珀は倉庫を調べに行った

～倉庫～

「は～外見は普通の倉庫と変わらないな。」

秀治が言う

「そうだな・・・・よし、手分けして探そう。俺は奥の方を探る。秀治、お前はコンテナの方を探ってくれ。琥珀は二階の事務所に行って情報を収集してくれ」

「「分かった（分かりました）」」

そう言って俺らは一旦、別れた

～修視点～

俺は奥の方に行った。周りはこれと言って変わった物は無かった。あるのはフォークリフトが数台、駐車してあった

俺はＭ８７０を構えながら慎重に進んで行く

「ここら辺は何にもない感じかな・・・・・どっかに下に続く階段でもあるんだろうか・・・・・・」

そう言いつつ俺は奥へと進んで行く

～秀治視点～

俺は修の指示通りコンテナ部分にやってきた。コンテナは一か所に集められているようだ

「中身は何が入ってるんだ？一つ開けてみようっと」

そう言って手短にあったコンテナの扉を開けた

重く鉄の扉が音を立てながら開いていく

「ふっ！」

俺はフラッシュライトを付けて中の様子を探ったが、中は大きな箱が置かれていただけであった

「異常はなしっと、箱には何が入ってるんだ？」

そう言って木箱を開けた

「！こいつは・・・・すげぇ・・・・よくもまぁ政府にこんだけの金があるもんだな」

箱の中にはきれいに整理されたアサルトライフルが何十と置かれていた。どうやら、ここで間違いないようだ

「場所はここで確定だな。後は下に続く階段かエレベーターがあれ

ばいいが・・・・・他のコンテナも調べてみるか」

そう言って開けたコンテナを出た

～琥珀視点～

私は修様の指示で二階にある事務所にやってきた。

今回は室内なので愛銃のジャッカルはａｎｇｅｌに置いて来た。代わりに、サブマシンガンであるＭＰ５Ａ２を所持した。この銃はＳＷＡＴなどの特殊部隊が良く使用しているサブマシンガンで信頼性は高い。弾は９ｍｍ×１９弾を使用する

私はゆっくりと階段を上がり、事務所のドアに手を掛けた。そして、勢いよく開けて中に突入した。

「これは・・・・・ここでも襲撃があったのでしょうか？」

中に入るとまたもや自衛隊の死体があった。争った形跡は無く全員が頭に一発食らって即死したようで、生きている者はいなかった

「これは・・・・・狙撃されたのですか・・・・・となると・・・・この窓の向かい側・・・・・あの倉庫ですかね」

私は狙撃ポイントである向かい側の倉庫を見ながら言った

「さてと・・・・情報は・・・・・・」

そう言って中を捜索していく、すると、近くのパソコンが開きっぱなしになっていたので覗いてみることにした

「これは・・・・日記ですかね・・・・あまり、人のを読みたいとは思いませんが・・・・仕方ありません」

そう言って中身を読んで行く

～パソコンの日記～

５月２６日、今日は天気も快晴、すばらしい日照りで春が過ぎて夏の予兆がもう出始めていた。正直、隊の服を着ていると汗がハンパなく出るから着るのは嫌だったが、仕事のためだ仕方ない。今日は本部から新たな武器が搬入されるとの事なのでいつもより人の出入りが激しい、長村隊長もやけに忙しそうだ。俺は通信兵だが、時々駆り出される事はある。正直、きついよ。それにしても街の方がいつもより騒がしいが何かあったのか？パレードでも開いてるのかな・・・・・

５月２７日、なんてこった。これは現実か？映画で出てきたような化け物共が街を歩いて生者を喰らう。正直、ゲームや映画だけの話だと思っていたのに・・・・・本部からは倉庫を守れと命令が下っている。しかも、この騒動は日本だけじゃない世界中で起きてしまっている。東京にいる家族は無事かな？さっき電話して見たが回線が混雑してて繋がりそうにない・・・・心配だ

５月２８日、昨日の騒動から一日が立った。床主の警察は橋を封鎖して、奴らの進行を止めようとしてるが無意味に近い、なぜなら、こっちでも化け物共が現れているからだ。市民のほとんどは洋上の国際空港に逃げるつもりだろう。おそらく、安全とすれば米軍のいる沖縄や島である四国、九州、北海道だろう。他は無人島が妥当だな。だけど、俺はここを守るって言う使命がある。いつか、自衛隊

が総力戦をするときに武器がなきゃ困るだろう。食糧はたくさんあるし、他の仲間もいる

5月29日、どうなってんだ?昨日から仲間の一人である沢村が姿を消した。付近を捜索したが、手掛かりが全く見つからない。あの化け物に食われたとしたら血痕でも残っておかしくないが・・・・隊長は複雑な顔をしている。それと、あの化け物共もこっちに移動して来ているようだ。橋は突破されたのだろう。まぁ、港の入口には鉄の扉があるし、ここまで入って来る事は無い。それにしても、沢村が気になる、どこに行ってしまったのだろう?しかも、今日は最悪な日になってしまった。どっかの核保有国が核を打ち上げて日本の上空でEMP攻撃をしやがった。幸い、この倉庫はEMP対策を施しており、最悪の事態は免れているが街の方では一気に静かになってしまった。まるでゴーストタウンだ

5月30日、今日は変な外人がやってきた。外見はどう見ても一級品の装備ばかりである。彼らは傭兵だそうで、会社はその業界じゃあ、新しい民間軍事会社で、名前はセンチュリオン。依頼主からここら辺で探している倉庫があるとの事だそうだ。いざ、仕事にかかろうとした矢先にこの騒動が起きてしまいここまで戻って来たそうだ。数分して、彼らは自分達の拠点に戻って行った。しかし、怪しいな彼らはどう見ても素人な感じではなかった。きっとアフガンとかで実戦を積んだのだろう。彼らには警戒しておかなくてはな・・・・・・

5月31日、なんてこった!!予想が的中しちまうなんて!例の外人部隊はこの倉庫が目標だったみたいだ。外では銃撃戦が起こっており、皆がそっちの方に周っている。俺は本部と連絡ができるよう無線を使い緊急信号を送っている。他にも隊長や他の指揮官が話し合っている。死ぬのは怖い・・・・でも、日本を守るために俺は自

衛隊に志願したんだ。たとえ、どんな結末が待っていようとな・・・・・・

日記はここで終了していた。恐らく、ここら辺で狙撃されたのだろうと琥珀は憶測を立てる。

「さて、この事は修様に話しておきましょう。後は地下武器庫への道しるべは・・・・・・・・・なるほど」

そう言って私は事務所を出た

～集合場所～

「で？なにか収穫はあったか？」

俺が言った

「んじゃあ、まず俺からあそこに置いてあったコンテナの中味は全部、兵器だったよ。ハンドガン、アサルトライフル、ショットガンと何でもござれって感じだぜ。ここで間違いないのは確かだ」

秀治が言う

「そうか・・・・琥珀は？」

「はい、やはりここで間違いないようです。事務所のパソコンから位置が判明しました。そして、あの外人部隊はセンチュリオンと言う民間軍事会社ですね」

琥珀が言う

「傭兵って事？」

秀治が言う

「そうだろうな。ここには武器がたんまり存在している。武器庫にするには丁度いいしな。隠れ蓑にもできる。で、琥珀、地下武器庫への道は見つけたか？」

俺が言った

「はい、こちらです」

そう言って俺が行った奥の方へと向かった

～奥の方～

奥の方へと俺達が辿りついた

「この扉を開けるとエレベーターがありますよ」

琥珀が言う

「そうか。秀治、やるぞ」

「ｏｋ、把握」

そう言って扉に手を掛ける

「せーの！！」

そう言って二人で力いっぱい扉を引く、ゆっくりとではあるが扉が開く

「ほ～う、エレベーターか。しかも大型だな」

俺が言った

「そうだな。こいつはダンジョンに行くみたいで楽しみだな」

秀治が言う

「よし、一旦、小ノ牧さんと合流するか」

そう言って俺らは小ノ牧さんの元へと向かったのである

地下武器庫

俺らは地下武器庫への道を発見した。なので、一度小ノ牧さん達の所へ戻ったのだった・・・・・・・

～倉庫前～

「小ノ牧さん～」

俺が言った

「ん？どうかしたのかね？修君」

小ノ牧さんは葉巻を吸いながら言った

「いや、地下武器庫への道を見つけましてね。せっかくだから回収できる物はしてしまおうって思ったんですよ。それと、そいつらの事も分かりましたよ。ある程度は」

「それは本当か？」

「ええ、そいつらは傭兵部隊の様です。民間軍事会社センチュリオンという会社です。」

「センチュリオン・・・・・・・確か、アフガン方面に本部を構えてる奴らだな。だが、新しすぎて評価はそんなに大きくなかったはずだ」

小ノ牧さんが言う

「おろ？知ってるんですか？」

「ん？ああ、風の噂だがな。前にも言ったが私は自衛隊に入る前は傭兵稼業をしていたんだ。ってどうした？皆」

俺らは唖然とした。だって、小ノ牧さんが傭兵稼業をやっていたって！？

「隊長、それは本当なんですか！？」

訓子さんが言う

「ああ、元々外国育ちだった私は、ろくに夢も抱いてなかったクソ餓鬼に過ぎなかった。だが、テレビで毎回報道される戦争の映像、そこで必死に暮らしている子供たちを見ていると無性に助けたくなる気持ちでいっぱいだった。だが、現実は甘くなかった。だから私は傭兵という立場から子供たちを助けようとしたんだ。そう言う過程で今の私があると言う訳だ」

小ノ牧さんは懐かしそうに言った

「へ～なんかすごいですね・・・・・・」

美麻さんが言う

「実際はそうでもなかったさ。で、先の話に戻るが私にはそういう関係からのコネがあるんだよ。時々、連絡してる時もあるさ。友人として戦友として信頼できる奴だ。間違いは無い」

「そうですか。で、こいつらは危険そうですか？」

「ああ、ここの軍事会社の社長は元ＧＲＵの隊員だ。」

「ＧＲＵ・・・・・ってうへ～」

秀治が言う

ＧＲＵはロシアの誇る諜報機関で手段を選ばない時もあるそうだ。

まぁ、そんなには知らないけどね。とにかく奴らを敵に回すのは火に油を注ぐのと同じ事だ。それぐらい危険な敵である

「確かに厄介ですね・・・・・でも、奴らの目的が分からない以上どう行動していいのか分からないってのもありますけどね」

「ああ、それに奴らがどうしてここの存在を知っていたのか気になる。だが、確かめようのない事だな。今は、武器・弾薬を持ち出してこの場を離れるとしよう」

「ええ、そうですね。それじゃあ、武器庫へと向かいますか」

そう言って俺らはそうこの中に入り、エレベーターを使って地下へと降りて行った

～地下武器庫～

エレベーターを降りると広いホールのような場所にやって来た

「広いな～」

秀治が言う

「多分、ここで荷物を乗り降りしてたんだろう。このでかさになりゃあ相当なもんだな」

俺が言った

「修君、ここからは二手に分かれないか?」

小ノ牧さんが言う

「何故ですか?」

俺が言った

「ここは、東京ドーム二個分の大きさを誇る。一つには車両用、もう一つは武器弾薬を保管してある。二手に分かれる事によってより、いい物を探そうと思ってね。因みにこの先の道を進むと中央管理室に辿りつく、そこで何が搬入されてるかが、分かるはずだ」

小ノ牧さんが説明する

「分かりました。しかし、どうしてそんなに詳しいんですか?」

俺が聞いた

「ああ、私もこの計画に携わった者だ。ここら辺の地理は詳しい」

「と言う事は日本全国にあるって言う倉庫の件も・・・・・」

「ああ、私が発案したんだ。日本は戦争放棄しているとはいえ、隣国からの脅威は侮れない。中国、韓国、北朝鮮、そこら辺の国々が怪しいからな。世間では良さそうに見えても実際は泥沼状態だからな」

「ええ!?マジッすか!?」

秀治が言う

「ああ、おおマジだ。だから私はこの計画を防衛大臣に話して、ここまで動かしてもらったのだ。だが、世界中でこんな騒ぎになってしまってはもう、意味は無いのだがな・・・・・」

「そうですか・・・・・」

「すまないな私の過去など話しても仕方ないと言うに、では、さっき言った通りで行動するか?」

「ええ、そうですね。俺達は武器弾薬を探しますよ。小ノ牧さん達は車両をと言っても必要そうな物をお願いします」

「了解した」

そう言って俺らは別れた

〜武器弾薬組〜

俺らは右に道を進み、武器弾薬がありそうな場所を探る事にした。

「にしても、まさか、小ノ牧さんが関わってるとはね〜」

秀治が言う

「ああ、ビックリしたな」

「そうですよね。本来なら極秘だった情報を私達のために教えてくれて、いい人ですよね」

「だな。感謝しないとな。さて、武器弾薬はどこに眠ってますかね？」

そう言って辺りを見回す、扉らしいものは見つからず長い廊下が永遠と伸びてるように感じた。電気が付いていると言う事は自家発電でも動いているのだろう

「それにしても長い廊下ですね。どこまで続いてるんでしょうかね？」

美麻さんが言う

「確かにな・・・・・作り的に旧日本軍が使っていたような形だよな・・・・・秀治、床主に軍事基地ってあったか？」

俺が聞いた

「さぁ～？でも一説だと旧日本軍が地下道を作っていたって言う噂は聞いたことがあるよ。本土決戦に向けてたくさんの労働者を使って巨大な地下世界を完成させたんだ。」

「へ～」

「でも、あくまで噂だしな実際、この地下道が旧日本軍が作った物かどうかは分からんしな」

秀治が言う

「まぁ、そうだな。とにかく武器庫を探そうじゃないか」

そう言って俺らはさらに奥へと進んで行った

～数分後～

「・・・・そろそろ見えて来ても良いはずだがな・・・・・・・」

俺が言った

あれから数分、歩いているが一向に扉らしきものも見えてくる気配がなかった

「そうですね・・・・・・あれ?修さん、ここの壁、色がおかしくありませんか?」

美麻さんが言う

「あっ本当だ。何だってこんな色をしてるんだ?」

壁はコンクリートの壁ではなく土で作ったような壁になっていた

「う～ん、どう見ても土だな。これ」

秀治が言う

「あっあそこ、部屋になってるぞ」

俺が言った。そこには丁度人が二人分、入れるような入口があった

「怪しいな。行ってみるか」

そう言って壁の横に着いた

「３カウントで行くぞ。３・・・２・・・１・・・・GO!!」

そう言ってM８７０で構えながら突入した

～謎の部屋～

「おお・・・・ここは・・・・・」

「すげぇ・・・・・・・」

「どっかの宝庫ですか?」

三者三様の言葉が出てしまった

そこにあったのはハンドガンからミニガンと言った銃器がこれでもかってくらいに置かれていた。正直、修の家にあった武器庫なんか比では無かった

「博物館ができるぞ。ここ」

秀治が言う

「ああ、ずいぶん年代物が置いてあるな・・・・こっちは最新型か」

年代物で言えばレバーアクションショットガンなど、アメリカ西部で使われていたような物から最新式ではＭ８ライフルなど最新のアサルトライフルが置かれていた。しかも何十丁という数だ

「これ、戦争何年分になるんでしょうかね？」

美麻さんが言う

「さぁ、少なくとも長期に渡ってできることは確かだな。こんだけあるんだ。」

俺が言った

「小ノ牧さんに連絡するか？」

「ああ、そうだな。連絡しよう」

そう言って無線機を取り出す

「こちら、修、小ノ牧さん聞こえますか？」

「ああ、聞こえるぞ」

「例の武器庫を見つけました。結構な数ですよ」

「そうか。丁度、我々も車両基地に着いた所だ。これだけの数を揃えるとは政府とは凄い物だな。あんな爺共の集まりでもたまには役立つこともあるもんだな」

小ノ牧さんが皮肉のように言った

「ははは・・・笑えますね」

「よし、我々は良さそうな車両を見つけ出してそちらに向かうとしよう。少しの間、待っていてくれ」

「了解しました」

そう言って無線を切った

「よし、小ノ牧さん達がやってくるまでの間に銃を選んじまおうぜ。好きなのを持って行こう」

そう言って武器の選別に入った俺達であった

奇襲

俺らは地下武器庫で大量の武器・弾薬を発見する。小ノ牧さんらは反対の車両基地に向かっており、こっちに迎えに来てくれるそうだ。そこで、来るまでの間にいろいろ物色することにした

～武器庫～

「わぁ～銃だけじゃなくて刀とかも置いてありますね～」

美麻さんが言う

「そうだな。琥珀、なんかいいのは見つけたか？」

俺が言った

「はい、といってもほとんどは家に置いてあった物と同じ物のようです。これといって特別な物は・・・・・あら？」

琥珀が気づく

「どうしたんすか？琥珀さん」

秀治が聞いた

「いえ、この箱だけ妙に丁寧に扱われているというか」

琥珀が指さしたのはライフル銃がちょうど収まるような大きさのケースだった

「え～と、モシンナガン専用のカスタムパーツ？」

箱の表紙に書かれていたことだった

「どういうことだ？モシンナガンってカスタムパーツなんか無かったよな？」

秀治が言う

「ああ、第二次大戦でもそんなのは聞いたことないぜ。開けてみるか」

そう言って床に置いてふたを開けた

「おお、いろんなのがあるんだな」

ふたを開けるとそこには様々なパーツが置いてあった。マガジン増量のロングマガジンやスコープの倍率が高いスナイパーライフル用のスコープなど各部品のアップグレード版のパーツが納まっていた

「これ、修の銃に使えんじゃね？」

秀治が言う

「そうだな。試してみるか」

そう言って持ってきていたモシンナガンを取り出す、そして、遠距離用のスコープを装着してみた

［カッチャン］

「おお・・・・ハマったな。」

俺が言った

「修様、あそこに作業台があることですし、そこでやってみてはいかがですか？」

琥珀が勧める

「そうだな。じゃあ、琥珀、捜索は頼んだ」

「了解です」

そう言って俺は作業台に向かった

～数分後～

「できた！」

そう言って銃を掲げる

モシンナガンは今までのより強くなった。元々、修はそこまで改造を行ってなかったので嬉しい誤算だった。

どのように変わったかというとまず、スコープはスナイパー仕様の遠距離スコープ、マガジンもボルトアクションは変わらないのだが、マガジンがつく事によってリロード時間を省いてくれる。内部の改造として威力が上がり、薄い壁なら簡単に貫けるほどの威力を持つ

ようになった。外見的には銃身自体が長くなってしまったが、それは仕方あるまい。さらに反動を抑えるため肩あてのところにクッションがあてがわれた。ついでに伏せ撃ちの時、安定するようにバイボッドを装着した

「こいつは・・・・・すごいな・・・・・自分で作っておいてなんだが」

俺が言った

「修、こっちは終わったぞ。」

秀治が言った

「おう、こっちも終わったぜ」

俺が言った

「どうだ?改造の方は」

「ああ、完璧って言ってもいい。計算が正しければ薄い壁は簡単に貫けるぜ」

「ほう。興味深いな」

その時だった

(ピピピ・・・・)

「おっ通信だ。こちら、修です」

「こちら、小ノ牧だ。これから、迎えに行くよ。ゆっくり待っていてくれ」

「了解です。では、後ほど」

そう言って無線を切る

「小ノ牧さん？」

「ああ、今からこっちに向かうってよ」

「そうか。そんなことより修、こいつを見てくれよ」

そう言って秀治が出してきたのは

「Ｈ＆Ｋ　ＸＭ２９ＯＩＣＷか。米軍で配備されようとした没銃だな。」

俺が言った

この銃は米軍が最初から導入予定であった銃でアメリカ支社や他の軍需産業が担当して設計された。２０００年に公開され突撃銃・グレネードライフル・赤外線装置などが装着されていて次世代のアサルトライフルとして注目されていたが、４～５時間の充電をしなければならない事やコスト面で大幅な問題があることから凍結されてしまった没銃である

「ああ、しかも、こいつ改造されているみたいでな。充電パックが長時間使用できるようになっているみたいだ」

「まじかよ。日本が手を加えたのか？」

「そうじゃないか？小細工だけは得意だからなこの国は」

そう言って笑う

「だが、嫌いじゃないな」

俺が言った

その時だった

［ドドーーン！！］

大きな爆発音とともに部屋全体が揺れた

「うわっと！？」

俺はなんとか踏ん張った

「いてて・・・・何が起きたんだ？」

転んだ秀治が言った

「分からん。琥珀、美麻さん、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です～」

「私も大丈夫です。修様、ちょっとこちらへ」

琥珀が手招きする

「どうした？」

「ここから少しだけ顔を出してください。決して全体を見せないように」

琥珀が真剣な顔で言う。何かあったのだろうか？

「どれどれ・・・・・・！！おいおい、増援か？」

「どうしたんだ？」

秀治が言う

「こいつはやばいぜ。センチュリオンの傭兵部隊だ。地下道を爆破してこっちに侵入してきやがった。」

「なんだって！？」

「馬鹿、大きな声を出すな。奴らは俺たちがこっちにいるのを気付いていない。」

「どうするんだ？」

「人数的には俺らと同等だ。簡単に片が付く。一気に奇襲しちまえばこっちのもんだろう。美麻さん、ここの入り口以外に出る場所はあるか？」

俺が聞いた

「えっと・・・・・・そこの換気口から奴らの上に出られますね。」

「よし、俺が上から奇襲を仕掛ける。琥珀と秀治はこっから射撃を行ってくれ。美麻さんは道案内を頼む」

「了解です」

「おｋ、把握」

「わかりました」

三者三様の答えがきた

「久しぶりだぜ。まともな人間とやりあえるのは・・・・・・」

そう言ってニヤリと笑う俺だった

N作戦

俺らは武器庫を発見して、小ノ牧さんらが来るのを待っていた。が、例の傭兵部隊が地下道を爆破してこちらに侵入してきた。そこで、奇襲を行う事にした俺達

～武器弾薬庫～

「よし、俺が通気口から攻撃を仕掛ける。その後、琥珀と秀治で始末してくれ。それと、一人だけ残していてくれ」

俺が言った

「修さん、それはなぜですか？」

美麻さんが言う

「簡単さ。情報を集めるんだよ。下っ端でも雇い主位はわかるだろう？それに、なんで、この任務が発動されたのかもな」

「なるほど、」

美麻さんは納得したようだ

「じゃあ、行って来る。美麻さん、ナビゲートよろしく」

そう言って俺は喚起口に入った

～喚起口内部～

「ふぅ～狭いな～やっぱ、サブを持って来ておいて正解だったな」

俺は匍匐前進しながら喚起口内部を探索していく、今、武装しているのは武器庫で見つけたＵＺＩを所持している。こいつはイスラエルが開発したサブマシンガンでアラブ諸国の国産陸上兵器に対抗できるサブマシンガンの依頼をされ、この銃が開発された。連射速度は６００発／分である。

「修さん、もうすぐ傭兵の頭上に出ますよ。気を付けて下さい」

美麻さんから情報が入る

「了解、琥珀と秀治に耳と目を抑えるように言ってくれ。その後、開始だ」

「分かりました」

そう言って無線を切る

数分後、下から明かりが漏れる出口を発見した。予想通り、下には傭兵部隊が何か話し合っているようだ。

「んじゃ、音響パレードと行きますかね」

そう言ってスタングレネードのピンを抜いて落とした。しかも三個、俺はその場で耳を押さえて蹲る。数秒後、派手な音が響いた。

俺は下の状況を確認するべく覗いた。敵さんはモロに食らったせいか。その場でのた打ち回っていた。その後、秀治と琥珀がやって来

て全員を拘束する事に成功した

「ふぅ～殺さずに済んだか。敵さんは素人か？」

俺はそう言って喚起口から出て下へと降りて行った

～武器庫前の廊下～

「クソ！離しやがれ！」

傭兵部隊の一人が気が付いて暴れ出した。幸い、ロープなどがあったので全員、拘束する事に成功した。武器はもちろん、装備品に至るまで回収しているため、安全だ

「気が付いたようだな。じゃあ、話してもらおうか？」

俺は椅子に座りながらタバコを吸って言った。

「ふざけんじゃねぇ！！離せよ！！コラ！！」

傭兵は離せと喚くだけだった

「うるせぇな。自分の立場が分かってんのか？」

そう言って俺はＭ２９を突き付けた

「そんな事をやっても無駄だぞ！！ヒャハハハハ！」

「おい、黙れ、ロビンソン」

そんな時、一人の傭兵が冷静に声を上げる。きっと隊長なんだろう

「ほう・・・あんたはずいぶんと冷静だな」

俺が言った

「こんな状態だ。武器や装備品が剥がされてしまっておまけに拘束されているんだからな。慌てた所で何の進展もない」

隊長格の男が言う

「あんた・・・名前は？」

「私は、ジョン・・・・ジョン・ヘンリーだ」

ジョンは名前を名乗った

「ジョン、あんたなら話が通りそうだ。単刀直入に行こう。目的は何なんだ？」

俺が言った

「こうなった所でどうしようもないしな。分かった。話そう。我々、センチュリオンはある方からの御依頼を受けて日本にやって来た。」

「それは・・・・この武器庫の事か？」

秀治が言う

「そうだ。米軍や中国軍などの大多数の武器庫は粗方使われてしま

っているからな。だとしたら、この非常時に簡単に持ち出せるのは日本の自衛隊の武器庫、そこから武器を集めて来い、との事だった」

ジョンが内容を話していく

「じゃあ、なんでこの武器庫の事を知ってたんだ？世界からも目を欺ける技術を使って秘密裏にしていたこの武器庫の事」

俺が言った

「ああ、それは依頼人からの情報だった。私も半信半疑でここに来た訳だが・・・・・見事に当たっちまった。」

「じゃあ・・・・依頼人ってもしかして日本人なんですか？」

美麻さんが言う

「いや、我々も実際に依頼人には会っていない。社長のアンダーソンしか分からん事だしな。そういえば、君に聞きたい事があるんだが・・・・・」

俺に向かって言った

「なんだ？」

「君はもしかして、古知屋君かい？」

「何で知ってる？」

「いや、数年前にな君のお父さんの護衛をやっていた時があったん

だ。その時は大層仲良くやってくれてね。いつも、私と酒を飲むときは、君の事かお母さんの話をしていたもんだ」

懐かしそうな目で言うジョン

「なるほどね～で、あんた達はどうするんだい？」

俺が聞いた

「敵に捕まった時は契約終了と言われていたからな。我々は収入源を失って無職になった訳だ。君達に危害を加えるつもりはない」

「その証拠は？」

「装備品の中に契約書が入ってるよ。読んで見たまえ」

秀治がすぐに動いて装備品の中を探る。すると一枚の契約書が出てきた

「秀治、どうだ？」

「こりゃあ、本物だね。嘘っぱちで書かれるような内容じゃない」

「そうか。あんた達は無罪放免と言う事だな」

俺はそう言ってナイフでロープを切った

「ふぅ、切れた切れた～」

ロビンソンと言われた人間が言った

「簡単に信じて貰えるとは思わなかったよ」

ジョンが言う

「良いさ。あんたはウソを言ってるようには見えなかったしな。人がウソを付いているときは目を見れば分かるって親父から教わったしな」

俺が言った

「ふっやはり、あの男の息子だな。」

「それで、あんた達はどうするんだい？」

「さぁな。無職になってしまったし、これからどうするべきかね・・・外はあの化け物でいっぱい、簡単に仕事が見つかるかどうか分からんな」

そう言って笑うジョン

「だったら、俺達と一緒に来ないかい？」

俺が言った

「・・・・・いいのか？」

「ああ、親父の元護衛なら信じられるしな。それにあんたに興味が湧いて来た。」

俺が言うとジョンは一瞬驚いた顔をしたがすぐに笑顔になり

「なら、断る理由は無いな」

そう言って握手を求めてきた。俺も握手をする

「これから、よろしく頼むよ。修君」

「ええ、よろしく、ジョン」

N作戦（後書き）

～人物紹介～

ジョン・ヘンリー

出身国　アメリカ

元センチュリオンの傭兵部隊の隊長、と言っても隊員はおしゃべりなロビンソンと無口なアネットの二人だけである。数年前は修の親父を護衛していた時があり、その時に修の事を知った。冷静沈着で何事にも臨機応変に対応できる人物。傭兵稼業に入る前はデルタフォースに所属していたらしいがある事件を機に軍人をやめた

身長は１７９ｃｍ　体重は７５ｋ

扱う武器はＧ３６Ｋにマスターキーを付けたバージョン

ロビンソン・ネウロ

出身国　イタリア

元センチュリオンの傭兵隊員、傭兵になる前は軍人をしており、それなりに地位は昇っていたが途中で飽きてしまい、傭兵稼業に身を投じるようになった。元々、おしゃべりが大好きなので黙ってる事が少ない。しかし、必要であれば黙るので周囲に迷惑を掛けるほどではないらしい。体力が異常に高く重い装備なども装備できるのでもっぱら援護型である

身長は１７６ｃｍ　体重は７０キロ

使用武器はＭ２４９Ｂ汎用機関銃

アネット・フリーソン

出身国　ロシア

元センチュリオンの女傭兵隊員で無口である。と言っても必要な事は喋るので極端に無口と言う訳でもない。物事を冷静に分析しそれに対処しうる能力を持っている。元はロシアの反政府組織の狙撃部隊に所属したいたが、無能な上層部に飽き飽きし、傭兵稼業に入った。狙撃はさながら紙一重と言えるほどうまい

身長は１７３ｃｍ　体重はゲフンゲフン

使用武器はドラグノフＳＶＤ

また、新たな仲間ができました。これで、謎に包まれたセンチュリオンの全貌が見えてくるのでしょうか。楽しみです！

こいつはぁ、予想外だな

俺らはセンチュリオンのジョンとその仲間を向かい入れた。その後、小ノ牧さんらを乗せた車両がこっちに到着したのだ

～武器庫前～

「小ノ牧だ。もうすぐ、着くぞ」

無線で小ノ牧さんが言った

「了解です。俺達も準備します」

俺が言った

「そういえば、修君」

「はい？」

「君達はどういう目的でここに入ったんだ？」

ジョンが言う

「俺達は武器弾薬類が無くなったんだ。その時、さっきの無線で話してた小ノ牧さんがここの情報を教えてくれたんだ。」

俺が言った

「そうなのか。その後はどうするつもりだったんだ？」

「ここを出て、こいつの親、秀治の家に向かうことになってたんだ。」

そう言って秀治の肩を叩く

「そうか。無事だといいな」

ジョンが言う

「ええ、そう願いたいです」

秀治が言う

「そういえば、大蛇（おろち）さんはどうしているのかね？」

大蛇とは修の親父の名前である

「親父はお袋と一緒に仕事に行きました」

「ああ～例の仕事かね？」

「ええ、たぶんそうでしょうね。連絡は付きませんが、あの二人はそんじょそこらのゾンビ共に負けることはないでしょうしね」

俺が言う

「そうだな。武装夫婦なんてあだ名だしな」

ジョンが笑いながら言う

「修さん修さん」

「ん？なんだい、美麻さん」

「ずっと、気になってたんですけど武装夫婦ってなんですか？」

美麻さんが言う

「ああ、家の両親が外国で取引に行った時、一回、嵌められた時があってね。敵はその区域の反政府組織なんだけど、その後ろにいたのがライバル会社なんだ。親父とお袋だけで組織を壊滅させてその後、そのライバル会社の本社に行って社長にお話しに行ったんだと、その会社は倒産、社長も行方不明になってね。それ以降、何回か潰そうとする会社がいたけど全部、武力で屈服させたんだと」

「うわ～・・・・・それはすごいですね」

美麻さんは口をポカーンとさせながら言った

「で、そんなことしている内に武装夫婦なんてあだ名が着いちまったわけだ。他にも”戦争の火種”なんかも言われたな」

「ん？そっちの話は聞いたことないぞ？」

秀治が言う

「当たり前だ。これは機密事項だからな。知ってるのは親父、お袋、琥珀、俺の四人ぐらいじゃないか？」

「そうですね。」

琥珀が頷く

「そのついた理由は?」

「うーん、さすがにこれは言いづらいな・・・・・・(パァーン!)おや?」

俺が振り向くと小ノ牧さんがやってきた

「この話はまた今度な。今はここを出ることに集中しよう」

「そうだな。」

秀治も同意した

「すまないな。遅れてしまって」

小ノ牧さんが言う

「いえ、大丈夫ですよ」

「ん?そちらの外国人は?」

ジョンを見て言った

「ああ、こちらはジョン・ヘンリー、元センチュリオンの傭兵部隊だ」

「何！？」

小ノ牧さんが声を上げる。同時に訓子さんが８９式を構えた

「待ってください！彼らはもうこっち側に付きました。」

俺が言った

「・・・・・本当なの？」

訓子さんが言った

「ええ、彼らが裏切ることはないです。」

「なぜ、そう言えるの？」

「この書類にそう書かれているからです。それに彼は親父の元護衛役でした」

そう言って書類を三人に見せた

「うーむ、偽物ではないな。確かに書類は本物だ」

小ノ牧さんが言った

「これで、信じてもらえたか？まぁ、今信じろとは言わない。ただし、裏切る事はないさ。これは絶対だ」

ジョンが言う

「分かった。だが、妙な事をすれば・・・・・」

「ああ、その時は好きにしてくれて構わない」

なんとか、一件落着みたいだな

「それじゃあ、さっさと武器、弾薬を積み込んじゃいましょう」

俺が言った

「そうだな。それがいい」

秀治が言う

「敵・・・・・5時方向」

アネットが言う

「敵だぁ?どこいるってんだ?」

ロビンソンが言う

『アアアアアアアアアア・・・・・・・・』

「マジかよ・・・・・どっから侵入してきやがった」

俺が言った

見ると、ゾンビの奴らがこの地下道に入って来たらしく。どんどん、暗闇からやってきていた

「うぉい！なんなんだ！？この数」

ロビンソンが言う

「アネット！ロビンソン！その場で制圧射撃をせよ！」

ジョンが言った。すると、二人はすぐさま自分の得物を取り出して射撃を開始する

「へ～イ！ビッチ共、お仕置きの時間だぜ！！」

ロビンソンが撃ちながら言う

「ワンキル・・・・・・ワンショット」

アネットも正確に奴らの額に弾丸を撃ち込んでいく

「修君、ここは、私達が押さえる。君達は車両に武器弾薬を積み込んでくれ」

そう言ってジョンもＧ３６Ｋで射撃をする

「了解ですよ。さぁ、今のうちに積み込んじまうぞ！」

俺が言った

「了解だぜ！」

秀治が言う

「分りました！」

美麻さんが言う

「修君！ここは任せたぞ！我々も攻撃だ！」

小ノ牧さんが言った

「了解！」

「了解です～」

薫さんと訓子さんが言う

「ジョン！そこをどいてくれ！」

「おいおい、Ｍｒ小ノ牧、どいてくれと言われ・・・・」

そう言ってジョンが振り返ると

「ｆｉｒｅ！！」

小ノ牧さんがどこから持ち出したか分からないＡＴ４対戦車ランチャーを構え発射した

「うおっと！！？」

ジョンはギリギリでミサイルを避けた。弾道はそのままゾンビ共に衝突し、周りを巻き込んで爆発を起こした

「おい！危ないだろ！！」

ジョンが言った

「すまんすまん、急だったしな。手を貸すよ」

小ノ牧さんは笑いながら言う

「たくっ　背中は任せるぜ。」

ニヤリと笑って言った

「おやおや、もう仲が良いことで」

俺は荷物を運びながら言った

「にしても、こいつは見たことないタイプだな」

秀治が言う

「ああ、ブラットレーと大型トラックを組み合わせたみたいな奴だな」

俺が言った

小ノ牧さんが乗ってきた車両はＭ２ブラットレーの車両に荷台がくっ付いたような車両だった。それは修でも見たことがなかったタイプだ

「輸送とかも楽々にできそうですよね」

美麻さんが言う

「そうだな。とりあえず、積み込んじまうか」

そう言ってどんどん、積み込んでいくのだった

大量発生！？

俺らは軍の武器庫から持てるだけの武器弾薬を運び出していた。しかし、途中ゾンビ集団がやって来て応戦する羽目になった。今は、小ノ牧さんとジョンのチームが応戦に当たっている

～武器庫前～

「修君！あと、どれぐらいかね！？」

小ノ牧さんが言う

「まだ、耐えて下さい！もうちょっとで終わります！」

俺が言った

正直、厳しい状況になっていた。ゾンビ共は減るどころか逆に増えて来てしまっている。小ノ牧さん達が必死に抑えてくれてはいるが、いつまで持つか分からない状況になっていた。

「修！早くしないと小ノ牧さん達が危ないぞ！」

秀治が言う

「分かってるよ！美麻さん、後、どのくらい残ってる！？」

俺が言った

「えっと・・・・・弾薬箱が後、５つぐらいです！他は大きすぎて

車両に乗りません！」

美麻さんが言う

「分かった！その弾薬箱を入れこんだら出発だ！秀治、後は頼んだ！」

そう言って俺は車両の砲塔に乗り込んだ

この車両に付いている砲塔はＭ２ブラットレーと同じ２５ミリ機関砲を搭載している。俺はそれを起動して照準を奴らに向けた

「小ノ牧さん！ジョン！どいてくれ！」

俺がスピーカーで二人に言った。二つのチームはすぐに動いて射線上からどいた

「ｆｉｒｅ！！」

ドン！ドン！ドン！とタイミングのいい音がトンネル内に響く、弾は奴らにぶつかり爆発を起こす。ありったけの弾をくれてやる

「修！積み込みは完了した！いつでも行けんぞ！」

秀治が言う

「了解！ジョン、運転してくれ！小ノ牧さん！機銃の方をお願いします！」

そう言うと二人はすぐさま動いた。ジョンは運転席に飛び乗りエン

ジンを動かす、小ノ牧さんは砲塔の上にある機銃に弾薬を装填し、射撃し始める。他は座席に着いたり後ろの荷台に乗り込んだ

「行くぜ！このまま出口に直行だ！」

ジョンが言う

その後、車両が急回転し大型エレベーターの方へと向かった。車体は前がタイヤ、後ろがキャタピラとなっているハーフトラックの感じになっている

「よし、奴らは付いて来れないようだな」

小ノ牧さんが言う

「ええ、そうですね」

「で、この車両はどうしましょう？」

琥珀が言う

「そうだな。一旦、上に上がって全員が乗せられるかどうか確認しよう」

そう言って俺達を乗せた車両は地上へと向かった

～倉庫前～

「さ～て、今残ってるのは・・・・・・・ＭＢＴ、ＡＰＣ、ガントラック、ハンヴィーか。」

俺が言った

「どうするべきかね？このままで行くか？」

小ノ牧さんが言う

「それだったら、このガントラックは捨てて、こっちのハーフトラックを持って行くのはどうだ？積載量もこっちの方が多いと思うが・・・・」

ジョンが言う

「よし、ガントラックは捨てよう。代わりにこのハーフを入れよう」

「了解。じゃあ、ジョン少し手伝ってくれないか？」

小ノ牧さんが言う

「了解」

そう言って二人はガントラックの方に行き、上に付いている機銃などを取り外しにかかる。俺はハーフの方の荷台に行き何を取って来たのか確認する事にして見た

「え～と、アサルトライフル、スナイパーライフル、軽機関銃、ショットガン、対物ライフルか。後はそれぞれの弾薬って所だな」

俺は箱を確認しながら言った

「修様、他の方も確認しました。戦車砲はまだ、余裕があります。ａｎｇｅｌの機関砲も弾薬はあります。」

琥珀が言う

「了解、とりあえずは揃ったと言う所か」

「ええ、そうでしょうね。」

「小ノ牧さん達の準備が終わったら移動する事にするか。」

「そうしましょう。あの死体共がいつ来るか分かりませんし」

琥珀が賛成する

～数十分後～

「修君、こっちの準備は完了したぞ」

小ノ牧さんが言う

「じゃあ、これから出るとしますか。目標は秀治の家だ。秀治、ナビゲート頼むわ」

「おっしゃ、任せろ！」

そう言って秀治はハンヴィーに乗り込む、助手席には薫さんが乗る

「じゃあ、ジョンはあのハーフを頼む」

そう言ってハーフトラックを指さす

「分かった。一番、後ろで良いのか？」

「ああ、頼む」

そう言って俺はＸＭ－１０２に乗り込んだ。小ノ牧さんらはａｎｇｅｌの方に乗り込んだ

「秀治、先に出てくれ」

俺が無線で言った

「ｏｋ、把握」

そう言って秀治が乗るハンヴィーが門を出て行く、俺らもその後に続いた

～とある部屋の一室～

「社長、ジョンの部隊が契約違反をいたしました」

スーツ姿の男が言う

「構わん、予定の範囲だ。それより、武器弾薬はどうなっている？」

ワインを片手に葉巻を吸う男が言う

「はっジョンの所を抜いても二年ほどは戦争が出来ますよ。」

「そうか。今や、アメリカや中国と言った主国が終わった今、これからの時代、我々の出番だ。その事を肝に銘じておけ」

「それは元より承知です。社長に付いたあの日から」

「ふっ　そうか。兵力はどんな感じだ？」

「徐々に集まって来ております。避難民の中には元兵隊や傭兵がいるようですし、彼らに対して見れば生き残る権利がある訳ですし必死にもなりますよ。それに例のテロリストから重要な情報も得ることができました」

「よし、集まりが完了次第、師団を動かせ、まずはハワイから掌握するぞ。今の状態なら簡単に奪還できるはずだ」

そう言って葉巻を吸う

「分かりました。命令はこちらの委任でよろしいですか？」

「ああ、任せる」

そう言った後、スーツの男は部屋を出て行った

「フフフ、これで、世界は私の物になる。大蛇よ　この私を止められるかね？」

そう言って男は葉巻を灰皿に押し付けた

～幹線道路～

俺らは幹線道路を走っていた。やはり、安全な場所など存在しない。どこに行ってもゾンビ、ゾンビ、ゾンビ、嫌になるほどだ

「おっと、秀治、聞こえるか？」

俺が無線機で言った

「どうしたぁ？」

「いや、燃料が少なくなってきたからな。ちょっと補給したいんだが」

「了解。すぐそこにスタンドがあるからそこで入れちまおう。セルフじゃないから安心しろ」

そう言って無線を切る

数分後、ガソリンスタンドに到着した

「おお、こいつは大型だな」

「ああ、一万台分の燃料が収まってるぜ。さっさと入れちまおう」

そう言って給油機からノズルを取り出し、差し込んだ

「修、こっちのタンクにも入れておいたらどうだ？」

そう言ってポリタンクを出した

「そうですね。こっちが終わったらそれにも入れちゃいましょう」

そう言ってどんどん、給油していくのだった

秀治の家

俺らは秀治の家の近くのガススタで燃料を補給し再び出発した。

～道路～

「秀治、家はどこらへんだ？」

俺が無線機で言った

「この先に造船所がある。そこが俺の家だ」

秀治が答える

「よし、分かった」

そう言ってどんどん進んで行く俺達だった

～ハワイ諸島～

修達が秀治の家に向かっていた頃、ハワイ諸島は大変な事が起きていた。

「クソ！どこの軍隊なんだ！？こんなバカ騒ぎが起きてるってのに進行してくる奴らは！！」

兵士がＭ４を撃ちながら言った

「んなこと知るか！！とにかく撃ちまくれ！！ここは最後の砦なん

だぞ！！ここを落とされたらは事実上アメリカは終わる事になる！」

もう一人の兵士が言う

海岸には黒く塗装された船、ヘリ、強襲揚陸艦などが上がって来ていた。また、兵士の姿もドイツ第三帝国軍の特殊部隊の様な黒い装備が施されていた

「兵器は最新型ばかりだぞ！？表に出てない奴まで持ってるなんて・・・・本当にどこのどいつなんだ！？」

「分からん！とにかくここを死守だ！大佐達が駈けつけてくれるまで守るぞ！」

そう言いつつ兵士達は孤軍奮闘するのであった

～秀治家～

「着いたぞ。ここだ」

そう言って秀治が降りる

粗方、ゾンビ共は片づけておいたので気にすることなく降りた

「ほへ～でかいな～」

俺が言った

造船所はまるで飛行場にあるハンガーをさらにでかくしたような建物だった

「ああ、大型船をそのまま入れるように改造してあるからな。入口はこっちだ」

そう言って近くの門を開けた。俺達はそのまま車両を中に入れた

～造船所内～

「ほとんどが手つかずのようだな」

小ノ牧さんが言う

「この事件が起きたと同時に業務も停止したみたいだな。しかし、人の気配がないのはおかしくないか？」

ジョンが言う

ジョンの言う通り、造船所の中には人の気配が全くしないのだ。逆に不気味なぐらいに

「親父・・・お袋・・・・どこにいるんだ？出て来てくれよ」

秀治が言う

「これだけ広いと時間がかかるかもな。手分けして探すか」

俺が言った

「そうだな。じゃあ、東の造船所は我々が偵察してくる」

小ノ牧さんが言う

「じゃあ、俺らは西の倉庫を調べるとするよ」

ジョンが言う

「じゃあ、俺と美麻さんは奥の方を調べる。秀治は自宅の方に行って見ろよ」

俺が言った

「そうだな。そうして見るよ」

「じゃあ、私も秀治さんに付いていきます～」

薫さんが言う

「じゃあ、お願いしますね」

そう言って俺らは分かれた

チーム的にはこんな感じである

東の造船所

小ノ牧さん・訓子さん

西の倉庫

ジョン・ロビンソン・アネット

奥の建物

修・美麻さん

秀治の家

秀治・薫さん

とこんな感じで分かれた

～奥の建物～

俺と美麻さんは奥の海に近い建物を調べることにした

「ここはなんでしょうね？」

美麻さんが言う

「さぁ？海に近いから組合とかの建物じゃないか？それとも事務所とか」

俺が言った

「これは・・・・看板ですかね？血でよく分かんなくなってますね」

建物の近くには看板らしき物があったが、血で文字が見えなくなっていた

「美麻さん、ここからは慎重に行こう。とりあえず、こいつを渡し

ておくよ」

そう言ってイサカＭ３７フェザーライトを渡した

「これ、ものすごい軽いですね～」

Ｍ３７を持ちながら言う美麻さん

「そいつは警察とかでも重宝されているショットガンだ。軽量の上に扱いやすいのが特徴だな。撃ったら下にあるスライドを引くと次の弾が装填されるようになっている。美麻さんでも扱えるはずだ」

俺が説明した

「分かりました。」

「じゃあ、俺はこれで行くとしますかね」

そう言ってイングラムＭ１０を二丁装備した。二丁拳銃ならぬ二丁サブマシンガンだ

そして、ドアの横に張り付く

「美麻さん、１，２，３で行くからね」

「分かりました」

「１・・・２・・・・３！！」

俺がドアを蹴って開かせる。そして、同時に中へと侵入した

～西の倉庫～

西の倉庫にはジョンの部隊が向かっていた

「なぁ、ジョン、この倉庫なんか、怪しくないか？」

ロビンソンが言う

そこには一軒の巨大な倉庫が建っていた

「どういう事だ？」

ジョンが言う

「簡単さ。〝匂い〟だよ」

「なるほどな・・・・・・調べてみるか」

「隊長・・・血痕の跡」

アネットが言う

倉庫の壁には真新しい血痕が付着していた

「警戒しろ。この先、何が待っているか分からん」

そう言ってＡＫＭを抱える

「了解！仕事の時間だな！」

そう言ってロビンソンもＭ２４０Ｂを持つ

「警戒・・・・厳」

アネットもＬ９６Ａ１を持つ

アネットは近くの梯子から屋上へと向かった。残り二人はドアに張り付いた

「ロビンソン、フラッシュクリア」

「了解」

そう言って口で安全ピンを抜いた・同時にジョンがドアを蹴り破る。さらにロビンソンがフラッシュグレネードを投げ入れる。

数秒後、中で一瞬の光と音が炸裂する

「行くぞ！」

ジョンが先に入り、ロビンソンが後に続く

～東造船所～

小ノ牧らは東の造船所に向かっていた

「隊長、ここら辺はなんか違いません？」

訓子が言う

「ああ、確かにな。自衛隊にいた頃と少し似ているような感じがする。何か秘密でも隠されているのか？」

小ノ牧が言う

確かにこの造船所は空気が違うように感じている二人だった

「少し探ってみるか。ここから入るとしよう」

そう言って鉄の扉に入って行く

「こ・・・こいつは・・・・・」

「そんなまさか・・・・・・」

二人は最初に目にした物に驚いた。

果たして目にした物とは！？

～秀治の家～

秀治と薫は秀治の家に向かっていた

「秀治君、家はどのくらいの大きさなの？」

薫が言う

「一軒家じゃないんですよね。家」

「？それってどういう事？」

「まぁ、見れば分かりますよ」

苦笑いする秀治

「！・・・これって」

薫は驚いた。

そこにあったのは一隻の空母だった。だが、何年も動かしていないせいか所々変色していた

「親父が大の船好きでしてね。この造船所を始めた記念に空母を買って来たんすよ。さすがにお袋も驚いたようで」

秀治が言う

「ほへ～すごいわね～。でも、相当掛かったんじゃない？お金」

薫が最もな事を言う

「ええ、と言っても修の親父さんが担保役になってくれましてね。事実上（タダ）無料なんですよね。」

秀治が言う

「と言う事は修君のお父さんが全額払ったの？」

「まぁ、そう言うことですね。さっ中に入りましょう」

「ええ、そうね。秀治君、準備は良い？」

薫がＭＩＮＩＭＩを持ちながら言う

「もちろんっすよ！」

そう言って秀治もＨ＆ａｍｐ；ＫＵＭＰを持つ

「じゃあ、突入！」

そう言って一気に桟橋を抜けて船に乗艦する二人だった

最悪の結果

俺らは無事に秀治の家に到着した。しかし、そこにいるはずの秀治の親父さんとお袋さんがいなかった。なので、手分けして捜索することにした

～修・美麻さん視点～

俺らは奥の建物の中に侵入した。中は所々、血痕が落ちていた

「中は結構、酷いもんだな」

俺が言った

「そうですね。生存者がいればいいですが・・・・・」

美麻さんが言った

奥に続く廊下が伸びており、幾つかの部屋が配置されている構造だった

「美麻さん、手分けして探そう。俺は二階を調べてくるよ。美麻さんは一階の方を頼む」

「分かりました。お気をつけて」

そう言って俺は二階へと向かった

～二階～

俺はサブマシンガンを構えながら辺りを警戒す。ゾンビどもが一向に現れる気配がないからだ

「奴らはここにはいないのか？いや、血痕があるなら一匹や二匹いてもおかしくないが・・・・それにドアは閉まってたしな」

俺は独り言のように言いながら進んでいく

「おや？この部屋は怪しいな」

俺は一室の部屋の前に立ち止まった

「行くか・・・・・」

そう言ってドアを蹴破り中へと侵入した

「うっ！？こいつは・・・・・ヒデェな・・・・・」

部屋は血の海と化していた。死体は判別できないほど細切れになっている。ここで一体何があったのか？

「銃があるってことは生存者がいたってことか。しかも、警察官だな」

近くには警察が使用しているニューンナンブＭ６０が落ちていた

「弾薬は・・・・・使用されていないな。撃つ前にやられたって所か。しかし・・・・・」

俺は再び、死体の方を見た。死体は先ほど言ったとおり判別できないほど細切れになっていた

「ゾンビがやるとは思えないな。あいつらは食うことはあってもこんな風にはしないはずだ・・・・警戒しなきゃな」

俺はそう言って部屋を出た

～美麻視点～

私は修さんと分かれて一階を捜索していた

「う～ん、ここも何もないですね～」

部屋を一つ一つ調べているが、一向に手がかりが見つからない。

「ここで、最後ですね」

そう言ってドアを開けようとするが・・・・・

「あ、あれ?開かない・・・・」

ドアには鍵が掛っており、開けることができなかった

「しょうがないですね。」

そう言って私はドアの金具に向けてショットガンで撃った。響きのいい金属音と共に金具が外れ床に転がった

「お邪魔しま～す」

ゆっくりとドアを開けて中に入った

「う～ん、特に変わった所はないですね・・・・・」

部屋を見渡したが、特に変わった所はなかった

「でも、鍵が掛ってたてことは何かしらの意味があるんでしょうね・・・あら？あの金庫は・・・・・」

そう言って発見した金庫に近づく

「ダイヤル式ですか・・・暗証番号があればいいんですけど・・・」

適当に弄ってみたが開くことはなかった

「もうちょっと探してみましょう」

そう言って私は部屋の中を探索するのだった

～ジョン・ロビンソン・アネット視点～

我々は近くの倉庫を調べることにした。理由としては近くに血痕があったからだ。何かしらの手がかりはあるだろう

倉庫内

「こいつは広いな～」

ロビンソンが言う

「ああ、それに荷物が多すぎる。影から出てくるかもしれない。気をつけろよ」

私が言った

「ああ、解ってるよジョン。」

そう言って先に進む、すると天窓を突き破って銃弾が中に入る

「ふむ・・・・アネットが先制したらしいな。気をつけろよ」

「了解」

そう言って先へと進む

～数分後～

「ん？ジョン、あそこに何かあるぞ？」

ロビンソンが言う

「何？」

私はそう言って言われた方を見る。そこには、大型の木箱が入っていた

「まるで、軍の兵器箱だな。こりゃ」

ロビンソンが言う

「そうだな・・・・開けてみるか」

そう言って近くにあったバールを手にして箱を開けようとする

「ふん！」

バキャバキャといって蓋が外れた

「ん？なんだ、こりゃ」

ロビンソンが言った

「こいつは・・・・・・行方不明になっていた。ソ連の核弾頭か！？なんで、こんなところに！？」

私が言った。それはソ連がまだ、存在していた頃キューバ危機の後、核弾頭が三基行方不明になるという事件が起きた。それは、表沙汰にはされていない。

「なに！？核弾頭だと！？」

「ああ、お前も聞いたことがあるだろ？消えた核弾頭」

「ああ、俺も軍に入ってからだけど・・・・・まさか、これが！？」

「ああ、こいつは間違いない。ソ連製の核弾頭だ。年号も合っている」

「おいおい、冗談だろ!?なんで、こんなところにあるんだ?」

「そいつは分からんな。まさか、アンダーソンの目的はこいつの奪取か?」

「そういえば、ここのゾンビは服装が今までのと違うな」

ゾンビの服装はアーミー仕様だった

「よし、他にも調べてみよう。何かあるかもしれない」

そう言って私たちは捜索を続けるのであった

～小ノ牧・則子視点～

「こいつは・・・・・・護衛艦か?」

私が言った

「ええ、でも海上自衛隊の護衛艦にしては型が違うように思えますけど・・・・」

則子が言う

「そうだな。しかし、なんか作られて途中で終わった感じだな」

私が言った

船の周りにはシートが被せており、長年使っていないことが分かる

「そうですね。調べてみますか？」

「ああ、そうだな。手分けして探そう。則子はそっちの事務所らしきところを調べてくれ。私は倉庫の方を調べてみる。船はとりあえず、後回しだ」

「了解です」

そう言って私たちは分かれた

「さて、こっちの倉庫には何があるかね？」

そう言って倉庫のドアを開けた

「おやおや、武器庫かなんかかね？」

倉庫の中は思ったより広かった。辺りには船に搭載する機関砲などが置かれていた

「ふ～む、ここら辺には書類とかはなさそうだな。」

そう言いつつ捜索していくのだった

～事務所～

「う～ん、何にもないわね～」

私は事務所の方を調べていた。隊長は何か見つけたかしらね？

「さて、他にはないかな～？」

そう言って山積みになっている書類を調べる。中には決算の報告書や注文表が置いてあった

「う～ん、ここら辺の注文表しかないわね～手がかりになりそうな物はないわね～」

そう言いつつ私は事務所内を調べていくのだった

～秀治・薫視点～

俺と薫さんは俺の家である空母内を調べる事にした

「う～ん、ＥＭＰ攻撃のせいか、中は薄暗いな・・・・・」

俺はモスバーグＭ５００を構えながら言った

「ご両親は大丈夫かしらね？」

「分かりません。でも、探すしかないです」

「そうね。じゃあ、デッキの方から調べてみる？」

薫さんが言う

「ええ、そうですね」

そう言って俺らは進んでいく

途中、ゾンビ共がいたがすぐに始末してデッキに行った

「親父！お袋！」

俺は大きな声で叫びながらデッキに入った。だが、そこに親父とお袋はいなかった

「ここにはいないみたいね・・・・・・」

薫さんが言う

「後、他に行きそうなところは・・・・・・・武器庫にしている機関室ですかね」

「じゃあ、行ってみよ！」

そう言って俺らは下の階層に行ってみた

～機関室～

「ん？・・・・こいつは・・・・」

俺が床を見て言った

「血痕・・・・・・ね。奥に続いているわ」

薫さんが言う

「まさか！？」

「秀治君、まだ決まったわけじゃないわ。最後まで希望を持つのよ」

「はい・・・・・」

そう言って俺達は奥へと進んでいく

血痕はだんだんと分かる物になってきていた。

「この先が武器庫です」

「そう。覚悟はいい？」

「はい！」

そう言って一緒に突入していく

「「！！」」

中は血だまりができていた。そこには男女の遺体が横たわっていた

「親父・・・・・お袋・・・・・・・」

秀治が言う

「・・・・・・・ご両親？」

「・・・・・・はい」

「・・・・そう」

薫はそう言って二人に近くにあった布を被せて黙祷する

「あら?秀治君、手紙が置いてあるわ」

近くの破壊されたロッカーの中に真新しい手紙が置いてあった

「お袋の字だ。」

秀治はそう言って中身を見た

~秀治への手紙~

秀ちゃん、もしこの手紙を見てる時は私たちはもうだめな時よ。あの事件が起きてからしばらくはここにいてご近所の人たちを匿ってたんだけど、ある日、見た事もない人たちが現れていきなり私たちを攻撃してきたわ。反撃したんだけど、ほとんどの人がやられちゃって、明さんも負傷したのなんとか空母の武器庫に逃げ込んだんだけれど、どっかからか化け物どもも入って来ちゃって避難民もその襲ってきた人たちもやられて混乱しちゃったの、私も一発もらっちゃって治りそうにないわ。秀ちゃん、あなたはどうか生き延びてね。これは私と明さんからの約束よ

後、修ちゃんに伝えて、さっき言った襲ってきた人たちは修ちゃんのこと知っているみたいよ。どうか、気をつけて・・・・・・

「お袋・・・・・・グスッ」

秀治はその場にへたれこんだ

「秀治君!」

慌てて薫が抱える

「これじゃあ、生きている意味がないよ・・・・親父、お袋」

そう言って泣く秀治

「秀治君、あきらめちゃダメ！あなたがあきらめたら私はどうすればいいの？あなたに生きる意味無いなら与えてあげるわ！私のために生きて！お願いだから！」

薫は必死に言った

「薫さん・・・・・すみません、少しの間、泣いていいですか？」

「ええ、いいわよ」

そう言って秀治は薫の胸で静かに泣いたのだった

どうするか・・・・？

俺らは今、秀治の家で秀治の両親を捜索しているところだった

～奥の建物～

俺は二階で死体の付近を調べていた

「ここら辺は死体以外何も無い感じかな？」

俺は探しながら言った

「しょうがない。美麻さんと合流するか」

そう言って俺は部屋を出た

～一階～

「美麻さ～ん？」

俺は一階に降りて美麻さんを探した。ほとんどの部屋は調べたので残るは奥の部屋だけである

「美麻さ～ん？」

「あっ修さん」

予想通り美麻さんがいた

「どうだった？何か進展は？」

俺が聞いた

「この金庫がどうしても気になってるんですけどね・・・」

そう言って置いてある金庫を見た

「こいつか・・・・爆破するか」

「は？」

美麻さんは思わず聞き返してしまった。が、その頃には修が金庫のドアにＣ４爆薬を装着していた

「ちょ、ちょっと修さん！いくら開かないからって！」

「大丈夫大丈夫、そら、部屋を出た出た。爆破するぞ」

そう言って修は美麻の体を押して部屋に出た

直後、手元のスイッチを押した。それほど大きくない爆発音と共に金属音が床に落ちる音がした

「完了」

「派手に行きますね～」

美麻さんは苦笑いしながら言った

「何、時間は掛けたくないだろ？それより、中身はなんだ？」

「えっと・・・・・・何かの書類と鍵ですかね？」

金庫の中身は紙と鍵だった

「どらどら・・・・・・新型フリゲート艦設計図書類？なんだ、こりゃあ」

中身を見てみると核搭載可能な大型フリゲート艦の設計図のようだった。

「依頼主は・・・・・・・・アンダーソン？ジョンの雇い主じゃないか。」

「と言う事は・・・・・センチュリオンの社長さんがその設計図の制作を頼んだってことですか？しかも、秀治さんの御両親に」

美麻さんが言う

「多分な・・・・もしかしたら今回の襲撃もそれが目的だったのかもな。とりあえず、ここを出よう。親御さんに聞けば何か分かるかもしれん」

そう言って俺らは部屋を後にした

～中央広場～

中央の広場には避難民が使っていたであろうテントなどが張ってあった。皆はすでに到着しているようだ。

「修・・・・」

秀治は暗い顔をしていた

「秀治・・・・まさか」

「ああ・・・・ダメだったよ。二人は仲良く眠っている」

「そうか・・・・・残念だったな。」

「ああ、それよりお前に伝言がある。母親が襲ってきた奴らはお前の事を知っているらしいだそうだ。」

秀治が言う

「俺の事を知ってる・・・・か。親父の筋だろうな・・・・・全く、息子にまで迷惑かけるとはほんと、困りものだよ」

俺は呆れながら言った

「その言い方だと何か知ってるの?修君」

訓子さんが言う

「ええ、親父の息子だからって誘拐しようとする奴なんざわんさかいましたよ。まっ返り討ちにしたり、琥珀が守ってくれたりしたんで助かってますけどね」

俺が言った

琥珀は自分の事を言われたのか、少し赤くなっていた

「それより、他は何か見つけたのか？」

俺が言った

「じゃあ、我々が、あっちの倉庫にとんでもない物が置いてあったぞ。」

ジョンが言う

「とんでもない物って？」

小ノ牧さんが言う

「核弾頭だ・・・・旧ソ連製の」

「「「「！！！！！！！！」」」」

皆が驚く

「か、核弾頭！？なんで、そんなものが家にあるんだ！？」

秀治が言う

「分からんが、会った事は事実だ。合計で三発あるはずだが、ニ発分だけ無くなってしまっている。持ち去られたんだろう」

「ふむ・・・だとすると、こっちの情報と繋がるか？」

小ノ牧さんが言う

「何か見つけたんですか？」

俺が言った

「ああ、こっちの造船所には作りかけの護衛艦らしき物があったよ。ただ、もう一隻分のスペースがあったんだ。船は無かったがね。」

「だとすると、この設計図とやらは・・・・」

「設計図だって？ちょっと見せてくれ」

ジョンが言う

俺はその場で設計図を広げた

「こいつは・・・・・核搭載型フリゲート艦か！？」

秀治が言う。さすがは、造船技師の息子と言った所か

「依頼主を見てくれ。アンダーソンだ」

「おいおい、マジかよ」

ロビンソンが言う

「秀治はこの事知ってたか？」

俺が言った

「いや、いくら親父の手伝いって言っても東側の造船所は入れてくれなかった。初見だよこんな物は、親父、あんたは何やってるんだよ」

すでにいない肉親に向かって言った秀治だった

「この船、最新鋭の物ばかりだな。１５０ｍｍ機関砲・対艦ミサイル・トマホーク、３５ｍｍＣＩＷＳ・対空ミサイル、ほぼすべての作戦に投入可能だな」

小ノ牧さんが言う

「しかし、これを手に入れた所でどうすると言うんですか？こんな世界になってしまっては意味を為さないと思いますが」

琥珀が言う

「こんな世界だからだ。」

ジョンが言う

「力こそがすべての世界ってことか。それゆえに自分達が頂点に立てるように力の元を取り出したって訳か。このままじゃあ、本当に地獄の黙示録になったっておかしくないぜ？」

俺が言った

そう。強い武器を手に入れるだけで人々はそれに攻撃しようとは思

わない。これが所謂抑止力と言う奴だ。これを利用してセンチュリオンが世界の頂点に立とうとうしているのだろう

「だとしたら、まず仕掛けるとしたらアメリカ軍だな。彼らは全軍をハワイで集結させようとしている。」

小ノ牧さんが言う

「なんで、ハワイに?」

美麻さんが言う

「一番の理由は島だからだろう。それにハワイでは思ったほど、あいつらの出現率が低いからな。そこで軍を集めて本土を取り返そうとしたのだろう。大統領がいないあの国で何ができるかね?」

「だからこそ、センチュリオンの奴らはアメリカ軍に手を出しに行ったって訳か。それによって世界の均衡も大きく崩れるだろうな・・・」

俺が言った

「だが、我々の会社はで来たばっかりで人員はそこまでいないぞ?一個師団ほどにも満たない。そんな状態で攻撃が可能か?」

ジョンが言う

「そこはあれでしょう。避難民とか匿ってその代わりに兵隊として働けとか言ってるんじゃないですか?生き残るためには力がすべてって事を教えるつもりじゃあ」

秀治が言う

「だが、奴らを気にした所で何になる？こちらに危害を加えるとも思えないが・・・・・」

「小ノ牧さん、家は貿易事業の他に裏で傭兵稼業もやってるんですよ。ＯＭＣＲって聞いたこと無いですか？」

俺が言った

「ああ・・・・・イラク方面に拡大している民間軍事会社だったな・・・まさか、そこも・・・・・・」

「ええ、家の事業内ですよ。」

「マジでか！？」

秀治が言う

「まぁ、いざとなったら逃げればいい話ですし、ここから脱出する方法を調べるとしますかね。表にはお客さんが集まりだしたみたいだし」

俺が言った

「？お客さん？」

美麻さんが言う

「外をよ～く聞いてみな」

［アアア～・・・・・］

「「「「「「「「！！！！！」」」」」」」」

「修君、あなた、耳が良いのね」

訓子が言う

「昔から耳は良かったんですよ。それより、増えてきちゃってますからね。何か、対策を考えるとしますか」

そう言って俺らは議論を重ねていくのだった

大火力

俺らは秀治の家でとんでもない物を発見してしまった。なんと、旧ソ連製の核弾頭が見つかったのである。三本の内二本がすでにセンチュリオンの手に渡ってしまったのではないかと思われる。しかし、そこにゾンビ共の大群がやって来た

～門の前～

「で？どうするのだ？修君」

小ノ牧さんが言う

壁の向こう側では奴らのうめき声が大きくなっていた

「う～ん、向こうの数にもよりますけど、こっちの火力で物を言わせるしか方法は無いんじゃないですかね？」

俺が言った

「しかし、修様、こちらにも限界と言う物があります。無駄に撃ち過ぎては今後にも支障をきたすかもしれませんよ？」

琥珀が言う

「そうなんだよな～だからこそ、どうするべきか・・・・・」

「あっそういえば・・・・・」

秀治が思い出したように言う

「どうかしたの？秀治君」

薫が言う

「いや、家の倉庫に確か、とんでもない物があった気がしたんですよね～なんだっけな？」

秀治が言う

「秀治、そいつは使える代物か？」

修が言う

「多分な・・・・本来なら対空用として置いてあった物だから使えるはずだが・・・・・・」

「場所は分かるか？」

「ああ、すぐそこの倉庫に眠ってるよ。車輪も付いていたから陸でも動かせるようにしてあったし」

「行ってみるか。秀治、案内してくれ」

「ｏｋ、把握」

そう言って俺達は倉庫の方に向かった

～倉庫～

「ここだ」

そう言って扉を開ける。無論、俺達も手伝う

鋼鉄の扉がゆっくりと開いて行く

「おお・・・・・こいつは・・・・・」

俺が言う

「久方ぶりに見ましたよ。この車種は」

琥珀が言う

「いやはや、これを船に取り付けようとは・・・・・」

小ノ牧さんが言う

そこにあったのは九六式二十五粍高角機銃だった。こいつは旧日本海軍が使っていた対空機関銃である。九六式二十五粍高角機銃はフランスのオチキス（ホチキス）製２５ｍｍ機関砲を基に１９３５年（昭和１０年）に開発されたガス圧作動方式の対空機関砲である

「こいつはどうしたんだ？」

俺が言った

「ああ、船の注文者の中に大の日本軍が大好きって言う顧客がいてな。それ用のために作った機銃なんだ。生産ラインは家が全部請け

負ってる」

秀治が言った

「しかし、こいつはまた、年代の古いのが来たな。弾は大丈夫なのか？」

ジョンが言う

「ああ、それなら修の会社が請け負ってくれたんで、何とかなりましたよ。その顧客、実弾も用意してくれって言うもんだから困ったもんだったよ」

「だけど、それを可能にしたんだな？」

俺が言った

「そう言う事、さっこいつを動かしちまいましょう！」

「分かった！では、車で運んでしまうとしよう。ハーフトラックを持ってくるよ」

そう言って小ノ牧さんが動いた

「秀治、弾薬類はどこにある？」

「あそこの奥にフェンスで囲まれた場所がある。そこに置いてあるぜ。薫さん、空母の武器庫から武器を持って来ちゃいましょう」

「分かったわ！」

「秀治君、私も手伝うよ」

そう言って秀治、薫さん、ジョンの三人は空母の方に向かって歩き出す

「じゃあ、ロビンソン、弾薬箱を運ぶの手伝ってくれ」

「了解」

そう言って俺とロビンソンは弾薬庫の方に行った

～一時間後～

俺らはすでに戦闘準備が整った。表にいる奴らの声が増して来ているのが分かる

「秀治、そっちの機銃は任せたぜ？」

俺はリンカーンに乗りながら言った

「任せろよ。こいつは俺以外で使えた奴はいないんだ。甘く見て貰っちゃあ困るね」

「それでこそ、秀治だ。アネット、門の金具を撃ってくれ」

「・・・・了解、指示に従う」

そう言ってアネットはバレットで門の留め具を撃った。弾は手甲弾を使用している。響きの良い金属音と共にゆっくりと門が倒れてい

った

数秒後、ゾンビ共が一斉に中に侵入した

「撃てーーー！！！」

俺はそう言ってリンカーンの主砲を撃った。１３０ｍｍ滑腔砲が火を吹く、それと同時に各車両に載っている重火器が一斉に火を吹き弾幕を作る。敵を一切近づけない弾幕となっていた

「おらおら、どんどん来やがれ！！！細切れにしてやる！！！！」

秀治が例の機銃を使いながら言った

「左舷、弾幕薄いよ！なにやってんの～！！」

ジョンがロビンソンに向かって言った

「ジョン！これでもせいっぱいだよ！！後、どっからそのネタは仕入れたんだ！？」

ジョンはＭ６０でばら撒きながら撃っていた

「企業秘密です！キラッ☆」

（ウゼェ・・・・）←全員

「美麻さん！Ｃ４を起爆してくれ！」

「はい！」

そう言って美麻さんが手元のスイッチを押す、次の瞬間、門の前に設置しておいたC４爆弾が一斉に爆発する

「汚ねぇ花火だ。」

小ノ牧さんが言う

ゾンビ共は哀れとしか言えない、ただの的になっているのだから・・・・

「作者、そこを気にしちゃあいけないよ」

［へいへい］

「修さん、誰に言ってるんですか？」

同乗している美麻さんが言う

「気にするな。それより、数はどんな感じだ？」

「えっと、離れた所に団体様がいますけど、門の周辺にはそれほどでもないですね。ここを出ますか？」

美麻さんが言う

「そうだな・・・・ここを出るとしますか。皆！脱出するぞ！それぞれの車両に乗れ！先陣は俺が行く！」

そう言ってリンカーンを動かす、秀治達もハーフトラックの方に乗

り込んだみたいだ

俺は勢いよく表に出て近くにいたゾンビ共を胴軸機銃で撃ち殺した。
この機銃もＭ２と同じタイプなので威力はお墨付きだ

数秒後、皆も準備ができたらしく次々と表に出てきた

「よし！このまま、高速に乗るぞ！」

そう言って俺達を乗せた一行は街を出るべく高速に向かって行った

奴らの陰謀

俺らはゾンビの包囲網を脱出して、高速道路の方面に向かった

～大型工場付近～

俺らはいち早く高速に出るため大型工場付近を通っていた。

「こんな所に大きな工場なんかあったけ？」

俺が言った

「さぁ？私はこんなの見たこと無いですけど、なんの工場ですかね？」

美麻さんが言う

大きな工場に隣接して巨大な貯蔵施設があった。化学工場に置いてあるような奴

「それにしてもでかいな～・・・・・ん？ありゃあ」

俺が言った

工場の影から一機の大型ヘリコプターが飛んで行くのが見えた。ＣＨ－５３シースタリオンと呼ばれる機体だ。主にアメリカ軍が使用している

機体の下にはコンテナがぶら下がっており、何を輸送していた

「なんだ?どっかの軍か?」

俺が言った

「軍にしては機体が黒くないですか?気味が悪い・・・・・」

美麻さんが言う

そう、機体が真っ黒に染められているのだ。夕日によってそれが強く強調されている。

「ああ、気持ち悪いな。あんな色、どこの軍でも採用されてないぜ。小ノ牧さん」

俺は無線機で小ノ牧さんを呼んだ

「なんだ?」

「前方の工場の上にヘリが飛んでいるんですが、見えますか?」

俺が言った

「ああ、見えるが、どこの軍だ?あんな色は見たこと無い」

小ノ牧さんでも分からないようだ

そう言いつつも俺らは街を出るべく高速を目指していく

〜シースタリオン機内〜

「こちらはベイカー、ＨＱ聞こえるか？」

ヘリパイロットが言う

「こちらＨＱどうぞ」

「例の”ブツ”は手に入った。繰り返す、例の”ブツ”は手に入った。どうぞ」

「了解、直ちに洋上の空母に帰還せよ。交信終了」

そう言って本部は無線を切った

「しっかし、あのコンテナの中には何が入ってるんだ？」

もう一人のパイロットが言う

「いや、俺にも分からん。ただ、兵器とは言われてるんだ。何かしらの武器なんだろうよ。この騒動を利用して作った新兵器だそうだ」

「へ～まっ俺らには分からん事だしな。あまり、関わり合いたくないしな。あの社長もなんか胡散臭いしな・・・・・」

「そうだな・・・まっこれを運び終えたら一杯やろうじゃないか。良い酒を見つけたんだ」

「おっいいね。帰ったら楽しみだ」

そう言って機内では二人の笑い声が響く、しかし、ロープに吊るさ

れているコンテナの中では”何”かが動いていた

～修視点～

俺達が見ていたヘリはそのまま海の方へと向かって行った

「修さん、あのヘリ、なんか気になりません？」

美麻さんが言う

「確かにそうだが、海の方へ行ったんだぞ。さすがに追跡できないじゃないか。」

俺が言った

「そうですよね・・・・・とりあえずはこの街をお別れして、その先はどうするんですか？」

「そうだな・・・とりあえず、東京付近の山に俺の別荘があるからそこまで行くとするか。それで、今後の事を考えよう」

「そうですね。あっあそこが高速の入口ですね。」

美麻さんがモニターを指さす

高速の入り口には封鎖のためか特殊部隊のバンが止まっていて通れない状態だった

「あれま、封鎖してたのか、関係ないけどね」

そう言って俺は主砲をバンに合わせる

「撃てー！」

砲撃音と共に砲弾が発射され、二台のバンの間に着弾する。爆発が起き、二台のバンはそのまま吹っ飛ばされた

「完了っと」

そう言って料金所を通過する。そして、そのまま高速に入った

～高速～

高速は人っ子一人おらず、廃棄車両までもが無かった

「ここまで無いと逆に不気味だな」

俺が言った

「そうだな。移動しつつも警戒しておこう。」

ジョンが言う

「2～3キロ行った所にパーキングがあるからそこで休憩するか？修」

秀治が言う

「そうだな。一旦、休憩に入ろう。」

そう言って俺らはどんどん、進めて行くのだった

～ハワイ諸島～

「撃て！撃ちまくるんだ！」

一人の兵士が上空に飛ぶアパッチに向かって叫んでいた

その後ろでは陣地と思われる場所にアリス少佐の姿があった

「状況はどうだ？」

アリスが言う

「はっ！敵は依然として攻めて来ており、海岸には奴らの兵器で埋め尽くされています。少佐、航空支援はどうなっていますか？」

現場の指揮官が言う

「本部に有る程度付けると言われたが、正直、全滅させるほどに回せない。ほとんどは本国に置かれているそうだ。」

「そうですか・・・・・・何回まで可能ですか？」

「五回だ・・・五回しか余裕がない。島の反対側から陸軍と海兵隊の一個師団ずつがこちらに応援に来てくれる。それまで、なんとか持ちこたえるしかない」

「分かりました。」

「弾薬の方はどうなっている？」

「はっほとんどが６０％までしかありません。歩兵の数も正直、きついですね。」

「そうか・・・・敵の構成は？」

「敵は、戦車が約２０両、航空機が３０機ほど確認できています。また、装備も一国級です。数が少ない分、こちらが不利ですね」

「なんとかするしかない。ここを失ったらアメリカは消滅するに等しい。なんとしてもそれは避けなければな」

そう言って少佐は表に出る

少し先には未だに戦っている米軍兵士と謎の部隊があり、海上には空母と思しき船が見えていた。

「そうですね。せめて、古知屋貿易の船がこちらに周ってると良いのですが・・・・・叶わぬ願いですね。」

指揮官が言う

「そうだな・・・・・よし、責任は私が持つ、なんとしてもここを守るぞ」

「了解です。少佐、あなたに命を預けますよ」

「犬死にはさせない。私も戦うぞ」

そう言ってＢＡＲを取り出した

「少佐・・・・分かりました。背中は任せて下さい」

そう言って指揮官もＭ４を取り出した

「行くぞ！」

そう言って二人は混迷の戦場へと足を踏み入れたのだった

ヤバくないか？

俺達は高速に入って、最初のパーキングエリアで休憩する事になった。

～パーキングエリア～

「ふぅ～久々だな～」

俺はリンカーンの上で休んでいる。天気は快晴、雲一つ無かった

「それにしても、奴らの目的は何なんだ？それに・・・・あの工場・・・なんかの化学工場だと言う事は分かるんだけどな・・・・・・」

俺は独り言のように言った

「修さ～ん！」

美麻さんの声が聞こえた

「？どうかしたか、美麻さん」

俺は起きあがって言った

「衛星から確認できたんですけど、海上の方に大規模な艦隊が確認できましたよ！」

喜びながら言う美麻さん

「お～それは本当か？小ノ牧さん達にも確認してもらったのか？」

俺が言った

「あっいえ、今知ってるのは、秀治さん、琥珀さんの二人だけです」

「そうか、どれ、見せてもらえるか？」

「ああ、はい、どうぞ」

そう言ってノートパソコンを渡す美麻

「どれどれ・・・・・・」

俺はパソコンの画面を見た

「おい・・・こりゃあ・・・・・自衛隊の船じゃないぞ。」

「？どういうことですか？」

美麻さんが言う

「こいつは・・・・・戦艦ミズーリじゃないか！それにキティホーク級の正規空母までいやがる！こいつはただの軍隊じゃないぞ！？」

俺が言った

「と言う事は・・・・・センチュリオンの会社ですか!?」

美麻さんが言う

「多分な・・・・しかし、こいつらはどこに向かってるんだ?このまま、まっすぐ来たら・・・・・・床主の港に着くぞ。」

俺は衛星を操作して奴らの到着先を読んで見た

「もしかして、さっきのヘリコプターが関係してるんじゃないですか?」

「ああ、だとしたら回収に来たってとこか・・・・・・ミズーリも混乱の最中に奪取したんだろう・・・しかし、今も使われているキティホークが戦列を並べているのはどういう事だ?」

「まさか・・・・アメリカ軍の中でも亀裂が走ってると言うことですか?」

「だとしたら、最悪だな・・・・少佐は無事なんだろうか?」

俺は空を見上げて軍に戻っている少佐を按じた

「とにかく、こいつらの動きが分かれば先手はできる。しばらくは様子見をしよう」

「待って下さい。なんで、戦う理由があるんですか?私達はまだ、攻撃を受けてませんよ?」

美麻さんが言う

「だが、こいつらの動きはどう見てもここの侵略だろう。ここら辺には家の会社に関係してる所が多いからな。そこが使えるとなれば話は別だ。一般物資から軍用物資まで何でも揃う大型スーパーみたいなものだ。」

「そんな・・・・」

美麻さんは驚いた表情で言った

「だからこそ、この地方を乗っ取って、そこから世界にでも飛躍するんじゃないか?まぁ、目的は分からんがね・・・親父、お袋、あんた達ならどう切り抜けるんだ?」

そう言って俺は空を見上げたまま動かなかった

~その頃、ハワイ諸島~

ハワイでは未だに激しい銃撃戦が続いていた。

その戦闘に身を投じるアリス少佐の姿があった。

「ほら、戦闘はまだ、続いてるんだ。しっかりしろ」

近くにいた兵士に呼びかける

「しかし、少佐　戦況は一向に変わりませんよ!?このままでは持ちこたえられません!空爆の支援も受けられませんし!」

そう。空爆を要請したのだが、海上に有る対空専用のフリゲート艦

が陣取っていて要請しようにも要請できないのだ。さらに、こちらに向かって来ている陸軍と海兵隊は途中の道が分裂されており遠回りを余儀なくされていた。そのため、到着は二日ほど遅れてしまっている

「だが、我々が諦めてしまってはどうしようもないのだぞ！踏ん張るんだ！神の御加護は我々に有る！」

少佐が言う

「わ、分かりました！頑張ります！」

そう言って兵士は再び銃を持って射撃をするのだった

（しかし、戦況は圧倒的に我々の方が不利だ。どうすればいい？）

少佐は撃ちながら考えていた。その時

「うっ！？」

少佐の方に流れ弾が当たってしまい、撃てなくなっていた

「クソ・・・・・ここまでか・・・・」

と諦めかけたその時、海上にあった敵空母が突然、爆発を起こし轟沈し始めた。

「な、何が起こったんだ？」

少佐は驚きを隠せないでいた。他の兵士も敵兵士も動揺を隠せない

でいた。

それとは別に海上の敵艦船が次々と爆発、轟沈し始めたのだった

「少佐！あの船からです！」

一緒に付き添っていた軍曹が言った

「ど、どこの船なんだ？あんな船を所有してるなんて・・・・・」

離れた所にその船はあった。遠くからでも確認できるほどの大きさを誇る船を横に繋げた双胴戦艦がそこに有った。他にも巨大空母、フリゲート艦など、一個艦隊ほどの戦力が並んでいた

「よし、今こそ好機！通信長！爆撃要請だ！」

少佐が言う

「りょ、了解！」

そう言って通信長が本部に無線送信する。

数分後、上空にＡ－１０サンダーボルトとＦ－４戦闘機がやって来ていた

「よし、無線を貸せ」

そう言って無線を借りた少佐

「こちらは海兵隊アリス少佐だ。聞こえるか？」

「こちらはパパ・ベアリーダー、感度良好だ。どこに落とせばいい？」

「海岸一帯にプレゼントを差し上げろ。塵も無くな」

「了解！パパ・ベア交信終了！」

そう言って無線を切った。

数秒後、Ａ－１０からＭａｒｋ７７爆弾が落とされ、火の海と化す、さらにＦ－４から空対地ミサイルが発射され、敵戦車に命中した

「いいぞ！もっとやれ！」

他の兵士が言う

「よし、諸君！今こそ、好機だ！私に続け！」

そう言うと他の兵士も雄叫びをあげながら敵を撃破していくのだった。

数分後、決着は着いた。もちろん、アメリカ軍の勝利である

「やったぞ！！俺達の勝ちだ！！」

他の兵士も歓喜の声を上げた

「通信長、無線を貸してくれ。」

少佐が言う

「どうぞ」

「ありがとう。こちらは海兵隊アリス少佐だ。先程はありがとう、よかったら旗艦の名前を教えてくれないか？」

少佐は所属不明艦に対して言った

「こちらはＯＭＣＲだ。人助けができて良かったよ。そちらにけが人はいるか？」

不明艦はＯＭＣＲと言うらしい

「多少のけが人はいますが、大したことではありません。お気遣いありがとうございます。良かったら、お礼をしたいのですが、そちらに向かってもよろしいですか？」

「丁度、燃料が切れそうになってるんだ。分けてもらえると助かる」

「了解です。では、迎えのヘリを寄越すので、こちらに向かって来てもらえますか？補給艦は我々が行います」

「すまない、助かる」

数分後、迎えのヘリが中継基地にやって来た。そこで降りた人物に驚いた

「あ、あなたは！！古知屋社長！？」

ヘリから降りてきた屈強なおっさんに向かって言った

「おや、私の事を知っているとは顔が広くなった気分だな」

そう。この屈強なおっさんは世界の古知屋こと古知屋貿易の創設者であり、修の親である古知屋（こちや）　大蛇（おろち）だ。右目に眼帯をしている。そして、スーツに似合わんばかりの傷跡が特徴的だ。

「ええ、知ってるも何もアメリカ軍は元より世界中の軍隊と取引している大企業の社長ではないですか！？それにしてもなぜ、あんな所におられたのですか？」

少佐が言う

「初めは欧州の方にいたんだが、あちらの方も例の騒ぎがあってね。妻共々逃げ帰って来たってわけさ。それに世界中で起きていると言うんだから驚きもあるしな。それに、日本にいる息子が気になってね。親馬鹿と言うのかな？」

大蛇が言う

「息子さんなら無事ですよ。強く生きていらっしゃいます」

少佐が言う

「本当か！？息子は今、どうしている！？」

大蛇が言う

「私は途中までしかいられなかったのですが、床主小学校を出た後

なので、その先は分かりません。しかし、武装もしっかりしていますし、仲間も付いていますから大丈夫だと思います」

「そうか・・・あいつは無事なんだな。香苗も喜ぶぞ。」

「そういえば、奥様は？」

「ああ、あいつには船の総指揮を任せている。何分、軍隊育ちだからな。問題は無い」

「そうですか・・・これから、どうするんですか？」

「燃料を補給した後、日本に向かうさ。息子とは別に気になる事があってな。」

「気になる事とは？」

「実は、センチュリオンと言う最近できた民間軍事会社がこの騒動に乗じて世界を手中にせんとしている。私の会社の多くは地元からの輸出が多くてな。あそこには何でも揃っている状態だ。だから、私は中東に有る私の会社の兵力をすべてこちらに回してきた。アメリカもさぞかし大変だろうな。戦艦、ミズーリが奪われたとの情報が入って来ている」

「なんですって！？」

少佐は叫んだ

「事実だ。後で情報部に確認して見るといい、先程、襲撃してた奴らもセンチュリオンの部隊だ。まだ、攻撃してくるかもしれん。気

お付けなさい」

「了解です！貴重な情報ありがとうございます！」

そう言って敬礼する

「いやはや、若いのは良い事じゃの。私まで気合いが入ってくる。」

その時、大蛇の腰に刺さっていた無線がなる

「おろちゃ～ん、準備ができたわよ～」

奥さんである香苗の声だった

「ああ、分かった。では、私はこれで失礼させてもらうよ。」

そう言って海軍帽をかぶる大蛇

「はっ、ご武運を祈っています！」

そして、大蛇を乗せたヘリは飛び去ってしまった

「修君・・・・お父様はお元気よ。早く会えるといいわね。さっ情報を確認してみなきゃ！」

そう言って少佐は本部の方へと歩き出した

お前ら覚悟は良いか？

俺らはパーキングで一時休憩を行っていたが、美麻さんのパソコンからセンチュリオンの奴らがこちらに進行しているのが分かった

～パーキング～

「これは、非常にまずい事になったな。日本政府も機能していない今、陥落するのは火よりも明らかだ。」

パソコンを見ながら小ノ牧さんが言う

「でも、あっちの戦力は絶大、こっちはＭＢＴ、ＡＰＣ、ハーフトラックだけだぜ？それこそ、ロシア軍でも呼んでこないと、勝てないぞ」

秀治が言う

「確かにね・・・・過激派でも生きてりゃあ話は別だけど・・・・・」

訓子さんが冗談交じりに言う

「訓子～過激だよ～」

薫が言う

「少佐に連絡して見るか？」

俺が言った

「試しにか？」

「ああ、」

そう言って俺は武器庫から回収してきた置き用の無線機で連絡して見ることにした

「こちらは、ＰＭＣ誰か、聞こえるか？」

俺が言った

「・・・・こちらは・・・・メリカ軍・・・・・周波数を１８０．５に・・・・せよ」

繋がったようだが無線があってないようだ

「了解・・・・・・今、変えた」

「おお、聞こえるぞ。こちらはハワイ諸島所属のハワード・ダン軍曹だ。そちらは？」

「こちらは日本の古知屋貿易会社の息子の古知屋　修と言う者です。」

「何！？古知屋社長の息子さんか！！」

「ああ、はい。どうかしたんですか？」

「実は・・・・・」

俺はハワイ諸島で起きた事を聞いた

「親父とお袋が・・・・・」

「ああ、今は日本に向けて去って行ったよ。時期にそちらに到着するだろう。それと、センチュリオンの件は古知屋社長から聞いたからな。横須賀にいる第七艦隊を回させよう。そちらの方が近いはずだ。」

ダン軍曹が言った

「しかし、あいつらの方が到着するのは明白です。どうすればいいですか?」

「う〜む、ちょっと待っててもらえるか?他と連絡して見る」

そう言って無線を切った

「どうだった?」

小ノ牧さんが言う

「横須賀の方から援軍を回せてもらえるみたいです。でも、奴らの方が到着するのは明らかだって言ったら他のとこに連絡を入れて貰えるみたいです」

俺が言った

「そうか・・・・しかし、奴ら以外にもゾンビの影響もあるぞ？」

「そうですよね・・・・・せめて他の生存者が少しでもいてくれたら助かるんですけどね・・・・・」

そう、ゾンビ共にも警戒を解いてはいけない。奴らの相手をしている時に襲われたらシャレにもならないしな。

「とりあえずは移動しながら考えるとしますかね」

俺が言った

「そうだな。訓子、通信長をやってくれ。」

「了解です」

そう言って訓子は席に着いた。俺らはそれぞれの車両に乗り込み移動を始めた。

「さぁ、出発だ」

そう言って俺らはパーキングを出た

～数分後～

俺らは未だに誰もいない高速を走っていた

「ん？なんだ、ありゃあ」

俺は高速の先に有る物を見つけた

「美麻さん、あれが見えるかい？」

俺が言った

「・・・・コンテナですか？」

そこには道路を塞ぐように大量のコンテナが置いてあった

「なんで、こんなにあるんだ？」

秀治が言う

「さぁ・・・・この感じは嫌な予感するな・・・・・・・・」

俺が言った

「よして下さいよ。縁起でもない」

美麻さんが言う

「一旦、高速を降りるか？」

ジョンが言う

「そうだな・・・・・・」

その時だった。コンテナの一個が扉を開けた

「おい、扉が開いたぞ」

秀治が言う

「俺の予感が当たっちまうかもな・・・・・・・全員乗車！！」

俺が言うと皆はすぐさま車両に乗り込む、その数秒後、中からゾンビ共があふれ出てきた

「マジかよ！！修の予感が当たっちまったな！！」

秀治が言う

「お前ら覚悟はいいか！？」

そう言って俺は胴軸機銃（ＨＴＭ）で射撃を開始する。ヘビーなので一体ではなく二体三体と貫いて行く。他の車両に載っている重火器も火を吹いた

「皆！後退しながら射撃だ！」

俺が無線機で言った。皆は後退しながら射撃を続ける。流れ弾が当たったのか、他のドアも開いており中からゾンビ共がやって来ていた

「こいつら、どっからきやがったんだ！？」

ジョンが言う

「とにかく、後退だ！撃ちながら後退だ！」

俺が言った

そのまま後退しながらゾンビ共を撃退してく俺達だった

～太平洋上～

「はっ！？」

香苗が気づいたように言う

「どうした？香苗」

大蛇が言う

「修ちゃんの声が聞こえた気がする！」

「ふむ・・・全速前進！！全艦、速力を最大にせよ！」

大蛇の乗る船が大きな汽笛を出すと周りの船が同時に速力を上げる

「修、もうしばらくの辛抱だぞ。」

大蛇が海を見ながら言った

ＯＭＣＲの艦隊は猛スピードで日本を目指すのだった

予想外の救援

俺らは高速で誰が作ったか分からないバリケード兼罠によって嵌められてしまった。コンテナの中からは大量のゾンビどもがやって来ていた

～高速パーキングエリア付近～

俺らは後退射撃を行いながらパーキング付近までやって来ていた

「修！入口が塞がれてんぞ！！」

秀治が言う

俺達が最初に入って来ていた高速の入り口は先程と同じくコンテナが積まれており、周辺にはゾンビ共が徘徊していた

「クソ！最初はいなかったのに！」

俺が言った

「修君！こっちのゾンビ共は私達とジョン達で引き受ける！君達は前方のゾンビを頼む！」

そう言って小ノ牧さん、訓子さん、ジョン、アネットが後方のゾンビに向かって行く

「よし！ここで、撃破をするぞ！遠慮はいらねぇ！！やっちまえ！！」

俺が言った

秀治はハンヴィーのＭ１３４ミニガンでありったけ撃ち、俺はリンカーンの主砲で一気に吹っ飛ばす、薫さんはＭ７０で足を撃ち抜き、美麻さんはＭ１６で撃ち、琥珀はジャッカルで規格外の弾を撃ちだす、まさに弾幕と言った方が正しい

「畜生め・・・こんな時、お助けマンがいれば最高なんだけどな・・・」

そう言いながら撃って行く俺達だった

～床主上空～

床主市上空に一機のＣ－１３０が飛んでいた。機体には蛙と蛇が描かれていた

「艦長、もうすぐ床主上空です。」

パイロットが言う

「フム、どれどれ・・・・」

機内には一組の男女がいた

「久しぶりの床主ね～」

「香苗、はしゃぎ過ぎだぞ。まぁ、私も言える立場ではないがな」

そう言って笑う大蛇

「おろちゃんだって、本当は自分の息子に会えるのが楽しみなんでしょ？」

香苗が言う

「ははは！！お前には敵わないな。ああ、そうさ」

大蛇が笑いながら言った

「艦長、真下の方で爆発がありましたよ？ご覧になられますか？」

副長が言う

「どれどれ・・・・高速で生存者が戦っているのか・・・・」

窓から外の状況を調べていた

「あら？・・・あの戦車・・・・・・確か・・・・・」

香苗が気づいたように言う

「どうしたんだ？香苗」

大蛇が言う

「あれって、米軍で開発した新しい戦車じゃない？確か・・・・・ＸＭ１０２とか言う」

「ああ、そんな物があったな。と言う事は戦っているのは米軍か？」

「どうなんでしょうね？機長さん、この機体にカメラ機能はあるのかしら？」

香苗が機長に聞いた

「はい、ありますよ。最近取り入れた最新型なので地上の様子が鮮明に捕えられます。そこのＰＣから見られますよ」

機長が説明する

「どれどれ・・・・・」

香苗は慣れた手つきでパソコンを開いてカメラを接続させた

「どうだ？香苗」

「おろちゃん、修ちゃんがいたわよ！！」

香苗が言う

「なんだと！？」

「今まさに、高速で戦ってるのは修ちゃんよ！！ほら！！」

そう言ってパソコンを見せる香苗

「本当だ！！」

パソコンの画面には修が丁度、戦車から出てＭＩＮＩＭＩで銃撃を開始していた

「私、こっから降りる！降りて修ちゃんに会う！」

そう言って香苗はパラシュートを抱える

「分かった！機長！沖合にいる要塞に連絡しろ、戦闘機を出せ、それから指揮はモンゴメリに任せる！行くぞ香苗！！」

そう言って大蛇は身の丈ほどの分厚い刀とニ連装式のマグナム銃を装備する

「了解！」

そういう香苗もライフル銃と鮮やかに装飾された日本刀を持った。しかも性格が変わっている。

そして、貨物ハッチを開けた。機内に警報音が鳴り響くが二人は気にしていない。

「行くぞ！！Ｉ　ｃａｎ　ｆｒｙ！！」

そう言って二人は大空に落下していく

「やれやれ・・・・あの二人は息子になると周りが見えなくなるな・・・・」

機長は苦笑いしながら機体を旋回させるのであった

～戻って、高速～

高速では苦戦を強いられていた。主砲の弾は底をついてしまい、修も外に出ざるを負えなかった。

「修！こいつはきついな！！」

秀治が言う

「全くだ！アラモだぜ！」

俺はＭＧ４２を持ち出して言った。こいつはドイツ軍で使われている軽機関銃で通称電動ノコギリと言われている。何故かって？そりゃあ、うるさいからに決まってるっしょ

「小ノ牧さん！そっちはどんな感じですか！？」

俺が言った

「こちらも少々キツくなってきた！終わりは無いのかね！？」

「ああ・・・本当に終わりが見えないぜ・・・・まさか・・・・詰んだか？」

とそんな時だった

「イーヤッフウウウ！！！！」

上空から声が聞こえて来て前方にいたゾンビ共が衝撃を受けて吹っ飛んだ

「な、なんだ!?」

秀治が言う

「これは・・・・まさか・・・・・」

琥珀が言う

「ああ、琥珀の思ってる通りだと思うぜ・・・・・」

俺が言った

すると、後ろの方でも爆発が起きた。振り向くと小ノ牧さん達の相手をしていたゾンビ共が燃えていた。

「修、元気にしてたか?」

「ああ・・・・もちろんさ。親父」

「えっ!?修さんのお父様ですか!?」

美麻が言う

「話は後だ、今は目の前の敵共を滅殺するぞ」

そう言って巨大な刀を抜いて唾元に付いているエンジンを稼働させる

「さぁ、宴を開こうぞ。」

そう言って付近にいたゾンビを切る。すると、切られたゾンビは火だるまになって絶命した。美麻さんは何が起こったか分からない状態だ

「な、何が起きたんですか!?」

驚く美麻さん

「親父の剣は特殊でな。親父自身が作りだした剣なんだ。製造方法は知らない」

「そうなんですか・・・・・」

美麻さんが言う

「にしても、お前の親父、最強だな・・・・・一人で無双をやっちゃってるぜ・・・・・」

秀治が言う

「今の内に爆薬でも仕掛けるか・・・・・秀治手伝え」

「ｏｋ把握」

そう言っていそいそと高速に爆薬を仕掛ける

～数分後～

「親父!戻って来てくれ!爆破する!」

俺が言った

「了解！」

そう言って大蛇はすぐさま修の所に戻った。

「終わりだ！！」

そう言って爆破スイッチを押した

すると、爆発が起き、高架橋である高速の一部が崩れて渡れなくなってしまった。そこにゾンビ共がどんどん落ちて行くのだった

「ふぅ、こっちは終了だな。そっちは・・・・・」

秀治は言うのをやめた。

「ｂｅａｕｔｉｆｕｌ」

大蛇が言う

そこには香苗一人が立っており、その周りには首を切られたゾンビ共が横たわっている状態が出来ていた。

「お袋、やり過ぎだよ」

俺が言う

「こんなことでやり過ぎとは言わない。むしろ、優しい方だ」

そう言って香苗は刀を納める。次の瞬間

「修ちゃ～ん！！」

性格が変わり、修に抱きつく

「ちょ、やめろって！！皆が見てるだろ！！」

俺が引き離そうとしたが胸に押し付けられた

「いいじゃな～い！久々に再会できたんだから～！」

喜びながら言う香苗

「なんて言うか・・・・破天荒ですね・・・・修さんの御両親」

美麻さんが言う

「ああ・・・俺も大学入ってから知り合っていたからなんとなく分かってはいたがね・・・・」

秀治が言う

～数分後～

「こちらは元自衛隊員の小ノ牧さん、薫さん、母親の知り合いの訓子さんだ」

「よろしく」

大蛇が言う

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

「訓子ちゃん、久しぶり～元気にしてた?」

「はい、こちらは元気にしていましたよ。香苗さんは変わってませんね」

訓子が言う

「もちろんよ～」

「で、こっちが元センチュリオンの傭兵部隊」

「ジョン、久方ぶりだな」

「ええ、大蛇社長もお元気で何よりです」

ジョンが言う

「で、後は、俺の彼女　古城　美麻さんだ。」

「は、初めまして!!」

そう言って美麻さんがお辞儀をする

「あらあら、礼儀正しい子ね～」

香苗が言う

「うむ、修にも春が来たと言う訳か」

大蛇が言う

「まぁ、こんなものかな?親父、これから、どうするんだ?」

「うむ、沖合に我々の艦隊がいる。まずはそこまで移動しよう。港に向かうぞ」

「了解、それじゃあ、行くとしますかね」

そう言ってそれぞれの車両に乗り込み、その場を後にするのだった

予想外の救援（後書き）

～人物紹介～

古知屋（こちや）　大蛇（おろち）

修の父親で古知屋総合貿易会社の現社長である。一代で大企業に昇りつめた人物。この騒動が起きた時、取引で欧州の方に行っていたが、日本に戻った。外見はスーツを着ているが、屈強な体で右目に眼帯をしている。昔は傭兵稼業をしていてその伝で民間軍事会社も設立している。大蛇が所有している兵器はすべて、大蛇の傘下にある工場で作られたオリジナルの兵器でそれを元に艦隊を作りだしたセンチュリオンの社長とは知り合いらしいが詳しい事は分からない

武器は斬馬刀改とニ連装のマグナム銃（ポセイドン）を持っている

古知屋（こちや）　香苗（かなえ）

修の母親で古知屋総合貿易会社の副社長である。普段はおっとりしていて優しい母親で、経理、財務関係を一人で行えるほどの腕を持っている。もちろん、他の部下にも教えてはいるが・・・しかし、武器を持つと性格が急変して冷酷な戦士へと変わる。その昔、傭兵稼業を長年行っていたため、どうしても武器を持つと裏の性格になってしまうらしい。それが今の悩みらしい。最近はファッションにもちょいちょい手を加えてるらしい。

スリーサイズは上から８０、５５、６０らしいが、知っているのは大蛇と琥珀ぐらいである。

武器は装飾された日本刀（紗枝）とスコーピオン（サブマシンガン）を使う

なんというか・・・・ある意味で最強夫婦になっちゃったな・・・・・まぁいいか！

救難信号

俺らは親父たちと合流する事が出来た。そして、今は再び床主港に戻っている途中である

～大通り～

「親父、センチュリオンの奴らとやり合うのか？」

俺が聞いた

「ああ、もちろんだ。あそこの社長とはちょっと揉め事があってな。あっちはそれを恨んでいる。まぁ、こう言う職業柄、トラブルは付き物さ。」

大蛇が言う

「でも、あっちは戦艦とかあるんですよ？それに強襲揚陸艦とかも衛星で確認できましたし、その人たちはなんの目的で動いてるんですか？」

美麻が言う

「君が言う事は最もな事だ。奴はこの混沌とした世界で世界の頂点に君臨し誰にも逆らえない国を作ろうとしているみたいだ。そのために機会を待った。その結果がこれだ」

そう言って指をさす。辺りにはゾンビ共の死体が転がっていた

「この混乱した世界なら誰にも邪魔されず、計画を進められるからな。表向きには救助と言う形にしているが、その裏で難民に兵士になれと強要させている。それに加えて核弾頭と来たから驚きだ。今や核を撃てると言ったら米国か中国、ロシアのどれかしかあるまいが、ロシアは全滅、中国は多くの市民の救助に当たっている。そして、米国も大統領、副大統領が行方不明となっている。」

大蛇が説明をする

「でも、親父、米国ならまだ、将軍は生きてるはずだろ？だったら撃てるんじゃないのか？」

俺が言った

「ああ、その通りだ。だが、米軍も全体の7割が通信途絶又は全滅という報告が入っている。そんな状況で核ミサイルが撃てると思うかね？答えはＮＯだ。ミサイルを撃つにしてもそれまでに準備がいるだろうし、何よりそこにいる人間がちゃんとした奴かどうかも分からん、あの化け物共みたいになっている可能性だってあるしな。実際、最初のミサイルが撃たれた時、迎撃に出ていた米海軍の艦艇に化物が搭乗していたようだ。そのせいでクルーは全滅、ただの鉄の棺桶になった」

「それは、本当ですか？大蛇様」

琥珀が言う

「ああ、米軍に直接聞いたから間違いない。どこに行ったって安全が保障されている訳じゃないしな。話を戻そう。あいつらは持っている軍事力を使って世界を乗っ取ろうとしているみたいだしな。だ

からこそ、ここ、床主の力が必要になった訳だ。」

「つまり、ここにある大蛇さんの会社を当たるだけ当たって物資、兵器を盗み出し、それを元に世界を掌握する。と言うことですね？」

美麻が言う

「さすがだな。その通りだ。だが、奴らは我々にも攻撃を仕掛けてくる。これには絶対の理由がある。」

「一つは親父や俺と言った邪魔者を消し去ると言う訳か」

俺が言う

「ああ、そうだ。奴にとって俺達は障害の何者でもない。真っ先に消そうとするだろう。一部の情報だとこの化け物共を使って新たな兵器も生み出したそうだ。お前も何度か目にしてるんじゃないのか？」

大蛇が言う

「俺達が目にした事のある？・・・・・・ああ！デカマッチョの事か？」

俺が思い出したように言う

「正解だ。この騒動が起きた時に何体か捕まえて、改造手術を施し、実験に出していたようだ。全く、あいつらは死体とはいえ人間だった事には変わるまい。それに良心が痛まれないのか。信じられないな・・・・」

大蛇はため息を吐きながら言う

「それじゃあ、目標はあの軍事会社を潰して、安全な所でこの騒動が終わるのを待ちますか」

俺が言う

「まぁ、そうだな。生き残りがいれば助けよう。ただし、すべての人間が助けの対象ではあるまい」

「そうですね。この世界なら人間の本性が出ますからね。」

琥珀が言う

「ん?ちょっと待った。こちらは大蛇だ。どうかしたか?」

どうやら艦隊の方から連絡があったようだ。

「こちらはモンゴメリ、大蛇、救難信号だ。しかも、旧世代のモールス信号でだ」

相手はモンゴメリのようだ

「ほう・・・どこからだ?」

大蛇が言う

「床主空港という所からだ。現在、民間人も多数いるようだ。どうする?」

「よし、一回、こっちと合流してそれから救助に向かおう。ホバーを二台、回してくれ」

「了解、さて、俺は紅茶の時間でも楽しむとするかね」

「よし交信終了。修、このまま港に向かうぞ。迎えが来るからな」

「了解」

そう言って俺らは港に向かうのだった

～センチュリオン～

「司令、救難信号が入ったようですが、どうしますか？」

側近の男が言う

「構わん、放っておけ。私達には目的があるんだ。ハワイの二の舞にはさせまい」

「了解です。このまま床主を目指し、そこで物資、弾薬、兵器の回収に専念します」

そう言って部屋を出る側近

「くそ、またしても大蛇に邪魔をされてしまったな。だが、ここからが本番だ。大蛇、そしてその息子である修、貴様らをどん底に落としてやる」

そう言ってアンダーソンは葉巻を吸いながら外の様子を見ているのだった

～港～

「ふぅ、やっとここまで来れたな」

秀治が言う

「ああ、親父の艦隊を見たら驚くぜ？」

俺が言う

「そりゃあ、楽しみだ」

「二人とも、警戒を解かない。敵はすぐそこまで来ている」

母親である香苗がマスケット銃を取り出して言う

そう。港に着いたのは良いが、それと同時にゾンビ共がやって来てしまったのだ。単なる偶然かそれともセンチュリオンの差し金か・・・どっちでもいいが、とにかくこの場を切り抜けなければならなかった。親父は艦隊に連絡して、ＡＣ－１３０をこっちに回してもらったみたいだ。後数分で着くとの事それまではなんとか耐えなければならなかった。

俺はモシンナガンで奴らの脳天に正確にきめていった。

「修、ソ連の超スナイパーに似て来てるぞ・・・・」

秀治が言う

「そうか?まぁ、悪い気はしないな。これで、ギリースーツがあれば、完全にC○Dのシモヘイヘになるだろうな～」

俺が言う

「あっそのゲーム私も知ってます。よく、暇な時にやってました。」

美麻さんが言う

「おっマジでか?俺はスナイパーを使ってたんだが、美麻さんは?」

俺が言う

「私は軽機関銃を使ってましたよ。これでも、サポートは完璧でした」

そう言ってM16でゾンビの額に弾丸を撃ち込んで行く

「へ～、暇な時にでも一緒にやりたいね～」

「私もです!」

「お二人さん、熱く語るのは良いけど、外さないようにしてよね!退路は無いんだから」

訓子さんが言う

「はーい」

「了解です～」

そう言いつつも撃ちこんで行く、親父とお袋は前線に出て無双を繰り広げている

数分後、上空にＡＣ－１３０が到着した

「こちらはハン・ドンソンだ。どこに落とせばいい？」

ＡＣ－１３０から連絡が来た

「えーと、アルファ２、ブラボー６付近に禁止エリアは車両が並んでる付近でよろしく頼む」

「了解、ｆｉｒｅ！」

そう言うと上空から１０５ｍｍ榴弾砲や４０ｍｍ機関砲といった重武装の銃撃が空からゾンビめがけて降って行く。着弾地点付近のゾンビ共は吹き飛ばされていく

「あっ親父たちの事忘れてた。」

俺が言った

「「「「「「「「「おい！！！！！！」」」」」」」」」

全員に突っ込まれた

「おいおい、修、させるなら私達の事を忘れないで欲しいな～」

「本当に・・・・・」

二人は服装はボロボロになっていたが体に被害は無いようだ。どこまでチート級なんだ。この二人は・・・・

「悪い悪い、今度からは気を付けるよ。それより、そろそろ迎えが来るぞ」

「うむ、そうか。では、待つとしよう。ＡＣ－１３０はそのまま上空で待機せよ。化け物共が来たらプレゼントを差し上げろ」

そう言って無線を切った大蛇

海上からホバークラフトがニ隻やってくるのが見えた

「よっしゃ、俺達の勝ちだな」

そう言って迎えに来るホバーを見つめながらいう修だった

大蛇艦隊（前書き）

皆さまあけましておめでとうございます！今年もよろしくお願いします！！

大蛇艦隊

俺らは床主港で親父の艦隊と合流する事になり、ホバーで艦隊の所に向かっていた

～ホバー～

「う～ん、潮の匂いはいいな～」

秀治が言う

「そうですか？私はちょっと苦手です」

美麻さんが言う

「そう、悪いもんじゃないぞ美麻さん。船旅もたまには良い物だ。心が洗われる」

俺が言った

親父の艦隊は床主港から二海里ほど離れた所に停留していて俺らの迎えを待っているそうだ。二人がこの艦隊を見たらきっと驚くな

「もうすぐ、見えてくるはずだ」

親父が酒を飲みながら言う

「親父、酒飲みながら言う事かよ。ていうか、どこにしまってあったんだ？」

俺が言った

「いいじゃないか。修よ、私だってずっと我慢して来たんだ。香苗にお預けされててな。」

そう言って日本酒を飲む親父

「ふ～ん、お袋が承諾したのかよ?」

「ああ、そうだとも」

「何が承諾したですって?おろちゃん」

親父の後ろから突然、お袋が現れた

「か、香苗!?いや・・・これは・・・その・・・・」

「おろちゃん・・・・・・ＯＨＡＮＡＳＩしましょうか?」

にっこりと笑いながら言った。だが、目は笑っていなかった

「ま、まて、香苗、おい!修!助けてくれ!」

親父が助けを求めてきた、どうしますか?

1、助ける

2、助けない

「・・・・親父、自業自得だ。反省せい」

俺はそう言って銃の整備を行う

「さぁ、おろちゃん?ちょっと・・・・後ろの方に行きましょうか?」

そう言ってお袋は親父の襟を掴んで引き摺って行った

数分後、後ろで悲鳴が聞こえたが、その場にいた全員は敢えて触れないようにした

～大蛇艦隊～

「秀治、美麻さん、そろそろ着くってよ」

俺は船倉で寝ていた秀治と美麻さんを起こす

「んあ?もう着いたんですか?」

美麻さんが言う

「ああ、それほど離れていなかったらしい」

「グォ～グォ～」

秀治は未だに寝ていた

「ほら、秀治、起きろよ。起きないと洗濯バサミだぞ～」

そう言って俺は秀治の鼻や口、耳に洗濯バサミを挟んで行く

「ロケット発射まで３・・・２・・・・１・・・ＧＯ！」

そう言って思いっきり紐を引いた。紐は洗濯バサミに付いている。

と言う事は・・・・・

「いでででで！！！！！！」

洗濯バサミを外された秀治は顔を叩きながら飛び起きた

「起きたか？」

「つぅ～・・・・・修・・・・少しは加減してくれよ～」

「やなこった。こうでもしないとお前は起きないからな。ほら、ついて来い、家の艦隊をお披露目するぞ」

そう言って先に外に出て行く

数秒後、秀治と美麻さんが出てきた

「すげー・・・・・・・」

「こんな船、見たこと無いです・・・・・・」

二人は驚いていた。

それもそのはず、大蛇艦隊の旗艦は現代では使われない戦艦を用いている。しかも、横に繋げた双胴戦艦だ。これにより、大排水量を

得て巨大な砲塔を装備する事が出来る。他にも正規空母以上の巨大さを誇る空母や大型フリゲート艦など、世界のどの軍隊を見ても決して見れる事の無い艦隊が揃っていた

「これ全部、大蛇さんの船か？」

秀治が言う

「ああ、そうだ。私の船だ。この艦隊は数年も賭けてやっと出来上がった艦隊だ。実に苦労したが、まさか、こんな形で出す羽目になるとは思わなかったよ。こいつらにはもっと正式な戦争で活躍してもらいたかった」

大蛇はいつの間にか皆の後ろにいた

「でも、戦艦なんて、今の時代じゃあ役に立たないって軍事評論家が言ってましたよ？テレビで」

美麻さんが言う

「軍事評論家なんて言う類の奴らは実際の戦争を見ていないからあんなことが言えるんだ。少なくとも戦艦も立派な戦力となる。用は使い方次第って事さ」

「それで？あれは名前付けたのか？親父」

俺が双胴戦艦を指さして言った

「ああ、すでに決めていたさ。こいつは〝ラーズグリーズ〟だ。」

「へぇ～ラーズグリーズってなんですか？」

秀治が言う

「ラーズグリーズは北方の村にある悪魔とも英雄とも言える怪物だ。まさにぴったりだろ？」

「なるほどな・・・・・・良いセンスじゃないか」

「ははっ修よ。行こうじゃないか」

「ああ、そうだな」

そう言って俺らを乗せたホバーは空母に向かって行った。

～巨大空母～

俺らは空母の中に入って乗艦した

「すげ～中はこんな風になってるんだ。家の空母とは大違いじゃないか」

秀治が言う

「秀治君よ。あの船も中々だっただろ？あれは良い船だぞ」

親父が言う

「ええ、そうですね」

空母の中はいろんな区域があった。商店街もあり、散髪屋もあり、工場もあった。まさに海上に浮かぶ要塞兼都市その物だった。

「すごいですね～軍の人以外にも一般の人もいるんですね～」

美麻さんが言う

「ああ、収容人数はざっと十万は超えるだろうな。それに艦載機は１００を超える」

「え！？マジですか！？」

秀治が驚く

「ああ、もちろんだ。だが、一度停泊すると一週間ぐらいは止めなきゃあいけない。食糧や燃料が馬鹿にならないからな。大きければ大きいほどそれなりのデメリットが付いてしまう。幸い、一年分は持つように調達したから当分停泊する予定は無いがな」

「そういえば、モンゴメリさんにも会えるんだな・・・・」

俺が言った

「ああ、モンゴメリもお前に会えると知って大喜びしているぞ」

「そうか・・・・」

そう言って甲板に向かう俺達だった

～甲板～

甲板にはいろんな機体が駐機してあった。それこそ、空母に乗せられない大型輸送機や攻撃機が止まっていた

「艦載機以外も飛ばせるんですか？」

美麻さんが言う

「ああ、通常の空母とは違うからな。大型輸送機でも十分な滑走距離がある。」

大蛇が言う

丁度、ＵＨ－６０　２機が俺達の目の前に着陸した

「修、元気にしてたか？」

中からベレー帽をかぶった白人がやって来た推定年齢４０後半である。

「ああ、モンゴメリ。久しぶりだな。」

「ああ、お前は無事だと俺は信じてたぞ。」

「ははっそりゃあ嬉しいね。」

「さぁ、お仲間さんもこっちに来てくれ。今から旗艦の方に向かうぞ。二手に分かれてヘリに乗ってくれ」

そう言われたので俺らは簡単に分かれてヘリに乗り込んだ

「さぁ、我々の時代だ。諸君、今こそ、君達の力を見せてくれ」

親父が無線を通して全艦に言う。それに応えるように歓声や祝砲を上げる

「盛大だな・・・・」

俺はそう言って外の風景を楽しむのだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3838u/

ＤＥＡＤ　ｏｆ　ＰＡＲＡＤＩＳＥ

2012年1月4日03時50分発行